

ボディファイト エクスパニッシャー

サイアー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

様々な時代で活躍したモンスターなどが進化し、その者達とも闘うためのモンスターに選ばれた少年とそのバディとの物語

目次

設定集及び番外編

キャラクター設定（2月24日更新）	1
オリカ集（霸王軍のみ）	7
1周年記念短編集	20
番外編 バレンタインの恐怖	27
バディとの出会い	
プロローグ	33
覇龍との出会い	37
ドラゴニックの戦い	41
戦いの後で	50
謎のモンスター	53
ブレイブせよ！ブレイブウォリアー登場	56
フアーザーの力	64
デッキ破壊の恐怖	69
和人のバディの力	74
手札事故、、、は気をつけて	79
伝説のモンスター ヤマトドラゴン見参	86
合体せよレイ ブレイブドラゴン登場	92
夏休み突入問題の連発	
旅行の準備	99
生徒会長の力	103
海での出来事	109
破滅をもたらす伝説の竜	114
助っ人参上	122

覇王の異変	129
とある日常	134
動きだす組織達	138
新たななる炎	142
バディ達の会話	148
トリオファイト前編	154
ぶつかり合うバディ達	154
トリオファイト後編	161
絆の霸王龍編	
激突 バディファイト研究会	169
秋だ!!野菜だ!バディファイトだ!	178
合宿の夜 大いなる闇の降臨	186
現出する闇の鎧	192
合宿最終日 研究会の話し合い	201
地区大会スタート 初戦	210
孤高の戦士対最強の竜	
2回戦 増殖する手札	220
2回戦中編 未来からの使者	227
2回戦後半 嵐の中での勝機	234
強襲 ダークネスの脅威	245
激突 封印されし竜王と最強進化した竜	251
遂に起動!!始まりのブレイブモンスター	261
新たななる仲間 その名は覇龍剣	269
絆の霸王龍の力	275
今明かされる衝撃の真実!	285
つかの間の日常	
華子さん、ハロウィンでの恐怖	292

怒りの炎	300
バディ達の会話2	310
未知なるカプラネットワークワールド	317
対決研究会の決戦	328
2つのお話	339
つかみ取れ可能性	346
未知なる魔法	354
覚醒の霸王龍編	
ダークネスとジョーカーの秘密	365
戦国の竜王	372
二つの勇氣	381
大晦日の宴会	390
構築された戦士	397
平和な敵の組織	408
看病のつもりが	416
絶望へのカウントダウン	423
激突!!戦国の霸王龍対カオスブレイカー	429
竜次の覚悟!!放てマテリアル・ブラスタ―!!	439
霸王の敗北	446
煉獄の霸王龍	456
緊急事態発生	466
霸王への旅路	
激突!!覇竜騎士団対英雄 前編	472
激突!!覇竜騎士団対英雄 後編	481
マジックワールド 少女の覚醒	490

デンジャーワールド 無法の王の拳	499
ダークネスドラゴンワールド 怨念の鎧	510
ヒーローワールド 新たなる始まり	518
ダンジョンワールド 前編 本の中のダンジョンを攻略せよ。	525
ダンジョンワールド 後編 ぶつかりあう霸王龍	534
ドラゴンワールド 覇龍の復活	545
混沌魔獣編	
集結した仲間達	553
襲撃!!混沌魔獣の咆哮	561
デートの誘い	572
黒き騎士の祝福	579

設定集及び番外編

キャラクター設定（2月24日更新）

チーム シーカーズ

弓風 剣（ゆみかぜ けん）

16歳

誕生日 11月11日

デツキ名 覇竜、爆誕

バディは、絆の霸王龍ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー

この作品の主人公。

霸王軍を指揮するの者、ドラゴニック・エクス・カイザーに選ばれ霸王軍を使う少年。

中学まで剣道をしていた。

以外と勘が鋭い

頼まれたら断れない性格、あと仲間思い。

伝説の剣、覇龍剣の夢を見て様々なことを経験するうちに覇龍剣と出会い、その力を得た。

チームメイトがカップルだけなのがたまに気にしている。

渡辺 創一（わたなべ そういち）

16↓17歳

誕生日 8月28日

デツキ名 リミッター・オーバーロード

バディは、ドラゴニック・オーバーロード

性格は、ファイトが好きで普通の高校生だったがオーバーロードとバディになってから冷静沈着な性格になった。

カナの彼氏でバイクが壊れたことを知った彼女からブレイブ・ホースを受け取った。

佐藤 カナ

16↓17歳

誕生日 10月1日

デツキ名サイバーチェンジ

バディは、サイバー忍者レイ

性格は、元気きな少女だがファイトの腕は、そこそこ。

よくレイに注意をされる姿が目撃されている。

ブレイブモンスターをカスミからもらって時々戦闘データを提出を研究所に送っている。

朝倉 和人（あさくら かずと）

16歳

誕生日 9月23日

デツキ名フューチャードラゴンズ

バディは、未来竜 ドラン

性格は、割りと普通ファイトは、ちよつとした理由で避けてきたがドラゴがドランの力を与えてくれたのでその問題も解決した。ファイトスタイルは、なにが起こるかわからない戦い方をする。

遙かとは、付き合っている。

黒川 遙か（くろかわ はるか）

16歳

誕生日 1月17日

デツキ名オールデリート

バディは、Cダリルベルク

性格は、基本は、静かだが和人が女の子と話していたりすると少し、大変（周りが）

最近の悩みは、ダリルベルクが自己主張が激しいこと。

ファイトスタイルは、とにかく相手のデツキを破壊しつくすことで勝利を目指す。

バディファイト研究会との合宿でその近くにあったブラスター・ダークと出会いその力と煉獄騎士団の力を受け継いだ。

モンスター

絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー

レジェンドワールド

レジェンドワールドのパックから出てきたモンスター

自分の力を与えることでそのモンスターを霸王軍とすることができ
きる。

霸王軍の本来の力である覇龍剣を見つけだし絆の霸王龍となった。

覇龍騎士エクシード・ドラグーン

レジェンドワールド

エクス・カイザーと同じ霸王軍のモンスター。

ダークネスによって封印されていたが自らその封印を破り、剣達の
前に現れた。

エクス・カイザーの事をレジェンドワールドの霸王龍と読んでい
る。

ドラゴニック・オーバーロード

創一のバディ

とある世界からやってきたモンスター

凄まじい力を持っている。

様々なことを経験しておりかつての自分が闇落ちした姿が敵とし
て現れたが自分自身の真の力に覚醒に撃破した。

ポーテックス・ドラゴン

オーバーロードと同じ世界から来たフレイムドラゴン。

ドラグーンと共にこちらの世界にやって来た。

オーバーロードをかなり慕っている。

未来竜ドラン

和人のバディ

全てが謎のモンスター

未来竜の力を持っている。

本当の力は、まだ未知数。

ヴァリアブル・コードと知り合い。

サイバー忍者レイ

カナのバディ

ブレイブの力を得たサイバー忍者カナ

冷静な性格でカナのサポートをしている。

Cダリルベルク

自分にも意思があるということを示したモンスターその行為に遥かが苦勞している。

トイレの華子さん

レジェンドワールドから宴会のためトイレのモンスター達とともにこちらの世界にやってきたモンスター。

ドラゴの過去にも関係している感じ。

次元竜　ガイアスカル

ドラゴンワールド

ドラグーンと共に様々な世界を旅をしていたがダークネスのせいで封印され、暴走してしまったモンスター。

ドラグーンと共に正気に戻し、元のモンスターとなり、今は、京子とバディを組んでいる。

覇龍剣

ワールド不明

霸王龍の力

チーム（リバイバル）

不動　炎馬（ふどう　えんま）

デツキ名神の降臨

バディは四角炎王バーン・ノヴァ

決勝で創一が戦った少年

名前が明かさねずつとモブ1だったネタキャラ。

櫻井　京子（さくらい　きょうこ）

デツキ名次元崩壊

決勝で和人が戦った少女

周りからの評価を気にしていた彼女に和人が声をかけられ元気を

もらいフアイトをおこなった。

その後もその悩みが離れずいたが海でガイアスカルに襲われるも、色々ありガイアスカルとバディとなりはれて

その悩みも消えた。

坂井 豪太（さかい ごうた）

デツキ名 究極合体

バディ カードバーン

店舗予選決勝でカナが戦った少年。

合体をロマンとしている。

海藤 弾（かいどう だん）

デツキ名???

バディ???

まだフアイトしてないから詳しくは書けないフアイター

新堂 光（しんどう ひかる）

デツキ名剣竜帝国

バディ武神剣帝 シュベルト・ハイランダー

暴走したガイアスカルを最初に止めにいった人物。

5本の剣とバディであるハイランダーが揃った時はかなり強い。

バディフアイト研究会

会長

デツキ名不明

バディ不明

様々なデツキを使っているバディフアイト研究会の会長

剣達に利益があるからということの研究會に入れた張本人。

研究会生徒

主にネタキャラ。

今後もそれを続けるつもり。

その他

斎藤 カスミ

バディ???

誕生日???

デツキ名ブレイブヒーロー

剣達の見学先で出会った謎の女性

ブレイブモンスターを作った人

カナにブレイブモンスターを与えデータを取っている。

ダークネス

性別不明

デツキ名不明

とにかくなぞのキャラクター。誰かに従っていて闇のエネルギーを集めている。エネルギーを集めるためには手段を選ばない。

だが、自分のすごいところを証明しようとして、周り構わず行動をおこそうとする。

オリカ集（霸王軍のみ）

レジェンドワールド

覇獣グランデル

レジェンドワールド

サイズ3

霸王軍

攻撃10000 防御10000 打撃3

コールコストゲージ3払う。

■このカードは、相手のカードの効果で破壊されない。

■自分のライフが5以下の時 このカードが攻撃した時相手の場のカード全てを破壊し1枚につき相手に1ダメージ。

〴〵デスカース 〴〵このカードに攻撃したカードは、ターン終了時に破壊する。

〔2回攻撃〕

覇龍ドラゴニック・エクス・カイザー

レジェンドワールド 属性 霸王軍／霸王龍

サイズ2 攻撃7000 防御4000 打撃2

〔コールコスト〕ゲージ2を払う。

■ 攻撃終了時デッキトップをドロップしそれが霸王軍なら、コールコストを払い、コールしてもよい。そうしてコールされたモンスターのサイズは、場を離れるまで0となる。

〔2回攻撃〕

覇竜騎士エクシード・ドラグーン

レジェンドワールド

サイズ2

攻撃10000 防御3000 打撃2

霸王軍

「コールコスト」ゲージ2払う。

■このカードの攻撃よってモンスターを破壊した時、このカードをスタンドする、その後君のライフが5以下なら相手に1ダメージ。

絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー

レジエンドワールド

サイズ2

攻撃10000 防御5000 打撃2

霸王軍／霸王龍

「コールコスト」ゲージ2払う。

■このカードは相手の効果で破壊されない。

■このカードが登場した時、デッキかドロップゾーンの霸王龍のアイテム1枚を選びそのカードを装備する。

■”絶ちきれぬ絆”このカードが攻撃した終了時、デッキトップをめくりそのカードが霸王軍のモンスターならそのカードをドロップゾーンに送り、ドロップゾーンのモンスター1枚を選びそのカードをコールコストを払い、コールできる。コールされたモンスターのサイズは0になる。それ以外のカードだった場合デッキの1番下に置く。

覇龍剣

レジエンドワールド

アイテム

属性 霸王軍／霸王龍

攻撃10000 打撃2

■このカードは他のカードの効果でしか装備出来ない。

■このカードが攻撃した時、ドロップゾーンのワールドの種類が3種類以上なら場のカードの打撃力を+1更に、5種類以上なら場の全てのカードの攻撃力+5000更に7種類以上なら相手の場のカードを1枚破壊する。

「2回攻撃」

霸王の奇跡

レジェンドワールド

魔法

霸王軍

「使用コスト」手札を全て捨てる。

■君の場に（霸王龍）がいるなら使うことができる。

■君の場の霸王龍意外のカードをドロップゾーンに送り、このターン君はダメージを受けず、君の場の霸王龍は場を離れない。霸王の奇跡はファイト中に一度しか使用出来ない。

霸王の下準備

レジェンドワールド

■君のフラッグが【霸王 降臨】なら使うことができる

■次の2つから1つを選んで使う。

・君のデッキの上から3枚をゲージに置く。

・君のライフを+3！

覇龍の盾

レジェンドワールド 魔法 属性 霸王軍

■相手ターンの攻撃中、君のセンターにモンスターがいなければ使える。

「対抗」その攻撃を無効化し、君の場に霸王軍があるのなら君のデッキから2枚をゲージに置く。

覇龍猛攻

レジェンド 魔法 属性 霸王軍

「使用コスト」場の霸王軍2枚ドロップゾーンへ送る。

■自分のフィールドの属性（覇龍）一体を選ぶそのモンスターは、このターン攻撃力を10000増やし、貫通とゲージ1を払いスタンドする能力を与えるその代わりにそのターン元々の能力を発動できなす

選択したカードしか攻撃できない。

覇龍の威圧

レジェンドワールド 魔法 属性 霸王軍

「使用コスト」ライフ2払う

相手の魔法を無効にする。更に自分のターンで君の場に属性（覇龍）がいるならこのターン相手は、対抗を打てない

霸王の復活

レジェンドワールド

魔法

■フィールドの（霸王軍）のモンスターが相手によって破壊された時に使うことができる。

使用コストゲージ1払う。

「対抗」ドロップゾーンの（覇龍）をコールドコストを払わずにコールドする。その後相手の場のモンスターを破壊する。

覇龍の盾

レジェンドワールド 魔法 属性 霸王軍

■相手ターンの攻撃中、君のセンターにモンスターがないなら使える。

「対抗」その攻撃を無効化し、君の場に霸王軍があるのなら君のデッキから2枚をゲージに置く。

覇竜剣 ドラゴ刃

レジェンドワールド

属性 霸王軍

攻撃力7000 打撃力2

装備コスト「手札を1枚捨てる。」

■このカードの攻撃終了時デッキの1番上をドロップゾーンに置いてもいい。それが霸王軍なら、コールドコストを払い、コールドし、そ

のサイズは、場を離れるまで0となる。

《エクスブレード・ドライバー!》(雪咲さん提供)

魔法

レジェンドW 属性：霸王軍

このターン中、「霸王軍」のモンスター4体以上をコールしているなら、アタックフェイズ中に使える。

【対抗】カード3枚を引き、君の手札2枚をゲージに置き、君のライフ+1! 「エクスブレード・ドライバー!」は1ターンに1回だけ使える。

『霸王軍よ、今こそ限界を超えろ!』

ドラゴンワールド

煉獄の霸王龍 ドラゴニック・オーバーロードザ・グレード

サイズ3

属性 フレイムドラゴン／霸王龍／霸王軍

攻撃力13000 防御力13000 打撃力3

コールコスト(ゲージ3を払い、君の場のフレイムドラゴンを1枚以上ソウルに入れる。)

■ “シークメイト” このカードが登場した時、君のドロップゾーンにあるカード4枚を山札の1番下に送る。その後デッキから「煉獄竜ドラゴニック・ネオフレイム」か(霸王軍)のアイテムを1枚選び竜化させるか装備する。

■ “イモータル・フレイム” このカードが相手のモンスターを破壊したか、相手にダメージを与えた時君の手札を2枚捨てる。捨てたら君の場の(フレイムドラゴン)を2枚選びスタンドする。

「2回攻撃」

戦国の霸王龍 バーニング・イクサ・ドラゴン

サイズ3

ドラゴンワールド

属性 霸王軍／霸王龍

攻撃力20000 防御7000 打撃3

「コールコスト」ゲージ3を払い、デッキの上から2枚ソウルに入れる。

■このカードが登場した時、ドロップゾーンのカード1枚を選び、選んだカードをこのカードのソウルに入れる。

■”連刃”このカードが攻撃する時相手の全てのモンスターも相手に攻撃する。

■このカードが相手のモンスターを破壊した時、相手に2ダメージ与える。

『ソウルガード』

『俺達の戦いの歴史を後世に残してみせるぜ!!』

《覇竜騎将 ドラグルール》(雪咲さん提供)

モンスター

サイズ2／攻撃力6000／打撃力2／防御力6000

クラン：ドラゴンW 属性：武装騎竜／竜騎士／霸王軍

「コールコスト」君の場のモンスター1枚の上に重ねて、ゲージ1を払う。

【対抗】【起動】君の場のモンスター1枚をドロップに置く。置いたら、手札の「霸王軍」のモンスター1枚までを「コールコスト」を払ってコールする。

このカードが攻撃した時、君の場の他のモンスター2枚まで選ぶ。そうしたら、選んだカードを裏向きにして、「サイズ0／攻撃力6000／防御力6000／打撃力2 属性：ドラゴン／霸王軍」のモンスターとしてコールする。

【ソウルガード】

『人の理を超越し、竜となったもの。彼は、選ばれし者達を竜へと作り変えた』

『俺自身がドラゴンになることだ……!』

『なれたんだな……、ドラゴンに!』

覇竜ドラムバンカー・ドラゴン・フアーザー

攻撃9000 防御5000 打撃力3

「コールコスト」ゲージ2払いデッキの上から1枚をソウルに
入れる。

■このカードが攻撃した時、手札を一枚捨てて発動することが
できる。打撃力1追加しこのカードの攻撃は無効化できない。

【貫通】

覇竜騎士団 ハルバード・レヴォルーシヨン

ドラゴンワールド

サイズ2

攻撃7000 防御5000 打撃力3

属性 武装騎竜／霸王軍

「コールコスト」ゲージ2を払う。

■このカードが移動した時か、攻撃されたとき、手札の「覇竜騎士
団」を1枚選び、コールコストを払ってコールする。

【移動】

覇竜騎士団ドラゴ・アーチャー

ドラゴンワールド

サイズ1

属性 霸王軍

攻撃2000 防御2000 打撃力1

■君の場にカード名に「覇竜騎士団」を含むモンスターがあるならコールできる。

■〃霸王の一矢〃このカードが登場した時君のデッキからカード名に「覇竜騎士団」を含むカードを1枚手札に加え、デッキをシャッフルする。『霸王の一矢』は1ターンに1回だけ発動する。

新たな刃 システミックダガー・オーバーエッジ

ドラゴンワールド

サイズ1

属性 霸王軍

攻撃 3000 防御3000 打撃2

「コールコスト」ゲージ2を払い、デッキの上から1枚をソウルにされる。

■このカードがと攻撃した時に、ドロップゾーンにこのカード以外の(システミックダガー)と名のついたモンスターを1枚を選んでコールコストを払ってコールできる。この効果は1ターンに1度しか発動出来ない。

■このカードが場にいるとき場のシステミックダガーと名のつくモンスターは効果で破壊されず、相手の効果でレストされず、攻撃力+5000して打撃力+1して2回攻撃を与える。

覇竜サウザント・レイピア

ドラゴンワールド 属性 霸王軍

サイズ1 攻撃5000 防御 0 打撃2

■このカードが効果で登場した時、デッキの上から2枚追加する。

覇龍システミックダガー

ドラゴンワールド 属性 霸王軍

サイズ1 攻撃2000 防御2000 打撃2

〃 覇の絆 〃 このカード以外の霸王軍が登場した時カードを1枚ドロローする。「覇の絆」は、ターン中1回しか使えない。

覇竜拳 轟炎

ドラゴンワールド 属性 霸王軍／武器

攻撃4000 打撃2

「装備コスト」ゲージ1払う。

■君の場の全ての「霸王軍」のモンスターの攻撃2000 守備2000プラスする。

《奮起せよ、霸王軍！》（雪咲さん提供）

必殺技

クラン：ドラゴンW 属性：霸王軍

君の場にカード名に「エクスカイザー」を含むモンスターがあるなら使える。

【使用コスト】ゲージ4を払う。

「対抗」君の場の「霸王軍」全てをスタンドする。「奮起せよ、霸王軍！」は1ターンに1回だけ使える。

『お前達、こんな所で膝をついている場合ではないだろう？』

ヒーローワールド

覇動ロボガンセウラー

ヒーローワールド 属性霸王軍

サイズ2 攻撃5000 防御5000 打撃2

■ 相手の攻撃宣言時このカードに「搭乗」している時に発動してもよい。このカードをドロップゾーンに送ってその攻撃を無効にする。

「搭乗」(ライフ1払う)

覇炎特捜プロミネンスバースト

ヒーローワールド 属性 霸王軍

サイズ2 攻撃力5000 防御4000 打撃2

■このカードのバトル終了時、このカードを変身コストを払い装備するか、このカードを自分のアイテムのソウルに入れることができる。

■このカードがソウルにある時そのアイテムの打撃力2追加する。
「変身」(ゲージ1払う。)

覇竜クロスバスター

ヒーローワールド

サイズ2

霸王軍

攻撃7000 防御2000 打撃3

『彼らは、霸王軍になっても世界を守っている』

覇竜マツハブリーダー

ヒーローワールド

霸王軍

サイズ1

攻撃4000 防御1000 打撃1

「対抗」相手のモンスターが攻撃した時、ゲージ1払ってもよい。払った手札のこのカードをセンターにコールする。そして攻撃対象をこのカードに変更する。

「移動」

覇流鎧 アームズ・エイド

ヒーローワールド

サイズ1

霸王軍

攻撃5000 防御1000 打撃1

このカードを君の場の(霸王軍)のモンスターのソウルに入れることができる。

■このカードがソウルにあるカードは『ソウルガード』を得て打撃力+1する。

ダークネスドラゴンワールド

覇黒竜 アビゲール(ヤギリさん提供)

ダークネスドラゴンワールド

黒竜/霸王軍

サイズ1/攻6000/防1000 打撃2

【コスト】ゲージ1払う

□このカードが登場した時、君の手札のカード1枚すてて、相手のデッキの上から3枚をドロップゾーンに置く。更に〈霸王軍〉の能力で登場しているならカードを1枚引く。

□このカードが破壊された時、君のライフ+2
移動

ボイジャーワールド

《星詠みの宝花 ステラ》(雪咲さん提供)

モンスター

サイズ1/攻撃力6000/打撃力1/防御力1000

クラン:ボイジャーW 属性:スターゲイザー/マクロコスモス/

霸王軍

【起動】君のデッキの1番上を見る。そのカードを君のデッキの1番上に戻す。

【起動】ゲージ1を払い、君のデッキの上から1枚を捨てる。捨てたら、その中の「スターゲイザー」か「霸王軍」のモンスター1枚までを「コールコスト」を払ってコールする。この能力は1ターンに1回だけ使える。

『エクス様は、まるでお星さまのような御方です。』

《外部顧問 ボヤ男&ピオ子 “SD”》（雪咲さん提供）

モンスター

サイズ1／攻撃力1000／打撃力1／防御力1000

クラン：ボイジャーW 属性：SE／グランドマスター／霸王軍

「外部顧問 ボヤ男&ピオ子 “SD”」は1ターン1回だけコールできる。

【コールコスト】手札1枚を捨て、ゲージ1を払う。

このカードが登場した時、君のデッキからモンスターか必殺技1枚までをドロップに置き、デッキをシャッフルする。その後、選んだカードをデッキの1番上に置いてよい。

このカードが攻撃した時、君のデッキの上から1枚をドロップに置いてよい。ドロップに置いたカードが「SE」の必殺技なら、そのカードを手札に加えてもよい。

お互いのアタックフェイズ中、君が必殺技を使ったとき、そのターン中、このカードの攻撃力+10000！

『かつて、滅びた星からボイジャーワールドを造り上げた二人の少女』

『壊れた物は直せばいい、傷ついたら癒せばいい。失敗したら、やり直せばいい。何度でも』

《霸王晶竜 アイラ・ショット》（雪咲さん提供）

モンスター

サイズ3? 攻撃力7000? 打撃力0? 防御力7000

クラン: スタードラゴンW 属性: プリズムドラゴン? 霸王龍? 霸王軍

【コールコスト】君のデッキの上から3枚をソウルに入れ、ゲージ3を払う。

センターにいるこのカードは、カードの効果で、破壊されず、場を離れず、能力を無効化されない。

君のレフトとライトの「プリズムドラゴン」と「霸王軍」のサイズを3減らす。

『結晶竜達の力を1番使いこなせるのは——この、ボクだ!』

『プリズムドラゴン達の願いを受け、最高最強の司令塔がフィールドに舞い降りる!』

ダンジョンワールド

鋼撃霸王 サイクロプス

フラッグ: ダンジョンワールド

種類: モンスター 属性: Dエネミー/魔王/霸王軍

サイズ3/攻10000/防12000/打撃2

■【コールコスト】ゲージ4を払う。

■君のアタックフェイズ開始時、ゲージ1を払ってよい。払ったら、このカードの攻撃力と防御力を入れ替える。

■このカードが登場した時、君の好きな枚数の手札を捨ててよい。

捨てたら、そのターン中、捨てたカード1枚につき、このカードの攻撃力+5000、打撃力+1。

『2回攻撃』『ライフリンク6』

1 週年記念短編集

最高最善の

第3話と第4話の間の話。

勝者、渡辺 剣

剣「これが霸王の力だ！」

ドラゴ「我らの勝ちだ。」

「すごいな霸王軍。なんかめちやくちやだな。」

「創」もドラゴニック・オーバーロードだっけあれゲージ2で3枚のソウル持ちのモンスターになるのはすごいよな。」

「ああ、剣の方も最後の魔法、ゲージさえあれば無限攻撃が出来るってことだよな。発動条件は難しそうだけど発動したら対抗策がないとほぼほぼ勝ちだな。」

生徒達がファイトの感想が言い合っていると

サイバーカナ「すごい、これが」

カナ「これが最高最善の霸王。」

剣「いや、違うからねどつかの魔王じゃないから俺。」

剣はそう言う顔に文字が書かれた時計がテーマのライダーを想像したが面倒なことなりそうだから何も言わなかった。

その後4話に続く。

職務質問される華子さん

これはドラゴ達と会う前の話。

華子さん「あいつらどこにいったのだ？」

現在華子さんはこちらの世界に来てすぐで他のトイレのモンスター達とはぐれてしまったのだ。

華子さん「さあてどうしたものか。」

警官「君、こんな時間に何をしているんだい？」

いきなり声をかけられ後ろを向くと警官の服装をした人がいた。

華子さん「人に見られた。不味い、正体をバラせば簡単にことが進むのだがあまり正体をバラすのは妖怪の設定的に不味いのではないらばバレないようにするのが鉄石だな。」

華子さんが正体がバレないように警官を何とかしないと思っている。

華子さん「ん？それは散歩に決まっておろう。」

警官「散歩？こんな時間に危ないよ。住んでいる場所分かる？送ろうか？」

華子さん「(不味いこのままではこの警官にかなりの時間を喰ってしまう。)」

警官には悪いと思いつつ、この場を何としても離れようとする華子さんが考えていた。

華子さん「えっと、それは、分かるが。」

警官「じゃあそこまで送ってあげるから、帰ろっか。」

華子さん「え！それは、ちよつと、あ、近くだから大丈夫だ。」

帰れる訳ない。帰る場所はレジエンドワールド帰れないことはないがそれをするとしばらくこれなくなる。下部たちを置いて帰るなどありえない。

警官「(なんか変だな。この子何か隠しているのか？)じゃあちよつと一緒に警察所まで来てくれないかな？」

華子さん「い、いやそれは申し訳ないし、家も近いから大丈夫だ。」

警官「大丈夫だよ。お父さんとお母さんにも説明が必要だからね。とりあえず来てもらおうよ。」

華子さん「ああ、仕方ないな。」

その後数分かけて自分がモンスターであるということを説明するのに苦労している華子さんなのであった。

京子とガイアスカル
動きだす組織達から

デツキを完成させてファイトしているところ

京子「私は場の3体のモンスターを素材にしてゲージ3を払い、次元竜 ガイアスカルをセンターにバディコール。」

ガイアスカル「ガイアアー！」

地面からゲートが開いたかと思うとその中からガイアスカルが現れた。

そして、叫んだ。

剣「ん？あの言葉まさか。」

和人「いやいや、まさかあれは言わないだろ。」
という会話をしていると、

京子「アグオー!!」

周り「いや、それだめー!!」

その場にいた全員でツツコミをいれた!

京子「何よ。ガイアといたらこれだから問題ないはずよ。」

周り「言い訳ないだろ(でしよー)!!」

カナ「ガイアスカルはまだ問題ないかも知れないけど京子、テーマは駄目だ。それによってタグを増やさないといけないかも知れないだろうが」

剛太「そういうメタ的なことは言うんじゃない後々作者が増やさないといけないかもしれない。」

ガイアスカル「何か申し訳ない。我が京子の悪乗りに使乗してしまったのが悪いのだからな。」

レイ「いや、ガイアスカルは悪くないと思うわ。」

ドラン「結構あるあるだからな。俺達が知らない文化をバレないよにやらせようとするやつがいるよ。」

レイ「私の時もカナが寿司はわさびを大量にいれたのが普通だって

いつていたから食べるのが普通だって言うから食べたら鼻がツーンてなったわ。」

ドラン「それは普通分かるでしょ。」

レイの思い出に対してモンスター達が呆れていた。

研究会の合宿の夜

秋だ!!野菜だ!!バディファイトだ!!から

「遂にきたな。この時が。」

「ああ、皆の者準備はいいか?」

研究会生徒達「「おおー!!」」

合宿初日の夜、バディファイト研究会の生徒達は集まっていた。

不動「皆さんどこにいくんですか?」

「そんなの決まって要るだろう。」

「そうだぞ合宿、しかも夜だぞ。やること何て決まっているだろうが。」

一人訳も分からず混乱している研究会生徒に他の研究会生徒達が当たり前のように何かの準備している。

不動「(合宿の夜、しかも何人かがソワソワしている者もいる。一体何をしようとしているんだ?)」

一人分からずに考えていると、

「準備出来ました。」

「よし、これより例の場所に突撃する。」

不動「(突撃、そして何人かがいつもと違いすごいニヤニヤしている。・・・まさか。)」

何かに気づいたが時はもう遅し、全員で向かっていった。

不動「あ、不味いこのままじゃ全員怒られるじゃすまない!止めな

いと。」

急いで、後を追っていく。

急いで止めないと！

不動「止めろー!!」

剣「いきなりファイト挑むのはズルいぞ！頼むドラゴ!!」

創一「不意打ちしても変わらな。俺の勝ち揺るがない。オーバードの効果立ち上がれオーバード、エターナル・フレイム!!」

和人「おい、今ドラんいなんだよ！待て、や、止めろー!!」
ライフ0

研究会の生徒達がシーカーズのメンバーに2もしくは3対1でファイトを挑んでいた。

「え、これはどういう？」

会長「まさか、ここで仕掛けるとはな。」

不動「え、会長これはどういう？」

いきなり会長の声が聞こえたので後ろにいた会長にこの状況を聞いた。

会長「あいつらはな、あー、何したいのか分からない悪いな。」

不動「ええ。」

頼りになりそうだった会長も何したいか分からないみたいだ。

数十分後

「ぜえぜえ、やっぱり強いなあいつら。」

「はあはあ、全くだ。」

「だが、まだだ。」

「本当の戦いは、」

「本当の戦いは、」

「二」本当の戦いはこれからだ!!」「三」

「また特撮ネタに走りだしたよ。」

「この短編じやまだやってないからセーフだろ。」

「メタ的なこと言わないでくれ。」

いつもの研究会の会話してから話題を元にもどした。

「まあ、さっきのファイトは計画のうちだからな。デツキも相手の体力を奪うためのロックデツキを全員で使ったんだからな。」

「さあてここからが本当の戦いだな。」

「皆の者覚悟はいいか?」

「今度は何をするつもりなんだ?」

また何か準備をしている。

もう寝る時間なのに何をするつもりなんだ?

「総員、

まくらは持ったな。いくぞー!!」

「二」おぉー!!」「三」

「今度はまくら投げかよー!」

何かまた、変なことを始めた。

研究会生徒達が向かう先は、シーカーズの宿泊している部屋。

先程のファイトはシーカーズを疲れさせるのが目的だった。

ラストアタックだ!!

数分後シーカーズのバディ達に襲われたのは言うまでもないよう
だ。

「何も、見なかったZ」

先生「一体何を見たんだ？」

番外編 バレンタインの恐怖

和人 side

何でこんなことになってしまったんだろう。

あちこちに倒れて動けなくなっている人達、ばらまかれたカードそしてただ一人たっている男がいた。しかもかなりの殺気だっているのだ。

??? 「お前らいい加減にしやがれ!!」

和人 「ぎゃー!!」

この状況を説明するには時間を巻き戻さなければならぬ。

数時間前

司会者 「皆さん準備はいいですか、始めましょう。男だけの大祭りバレンタインだろうが関係無い。現実逃避杯スタート!!」

周り 「イエーイ!!」

剣 「よっしゃー勝ちまくるぜ!!」

豪太 「お、剣じゃねえか。なあどっちが多く勝てるか勝負しようぜ!!」

剣 「いいだろう勝負だ。」

ここに集まっているのは彼女がいない男だけの集団だ。そういう残念な人が集まり現実逃避杯が開催された。その中には剣や豪太がいる。

光 「剣、今日はシーカーズとの集まりがあつたんだろ? 行かなくていいのか?」

剣 「行くわけ無いだろ。どうせチョコ渡すとかそんな話だろ。最初の方は俺やドラゴ、あいつらのバディ達とも普通に話すかもしれないけどその内邪魔者扱いされるのがオチだよ。しかもあいつら無自覚だからな。たちが悪い。」

豪太「そ、そうか。(こいつ、闇が深くなってきたくないか?)」

光「ま、まあ今日はファイトを楽しもうぜ。」

バーンノヴァ「(ストレスがたまりに溜まったんだらうな。)あの甘ったるい雰囲気今日は更に濃くなるだらうな。絶対に行きたくないだらうな。」

そんな会話をしながらファイトの準備をした。

そうしてファイトを楽しむ剣たちなのであった。

創一「それであいつは来ないと。」

カナ「うん。何か用事があるって言ってたよ。」

ドラン「(あいつら逃げやがった!!)なんだよシーカーズ全員集合つてわけじゃないのかよ。」

レイ「(ずるいわよあいつらなんで逃げるのよ。)ま、まあしようがないわよ。用事があったんじゃないやあね。」

ダリルベルク「(本当にあのチョコを渡すのか?不味いぞあのチョコを渡すとどうなるか分からない。)」

ダリルベルクが何かヤバいことを考えていた。

バディ達もどうやってこの場から離れようか考えていた。

前に和人の為に遥かが鍋を作った時は鍋が何か変な色をしていたが今回はどんなチョコになっているんだ。(怖)

遥か「:リーダーいないとね。」

ダリルベルク「(そ、そうだこれを利用して、)これは仕方ない。今日はさっさと帰るとするか。」

ドラン「(ダリルベルク、ナイス!!)そうだな。今日はもう帰るとするか。」

レイ「……」

バディ達は帰る雰囲気にしてあの甘い雰囲気もしくは遙かのチョコから逃げ出したいようだ。

しかし、

カナ「しようがないわね。私達だけで始めちゃおっか。」

遙か「そうだね。はい、チョコ。」

和人「ありがとう。ん??こ、これ何?」

遙か「何ってチョコだけ?」

和人が渡されたのは黒い塊だ。しかし、何か変な煙が出ていてしかも何かドロドロしている。

和人「は、遙かさんちなみにこれは何か入れた?」

遙か「あ、解つちやつた? えつとね。普通のチョコに隠し味にねグミスライムやとかのダンジョンワールドのモンスターの素材を入れてみたのよ。」

和人「は、はい? (モンスターの素材を入れたのか? 何で、せめて鷹の爪とかだったらギャグとかであるけどモンスターの素材なんて聞いたことがないぞ!!)」

和人が周りを見渡すと、バディ達は離れていった。創一はカナを睨んでいた。

カナ「流石に私は普通のチョコよ。流石にあれは想定外よ。(小声)」

創一「そうか。ならいい。(小声)」

ちよつと哀れみの目で和人を二人は見ていた。

遙か「さあはやく食べてよ。」

和人「あ、ああ。いただきます。(何か動いているんですけど。)」
食べた後その近くで叫び声が聞こえた通行人がいたそうだ。

剣 side

剣「ん? 電話か? はい、もしもし。」

現実逃避杯で終わりフアイトを楽しんでいたのだから

カナ「た、助けて剣。」

剣「どうしたんだ？一体何があったんだ？」

カナ「か、和人が暴走してってキャアー!!」ツーツー

剣「おい、もしもし、もしもーし！」

どうしたんだ。一体？

豪太「おーいどうしたんだ？」

剣「いや、何かカナが何かあったっぽい。連絡してきたけど切れちまった。」

豪太「それは大変だ。はやくいったらどうだ？」

剣「そうする。じゃあ、お先。」

豪太「おう、気をつけてな。」

それからしばらくして集合場所についてあたりを見回した。

剣「な、なんだこれ？」

中はあちこちに黒い塊があり、そして人が倒れており、何かを口の中に入っている。

ドラゴ「なんでこんなことにいるんだ？」

レイ「に、逃げて!!」

声が聞こえたので後ろを振り向けるとボロボロの状態のレイがいた。

剣「レイ!!何でこんなことに？」

レイ「遥かがダンジョンワールドのグミスライムを混ぜたチョコを和人が食べさせられて気絶したのその後遥かが捨てようとしたらチョコが勝手に動きだして道行く人の口の中に入ってしまったの。」

剣「……………はい？」

えつとまずグミスライムをチョコに混ぜるの？普通混ぜないよね。それと何でチョコが勝手に動きだすの？グミスライムを混ぜたせい？それにそれを何でそんなのが人の口の中に入ろうとするんだ？どうやったらそんなことができるのか。

剣「はあ、何でこんなことに。」

ドラゴ「仕方ない後始末をしてやろう。それでその元凶は今どこに？」

レイ「……黙秘権を行使するわ。」

剣「おい、さっさとはけ。」

剣はもう面倒くさいので殺気を出してさっさとこの騒動を終わらせようとした。

レイ「ヒツ、分かったわよ。遙かならまた何か料理をしてるわ。もう近づくのが嫌で逃げてきたのよ。」

剣「……そうか、ならいい。もうこっちでやつとく。覇龍剣!!」

遙か「……あ、剣戻ってきたんだ。ちょうどいいわこの料理をの味見を。」

剣「フィールド展開。」

遙か「え?」

数分後何かスッキリしたような。剣がいたそうさ。

和人「ん、うーんどうして俺は寝てたんだ?」

だいぶ寝ていたような気がするが記憶がない。いったい俺は何をしていたんだ?

あたりを見回すと創一とカナと遙かが倒れていた。更に辺りにはダークネスドラゴンワールドのカードもばらまかれていた。

和人「おい大丈夫か?何かあったのか?」

返事がない。いったいどうしたんだ?

剣「意識が戻ったようだな。」

あ、剣がいた、て何で覇龍剣と一体化してんの?何でこんな殺気出

してんの？え、俺なんかしたっけ？

剣「お前ら本当にいい加減にしやがれ!!」

和人「ぎゃー!!」

な、何でこんなことに。ガク

剣「ふーやつと片付いた。」

あの後周りのチョコなのかスライムなのかよく分からない物を回収して1箇所にとめるとそれらが融合していき1体のグミスライムになった。チョコの部分は分離したようだ。まとめて置いた場所に残っている。

剣「(まさか本当に分離することができるのかよ。)それでお前はこれからどうしたいんだ?」

グミスライム「グミ、グミグミグミ(迷惑をかけたのであなた達に強力したい。)」

剣「(どうしよう。まじでモンスターの言葉理解できるようになっちゃった。もう俺がモンスターだって言われても否定できないかもな。)分かった。よろしくなグミスライム。」

ドラゴ「よかろう。我らの仲間として迎えよう。」

グミスライム「グミグミ(よろしく)」

そう言っただけでカードになったグミスライムを覇龍剣の力で霸王軍にして仲間に迎え入れ、帰路につくのであった。

バディとの出会い プロローグ

バディファイト、それは、異世界から来たモンスターとバディを組んで戦うカードゲーム。そしてそのカードゲームが主流となった世界、その世界の高校生のお話。

授業の終わりを上げるチャイムかなっている。

居眠りをしていた、弓風 剣（ゆみかぜ けん）は授業が終わるチャイムで起きた。

先生「よし今日の授業はここまでちゃんと復習をするように。」
先生がそういつて教室から出ていった。

剣は、放課後どうしようかとかんがえていると、
???「よう剣、ファイトしようぜ。」

そういつて近づいてきたのは、黒髪の男子、同じクラスの渡辺 創
一（わたなべ そういち）よくファイトを挑んでくるやつだ。

剣「いいよ、やろうぜ。」

そういつて机の上デッキを置いた。

ちなみにお互いにバディはいない。

バディがいる場合ファイティングステージで実際にモンスターが出てくるアニメみたいなバディファイトができるのだがお互いいないのでそれは叶わぬ夢なのだ。

そうしておたがいルミナイズをした。

剣「集え 疾風の龍の軍団、ルミナイズ、疾風騎士団」

創「超巨大モンスターここに降臨、ルミナイズ、グランブラスター

!!」

周りの生徒「バディー、ファイ!!」

二人「オープンザフラッグ」

剣「ドラゴンワールド」

創一「デンジャーワールド」

創一「先行はもらった俺のターンドロージャージアンドドロ。キヤスト、闘気暴走ライフ2を払って2ゲージ追加。」

手札 6 /ゲージ3↓5 /ライフ10↓8

剣「ゲージ5ってことはくるか？」

創一「ああいくぞ、ゲージ5を払い勇猛の神王 グランガデスをセンターにコール！」

勇猛の神王グランガデス

攻撃12000 防御 7000 打撃4

2回攻撃

創一「グランガデスでファイターに攻撃！」

剣ライフ 6

創一「ターンエンド。」

剣「俺のターンドロージャージアンドドロー装備迅雷騎士団期、レフトに迅雷騎士団旋撃のドラムをコール、センターに迅雷騎士団天弓のドラゴ・アーチャーをコールしてデッキから疾風迅雷フォーメーションを手札に加える。」

剣手札5 ゲージ0

迅雷騎士団期

攻撃4000 打撃2

迅雷騎士団天弓のドラゴ・アーチャー

創一「それでも俺のグランガデスは破壊されない次のターンで俺の勝ちだ。」

剣「それはどうかな？」

創一「え？」

剣「キヤストヘブンス・サンシャインライフル払いグランガデスを破壊。」

創一「なんだと！」

アタックフェイズ

剣「ドラムをライトをとアーチャーをレフト移動、そして迅雷騎士
団期の効果でフィールドのカード全て攻撃力4000追加」

ドラム7000+4000=11000

アーチャー3000+4000=7000

迅雷騎士団期4000+4000=8000

剣「アーチャーでグランガデスに攻撃」

アーチャー攻撃7000 グランガデス 守備 7000

グランガデス破壊

創一「ソウルガード」

グランガデスソウル残り2枚

剣「迅雷騎士団期でグランガデスに攻撃」

迅雷騎士団期攻撃8000 グランガデス守備7000

創一「ソウルガード」

グランガデスソウル残り1枚

剣「ドラムでグランガデスに攻撃ドラムは貫通を持っている」

ドラム攻撃11000 グランガデス守備7000

創一「ち、ソウルガード」

グランガデスソウル0枚

創一ライフ8↓6

剣「これで最後だドラムでグランガデスに攻撃」

グランガデス破壊

貫通とライフリンクで6ダメージ

創一「後攻ワンキルかよ!!」

創一6↓0

剣「よっしゃ俺の勝ちだ」

創一「負けたが次は負けないぜ」

剣「いや次も俺が勝つぜ」

そっぴいあつてゐるうちに周りの生徒は下校していった

その10分後には剣たちも下校していった

下校中

二人でパックを買っていたが、

創一「やっぱりバディレア出ないな」

剣「確かにな。」

やはりバディが出ないのだ。

お互いにバディがいないのでファイティングステージでのファイトが出来ないのだ。

剣「バディいればいろいろ出切る事が増えるからな」

そうしておたがいパックを向いていると、

創一「おいそのパックレジエンドワールドのパックじゃねえか。」

剣「あ！やべ間違えたまあいちおう開けとこう。」

創一「おいおい大丈夫か？」

そうして開けるとその中からなにかが飛び出してきた。

二人「えい！」

飛び出したのはカードでそのカードが光輝き一体のモンスターとなった。

???「我名は、覇龍 ドラゴニック・エクス・カイザー。霸王軍を束ねるリーダーなり。」

覇龍との出会い

剣「それで霸王軍って何？」

あの後創一と別れて、今俺の部屋に覇龍ドラゴニック・エクス、と、えくと長いから省略してドラゴという。ちなみにドラゴエクスはSDの姿は黄色い鎧を着た赤い眼球が無いアビゲールだ。

ドラゴ「省略しないで頂きたい我の名はドラゴニック「長過ぎるから省略してんの話ずらいし、あとなんで人の考えていることがわかるんだよ」

剣「とにかく話しを戻すけど霸王軍ってなんだよ？」

ドラゴ「霸王軍とは、かつて様々な人にファイトで使われていたモンスターや武器、魔法などがもう一度闘いたいと言う意思と我が力はそのカードを進化させた時に刻まれるものを言う。」

剣「つなりはなにか？お前のを与えたモンスターは強くなりお前とともに戦えるということか？」

ドラゴ「さよう。」

剣「でもお前はレジェンドワールド。他のワールドのカードは、バディファイトでは使えないだろ？」

そうバディファイトでは基本的に1つのワールドしか使用することはできないのだ。

ドラゴ「それを可能にするのが我がもつフラッグなのだ。」

そうしてドラゴは、一枚のフラッグカードを渡してきた。それを見た剣は驚いた。このカード一枚で今ある問題を全てクリアできるのだ。それとひとつの疑問が生まれた。

剣「お前これをどうやって、それにどうしてそんな力がお前にあるんだ？」

ドラゴ「質問が多いやつだな。一つ一つ答えてやる。」

そうして俺の質問に答えようとすると下の階から声が聞こえてきた

???「ごはんだよー。」

そういったのは俺の母さんだった。

剣「とりあえず飯食おうぜ。腹が減ってはなんとやらだからよ。」

俺は4人家族だ一人弟がいる。父さんにはバディがいるがいまだにバディファイトで勝った事はない。今は、全員いる。母さん達と話し合い、ドラゴが家にいてもいいことになっている。

剣「それにしてもその霸王軍つてカードは、今どれくらいあるんだ？」

ドラゴ「うむ、それは、ここにある。」

そういつてドラゴは、目の前にゲートみたいなものを作り出した。そこから、カードの束を取り出し、俺に渡してきた。その中には、何処かで見えたことがあるカードの上位互換のカードがあった。

剣「これやべえな。すげえデッキが組めるぞ。」

そういつてカードをみていくと、ちよつとした違和感があった。

剣「他のカードはないのか？」

ドラゴ「なぜだ？」

剣「いやこのカードの一部に名前を参照する効果があるんだけどさ、その名前の持っていないカードがないからさ。」

ドラゴ「ああそのモンスターは、今自分達のワールドで霸王軍になつてくれるモンスターを探して貰っているからな。」

剣「そつか。じゃあ今あるカードでデッキを組むとするか。」

そうして一時間位でデッキが完成した。もちろんドラゴのカードも入っている。

剣「明日学校でこいつを試してみるとするか。」

ドラゴ「そうだな。」

そうして剣達は次の日の準備をして寝た。

次の日の朝登校していると黒髪の女の子が話しかけてきた。創一と同じ幼なじみの佐藤 カナだ。バディは、カタナワールドのサイバー忍者 カナ。 同じ名前で最初みんな驚いたのは、結構昔の話だ。

カナ「剣、バディ出来たんだってよかったじゃん。」

剣「まあなファイトの時に見せてやるよ」

そうして他愛ない話をして学校につくと創一が待っていた。

創一「よう剣ファイトだ。バディファイトフィールドはれるんだろ？やろうぜ。」

バディファイトフィールドとは、バディがいる人がもらえる端末から、出せるフィールド。フィールドを展開すると、アニメのファイティングステージみたいところに飛ばされ、ファイトする事ができるのだ。剣は、昨日バディポリスからフィールドを展開できる端末を貰っていたのだ。

剣「いいけどお前バディいないじゃんフィールドは、お互いにバディがないとできないだろ。」

創一「あの後俺もバディが出来たんだよ。だからファイトだ。」

そういつて俺が昨日バディポリスから貰った端末、コアデツキケースを取り出しフィールドを展開した。フィールドは周りに被害を出さないために作られたバディファイト専用のフィールドだ。ある程度のことをしてもまず壊れないし、安全制もかなり高い。それに、周りのひとも見れる場所もある。

剣「しゃーねやるか。」

そういつて剣は、ルミナイズした。

剣「集え、覇龍に認められた、伝説たち、ルミナイズ、覇龍、爆誕。」

創一「怒りの炎でこの世の全てを破壊しろ、ルミナイズ

リミッター・オーバーロード！」

周りの生徒「バディ、ファイト」

オープン、ザ、フラッグ

創一「ドラゴンワールド、バディは、ドラゴニック・オーバーロード」

そうして創一の後ろにまさしく、ザ・ドラゴンという感じの赤いモンスターが現れた。

剣「霸王 降臨、バディは、覇龍ドラゴニック・エクス・カイザー

」

ライフ9 ゲージ2 手札 7

創一「なんだよ？そのフラッグ！聞いたことないぞ。」

霸王 降臨

フラッグ

君は（霸王軍）のカードを使用できる

君の最初のライフは、9 ゲージは、2、手札は、7になる！

これが俺のフラッグ霸王 降臨だ。

ドラゴニックの戦い

創一「ドローチャーシアンドドローいきなりいくぜゲージ2を払いデッキの上から3枚をソウルに入れバディコールこの世の全てを焼きつくす黙示録の炎ドラゴニック・オーバーロード！」

ライフ10↓11

ドラゴニック・オーバーロード

ドラゴンワールド 属性フレイルムドラゴン

サイズ3 攻撃13000 防御13000 打撃3

ソウル3枚

いきなり現れたのは炎を纏った巨大な人型のドラゴン。

生徒「なんだあれ!!」

生徒「聞いたことないぞ。」

アタックフェイズ

創一「オーバーロードでファイターにアタック。」

剣「くっ。」

ライフ9↓6

創一「ターンエンド」

手札 6枚 ゲージ1 ライフ11

剣「ドローチャーシアンドドローライフ1を払い覇動ロボ ガンザウラーに搭乗。」

覇動ロボガンセウラー

ヒーローワールド 属性霸王軍

サイズ2 攻撃5000 防御5000 打撃2

■ 相手の攻撃宣言時このカードが搭乗している時に発動できるこのカードをドロップゾーンに送ってその攻撃を無効にする。

「搭乗」(ライフ1払う)

剣の場に現れたのは巨大な機械の巨人だ。剣はその中に入っている。

剣「霸竜 シヤドウスキアーをライトそしていくぜ、ゲージ2を払い俺のバディ霸龍ドラゴニック・エクス・カイザーをレフトにバディコール。」

剣 ライフ7 ゲージ 0

霸竜シヤドウスキアー

スタードラゴンワールド 属性 霸王軍

サイズ1攻撃5000 防御1000 打撃2

「コールコスト」ゲージ1払う。

登場時手札を1枚デッキの下に置き発動できるドロップゾーンの霸王軍のモンスター1枚を手札に加える。

霸龍ドラゴニック・エクス・カイザー

レジェンドワールド 属性 霸王軍／霸王龍

サイズ2攻撃7000 防御4000 打撃2

「コールコスト」ゲージ2を払う。

■ 攻撃終了時デッキトップをドロップしそれが霸王軍なら、コールコストを払い、コールし、そのサイズは、場を離れるまで0となる。
2回攻撃

そこにいたのは、鎧が少し赤いシヤドウスキアーと、黄色の鎧に身にまとい腰に2本の剣を着けている赤いドラゴンがいた。

ドラゴ「出番か、待っていたぞ。」

剣「ああ頼むぜ、俺とドラゴとシヤドウスキアーの三体の連携でオーバーロードを攻撃。」

オーバーロード破壊

残りソウル2枚

剣「俺のバディ霸龍ドラゴニック・エクス・カイザーの効果デッキ

トップをドロップゾーンへ送ってそれが霸王軍なら、コールできる。」
デッキトップは、魔法カードだったのでそのままドロップゾーンへ。

剣「ドラゴ、もう一度アタックだ。」

しかし攻撃力が足りないのである。

二回目は、モンスター、覇龍システミックダガーをセンターにコール。

覇龍システミックダガー

ドラゴンワールド 属性 霸王軍

サイズ1 攻撃2000 防御2000 打撃2

覇の絆 このカード以外の霸王軍が登場した時カードを1枚ドロウする。「覇の絆」は、ターン中1回しか使えない。

システミックダガー「再び戦うことができることに感謝する。」

ターンエンド

剣手札4枚 ゲージ0枚

生徒「おいおいなんだあれ、システミックにシャドウ・スキアー少し昔のモンスターが霸王軍？になっているのか。」

カナ「これが、霸王軍。」

周りが霸王軍の力に驚いているというのに一人だけは違った。そう創一である。

創一「どんなカードでも負けるつもりはない。俺のターンドロウチャージアンドドロウ、センターにモンスターをコールしても無駄だ。キャストスペリオルバディオーバードに貫通を与える。」

アタックフェイズ

「オーバードロードでシステミックダガーに攻撃。」

システミックダガー「我が主よ必ず勝て。」

そういつてダガーは、オーバードロードの炎をくらい消えた。

剣「ダガー、うわ！」

ライフ7↓4

創一「2回攻撃。」

オーバーロードが剣に火をぶつけようとした時ガンセウラーが剣を自身の中から出し剣を庇い爆発した。

創一「なんだ？いまの。」

剣「ガンセウラーの効果ドロップへ送ることで相手の攻撃を無効にして1ドローする。」

創一「相変わらず守りは万全ってか。ターンエンド。」

ゲージ2 手札6枚

カナ「何で今、わざわざガンセウラーを盾にするようなことを？ さっきの攻撃を食らえば次のターンガンセウラーも攻撃できたのに？」

???「それは、オーバーロードの効果を警戒したんだよ。」

カナ「あ、武本先生、オーバーロードの能力って？」

そこにいたのは、武本先生、42歳、剣達の担任の先生だ。

武本「オーバーロードには、モンスターを破壊した時、相手にダメージを与えたとき手札を2枚捨ててスタンドする能力があるんだ。」

つまりさっきの攻撃を防がないと損してしまうのは、剣の方が大きいのである。

剣「俺のターンドローチャージアンドドローゲージ1払い、装備覇

竜拳 轟炎。」

覇竜拳 轟炎

ドラゴンワールド 属性 霸王軍／武器

攻撃4000 打撃2

「装備コスト」ゲージ1払う。

全ての「霸王軍」のモンスターの攻撃2000 守備2000 プラスする。

覇龍 ドラゴニック・エクス・カイザー

攻撃 7000 + 2000 || 9000

防御 4000 + 2000 || 6000

覇竜 シャドウスキーア

攻撃 5000 + 2000 || 7000

防御 1000 + 2000 || 3000

剣 「ドラゴとスキーアで連携攻撃。」

オーバーロード破壊

残りソウル1枚

デットアップ外れ

剣 「俺とドラゴで連携攻撃。」

オーバーロード破壊

残りソウル0枚

剣 「二回目センターに覇炎特捜プロミネンスバーストをセンターにコール、登場時キャスト覇龍の目覚め、1体の霸王軍をスタンドドラゴをスタンド、プロミネンスとドラゴで連携攻撃。」

ドラゴの呼び声に呼応するように現れた炎を纏った戦士が現れドラゴと共にオーバーロードを攻撃した。

オーバーロード破壊

剣 「プロミネンスはバドル終了時場のスペリオルバディを破壊し、アイテムのソウルへさらにドラゴの効果デットアップは覇竜サウザントレイピアドラゴンをセンターにコール登場じげーじ追加

レイピアでファイターに攻撃。」

覇龍の目覚め

魔法 レジエンドワールド 属性 霸王軍

カードの効果で自分の霸王軍が登場した時に使える
対抗場のカード一枚スタンドさせる。

覇竜サウザント・レイピア

ドラゴンワールド 属性 霸王軍

サイズ1 攻撃5000 防御 0 打撃2
このカードが効果で登場した時、デッキの上から2枚追加する。

覇炎特捜プロミネンスバースト

ヒーローワールド 属性 霸王軍

サイズ2 攻撃力5000 防御4000 打撃2

このカードのバトル終了時、このカードを変身コストを払い装備するか、このカードを自分のアイテムのソウルに入れることができる。このカードがソウルにある時そのアイテムの打撃力2追加する。

「変身」(ゲージ1払う。)

創一ライフ11↓9

剣「ターンエンド。」

剣ゲージ1 手札4

創一「俺のターンドロローチャージアンドドロキヤストドラゴニツクチャージプラスゲージ2追加。ゲージ2を払いオーバードロードを再度センターに、コール。」

オーバードロードソウル3枚。

再び現れた炎の竜とブーメランドラゴン。

創一「更にブーメランドラゴンをコール。」

ブーメランドラゴン

サイズ0 攻撃3000 防御1000 打撃1

アタックフェイズ

創一「更にブーメランドラゴンをコール。」

ブーメランドラゴン

サイズ0 攻撃3000 防御1000 打撃1

アタックフェイズ

創一「オーバードロードでセンターに攻撃。」

レイピア破壊

創一「2回攻撃。」

剣「キヤスト覇龍の盾、ゲージ2追加。」

覇龍の盾

レジェンドワールド 魔法 属性 霸王軍

相手ターンの攻撃中、君のセンターにモンスターがいないなら使える。

対抗その攻撃を無効化し、君の場に霸王軍があるのなら君のデッキから2枚をゲージに置く。

創一「さらにブーメランドラゴンでファイターに攻撃、その後ブーメランは、手札に。」

剣ライフ4↓3

創一「ファイナルフェイズ

剣「何!?!」

剣がゲージ1でもうてる必殺技があったか考えていると

創一「キャストバツツ×リンク、デッキの上から3枚見てゲージ2追加一枚を手札に、更にライフプラス1、そしてターンエンド。」

手札 6 ゲージ 3 ライフ10

剣「俺のターン、ドローチャージアンドドロー。」

創一「さあどうする?もううつてはないだろ?」

確かに周りもそうだと思ったセンターに防御力13000のソウル3枚もちのモンスターがいるのだから。

だが剣には、この状況を突破するカードがあった。

そしてそれは、剣の手札にすでにある。

剣「キャスト覇龍猛攻。」

ドラゴ「ウオー」

俺のアイテムとシャドウスキアーが消えその力がドラゴに集まっ
ていく。

覇龍猛攻

レジェンド 魔法 属性 霸王軍

「使用コスト」場の霸王軍2枚ドロップゾーンへ送る。

■自分のフィールドの属性(覇龍)一体を選ぶそのモンスターは、このターン攻撃力を10000増やし、貫通とゲージ1を払いスタンドする能力を与えるその代わりにそのターン元々の能力を発動できなず選択したカードしか攻撃できない。

剣「これでドラゴは、ゲージ1を払えば何度でも立ち上がる。」

創一「何度でもだと。」

カナ「もうなんでもありね。」

もう周りが呆れるほどの強さをみせる一体のモンスター

アタックフェイズ

剣「いくぜ、ドラゴでオーバーロードに攻撃時ゲージ1払いスタン
ドこれを4回繰り返す。」

オーバーロードとドラゴがぶつかり合いそしてドラゴが4回目
創一「オーバーロード、うわぁー」

オーバーロードソウル3↓2↓1↓0↓破壊

10↓8↓6↓4↓2

剣「これで最後だ。ドラゴでファイターに攻撃。」

創一「キャスト、ドラゴンシールド青竜の盾。」

剣「キャスト、覇龍の威圧。魔法を無効にし、このバトルこれ以降
対抗できない。」

覇龍の威圧

レジェンドワールド 魔法 属性 霸王軍

「使用コスト」ライフ2払う

相手の魔法を無効にする。更に自分のターンで君の場に属性(覇
龍)がいるならこのターン相手は、対抗を打てない。

創一「なんだと!」

2 ↓ 0

これが霸王軍の力だ。

戦いの後で

ファイトが終わってもとの場所戻ってきた。

その時創一のコアデツキケースから、一体のモンスターが現れた。オーバーロード「我らもまだまだ未熟ということだな。」

剣「オーバーロード、お前喋れたのかよ。」

創一「そうだな、ファイトの時、しゃべらなかつたんだからな。まあ、そういう反応になるよな。」

ドラゴ「そういうえば、そろそろ授業が始まるんじゃないか？」

確かにそうだなと思って授業を受けようとしたのを最後に、意識が途切れた。

ここは、何処だ？

そこは、どこかの街のようだった。

だが人が一人もいない。

そこに、モンスターが現れた。しかも、一体では、ない。大量のモンスターが、街を破壊し始めた。

停めようとしたら触ることができない。

そこに一人の男が現れた。

その人は、腰に、一本の剣を持っていた。

そして、その剣を抜こうとしたところでまた気を失った。

ドラゴ「大丈夫か？」

目を覚ましたのは、学校の保健室だった。俺が寝ているベットの隣にドラゴがいた。

剣「ドラゴ、何で俺ここにいるんだ？」

ドラゴ「あのファイトの後すぐお前は、倒れたのだ。それで原因は、おそらく最後に使った魔法が原因だ。あれの力かお主にも影響を与えたと我は、考えている。」

ということは、しばらくは、覇龍猛攻は、使わないほうがいいな。ファイトのたびに倒れてたまるか。

剣「そうか。創一は、どうなんだ。あいつもたおれたのか。」

ドラゴ「あやつは、オーバードロードがセンターにいたから無事だったそうだ。」

何か違和感を覚えたがまあいいか、と思い保健の先生にお礼を言い、教室にいった。

創一「お前大丈夫なのか。急に倒れて心配したぞ。」

剣「まあな。何とかな。初めてのファイトで疲れたんだろ。これからは、体を鍛えるよ。」

創一「ならいいが。早く授業を受けるぞ。」

俺も急いで授業の準備をした。

そのあとは、なんかあるわけでなく、下校した。

下校中考えていたのは、霸王軍の事だ。

創一とのファイトでは、ドラゴが破壊されなかったからなんとかなったが、次は、うまく行かないと思う。

剣「なあドラゴ霸王軍の強いやつだれかいなのか。お前引けなかった時のためにもう何種か欲しいんだけど。」

ドラゴ「いるぞ。こいつらだ。」

剣「何で昨日くれなかったんだよ。」

ドラゴ「こいつらがお前の力を見るまで協力しないといっていたのでな。」

そうしてドラゴは、そのカードを渡してきた。

そのカードをみて驚いた。そのカードの名は、

覇竜ドラムバンカー・ドラゴン・ファーマー

??? 「ブレイブモンスター最終調整もうすぐ終わるわ。」

机の上のパソコンから、作業を終えた女性がもう一人の相棒に報告した。

??? 「ありがとう。調整が終わり次第カードかして。」

その後、私がデツキをくむから。」

??? 「にしてもすごいわね、このモンスターたち。これ全てが未来への可能性を持ったモンスターなのね。」

そんな会話をしながら、また、画面をいじりだした。

謎のモンスター

その日俺達は、学校の授業の一貫でモンスターの研究所の見学をしていた。

研究所といっても危ないことをするのではなく、モンスターの力で何かできないかを研究、実験をしている所である

先生「よし、みんなここから、5人の班に別れてそれぞれ見学してもうから、適当に、5人班作れ。」

普通そういうのは、事前に決めるもんじゃないのか?と思いつつ、とりあえず創一とカナと組むことになった。

創一「あと二人か。誰かいらない?」

創一「お前、普段俺とカナと前の学校のやつ以外とあんまり関わらないからな。」

痛いところ突いてくるな。・・・悲しくなるだろ。

創一「事実だろ。」

創一「だから心読むな。」

何で俺の周りには、考えていることがわかるやつばかりなんだよ。

そう思いつつ今バディポリスにいるドラゴのことを思いだした。

数日前。

俺とドラゴは、家でファイトしていた。

新しい霸王軍のカードをいれたデツキを試運転するためだ。

ドラゴには前につかっていた、迅雷騎士団のデツキを使ってもらっている。

そんな時に、バディポリスが家に来た。

最初は驚いたが話を聞くと、バディポリスが把握していない新しいフラッグを高校生が持っていたというので違法カードなのではないか、という疑いがかけられているということだそうだ。

まあ普通に考えればそうだよなと思った。

それで疑いを晴らすためにドラゴとフラッグを調査するという。
因みに霸王軍のカードも持っていていかれたからしばらくは、バディなしの状態が続きそうだ。

そして、いまに至る。

剣「で、あと二人どうする?」

カナ「あそこに二人のグループあるから、そこと一緒に回ればいいんじゃないかな。」

創一「そうするか。」

創一「なあ一緒にまわらないか。」

???1「あぁいいよ。人数足りなくて困ってたんだ。遙か(はるか)もそれでいいよな。」

遙か「、、私は、それでいいけど。」

こうして5人でまわることになった。

???1「待て待て待て待てー!!俺名前出てないから。」

剣「え、???1って名前じゃないの?」

???1「そんな名前のやついるか。俺の名前は、朝倉 和人 (あさくらかずと)だ。何で同じクラスなのに名前知らないんだよ。」

創一「こいつあんまり人付き合ひよくないんだよ。」

???1「もういいよ。早くまわろうぜってなんで名前のところ???から直らないんだよ。」

改めて5人でまわることになった。

剣「にしてもすごい施設だよな。とくにあれなんかヤバいな。」

そこにはたくさんのミニギアゴットが一行に並んでおそらくモンスターによって壊れたところを直している。

創一「カオスマンスターもいるのか。俺のデッキにあうやついるかな。」

剣「創一のデッキは、サイズ3中心だからな。カオスはほとんどサイズ3だからな。」

そんな会話をしていると目の前にブレイブ研究所と書かれたドア

の隣に看板が置いてある。

カナ「ねえちよつとこの部屋気になるから入って見ようよ。」

剣「おいちよつと待て。」

カナがそのまま中に入ってしまった。

創一「勝手に行くっちゃったけどどうする?」

剣「どうするたつて行くしかないだろ。一人するわけにはいけないし。」

なかに入るとたくさんサーバーが起動していた。

カナ「うわ!」

前にいたカナが何かに驚いている。

剣「カナ。」

剣がカナの前に立つ。目の前には機械仕掛けの犬が警戒した姿勢でたっていた。

剣「こいつは、いったいなんなんだ。」

???「そいつは、ブレイブモンスター。バディファイトの新しい可能性を持つモンスター。」

剣「誰だ。」

そこには、白衣を着た眼鏡をかけた大人の女性がいた。

???「私の名前は、ブレイブモンスターの発明者の斎藤 カスミよ。よろしくね。」

ブレイブせよ！ブレイブウオーリアー登場

剣「それでブレイブモンスターってなんですか？」

今俺たちは、研究所の中央にあるテーブルでカスミ博士の話を聞いている。

内容は主にブレイブモンスターについてだ。

カスミ「ブレイブモンスターは、主にヒーローワールのモンスター、その能力については実際にファイトしてみるのが一番だね。誰かファイトしてみない？」

剣「誰やる？俺は今バディいないから無理。創一は？」

創一「俺もオーバード暴れたらあれだから家に置いてきた。和人は？」

???「俺も今バディいない。遥かは？」

遥か「、、私も今バディいない。ということは」

カナ「私ね。」

剣「そういうことだな。」

カスミ「よしファイトじゃあフィールド展開するよ。」

???「待て待て何で俺まだ???」からもどってないの？さすがにひどいだろ。いい加減もどせ。」

カスミ「それをいうならブレイブモンスターなんて作者が色々問題があったからっていう理由でまだ一体しか出てきてないんだから文句いわない。」

色々メタ発言が多いけどフィールドを展開させファイトが開始された。

カスミ「人とモンスター今ひとつになる。ルミナイズ、ブレイブヒーローズ。」

カナ「私流分身の術を見せてあげる。ルミナイズ、分身忍者。」

バディファイト、

「オーブン、ザ、フラッグ」

カスミ「ヒーローワール」

バディ

ブレイブドック

ライフ10 ゲージ2 手札6

カナ「カタナワールド」

バディ

サイバー忍者カナ

ライフ10 ゲージ2 手札6

カスミ「私の先行ドロッチャージアンドドロキヤスト、ハイパーエナジー、ゲージ4追加。更にゲージ1払いセンターにブレイブドックをバディコール。効果でブレイブウォリアーを手札に。そしてゲージ1払いブレイブウォリアーに変身。」

ライフ11 ゲージ5 手札5

ブレイブドック

ヒーローワールド 属性 ブレイブ

サイズ1 攻撃3000 防御2000 打撃1

コールコストゲージ1払う。

■登場時デッキからブレイブと名の付くモンスターを手札に加える。

(ブレイブ)ゲージ1払う

ブレイブウォリアー

ヒーローワールド 属性 ブレイブ

サイズ2

攻撃7000 防御5000 打撃2

■このカードが変身しているとき手札の(ブレイブ)の能力を発動することができる。

二回攻撃

変身(ゲージ1払う。)

そこに現れたのは赤い鎧に身を纏ったカスミの姿があった。

剣「変身ということは、あのデッキは、ヒーロー軸なのか？」

創一「いやよく見るあのカードの属性をあれは、」
ブレイブウオーリアー

属性ブレイブ

カナ「ブレイブ?」

カスミ「私が作ったのだから知らないのは、無理もないわ。ファイ
トが終わったらそこから辺の説明をするとしましょう。ゲージ1払い、
ブレイブドックのブレイブ。ファイターと一体化。」

センターにいたブレイブドックが分裂しブレイブウオーリアーの
背中にくっついた。

ブレイブウオーリアー+ブレイブドック

攻撃10000 防御7000 打撃3

剣「あれがブレイブか。」

カスミ「ブレイブは、ブレイブのアイテムの隣にカードをおき一枚
のアイテムとして扱う。私でファイターにアタック。」

カナライフ10↓7

カスミ「ターンエンド。」

ライフ10 ゲージ4 手札5

カナ「私のターンドロージャージアンドドロージャー2払いセン
ターにサイバー忍者カナをコール。」

サイバー忍者カナ

カタナワールド 属性 忍者

サイズ2 攻撃10000 防御4000

「コールコスト」ゲージ2払う。

■このカードが攻撃終了時手札の〈忍法〉を一枚捨てて発動できる。
このカードをスタンドして相手に1ダメージ与える。

サイバーカナ「私の出番ね。」

現れたのはくノ一の格好をしたカナそっくりのモンスターだった。
???1「あれって同一人物なのか?」

剣「違うらしい。そっくりだけだな。」

カナ「頼むわ。いくわよ。アタックフェイズ。」

周り「え!」

創一「手札事故か？それとも。」

カナ「サイバー忍者カナでファイターに攻撃。」

サイバーカナ「サイバー流連続切り。」

カスミ10↓8

カナ「サイバーカナの能力手札の忍法を捨て、サイバーカナをスタンドして相手に1ダメージ。」

手札6↓5

カスミ8↓7

創一「まさかあいつ今手札全部忍法なんじゃあ。」

創一「まさかな。」

カナ「つつけるよ、いけえ、サイバーカナファイターに攻撃。」

サイバーカナ「サイバー以下略。」

カスミ「以下略しちや駄目なんじゃないの？」

7↓5

カナ「サイバーカナの能力発動「対抗でキャスト、ブレイブチャンス。」え？」

ブレイブチャンス

魔法

使用コストゲージ1払う

ライフ6以下なら使える。

■フィールドのブレイブ状態のカードを手札にもどし、戻したカード以外の（ブレイブ）をコストを払わず（ブレイブ）できる。

カスミ「効果でブレイブドックを手札にもどし、ブレイブスパイダーをブレイブ。」

ブレイブドックがブレイブウォーリアーの背中から消えその場所に機械のクモがくっついた。

ブレイブスパイダー

ヒーローワールド 属性ブレイブ

サイズ1 攻撃3000 防御2000 打撃1

■登場時と（ブレイブ）時に発動できる相手のカードを一枚を選びそのカードは、レストして次の相手のターン終了までスタンドする事が出来ない。

（ブレイブ）ゲージ1払う

ブレイブウオーリアー+ブレイブスパイダー

攻撃10000 防御7000 打撃3

カスミ「ブレイブスパイダーのブレイブ時効果、相手のカード一枚をレストそのカードは、次の相手のターン終了までスタンド出来ない。」

カナ「・・・え！」

手札5↓4

カスミ5↓4

カナ「仕方ない。ファイナルフェイズ。キャスト、明鏡止水ゲージ3追加。そしてキャスト、超忍法絶命切り」

超忍法絶命切り

カタナワールド 必殺技 属性 忍法

必殺技

「使用コスト」ゲージ4払う。

相手に4ダメージ与える。

遙か「これはカナちゃんが勝った。」

カスミ「一度言ってみたかったのよね。」

それは、どうかな。」

ライフ1

??? 1「どういうことだ？なんでライフが、」

カスミ「私は、キャスト、実は生きていた を使ったのよこれで私のライフは1残るわ。」

剣「マジか。」

あんなの使うやついたのか。あれめっちゃ古い上にコストがめちゃくちゃ重いんだよな。

カナ「ターンエンド。」

カスミ「私のターンドロージャーアンドロー、よしレフトとライトにブレイブウルフをコール。効果で私の打撃力追加。」

ブレイブ状態ブレイブウォーリアー

3↓5

ブレイブウルフ

ヒーローワールド 属性ブレイブ

サイズ1

攻撃2000 防御2000 打撃2

■登場とブレイブ時、場の属性 ブレイブのカード1枚の打撃力を

1追加

(ブレイブ) コスト無し

カスミ「アタックフェイズ、私でサイバーカナに攻撃。」

サイバーカナ破壊

カスミ「2回攻撃。」

カナ「キャスト、うつせみの術。」

カスミ「ウルフ2体で連携攻撃。」

カナ「きやー」

ライフ7↓3

カスミ「ファイナルフェイズ。キャストブレイブアゲイン。」

ブレイブアゲイン

ヒーローワールド

必殺技

相手のライフが4以下なら使える。

「使用コスト」ゲージ1払い手札か場の(ブレイブ)を好きな枚数ドロップゾーンに送る。

■使用コストでドロップゾーンに送ったカード一枚につき相手に2ダメージ与える。

カスミは、フィールドにいたブレイブウルフ2体と手札のブレイブドックを实体化して相手に投げつけた。

カナ「そういうやり方なのー」

ライフ0

WINNERカスミ

剣「いいファイトだったぜカナ。」

ファイトが終わりまたさつきみたいにテーブルで話をしていたそうするとカスミさんが

カスミ「カナちゃんサイバー忍者カナのカードを見せてくれる？」

カナ「いいですよ。」

カナは、バディのカードをカスミに渡した。そのカードをカスミは機械を使って調べていた。

何してるんだらう？

カスミ「やっぱりね。」

カナ「なにがですか。」

カスミ「このカード、ブレイブモンスターに出来るかもしれない。」サイバーカナ「本当ですか？」

カスミ「ええ本当よ。少し時間がかかるかもしれないけど可能よ。」

サイバーカナ「ぜひお願いします。私強くなりたんです。」

カスミ「分かったわ。2時間位かかるからちよつと待っててね。」

そういつてカスミとサイバーカナは、奥の部屋へ入っていった。

剣達は、待っていると和人が気づいてしまった。

??? 1 「なあ俺達ってさそろそろ戻らないと不味くね。」
剣 「ヤベえ忘れてた。」

創一 「すぐ戻るぞ。」

そうして一同は、集合場所へ戻っていった。

一体のモンスターを残して。

フアーザーの力

あの研究所の一件から数日たった。

ドラゴがバディポリスから帰ってきた。

ドラゴがいうには特に問題なかったそうだ。

霸王軍もこれまでと同じようにつかっていいそうだ。

しかも、バディポリスのほうからお礼として隊員のバディのカードを何枚かもらった。

嬉しいことに、ドラゴがそれらを霸王軍にしてくれた。

なお作る際周りにバディポリスが何かの計測をしていたが気にしないことにした。

カナは、サイバーカナが研究所に置いていかれたことについて1時間ほど説教されたらしい。

まあサイバーカナ専用のブレイブモンスターを完成させるためしばらくは、バディとしてファイトに参加できないらしい。

今日は、ファイト実習のテストがある。

この学校では、バディファイトも成績に入れられる。

内容は、3回ファイトしてそのファイトの内容により成績が決定するとうものだ。負けたからといって成績が低くなるわけでもない。

そういう状況での剣達は、

生徒A

レフトライトなし

センター

ギガントソードドラゴン

ゲージ1

ライフ4

手札3

剣

モンスター無し

ゲージ2

ライフ6

手札2

生徒A「お前の戦術は知っているぞ。ドラゴニック・エクス・カイザーは、効果による展開力が高いカード、だがキヤスト、ロイヤリテイ。4体以上コールできない。これで展開封じた。」

剣「そうだな。だがつかうのが早すぎるドラゴ悪いが今回は、出番なしな。」

ドラゴ「まあ仕方ないか。」

剣「まあな。ゲージ2払いデッキトップをソウルに入れ覇竜ドラムバンカー・ドラゴン・ファアザーをレフトにコール。」

覇竜ドラムバンカー・ドラゴン・ファアザー

攻撃9000 防御5000 打撃力3

「コールコスト」ゲージ2払いデッキの上から1枚をソウルにいれる。

■このカードが攻撃した時、手札を一枚捨てて発動することができる。打撃力1追加しこのカードの攻撃は無効化できない。

貫通

生徒A「何？ドラムだと、けど何かが違う。」

そこにいたのは、かなりの風格を持ったドラムバンカー以下略のお父さんがいた。

ファアザー「ワシは、お前達が知っているドラムバンカー・ドラゴンは、私の息子だ。」

剣「ファアザーでギガントソードに攻撃。」

ファアザー「ファアザードラゴニックパンチ。」

剣「貫通。」

生徒A「ギヤー」

ライフ0

創一「オーバードロードでファイト にアタックエターナルフレイム。」

生徒B「クソー。」

ライフ0

カナ「バディなしできついけどファイナルフェイズ
必殺超忍法絶命切り。」

生徒C「うわー」

ライフ0

サイバーカナ「ごめんね。」

全員のテストが終わり、少しの休みができた。

休みの日全員が集まった。

その休みの間あるうわさが流行っていた。

剣「妖怪がうちの学校で宴会をしている?」

創一「夜な夜なお化けやら妖怪やらが学校からたくさん出てきて、
どんちゃん騒ぎをしているらしい。学校近くに住んでいるやつが見
たらしい。」

カナ「何か怖いね。」

和人「そうか、絶対モンスターの仕業だろ。妖怪カテゴリーとかそ
こらだろ。」

遙か「・・・妖怪カテゴリーって何かあったけ?」

剣「どうだっけ。」

創一「実際に観に行けばいいんじゃないね。」

和人「そうだな。」

こうして俺達は、今日の夜に行くことにして授業を受けた。

授業について?ただ授業を受けただけなので省略する。

そうして夜になった。

剣「よし早速妖怪を見に行こうぜ。」

創一「一応オーバーロードを連れてきた。何かあったら焼き尽くせ
ばいいし。」

剣「いや、やるなよ。」

無駄話をしていると

??? 「きやー」

カナ「なによ和人いきなり叫んでどうしたの。」

和人「俺じゃない、今回から俺は元々の名前に戻ったんだよ。なんかメタ的なことを言っている。」

創一「ということは、やばくね?」

剣「声の聞こえた方に急ぐぞ。」

悲鳴が聞こえた所に行く、そこには、人体模型やら

執事の格好をした骸骨やらが宴会をしていた。

ドラゴ「!!あれは、レジエンドワールドの属性トイレのモンスター達だ。」

遙か「何でそんなモンスター達がこんなところにいるの。」

トイレの華子さん「お主らそこにいるのは、分かっておる。出てこい。」

和人「ヤベ、気付かれてた。」

カナ「どうするの。」

創一「いくしかないだろ。」

そうして全員で自己紹介をした。

トイレの華子さん「お主、エクス?エクスではないか。どうしてここにおる。まさか自力で脱出を?」

ドラゴ「?何を言っている、まあ色々あってな。」

トイレの華子さん「お主がここにおるといことは、止めよう我らは今宴会の最中なのでな。」

剣「何でこんな所で宴会何かしているんだ?」

トイレの華子さん「我らは、何百年も生きています、レジエンドワールドの名所だけでは、つまらるのでな、年に数回この世界にきて宴会をしておるのだ。」

創一「そうだったのか。」

トイレの華子さん「そういえばさつき一人の人間がきたの。まあ軽く脅かしたら帰っていったがの。」

噂の正体は、トイレのモンスター達だったのか。

関心していると、

トイレの華子さん「こうしてあったのも何かの縁どうじゃ我らとファイトせんか。」

剣「いいだろ俺とドラゴが相手に「ちよつとまつて。」
え?!」

遥か「、、私がやる。」

和人「大丈夫か?お前会談とかそういうの苦手だろ。」

遥か「大丈夫全部破壊してみせる。」

そうして遥かは、今まで見たことのないくらいいい笑顔で笑っていた。(目は、笑っていない)

トイレの華子さん「まあいいファイトといこうか。」

遥か「フィールド展開。」

バディファイトスタート

デツキ破壊の恐怖

バディフアイト

「オープン ザ フラッグ。」

華子さん「レジェンドワールド。」

手札6 ゲージ2 ライフ10 デツキ残り42

遙か「ダークネスドラゴンワールド。」

バディ Cダリルベルク

手札6 ゲージ2 ライフ10

華子さん「我らのターンドロージャーリアンドドローマズは、ゲージ2払いデツキから3枚をソウルに入れ、校舎3階―手前から3番目のトイレ―を装備。」

遙か「トイレを装備？」

創一「あれは色々な意味で危険なカードだよな。」

華子さん「つつげるぞ、C・アルベリオンをセンターにコールそしてキャスト存在還元アルベリオンをドロップゾーンに送り、2ドロ―。更にアルベリオンの効果で2ゲージ1ドロ―。そして、もう一度C・アルベリオンをセンターにコール」

アタックフェイズ

華子さん「アルベリオンで攻撃。」

遙か「きや」

ライフ10↓8

華子さん「これでターンエンド。」

残りデツキ32枚 ライフ10 ゲージ3 手札7

和人「あーあ序盤からあんなにデツキを削るのは遙か相手にするのは後で響くぞ。」

その言葉で外野は、全員どんなデツキか大体検討がついた。

遙か「ふふふ、私のターンドロージャーリアンドドロ―

センターにバディコールC・ダリルベルクをセンターにコール。」

ライフ11

ダリルベルク「うおー私の出番だ。」

剣「カオスモンスターがしゃべった!？」

ダリルベルク「なんだ？カオスだとしゃべっちゃいけないと誰がきめた？私は私の好きなようにすると決めた。文句は、言わせない。」

剣「えつとなんかすいません。」

遙か「続けるよ、ダリルベルクの効果デッキトップ3枚を見て一枚を手札に。デスナバームをセンターにコール。キャストブラック・リチュアル、デスナバームを破壊しゲージ1ライフ1追加。さらにカードを2枚ドロ。」

デスナバームの効果で相手のデッキから5枚ドロップゾーンに送る。」

手札7 ゲージ3 ライフ12

華子さん「うお。」

デッキ残り27

遙か「更に悪夢ノ檻を設置センターに沈鬱の蛇黒竜バルザムをセンターにコール。悪夢ノ檻の効果で相手のデッキを更に一枚破壊バルザムの効果で悪夢ノ檻を破壊しチャージアンドドロ。破壊された、悪夢ノ檻の効果で逆天の黒死竜アビゲールを手札に加える。」

剣「何？この分回しあんまり見ないよこういうの。」

華子さん「しかも手札が減っていない。」

遙か「まだまだ満足しちゃいないわ。黒印竜ビターノーヴをレフトにコールけど能力は使わない。」

ゲージ2を払い逆天の黒死竜アビゲールをセンターにコールそして。ゲージ1払い逆天を発動。」

アタックフェイズ

遙か「アビゲールでセンターにアタック。」

華子さん「アルベリオンの効果ゲージ2追加して、ワンドロー。」

デッキ残り24 ゲージ5

ファイナルフェイズ

遙か「キャストデビル・ステイグマ、ビターノーヴを破壊し2ゲ

ジライフ1追加。」

手札5 ゲージ3 ライフ13

遙か「そして、ゲージ3払いアビゲールを破壊して、アビゲールハウルプリンガーをセンターに必殺コール。効果でドロップゾーン同名カードをデッキに戻し、効果発動。相手のデッキトップから9枚、ゲージ3をドロップゾーンに送り、相手に3ダメージ与えて私のライフを3増やす。ターンエンド。」

手札4 ゲージ0 ライフ16

華子さん「なんと！」

デッキ残り15枚 ライフ11↓8 ゲージ2

創一「長かったな。」

カナ「何で必殺モンスターで攻撃しなかったのかな。」

剣「攻撃すると装備されているアイテムのソウルがへるからだ。あのアイテムのソウルが失くなると面倒な状況になる。それにあのデッキは、攻撃しなくても勝てるデッキだ。そういう理由で攻撃しなかったんだと思う。」

和人「まあまだあいつの満足は、終わっていないけどな。」

華子さん「デッキを大量に失ってしまった。まあ次は、我らターンだ。反撃させて貰う。」

遙か「いや、アビゲールの逆天でもう一度私のターン。ドロウチャージアンドドロ。」

華子さん「なんと！」

遙か「キャスト、ブラック・リチュアル。アビゲールを破壊ゲージ1ライフ1追加して2枚ドロ。」

創一「必殺モンスターをコストにしやがった。」

遙か「いちいちうるさい。センターにデスナバームをコールさらにもう一度沈鬱の蛇黒竜バルザムをレフトにコール。効果でデスナバームを破壊し、チャージアンドドロ。デスナバームの効果ゲージ1払い相手のデッキから5枚破壊。」

手札4 ゲージ2 ライフ17

華子さん「まづい。」

デツキ残り10枚

遙か「更にキヤスト、デツキから5枚のカードをソウルに入れ、デスゲージタイマーを設置。更にセンターに黒印竜ビターノーヴをセンターにコールしバルザムを破壊し、デツキからアビゲールハウルプリンガーを手札に加える。」

和人「あ、終わった。」

アタックフェイズ

遙か「デスゲージタイマーの効果でソウルを一枚ゲージに追加する。」

ファイナルフェイズ

遙か「ゲージ3払い、ビターノーヴを破壊しセンターに必殺コールアビゲールハウルプリンガー。効果発動。再びデツキ9枚ゲージ3をドロップゾーンに送り相手に3ダメージ与え、ライフ3追加。」

華子さん

デツキ残り1枚 ライフ4 ゲージ0

遙か「私は、これでターンエンド。」

華子さん「わ、我らのターン。ド、ドロー」

遙か「今のでデツキが残り枚数がゼロになった。よって私の勝ち。」

華子さん「負けてしもうたの。」

一反木綿ペーパー「申し訳ございません華子様。我々お役に出来ず。」

華子さん「気にすることはない。」

剣「そういえばトイレ属性のモンスター達一体も出てこなかったな。」

創一「なら今度は、俺とやろうぜ。全部やきつくしてやるよ。」

華子さん「やれるものならな。良いぞ。ではいざ。」

と、こういう感じで皆でファイトを楽しんだ。

ドラゴと華子さんが二人、いや二体が並んで話をしていた。

華子さん「やはりお主がここにいる理由は、あれについて調べるためか？」

ドラゴ「まあそれもあるが一番は、バディと一緒にファイトを楽しみ霸王軍の強化をしたいというのが一番だな。」

華子さん「そうか。まあ気をつけるのだよ。レジェンドワールドにもたまには、来るのだよ。」

ドラゴ「まあたまにはな。だが帰るのは、あれについて分かっただな。それまでは、帰るつもりはない。」

華子さん「そうか。みつかるといいな。霸王軍の切り札にして最強のアイテムといわれていた。」

覇龍剣を。」

もう夜が明けるところみんなで華子さんが開いたレジェンドワールドへのゲートの前にいる。

剣「もう帰るのか？」

華子さん「うむ、また宴会をしたいと思えばまたくるからその時は、よろしくな。それではまた会おう。」

そうしてトイレのモンスター達は、帰っていった。

その日、学校でほとんどの授業を寝て過ごし先生から注意を受けたのは、いうまでもない。

和人のバディの力

ある日、皆で和人の家で集まっていた。

それは、あることを確認するためだ。

そのあることについて説明するには、3日前に遡る。

学校の昼休み創一によばれていた。

「二「バディグランプリ?」三」

創一「そう5人一組で参加できる全国大会だ。」

剣「5人一組か。じゃあこの5人で出ようというわけか」

カナ「でもちよつと待つて私、和人のバディ見たことがないけどバディいるの。」

剣「そういえばここにいるなかで和人のバディだけ見たことがない。」

でも和人は、デツキケースをもっているしいるんじゃないかと剣が思っていると、

遙か「確かにいるにはいるんだけど、ねえ」

和人「まあな。」

創一「どんな奴なんだ?」

和人「一言でいうと残念な奴。色々と」

カナ「ええとそれはどういう意味?」

和人「実際にみてもらえば分かる。今度の休み俺の家に来てくれそこで説明する。」

そしていまにいたる。

和人「いらつしやい。まああがれよ。」

ちなみに家については、普通の2階だての家だ。

剣「それでどんな奴なんだ?学校では話せないようなくらいヤベえやつなのか。」

和人「いやそういうわけじゃない。」

??? 「誰がヤベえ奴だよこのやろう。」

いきなり声が聞こえて来たと思っただら和人のデッキケースから真つ赤な小さいドラゴンが現れた。

和人「いきなりでてるなよびっくりするだろ、ドラゴン。」

ドラゴン「そんなこといったてき本当に久しぶりなんだよ和人の家族以外の人とあうのがこれくらいいいだろ。」

剣「それはどういう意味なんだ？」

和人「それはこいつのカードをみてもらえばわかる。ドラゴン、カードになってくれ。」

ドラゴン「分かったこいつらは、信用できるってことだな。とう」

ドラゴンがカードになって剣のもとにきた。

剣は、そのカードをみて驚いた。

未来への可能性ドラゴン

ドラゴンワールド／スタードラゴンワールド

属性 未来竜

サイズ0

攻撃2000 防御1000 打撃1

このカードが登場した時このカード以外にへ未来竜がいるときライフ1払いカードを1枚ドロウする。

カナ「未来竜？」

創一「そんなカード聞いたことがない。」

和人「そう俺のバディすなわちドラゴンは、未来竜と言う属性なんだがバディポリスですら知らない属性でさ。」

しかもこのカードしか未来竜が存在しないんだ。それにドラゴンも自分以外の仲間のことは、分からないらしい。」

創一「そういえば今までテストとかどうしてたんだよ。まさか全部赤点とかないよな。」

和人「いやバディなしでがんばってきた。これでも頭はいいほうだね。」

創一「そうか。」

和人「それに、未来竜は、俺の知り合いのなかでも特に大丈夫な方

の奴にしか話していない。ドランを悪用しようとする奴がいるかも知れないからな。」

ドラク「そういう理由で俺は、あんまり外に出してもらえなかったんだ。出してもらったとしても実態化してはいけなないと和人に言われていたからな。」

剣「世の中最近物騒だからな。」

サイバーカナ「そうね。」

創一「それほどバディを大事にしているということだろ。」

皆それぞれの感想をいつていた。

和人「この話はおいといてだ、創一お前のバディ、ドラゴニック・オーバードロードは、なにかへ未来竜について知っているんじゃないか？同じドラゴンワールドでもフレイルムドラゴンというオーバードロードしかもっていない属性だし。なにかあるとたすかるんだけど。」

創一「分かったそういうことなら聞いてみよう。」

そうして創一は、バディのカードを出した、そしてオーバードロードは、カードの状態でしゃべりだした。

オーバー「まず結論からいうとへ未来竜」という属性についてだがそんなモンスターは、おろかそんな属性すら聞いたことがない。」

和人「そうか。」

オーバー「だがドラクは、ドラゴンワールドとスタードラゴンワールドのデュアルカード、スタードラゴンワールドにいけば何か分かるのではないか。」

カナ「でもスタードラゴンワールドなんてどうやっていくの？確かに未来のドラゴンワールドなんですよ。」

たしかにと全員が悩んでいると、

ドラク「方法ならあるぞ。」

剣「本当かドラク。」

今までずっと黙っていたドラクが急にしゃべって何人かが驚いた。

ドラク「スタードラゴンワールドに行くには、スタードラゴンワールドのモンスターと次元を歪める程の力だ。」

だが次元を歪める程の力など存在するわけがない。」

和人「そうか。」

ドラゴ「しかし私の力をそのドラランに与えればもしかしたら別のカードを作れるかもしれない。」

和人「ドララン、、、どうする?」

ドララン「俺は、もっと和人の役にたちたいだから頼むドラゴニツク・エクス・カイザー俺に力をくれ。」

ドラゴ「よかろう。これを、、、受けとれ。」

ドラゴは、体からでた光をドラランにぶつけた。

そうしたらドラランが急に光出した。

和人「ドララン?」

ドララン「うおー」

そしてドラランから何枚かのカードが出てきた。

そして和人の元へ向かっていった。

和人「このカード達は!」

そこには、属性未来竜のカードがあつた。

ドララン「これはどういうことだ?」

ドラゴ「私の力でドラランの真の力を覚醒させたのだ。」

和人「そうか、、、ありがとうなドラゴ。」

ドラゴ「どういたしまして。」

剣「とにかくこれで5人で出れるな。」

カナ「そうね。」

遙か「私も、がんばります。」

ドラゴ「うむ。」

オーバーロード「全てやきつくしてやる。」

サイバーカナ「大会までには、調整も完了するだろうから私もがんばるよ。」

ドララン「今まで守ってもらってばかりだったんだここらでいっちょよ派手にやってやるぜ。」

ダリルベルク「私もカオスでもおしやべりなモンスターがいることをもつとアピールしてやるぞ。」

一体だけ目的が違うけどまあいいか、こうして彼らはチームを結成したのであった。

手札事故、、、は気をつけて

今俺達は、店舗予選の決勝にいる。
なぜこんなに展開が速いかって？
それは、数十分前の話。

店員「ではこれよりバディグランプリの店舗予選を開始します。
ルールは、簡単トーナメント制でチームから3人のメンバーをだし、
ファイトしていき、先に2勝したチームが勝ち進めます。ただし決勝
戦は、先に3勝したほうが勝者です。それでは皆さん決められたス
テージに移動して下さい。」

カナ「遂にはじまったね。」

剣「まあ店舗予選だし負けても次の店舗予選があるから緊張せずに
いこうぜ。」

創一「全く俺達のリーダーは、なんでこう余裕なんですかね。」

和人「まあ仕方ないよな。」

遙か「うんうん。」

剣「ちよつと待て、いつから俺がリーダーになった。この大会に
誘ってきたのは創一だ。創一がリーダーなんじゃないのか？」

創一「いや、お前リーダーでさつき提出してきた。まあ問題はない
だろ、なあみんな。」

遙か「正直私以外なら誰でもいい。」

カナ「私も。」

和人「速く移動しようぜ。」

ダリルベルク「そうだな、相手に悪いし。」

剣「ただ面倒ごと押し付けただけじゃねいか。」

創一「んで全戦全勝で勝ち進めて(ほとんどワンキル)いまに至る。」
剣「誰に話してんのお前。」

創一「いや、なんでもない。」

店員「これより決勝戦第1試合を開始します。」

剣「誰からいく?」

創一「俺いっていいか?」

剣「分かった。負けんなよ。」

創一「了解、いってくる。」

店員「それでは、ルミナイズしてください。」

モブA「古の力お借りします。ルミナイズ神の降臨。」

創一「俺達の炎消せるものなら消してみな、ルミナイズエターナル・フレーム」

「オープン・ザ・フラッグ」

モブA「エンシヨントワールド。」

ライフ10 手札6 ゲージ2

四角炎王バーンノヴァ

創一「ドラゴンワールド。」

ライフ10 手札6 ゲージ2

ドラゴニック・オーバードロード

二人「え?!」

創一（ヤバイヤバイヤバイ魔法6枚ってこれ完全に手札事故だろ）

手札ドラゴトラップ×1

ドラゴニック・チャージプラス×2

ロイヤリティ×1

ドラゴンシールド青龍の盾×2

モブA（おいおいおいモンスター6枚ってしかもサイズ3は今コ
ル出来ないのぼつかだし、これ完全に手札事故だろ。あとリツキーお
前自己主張激しすぎだぞ。）

手札ドラゴンキットリツキー×1

炎魔連合カッター×1

四角炎王バーンノヴァ×2

ドラゴンベビーリッキー×1

ビリオンナツクルアニキ・ノ・スピリット ×1

お互いに危機感を感じていると目があってしまった。

二人「あつ。」

お互いに冷や汗をかき

二人「ふっ。」

お互いに笑い

二人「完璧な手札だ。」

お互いに強がった。

二人（え！完璧なのか。）

お互いに危機感がありました。

この時敵味方関係無く周りのメンバーとファイトを見ていた人は、

（あつこれお互いに手札事故だな。）と思う人と

（馬鹿だ。）と思う人に別れた。

モブA「俺のターンドロローチャーとジアンドロローキャスト天竜開闢
ライフ2払い2ドロロー。更にキャスト竜枯盛様ライフ2払い4ゲ
ジ追加。ドラゴンキツトリツキーをレフト、ギヤング・ザ・キングを
ライトにコール。」

ライフ10↓6 ゲージ4 手札5

炎輪霸王ギヤング・ザ・キング

サイズ 3 攻撃7000 防御5000 打撃5

ドラゴンキツトリツキー

サイズ0 攻撃3000 防御1000 打撃1

アタックフェイズ

モブA「行けキングファイターに攻撃ギガントフィスト。」

創一「ライフでうける。」

ライフ10↓5

ファイナルフェイズ

モブA「ギヤング・ザ・キングを素材にビリオンナツクルアニキ・
ノ・スピリットを必殺コール。」

ビリオンナツクル”アニキ・ノ・スピリット
サイズ3 攻撃8000 防御6000 打撃2

ギヤング・ザ・キングが炎に飲み込まれて中からビリオンナツクルが現れた。

カナ「なんでギヤング・ザ・キングのライフリンクが発動しないの？」

和人「リツキーの効果でライフリンクが無効化されているからな。」
剣「なんで知ってんの？」

和人「ドラゴンについて調べていたときにたまたま見つけてそれを覚えていただけだ。」

剣「あつそ。」

カナ「なんで攻撃できないのにコールしたの？」

遙か「リツキーのおかげでライフリンクなくなったから今のうちにコールしておこうと思ったんじゃないの。」

モブA「俺は、これでターンエンド。」

ライフ6 ゲージ2 手札4

創一「俺のターンドロージャーミアンドドロージャー！これは。」

モブA「どうかしたか？」

創一「(これは、勝ったな。) いやなんでもない。キャスト、ドラゴニックチャージプラスゲージ5追加。」

ゲージ9

創一「ゲージ2を払いキャスト、霸王豪竜波。相手の全モンスターを破壊する。」

モブA「なんだと?!」

リツキー破壊

ライフ5

ビリオンナツクル破壊

ソウル残り0

創一「そして2枚ドロ。センターにドラゴニック・オーバーロードをバディコール。」

ライフ5↓6

オーバーロード「うおー！覚悟しろ。」

いつもよりも炎が激しくオーバーロードが現れた。久々の登場でテンションがあがっているようだ。

モブA「ひっ。」

創一「オーバーロード、ビリオンナツクルにアタックだ。エターナル・フレイム。」

ビリオンナツクル破壊

ライフ5↓3

創一「2回攻撃。エターナル・フレイム2連打！」

モブA「ここでバーンノヴァの能力を使ってゲージが足りねえ。くそー」

ライフ0

店員「勝者渡辺 創一。」

二人「ありがとうございます。」

こうして二人は、仲間のいるところへ戻っていった。

創一「勝ってきたぜ。」

剣「いやお前最初手札事故ってたろ。」

創一「それはどうかな。」

ドラゴ「、、、」

創一「ん？ドラゴどうしたなんかついてるか。」

ドラゴ「いや先程のファイトどちらも霸王となのおつくカードを使っ

ていたのにな。私の存在意義を模索したただけだ。」
「そういえばそうだな。」

こいつなんかそういうところ気にするよな。」

剣「まあお前とは関係無いカードだからいいんじゃないか。お前は、覇龍だし。」

ドラゴ「、、、それもそうだな。」

店員「これより2回戦目を行います。両選手前へ。」

和人「次は、俺がいく。未来竜の力見せてやる。」

遙か「頑張つてね。」

和人「おうじやいつてくる。」

モブB「それじゃお願いします。ってあれ？なんで私モブBってなってるのよ。」

モブA「いや俺がAだったんだからだいたい予想つくだろ。」

モブAが呆れていた。

モブB「うるさいゲージ管理ができない奴と一緒にされるのが嫌なのよ。」

モブA「なんととプレイミスは、誰でもあるだろうが。」

なんか口喧嘩を初めたんだけど、、

???1「はははまあいいんじゃないやね。ファイトをしようじやねえか、、つてなんで俺まで前の???1に戻っているんだよ。」

剣「相手だけじゃ失礼だろ、それでいいよ。」

???1「ふぎけん。これファイト終わったたら元に戻るんだろうな。そうじやなかったらピンチだぞこれ。」

ドラゴ「もういいよ。そういうのいいから、店員さん速く初めようぜ。」

店員「それもそうですね。ではこれより2回戦を初めます。ルミナイズしてください。」

???1「未来は俺達が切り開くルミナイズフューチャードラゴンズ。」

モブB「鬼の力頼みます。ルミナイズ百鬼集結。」

「バディファイト。」

「オープン・ザ・フラッグ」

??? 1 「ドラゴンワールド。」

ライフ10 手札6 ゲージ2

未来竜ドラゴン

モブB 「百鬼夜行。」

ライフ10 手札6 ゲージ2

天和御魂ヤミゲドウ・ミカズチ

伝説のモンスター ヤマトドラゴン見参

先行は、和人からなのだが、

外野「おいあいつバデイいないぞ。」

外野「バデイレア引けてないんだろう良くある話だ。」

そう前の話で出たモブ2のバデイは、カードだけの状態、要するに前の剣と創一と同じ状態なのだ。

だが言われている方は、嫌な気持ちになるのをいつている方は気づいていない。

モブ2「、、、」

???1「おい周りの奴ら少し黙れ。」

モブ2「え？」

和人「バデイがいなけりやファイトしちやいけないのか？バデイがいなければ下に見ていいのか？違うだろ、誰でも差別などかなく楽しくファイトできるのがバデイファイトなんだろうが。文句がある奴は、出てこい全員まとめて相手してやる。」

そういつて和人の威圧感に周りが圧倒され誰も喋らなくなった。

モブ2「なんであんなことを？」

和人「俺もバデイ最近までを隠して生活していたからな。少しはお前の気持ちかわかるんだよ。だからきにするな。えつとモブ2さん。」

京子「私は、京子というのよ。助けてくれたことには、お礼を言うわ。それでも手加減なんかしないでよね。」

和人「当たり前だ、いくぜ。俺のターンドロージャーリアンドドロ、まずはキャスト、未来への足音。デッキから未来竜ドランを手札に加える。」

未来への足音

魔法 ドラゴンワールド／スタードラゴンワールド

デッキからサイズ2以下の〈未来竜〉を手札に加え、デッキをシャッフルする。

和人「いくぜゲージ1払い未来竜ドランをレフトにバデイコール。」

ライフ10↓11 ゲージ2

ドラゴン「やってやるぜ。」

未来竜ドラゴン

サイズ0 攻撃3000 防御1000 打撃1

コールコストゲージ1払う

フューチャーアクセス〈対抗〉

デッキの上から5枚のカードをめくる。その中にサイズ3の〈未来竜〉があるのならばこのカードの上に重ねる。

フューチャーアクセスは、1ターンに1度しか使えない。

ソウルガード

和人「ドラゴンの効果発動、フューチャーアクセス。」

そういうとドラゴンの上から赤い円が出てきてドラゴンをおおった。

モブ2「なにが始まるの？」

和人「デッキの上から5枚めくってその中に〈未来竜〉があるのならドラゴンの上に重ねる。これが偉大なる古代の力だ。進化せよ。戦闘竜サムライドラゴン。」

戦闘竜サムライドラゴン

ドラゴンワールド

未来竜 サイズ3 攻撃15000 防御5000 打撃3

このカードは、未来竜の効果でなければコールできない。

〈対抗〉このカードのソウルのサイズ0の〈未来竜〉を一枚コールコストを払わずにこのカードの上に重ねる。

3回攻撃 ソウルガード

ドラゴンがいたところに全身を鎧でまといまるで侍のようなドラゴンがいた。

サムライドラゴン「我々は、戦いの中で生きる〈戦闘竜〉いざ尋常に勝負といこうぞ。」

アタックフェイズ

和人「サムライドラゴンでファイターに攻撃。」

サムライドラゴン「一刀両断。」

京子「きや、」

ライフ10↓7

和人「ターン終了。」

ライフ11 ゲージ2 手札6

京子「私のターンドロローチャーとジアンドロロー、あんた私も全力でいくわ。氷獄王キュートスグリッドをセンターにコール。効果でゲージ1枚奪う。そしてセンターに闇荒御魂ヤミゲドウ・ミカツチをバディコール。」

ライフ7 ゲージ0 手札 5枚

意思はないとしてもとんでもない位の威圧を感じる。

これが世界を食らおうとしたモンスターの力。

アタックフェイズ

京子「ヤミゲドウでサムライドラゴンを攻撃。」

和人「サムライドラゴンの効果発動。ソウルのドランをコール。」

サムライドラゴンが光となって消えドランが現れる。

これによりヤミゲドウの攻撃は、実質無効となった。

ドラン「もう一度戦うぜ。」

京子「ならドランに2回攻撃。」

和人「ドランの効果フューチャーアクセス。」

京子「相手のターンでも使えるの！だけどそんな都合よくくるわけないわ。」

和人「それはどうかな、頼むカード達よ俺の声に答えてくれ。」

1枚目ハズレ

2枚目ハズレ

3枚目ハズレ

4枚目ハズレ

ドラン「おい引き悪すぎだぞ。」

和人「分かってるよ。頼む5枚目。」

5枚目 戦闘竜 ヤマトドラゴン

和人「よし成功だいくぜ、ドラゴ。」

ドラン「おうよ。」

戦闘竜 ヤマトドラゴン

サイズ3 未来竜 効果15000 防御7000 打撃4

このカードは、〈未来竜〉の効果でないとコールできない。

このカードのソウルを一枚ドロップゾーンに送り発動できる。このターンこのカードは、相手の全てのモンスターとファイターに攻撃できる。

貫通 ソウルガード

先程と同じ様にして現れたのは、炎を鎧のようにみにまとっている武士のようなドラゴンがいた。

京子「私のターンなんだけど好き勝手にしてくれちゃって。私は、これでターンエンド。」

ライフ8 ゲージ0 手札 5

和人「俺のターン。」

京子「ここで私は、ヤミゲドウの効果デッキからゴクジョウヤミゲドウをソウルにいれるわ。」

和人「無駄だ。ヤマトドラゴンの効果発動ソウルを一枚ドロップゾーンに送りヤマトドラゴンは、このターン相手の全てに攻撃ができる。」

京子「なんですって?!」

アタックフェイズ

和人「行けヤマトドラゴン全てをぶち壊せ。」

ヤマトドラゴン「超連続切り。」

京子「キャスト、百鬼魔導 闇達え攻撃を無効化。これで私のターンで勝ちよ。」

和人「勝つのは俺だ、キャスト、未来襲来もう一度行けヤマトドラゴン。」

未来襲来

ドラゴンワールド／スタードラゴンワールド

ゲージ1払う

自分の場の〈未来竜〉を一枚スタンドする。

京子「キヤー」

ライフ7↓3

和人「貫通。」

京子「、、」

ライフ3↓0

勝者 朝倉 和人

ファイトが終わり和人と京子は二人で話をしていた。

京子「負けたわ。私もバディが欲しいわね。」

和人「まあバディ無くても強いんだからバディができれば俺は多分勝てないな。」

京子「次は負けない。」

そうして二人は、お互いのチームの元に戻った。

剣「よしこれで俺達の勝ちだが、、ドラゴ少しいいか。」

ドラゴ「うむ。」

剣「お前の力は、対象のモンスターを霸王軍にして強化するものだとお前は、言っていたがへ未来竜のモンスター達には、霸王軍という属性をもっていなかった。一体どうことなんだ？」

ドラゴ「我が与えたのは。我の力ではなく我がファイトの中で得たエネルギーを与えたに過ぎん。我もなぜ古代竜の力がでてきたのかわからない。」

剣「そうか。」

まあ和人達が強くなったからいいか。

そのしばらくして和人が帰ってきた。

そして俺達は知らなかった。

まさかあんなことになるなんて。

創一「お疲れ。これであと1勝だな。」

和人「あとは任せた。」

カナ「えっと次誰がいく？」

剣「俺がっこう。」

遙か「、、」

和人「どうした？遙か。」

遙か「和人他の女の子と楽しそうに話していた。許さない。」
何かドス黒いオーラを出している遙かがいた。

和人「お、おい遙かさん？何ダリルベルクの剣もってんのやめろって、あとダリルベルクどこ行った？。」

周りを見たわすとダリルベルクが少し離れたところに倒れていた。
ダリルベルク「に、逃げろ、うっ。」

剣「おいやめろ遙か、いくぞドラゴあいつら止めるぞ。おいカナ次のファイト任せる。創一こい。」

創一「おうよ。」

カナ「ちよつと待ってよ。まあいいか。いくよー。」

???「ええ私の新しい力見せてあげる。」

モブ3「あの一大丈夫ですか？あっち。」

カナ「ええ、多分。」

店員「、ええとじやあ三回戦初め。」

モブ3「合体せよ。カードバーン。ルミナイズ究極合体。」

カナ「ルミナイズサイバーチェンジ。」

モブ3「ヒーローワールド。」

バディ「カードバーン」

カナ「カタナワールド。」

バディ「サイバー忍者レイ」

サイバーレイ「サイバーカナ改めサイバーレイただいま見参。」

合体せよレイ ブレイブドラゴン登場

カナ「私のターンドロージャーシアンドロー。いくわよモブ3さん。」

モブ3「モブ3じゃない俺の名前は、坂井 豪太（さかい こうた）だ。」

カナ「あつえつとそれは、失礼しました。」

豪太「気にするな。さあファイトといこうぜ。」

剣「さあて何が、でてくるかな。」

遥かをなんとか暴走を止めることに成功し今は、和人に任せて剣と創一は、チームの席について応援をすることにした。

創一「にしても驚いたな遥かと和人がまさか付き合っているとは。」
剣「確かにな。」

そう遥かがあんなになるといふことは、、そういうことなんだろう。全く気づかなかった。

カナ「いくよ。まずはキャスト明鏡止水ゲージ3追加。そしてゲージ2を払いバディ変身。私と一体化してサイバー忍者レイ。」

ライフ10↓11

サイバー忍者レイ

カタナワールド

ブレイブ

攻撃7000 防御3000 打撃2

このカードが変身しているときフィールドにモンスターがいなくてブレイブがこのカードだけの時ドロップゾーンのブレイブモンスターをこのカードにブレイブコストを払わずブレイブしこのカードをスタンドする。この効果は1ターンに1度しか使えない。

変身（ゲージ2払う） 2回攻撃

レイ「いくわよ。」

そういうとレイがアーマーとしてカナと一体化した。

一見すると格好いいのだが、

カナ「合体完了いくわー早くしなさい」、あーもー私が喋ってるときに話さないでよ。」

何故かレイの声がカナと同じになっただけなので同じ人が一人二役やっているようにしか見えなくぶさけているようにみえるのである。

剣「何あれ？」

創一「あれだろどつかの特撮の二人でひとつみたいな奴だろきつと。」

カナ「もういい。ブレイブ・ライガーをコールしてゲージ1払いブレイブ。」

ブレイブ・ライガー（ヤギリさん提供のカード）

ブレイブ

サイズ2 攻撃5000 防御1000 打撃1

このカードが登場した時かブレイブした時、君の場のカード全ての攻撃力+3000して、打撃力+1

対抗ブレイブしているこのカードを手札に戻してもよい。戻した

場合君のライフ+2する。

ブレイブゲージ2払う。

サイバー忍者レイ+ブレイブ・ライガー

攻撃12000 防御4000 打撃3

カナ「ライガーの効果登場した時とブレイブした時打撃力が1増える。」

カナ「私でファイターに攻撃。」

豪太「ぐは。」

ライフ5

レイ「ターンエンド。」

ライフ11 手札4 ゲージ1

カナ「それ私のセリフ。」

豪太「やるな、でも俺は負けない。俺のターンドロージャーリアン

ドロドロ。キャスト、ハイパーエナジーこれによりゲージ4追加。更にキャスト発進準備OK,そしてバディ搭乗カードバーン。発進準備OKの効果ドロップゾーンに送ることで2枚ドロロー。」

ライフ6 ゲージ5 手札6

豪太「まだ終わっていない。レフトにカードサーペント、ライトにカードライノをコール。」

レイ「展開してきた。なににする気？」

豪太「決まっているだろ合体だ。ゲージ4払いフィールドのカードバーン、カードサーペント、カードライノを合体現れるアルティメットカードバーンに搭乗。」

場にいた3体のロボットが合体し1体の巨大なロボットになった。

アルティメットカードバーン

攻撃12000 防御8000 打撃3

2回攻撃

レイ「これは、まずいわね。」

アタックフェイズ

豪太「カードバーンでファイターに攻撃。」

カナ「きやつ」

ライフ8

豪太「2回攻撃。」

レイ「くっ。」

ライフ5

豪太「ターンエンドさあ次は、なにを見せてくれるのかな？」

ライフ6 ゲージ1 手札4枚

カナ「私のターンドロローチャーჯアンドドロロー。ブレイブ・ライガーの効果このカードをを手札に戻すことでライフ+2する。」

ライフ7

豪太「なに?ということは。」

カナ「そう私は、さつきと同じようにライガーをコールしてゲージ2払いブレイブ。これでレイの打撃力は+2される。」

アタックフェイズ

カナ「私でファイターに攻撃。」

豪太「させるか。キャストお前の攻撃は見切った。攻撃を無効化。」

カナ「させない。キャスト、サイバー忍法 エレキショット。」

サイバー忍法 エレキショット

魔法

ブレイブ

自分の場にモンスターがいなくてブレイブカードがあるとき使える。

対抗 相手が発動した魔法を無効化する。

豪太「なんだと。うわっ」

ライフ6↓1

カナ「これでラスト私でラストアタック。」

レイ「これで終わりだ。」

豪太「キャスト、お前の技は見切った。もう一度攻撃を無効化する。」

カナ「ターンエンド。」

豪太「このターンで終わられさせてやる。ドロージャーシアンドドロージャスト私に力を貸してくれ。デッキから2枚ゲージ追加してカードを1枚ドロローする。」

ライフ1 ゲージ3 手札4

カナ「なににする気？」

豪太「こうするんだよ。カードワイバーンをレフトにコール。」

剣「カードワイバーンだと?!」

創一「なんだよあのモンスターなににするか知っているのか？」

剣「あいつは、カードバーンを進化することができるモンスターなんだよ。」

なにか剣達が言っているけど気にしない気にしない、、多分。

レイ「気にしないといけなと思うけど、、まあいいわ。」

アタックフェイズ

豪太「カードバーンとカードワイバーンでファイターに連携攻撃。」

レイ「カナ今よ。」

カナ「うん。キャスト、サイバー忍法バリアスペース。」

サイバー忍法スペースバリア

カタナワールド

魔法

忍法 ブレイブ

自分のフィールドにモンスターがいなくてブレイブのアイテムがあるときに使うことができる。

対抗 相手の攻撃を無効化する。その後カードを1枚ドロウする。

豪太「なら2回攻撃。」

カナ「私は、負けないキャスト、サイバー忍法ライフストリーム」
サイバー忍法ストリームバリア

カタナワールド

忍法 ブレイブ

自分のフィールドにモンスターがいなくてブレイブのアイテムを装備しているときに使うことができる。

相手の攻撃を無効化し、山札の上から2枚をゲージに置く。

豪太「これも防ぐか！ならカードバーン究極合体ゲージ2払いカードワイバーンとアルティメットカードバーンを合体現れるアルティメットカードバーンD W（デュアルウイング）。」

カナ「え！まだ合体するの。」

レイ「さっき剣達が話してたでしょうが聞いてなさいよ。」

豪太「これで終わりだカードバーンで攻撃アルティメットウイングアタック。」

カナ「キャスト、バディブロックこれでこのターンのダメージは、受けない。」

豪太「防ぎきられたか、ターンエンド。（俺の手札は全てガード魔法次のあいつのターンも耐えて必ず勝つ。負けられないんだチームのためにも。）」

ライフ1 ゲージ1 手札4

今フラグがたってしまった。

カナ「私のターンドロウチャージアンドドロウそしてファイナル

フェイズ」

豪太「なんだと。」

カナナレイ「おいでブレイブ・ドラゴン」
ブレイブ・ドラゴン「ぎやおー」

カナの前に突然ゲートが現れて中から青い機械仕掛けのドラゴンが現れた。そしてカナは、ドラゴンの上に乗った。

カナナレイ「必殺ブレイブ・キャノン！」

必殺ブレイブ・キャノン

カタナワールド

相手のライフが4以下で自分のフィールドにモンスターがいないときブレイブのアイテムを装備しているなら使うことができる。

使用コスト ゲージ2払う

相手に4ダメージ与える。このダメージは無効化されず、ダメージも減らされない。

ドラゴンが相手に向かって口からレーザーのようなもの相手に向かって放った。

豪太「ばかなー」

ライフ0

店員「勝者佐藤 カナ。」

剣「よっしゃー俺達の優勝だ。」

創一「これで地区予選に行くことができるな。」

和人「地区予選までには、もっと強くならないとな。」

遙か「そうだね。」

声が聞こえてきたので後で後ろを向くと和人と和人にぴったりとくっついている遙かの姿があった。しかもなんか和人がすごい疲れしている感じがする。、、なんかお疲れさんです。

そんな感じの話をしていると決勝で戦った相手のチームがやってきた。

モブー「いやー負けたよあんたら強いな。」

京子「次やった時は、負けないわよ。」

和人「いや次も俺達が勝つよ。」

豪太「次は、勝つ。」

カナ「次も返り討ちに、、、してやるわ。」

レイ「いまの間何？」

カナ「だつてさっきのファイトバディブロック無かったら私まけてたんだもの。」

創一「たしかに。無かったら負けてたな。」

豪太「あれなかったらなー」

京子「確かにね。」

カナ「みんなしてひどいよ。」

みんな「ははは」

まあこんな感じで俺達は、楽しんでいこう。

この仲間達とともに。

夏休み突入問題の連発 旅行の準備

大会から数日たった。

剣達は、地区予選に向けてバディファイトの特訓にあけてくれた。

そんなある日

カナ「もうすぐ夏休みじゃん。」

和人「そうだけどそれがどうかしたか？」

カナ「チームの団結力を上げるためにみんなで旅行行かない？」

創一「いいけど、それお前が行きたいだけだろ。」

カナ「ソナナコトナイヨ。」

創一「いやお前嘘つくの下手すぎだろ。」

カナ「うわーっ！だつて行きたいんだもん。今年まだ海行つてないんだよ。」

そういつて騒ぎだした。ちなみにここは、和人の家なんか集まるときは、いつもここになった。なので問題はない。

レイ「昨日からずっとこんな感じなのよ。私もいい加減疲れたわ。」

創一「それは…えっとそのお疲れ様。」

剣「もう海でいいんじゃないか、面倒だし。」

遙か「……海がいい。」

なんか海に行くって感じでまとまった。

和人「まあ海に行くってことでまとまったけどどうやって行くんだよ。こっから少し遠いぞ。」

剣「バディにつれたいってもらうのはどうだドラゴが戦闘竜になってドラゴニック・オーバーロードと一緒にならいけるんじゃないか？」

創一「オーバーロードは、無理。体が暑すぎて長く乗っていられない。それにオーバーロードは、人型だから目立つ。」

カナ「目立つのは、全部一緒なんじゃないかな。」

レイ「珍しくカナがまともなこと言った。」

カナ「珍しくつてなによ。たまにはまともなこというよ。」

レイ「言ってみなさいよ。」

カナ「ええと……ごめん思い付かない。」

知ってた。」

レイ「ほらね。」

創一「どうでもいいけどどうやって行くんだよ。」

カナ「どうしてもよくない。せつかくいいものがあるのに言わないよ。」

剣「なんだよいいものつて。」

カナ「えへへ見よブレイブ・ホース。」

レイ「！カナ、それここでは駄目よ。」

カードから機械仕掛けの馬が出てきた。

和人「なにいきなりデカイ馬だしてんだよ。てか家の中でコールすんな。家が壊れる。」

真っ先に怒ったのは和人だった。そりや家壊されたらたまつたもんじゃないよな。

カナ「あ、ごめん。」

ブレイブ・ホースもそのことに気付いてカードに戻りカナのもとに向かった。

レイ「馬鹿でしょカナなんであんな所でブレイブ・ホースをだすのよ。」

カナ「だからごめんって言ってるの。」

剣「いいから外に出るぞ。」

改めて外に出てきた。

そこで改めてブレイブ・ホースをだした。

剣「で、どうやってブレイブ・ホースを使うんだよ。」

カナ「こうするだよ、ブレイブ・ホースタイプチェンジバイクモード」

ブレイブ・ホースが変形しバイクになった。

遙か「、、バイクになった。」

剣「これで行くのか？」

カナ「そうよ。」

創一「いやどうやって行くんだよ。一つしかないだろサイドカーでもつかうのかよ。」

レイ「いや足りないでしょ。それは、一人だけ遙かと言うことよ。車でいくのよ。カスミさんが車を運転してくれるとってた。」

カナ「バイクは創一が確か免許取っていたはずでしかもこの間壊れたはずだから新しいバイクとしてプレゼントしようとしただけ。」

剣「いやプレゼントしたかっただけかい。ていうかさつきから話が全く進んでないけど。」

創一「いや、、えつとありがとう。」

カナ「どういたしまして、あと夏休みいつでもいいんだけどショッピングモールとか一緒にどう、、かな。」

レイ「データは、よこしてほしいってカスミさんがいったよ。」

創一「分かった。」

ちなみに剣もバイクの免許をもっていたが空気を壊しそうだったのでだまっていた。

遙か「私達、夏休みの内にどこかに二人で行く？」

和人「そうだな、またショッピングモールで荷物持ちでもなんでもしますよ。」

遙か「そっか、、今なんでもするっていったよね。」

和人「えつと言ったよ。」

遙か「そっか楽しみにしてるよ。」

剣は、思った。

俺だけなんか浮いてねと、あとブラックコーヒー欲しい。

ダリルベルク「確かにな。」

レイ「まあがんばって。」

オーバード「まあきにしなきゃいいんだよ。」

ドラン「あとで、、まあ、、ええと、、なんかするよ。」

剣「ドラン、、もうちよつとましなこと言つてよ。」

ドラゴ「まあ頑張れ。」

なんかバディ達と剣だけで会話していた。

それからバディ達と愚痴やデツキ構成について話をしていた。

オーバーロード「俺だけいまだにフレイムドラゴン一体しかないんだけどどういふのとだよ。」

ダリルベルク「いやお前そもそもコラボカードじゃんそりや来ないよ。それより俺がカオスモンスターだけとおしゃべりなのを周りに知らしめる方法をなにかいいアイディアないか？」

レイ「正直いつてどうでもいい。それよりカナをもう少しおとなしくさせる方法ない？」

ドラン「そんなの無理だろあいつ静にさせるのは無理だと思うけど、それより俺未だにスタードラゴンワールドの力出せないんだけどどうしよう。」

ドラゴ「それは、経験を積みればできると思うぞ。それよりお前達霸王軍になる気はないか？」

「「無い。」」

一斉に断られた。

ドラゴ「……そんなにいやか？」

オーバーロード「属性が霸王軍になるのはなあ、個性がなくなる。」

レイ「今は、このままがいいのよ。ブレイブなかなか面白いし。」

ダリルベルク「カオスじゃなくなるし目標がなくなるのが嫌だ。」

ドラン「未来竜の力の本質を見たい。」

まあ一応、みんなそれなりの理由をもっているな。

ドラゴ「そうか、まあいいか。なりたくなったら言えよ。」

「「「そうするよ。」」」

この時一緒に話をしていた剣は思った。

こいつらなかないなど。

それに個性が強く、バディのあいつらは大変だと(一人を除く)まあいいか早く夏休みにならないかな。

生徒会長の力

剣 side

俺は今、今生徒会によばれて生徒会室にきている。なんでも俺達に参加した大会についてだそうだ。

一人でいいということだったので代表として俺だけがいくことになった。

あいつらなんかあつたら責任を俺に押しつけようとしてやがるな。まあ生徒会室だから服装と態度は、ちゃんとしてっつと。

剣「失礼します。」

中に入るとそこにいたのは、学生服を着たメガネをかけた俺より少し背が高く体型は普通のこの学校の生徒会長がいた。

生徒会長「やあ。よく来てくれた。一応自己紹介をしておこう。生徒会長をしている3年2組の坂城（さかい）カイトだ、よろしく。」

剣「こちらも言った方がいいですかね？」

カイト「いや、構わないよ。それより本題に入りたいんだけどいいかい。」

剣「構いません。大会についてといわれたのですがなにか問題でもありましたか？」

カイト「いや、問題はない。ただ君達の中に見たことも聞いたことも無いカードを使っているというのを聞いてね。もしかしたら違法カードなんじゃないのかという話が生徒会にきてね、一応大丈夫だと思っただけ確認しておこうと思っただけここに呼んだんだよ。」

確かに俺達の中で普段あまり見ないというか俺達しか持ってないモンスターが多いな。

剣「確かに俺達は、あまり出回っていないカードをもっています。バディポリスに霸王軍やブレイブモンスターを全て提出しあと数カ月したら一般のブースターやデッキとして出回る予定になっています。」

これは、事実だ。

これは、ドラゴが俺のもとに来てすぐの時から話が来ていた。

たった一人だけがもっているカードがあるなんて一部のバディファイターやカードコレクターから恨まれられない。だから俺達は、バディポリスに相談したら取引きを持ちかけられた。

内容は、新しい霸王軍のカードが出来たら提出して欲しいということだった。もちろんカードは、返されるし報酬も出る。あと身の安全も保証してくれるそうだから安心してファイトを楽しめることになった。

余談だがブレイブモンスターは、既にカスミさんがブレイブモンスターのデータ全てをバディポリスや関係のある場所に送っているそうなので問題はないそうだ。

カイト「それならば構わない、、、時間を使わせてしまってますまなかつた。協力に感謝する。」

剣「いえこちらでも誤解を解けるのでしから当然です。」

カイト「本当に今日は、感謝する、、もし時間があるのならこれから私とファイトしないか？ぜひ君の力を知ってみたくてね。いいかい？」

剣「俺は構いませんよ。」

カイト「なら早速始めよう。フィールド発動。」

「バディファイト」

「オープン・THE・フラッグ」

剣「霸王降臨」

バディ ドラゴニック・エクスカイザー

ライフ9 手札7 ゲージ2

カイト「THE chaos」

バディC・イヨノラセツリユウ

ライフ10 手札4 ゲージ2

カイト「それが、、霸王降臨か。」

剣「はい。それでは、先行は、俺です。俺のターンドロージャーリアンドドロージャーに覇竜クロスバスターをコール。」

覇竜クロスバスター

ヒーローワールド

サイズ2

霸王軍

攻撃7000 防御2000 打撃3

『彼らは、霸王軍になっても世界を守っている』

カイト「それが霸王軍か、、、」

アタックフェイズ

剣「クロスバスターでファイターに攻撃。」

カイト「くっ。」

ライフ10↓7

剣「ターンエンド。」

ライフ9 手札7 ゲージ3

カイト「私のターンドロージャージアンドローミニギアゴッド・スケルトンをセンターにコール。効果で4枚をドロップゾーンに送りその中に合ったスケルトンを手札に。そして存在還元を使ってスケルトンをドロップゾーンに送り2枚ドロ。更にC・ダリルベルクをレフトにコール効果で3枚めくって1枚を手札に残りドロップゾーンにそしてC・ライジングフレアをライトにコール。効果で3枚をドロップゾーンに送りクロスバスターを破壊、、、あれ、、、」

ドロップゾーンに送られたカード

混沌より来る者

存在還元

ドラゴニック・カオス

剣「、、、」

カイト「、、、センターにC・イヨノラセツリュウをセンターにバディコール。」

ライフ8

アタックフェイズ

カイト「ライジングフレアでセンターダリルベルクとイヨノラセツリュウでファイターに攻撃。」

剣「この。ぐはあ」

ライフ9↓7↓5↓3↓1

カイト「ターンエンド。」

ライフ8 ゲージ3 手札4

剣「俺のターンンドローチャージアンドロー！これは、いくぞゲージ3払い覇獣グランデルをセンターにコール。

覇獣グランデル

レジェンドワールド

サイズ3

霸王軍

攻撃10000 防御100000 打撃3

コールコストゲージ3払う。

このカードは、相手のカードの効果で破壊されない。

自分のライフが5以下の時 このカードが攻撃した時相手の場のカード全てを破壊し1枚につき相手に1ダメージ。

(デスカース)このカードに攻撃したカードは、ターン終了時に破壊する。

2回攻撃

カイト「それは、魔獣グランデルか？」

剣「そうだ。こいつも活躍したいと言う思いで霸王軍になったんだ。いくぞ、アタックフェイズ」

グランデルで攻撃、効果で相手の場のカードを全て破壊し1枚につき相手1ダメージ与える。」

カイト「くっ。」

ライフ8↓5

剣「2回攻撃。」

カイト「くそ、」

ライフ5↓2

剣「ターンエンド。」

カイト「俺のターンンドローチャージアンドロー。キャストドラゴニック・カオスドロップゾーンのイヨノラセツリユウをセンターに

コール。更にC・ゴーカスをライトにコール。効果でイヨノラセツリユウを手札に戻しコール。」

アタックフェイズ

カイト「いけC・イヨノラセツリユウでグランデルに攻撃。」

剣「キヤスト、霸王の加護グランデルの攻撃力と防御力を3000追加し反撃。」

カイト「くっだがもう一体のイヨノラセツリユウでセンターに攻撃。」

剣「グランデルが破壊されちまったか。だけどまだ負けるわけには、いかない。キヤスト、覇龍の復活フィールドの霸王軍が破壊された時ドロップゾーンの覇龍をコールコストを払わずコール。頼む俺のバティドラゴニック・エクスカイザーをライトにバディコール。」

ライフ1↓2

霸王の復活

レジェンドワールド

魔法

フィールドの霸王軍が相手によって破壊された時に使うことができる。

使用コストゲージ1払う。

「対抗」ドロップゾーンの覇龍をコールコストを払わずにコールする。その後相手の場のモンスターを破壊する。

ドラゴ「俺の出番だー。」

カイト「く。ターンエンド。」

ライフ3 手札2 ゲージ5

剣「俺のターンドロージャーリアンドロー。アタックフェイズ、ドラゴでファイターに2回攻撃。」

カイト「負けたか」

ライフ2↓0

カイト「いいファイトだった。またよかったらファイトして欲しい。次は、負けないよ。」

剣「ええ俺もたのしかったです。またやりましょう。こんども俺が勝ちますよ。」

「そうして剣は、生徒会室からでていった。

今回のファイト実際には、相手の手札事故による勝利だった。

それに本来ならもっと強力な盤面をつくれただろうし

カイトがサイズ30以上のギアゴッドや追撃用のカードを引いていたら自分の負けだったこと。

そしてギアゴッドが無くてもあれだけの力をもっていたカイトは、とても強い、さすがは、生徒会長ということだ。俺ももっと強くならないといけないな。

そう思いつつ自分の家へ帰った。

海での出来事

剣「はあ、はあ、はあ。」

そこは、荒廃した町だった。そこで俺は、見たことがないモンスターと戦っていた。黒い塊でよく分からないが様々な攻撃をしている。俺は、防ぐのがやつとだった。

そして俺が持っていた剣がモンスターの攻撃でついに粉々になってしまった。

剣「しまった。」

そして、モンスターは、レーザーの用なものを打ってきた。そして、

剣「うお、、なんだ夢か。」

なんだったんだ今の夢。なんか前にもあったような。リアルな夢だったな。

周りを見渡すとそこは、俺の部屋だった。

時間を見ると7：30分だった。

ちなみに今日は、日曜それに夏休みに入っているのだからこの時間に起きてもなんの問題もない、、はずだった。

俺は、思い出してしまった。

今日皆で海に行く日だったことを。

そして集合が8：00だということ。

そして集合場所がこっから20分かかるということを。

剣「遅刻じゃねえか。」

剣は、急いで準備をしようとしたが昨日の内に準備したものがない。

剣「なんでないんだよ。昨日ちゃんと準備したはずだぞ。」

焦っていると部屋のドアが開いた。そこにいたのは、ドラゴだったドラゴ「剣、起きたのなら早く飯を食うぞ。」

剣「なあドラゴ、俺が昨日の内に準備したもの「それなら我が既に玄関に置いておいた。朝飯も作ってある。あとは、お前が飯をくつて着替えるだけだ。」え?!」

そうして俺は、優秀なバディのおかげで準備を終わらせ無事集合場所についたのであった。

なお夜遅くまでワクワクして眠れなかったというカナとそもそも昨日の内に準備せず今日急いで準備したという和人は遅刻した、、罰として昼飯二人におごってもらったのは、別の話である。

カスミさんが先導して道を走るから俺と創一がバイクで向かい海へと向かっていた。

カスミ「うーんこれどういうことかしら?」

和人「どうかしたんすか。」

カスミ「いやね、これからいく海の家近くに何かゲートのような力があるのよ。」

和人「その何か問題あるんすか? たまにゲートが出て来てイリイガルモンスターが出てくるってのは、よく聞く話ですし毎回バディポリスが対処してるって聞いてますけど。」

カスミ「普通わね。でも少し変なゲートなのよねでもモンスターが出てこれるほど大きくはないから大丈夫だと思うけど少し心配なのよ。」

そんな会話がされていた。

その時きずくべきだった。

まさかそのゲートがとんでもないことになるということをし、海の家に着くとどこかで見たことのある集団がいた。

???「あれなんでここにいるの?」

剣「それはこっちの台詞だよ。なんでここにいるんだよ。」

チームリバイバル。」

そこにいたのは、店舗予選で俺達と戦ったチームリバイバルだ。

チーム名初めて聞いたって？ハハハ気のせいだよきつと多分。

ちなみにチーム名の理由は、チームのほとんどが結構前のグッズでその強化使っているからだそうだ。

??? 「なんだよ、そんな驚いてんだよ。」

剣「いやお前今まで小説でしゃべったことないし、読者も知らないからファイトしてない二人実質初登場なんだよ。」

黒い髪に青い目の少年、海藤（かいどう） 弾（だん）とかなりマツチヨな体をした少年の新堂（しんどう） 光（ひかる）、二人が残りのチームリバイバルのメンバーだ。

弾「一体何の話をしているんだ？」

剣「いやなんでもない。それにしてもお前達も泳ぎにきたのか？」

京子「それ例外なにあるの？」

剣「それは、、確かに。」

創一「まあせっつかくあったんだし一緒に泳がないか？」

光「いいだろ。まあせっつかくだ。楽しもうじゃないか。」

和人「なんかすごい大人みたいな話方だな。」

光「まあな。」

豪太「こいつ昔は、こんな話方じゃなかったんだけどな。まあ、色々あったんだよ。」

そんな他愛もない会話をしながら剣達は、海へ歩いていった。

そして、、

剣「それじゃ俺達は、こっちだから。」

カナ「ええまた後でね。」

それからそれぞれが更衣室で着替えてある程度海で遊んでいた。

女性陣は、ビーチバレーを。

バディモンスター勢は、砂でかなり本格的な城を作っていた。

そして男性陣は、、

和人「お前ら準備は、いいな。」

創一「ああこれは、負けられないな。」

弾「負けられないな。」

豪太「俺、泳ぐの苦手なんだよな。」

剣「まあそういうなつて。」

光「始めるぞ。」

「そう俺達が今から始めようとしているのは、水泳対決だ。」

ルールは、簡単誰よりも早く泳ぎ少し遠い所にいる覇竜ブロンズシールドドラゴンを目指すという対決だ。

なせブロンズシールドドラゴンがいるかって。

ドラゴがカードをもっていた。それを実態化した、それだけだ。

ちなみに周りには、人がいないのは、確認してやっているそれにスタートは、砂作りが本格的過ぎてギブアップしてきたオーバーロードがする。ちゃんと平等にするための処置だ。

オーバーロード「それではいくぞ、よーい、、、ドン。」

全員が一斉に海に飛び込んだ。

最初に飛び出たのは、弾だ。

弾（はあーハハハ、やはり私の勝ちで決まりのようだな。）

オーバーロード（はえーな弾だが、創一には、かなわないな。）

オーバーロードがそんなことを思っていると創一が弾を越した。

創一（おせえーぞ弾）

弾（くつまさか負けるとは）

そのまま創一の独走で1位だった。

そのあと皆で楽しんで昼飯を食うために一度海の家へ向かった。なお二人ほど財布が軽くなって泣いていたのは、いうまでもない。

剣「さあて午後は、なにする？」

弾「なら俺と誰かファイトしないか？」

創一「いいなそれ。俺がやるよ。」

弾「よしそれじゃフィールド発うおつと。」

弾がフィールドを発動させようとすると地面が揺れた。

剣「地震？マジか。」

豪太「?!なんだあれ。」

そこで剣達が見たのは、海の底から黒い何かが出てこようとしている光景だった。

少し離れた所

???「やったぞ遂に成功だ。ついにあのモンスターを蘇らせることに成功したぞ。さあ暴れるがいいかつて世界を破壊しつくすといわれた伝説のモンスター」

超次元竜よ。」

その声に答えるかのように海からでたモンスターは、雄叫びをあげるのであった。

破滅をもたらす伝説の竜

??? 「ギャオーオーオー」

いきなり地震が起きたかとおもうといきなり海の中から黒い竜が現れたかとおもうとこちらに向かっている。

創一 「おいこつちに向かってくるぞ、どうするんだ？」

剣 「どうするもこうするも避難したほうがいいんじゃないのか。」

少し会話して逃げようとした時謎のモンスターの口の中が光っている。あれつてもしかして

豪太 「!? まずい。カードバーン頼む。」

カードバーン 「おう。合体、アルティメットカードバーン。合体完了。」

豪太が気づいてカードバーンに頼むとカードバーンは、アルティメットカードバーンとなり剣達の前にたった。

それとほぼ同時に謎のモンスターがこちらにビームを撃ってきた。

ビームがアルティメットカードバーンに直撃した。

カードバーン 「ぐは、これは、、、 まずい、、、」

豪太 「アルティメットカードバーン、大丈夫か？」

カードバーン 「早く、、、 逃げる。」

その言葉を最後にアルティメットカードバーンは、爆発した。

豪太 「か、カードバーン。」

豪太達も爆発に巻き込まれた。

剣 「おい、皆大丈夫か？」

創一 「なんとかな。」

カナ 「私達も大丈夫。」

弾 「俺達も全員無事だ。」

どうやら全員無事のようにだ。

だが、、、カードバーンは、、、

豪太 「カードバーン。」

少し離れた所にボロボロのアルティメットカードバーンがいた。

だがすぐに3枚のカードとなり豪太の手元へいった。

そして謎のモンスターは、俺達の目の前に来た。

見た目は、黒い竜に所々に骨のようなものがくっついていて胸に赤いエックスが刻まれている。

剣「くっそもうこんなところに来やがった。」

フィールド発動

「「「「「えー」「」」」」」

いきなりフィールドが張られた。

一同が驚いていると、

光「豪太、早くカードバーンのカードを安全な所に。」

なんと光がフィールドをはっていた。

??? 「なんだこれは。」

光「これは、バディファイトフィールドファイトをしなければここから出られないぞ。」

??? 「ならばファイトだ。」

光「いいだろ、いくぞシユベルト。」

シユベルト「ああ共にいこう戦場へ。」

そこには、バディのカードのままだがとんでもない力を感じるカードがあつた。

??? 「ならばファイターは、こいつだ。」

その手に握られていたのは、気を失っている京子がいた。

そして謎の竜は、カードとなり京子のデッキケースの中に入った。

京子「よし、これで我も体を得られた。さあファイトといこう。」

弾「てめえ京子を解放しろ。」

京子「いいだろう。我、次元竜　ガイアスカルとのファイトにか

てたらかえしてやろう。」

光「いくぞ。」

そして、ファイトが始まる。

光「帝国に伝わりし5本の剣ここにそろろう。ルミナイズ、剣竜帝国。」

ガイアスカル「我が力再び世界を振るわせるルミナイズ

次元崩壊。」

「オープン、THE、フラッグ。」

光「エンシエントワールド。」

武神剣帝 シュベルト・ハイランダー

ガイアスカル「ドラゴンワールド。」

次元竜 ガイアスカル

ガイアスカル「我の、ターンドロージャーアンドドローライフル
払い装備、次元気銃クラキア。更に次元竜 フリマタを3体コール。
それぞれの効果でワンドロー。更にキャストフォーstriターン、全て
のモンスターを手札に戻してライフ1追加。そして、フリマタをもう
一度3体コール。」

手札8 ゲージ3 ライフ10↓9↓10

創一「あいつのデックスゲーまわってるな。」

剣「感心してる場合か。」

アタックフェイズ

ガイアスカル「フリマタでファイターに攻撃。そして、クラキアの
効果レストしてフリマタをスタンドしてワンドロー。」

手札9

光「くっ。」

ライフ10↓8

ガイアスカル「ターンエンド。」

光「俺のターンドロージャーアンドドローいきなりいくぞ、セン
ターにゲージ3払い武神剣帝 シュベルト・ハイランダーをセンター
にバディコール。」

手札6 ゲージ0 ライフ8↓9

そこにいたのは、人とはほほ同じ姿をした竜そして背中と腰に2本ず
つの鞘をもったモンスターが現れた。

武神剣帝 シュベルト・ハイランダー

モンスター

サイズ3／攻撃力10000／防御力10000／打撃力2
エンシエントワールド

剣竜帝国／護劍帝

「コールコスト」 ゲージ3払う。

このカードはカード名の異なる「護劍帝」のアイテム4枚まで装備できる。

君の場に他のモンスターがないなら、君の場の「護劍帝」のアイテム1枚につき君の場のカードの攻撃力+3000、防御力+3000!

お互いのアタックフェイズ開始時、手札を1枚捨ててもよい。捨てたら君のデッキから「護劍帝」のアイテム1枚までを装備コストを払わずこのカードに装備し、デッキをシャッフルする。

【移動】

シュベルト「俺の力、見せてやる。」

光「更に、俺に装備、護帝剣 ハドリアヌス。」

護帝剣 ハドリアヌス

アイテム

攻撃力1000 打撃力2

エンシエントワールド

護劍帝 武器

君の場の「護劍帝」は相手の効果によって、手札に戻されず、能力は、無効化されない。

ライフリンク2

『お主の世界の安定させる力、使わせてもらおうぞ』

アタックフェイズ

光「そしてここからが本番だ。シュベルトの効果手札を1枚捨ててデッキから護劍帝のアイテム1枚を装備する。俺は、護劍帝トラヤヌスをシュベルトに装備。そしてシュベルトをレフトへ移動。」

護劍帝 トラヤヌス

アイテム

攻撃力10000／打撃2

エンシエントワールド

属性 護剣帝／武器

君の場の「護剣帝」が攻撃した時、君のデッキの上から1枚をゲージに置き、ライフ+1。

ライフリンク2

『お主の切り開く力、使わせてもらおうぞ』

ガイアスカル「ほおう、モンスターがアイテムとは、珍しい。」

シュベルト「驚いているところ悪いがお主を倒す。」

光「俺でフリマタに攻撃。トラヤヌスの効果、ライフゲージ追加。」

ライフ9↓10

ガイアスカル「ゲージ1払いキャスト、大空を手に入れて全てのモンスターを手札にもどす。」

光「ならばシュベルトとアイテムで攻撃。トラヤヌスの効果でライフとゲージ追加。」

ライフ10↓11↓12

ガイアスカル「くつまだまだ。」

ライフ10↓7↓4

光「ターンエンド。」

ライフ11 ゲージ0 手札4

豪太「よし、これでかつただろ。」

剣「どういうことだ。」

豪太「シュベルトには、フィールドの護剣帝の数の数だけ攻撃力と守備力を3000追加できる。今のシュベルトのステータスは。」

シュベルト

攻撃力16000 防御力16000 打撃2

ガイアスカル「たかが16000我なら軽く越えてやろう我のターンドロージャーリアンドドローフリマタを3体コール。効果で3ドロ、更にキャストフォースリターンで手札にもどし、もう一度コール。更にギャンビットで全てのモンスターを手札に戻してもう一度コール。効果で3ドロ」

手札15枚

剣「あんなに手札を増やして何をするつもりだ？」

ガイアスカル「ふっははは、我自身をセンターにバディコール。」

ライフ4↓5

次元竜 ガイアスカル

モンスター

サイズ3

攻撃力 30000 防御力 8000 打撃力3

コールコスト ゲージ3を払い、場の次元竜3枚をこのカードのソウルに入れる。

このカードが攻撃した時、手札の（次元竜）を2枚このカードのソウルに入れると発動できる。このカードをスタンドする。

このカードのソウルが10枚以上の時に攻撃した時相手の場のカードを1枚ドロップゾーンに送る。

ソウルガード

アタックフェイズ

光「シユベルトの効果発動、手札1枚捨てて発動して護剣帝 ネルウアを装備。」

護剣帝 ネルウア

エンシエントワールド

護剣帝／武器

自分の場の「剣竜帝国」が離れる時、このカードをドロップゾーンに置いてもよい。置いたらそのカードを場に残す。

ライフリンク2

シユベルトが持っていた、鞆の一つが光、ネルウアが収まった。

ガイアスカル「構わん。我でシユベルトに攻撃。」

光「シユベルトが装備しているネルウアの効果、場を離れる時アイテムをドロップゾーンに送り場に残す。」

シユベルトは持っていた剣でガイアスカルの攻撃を防いだが相手の攻撃と同時に破壊された。

光「シユベルト大丈夫か？」

ライフ14↓12

シユベルト「ああ大丈夫だ。奴の攻撃もこれで終わり2回攻撃ももつてないようだしな。」

ガイアスカル「そいつは、どうかな。」

光「何をいつているんだ。」

ガイアスカル「俺の能力は、手札の「次元竜」を2枚ソウルに入れることでもう一度攻撃できる。そして、この効果にターン規制がない。」

手札14↓12

創一「なに!？」

剣「そのために手札をあんなに増やしていたのか。」

光「なんだよ、それー。」

ガイアスカルが体当たりをしてシユベルトを破壊した。

10↓8

ガイアスカル「もう一度攻撃。」

手札12↓10

光「ぐっは。」

8↓5

ガイアスカル「何度でも攻撃してやる。」

手札10↓8

光「、、、ま、、、だ、、、だ。」

ライフ5↓2

ガイアスカル「よくぞ最後まで耐えた。だがこれで最後だ。我で攻撃。」

手札8↓6

光「、、、ぐは。」

2↓0

圧倒的な力

これが、、、伝説の超次元竜の力なのか、、、

どこかのワールドのどこかの神殿
そこで封印されていた何かがあった。
??? 「遂に蘇ってしまったか。」
そういつて封印を破ろうとしている。
そして、封印を破り、何処かへ向かった。

助っ人参上

ファイトが終わりフィールドも消え、横たわっている光とシユベルトがいた。

どちらも気を失っているようだ。

ガイアスカル「私の勝ちだ、さあ次の相手はだれだ？」

ガイアスカルは、疲れているようすもなく次のファイトを行うつもりのようにだ。

カナ「何よ、あんた、一体なにが目的なのよ！」

カナがいきなり叫んだ。

ガイアスカル「なぜ？なぜならこいつの力を周りの奴らに示すためだ。」

ガイアスカルは、悲しい目でみてきた。

ガイアスカル「我がここに復活した時、周りの人間の中で最も心に闇を抱えていた奴を探した。そして、我が体を借りているこの者が周りにいるやつらの中で最も心に闇を抱えていた。だから我はこの者の体に乗っ取った。」

豪太「なんで京子が心に闇を一番強かったのか？」

ガイアスカル「それは、、、お前達の原因だ。」

豪太「な、なんだと!？」

ガイアスカル「この者は、周りにバデイがいて自分にはいないということを気にしていた。度々バデイがいないことを笑われてたみたいだしな。まあ本人は、闇があるといことを気付いていないみたいだしな。」

そうしてガイアスカルは、表情を元にもどした。

ガイアスカル「だから我はファイトが相手を倒し、この者の力を見せつけるのだ。」

剣「それが今、お前がやっていることなのか？」

ガイアスカル「そうだ。」

剣「そんなの間違っている！」

ガイアスカル「なに？」

剣「だからって相手を傷つけてまで力を見せつけることをしたって
そいつの闇は、消えない。むしろ増えてしまう。」

ガイアスカル「だまれー」

そういつてガイアスカルが剣を襲おうとしている。

ドラゴ「剣！くつ、ぎゃー」

剣の前にドラゴが守る形で庇ったが、ガイアスカルの攻撃で吹き飛ばされた。

剣「ドラゴ！」

ガイアスカル「ち、邪魔が入ったか、まあいい、もう一度だ。おりやー」

もう一度襲ってきた。

剣「俺は、お前を止める。」

???「ガイアスカルもうやめろ。」

なにかがガイアスカルの吹き飛ばした。

剣「!?、お前はだれだ。」

そこにいたのは、白い翼に赤い鎧そして、黒い剣を持った、白い人型のドラゴンが立っていた。

???「俺か？俺の名は、覇竜騎士 エクシード・ドラグーン。覇王竜に仕えている、覇王軍の騎士だ。」

剣「覇王軍だと!?!」

ドラゴ「お前、ドラグーンか!?!」

ドラグーン「おうよ。久しぶりだな。レジエンドワールドの覇王竜。」

ドラゴ「その呼び方は止めろとっているだろ。それよりなんでここにいる?」

ドラグーン「うん？ああ、俺はガイアスカルの止めに来たんだよ。」

ドラゴ「それは、どういう意味だ?」

ドラグーン「まあ詳しい話は、置いといて今は、あいつをファイトで止める。」

ドラゴ「分かった。剣いくぞ。」

剣「おう、これ以上あいつの好きにさせてたまるか。」

ドラグーン「なら俺をデツキにいれな。必ず役にたつてみせるぜ。」
剣「分かった。フィールド展開。」
先ほどと同じフィールドが張られた。

ガイアスカル「またこれか。まあいい。ファイトだ。」

剣「集え、霸王に認められた伝説達ルミナイズ、霸王、降臨！」

ガイアスカル「我の力が再び世界を震わせる。ルミナイズ、次元崩壊!!」

剣「霸王降臨。」

ライフ9 ゲージ2 手札7

ガイアスカル「ドラゴンワールド。」

剣「先行は、俺だ。ドロージャーリアンドドロ、覇竜システム、クダガーをレフトにコール。覇竜クロスバスターをライトにコール、ダガーの効果でワンドロー。」

手札7

アタックフェイズ

剣「クロスバスターでファイターに攻撃。」

クロスバスター「OKマスター。クロス切り。」

ガイアスカル「ぐはあ。」

10↓7

剣「ターンエンド。」

ライフ9 ゲージ2 手札7

ガイアスカル「私のターンドロージャーリアンドドロ」

我は、次元竜 アビスをセンターにコール。効果で手札を1枚捨てて、次元竜フリマタと次元竜ガイアスカルを手札に加え、フリマタをレフトにコールし、ワンドローデヴカインをライトにコール。」

ドラゴ「モンスターが3体揃ったということは、」

ガイアスカル「そうだ、3体のモンスターをソウルに入れてセンターに我をコール。」

ライフ8 ゲージ0 手札5

再び現れたガイアスカル。

アタックフェイズ

ガイアスカル「我でセンターに攻撃更に手札にソウルをいれて、スタンド。」

5↓3

剣「バスター!!」

ガイアスカル「もう一度だ。能力発動手札を2枚ソウルに入れてスタンド、更にソウルにある次元竜スカル・マーコルの効果スタンドした時ワンドローする。」

手札3↓1↓2

次元竜 スカル・マーコル

サイズ2

攻撃6000 防御2000 打撃2

コールコストゲージ1払う

このカードが登場した時、君のデッキから3枚見て、その中の1枚を手札に加えて残りは、ゲージへ置く。

このカードがソウルにある名前に『ガイアスカル』を含むモンスターがカードの効果でスタンドした時、カードを1枚ドロウする。この効果は、ターン中1度しか、使えない。

剣「ぐっは。」

ライフ9↓6

ガイアスカル「何度でも攻撃してやるお前が倒れるまでな。」

手札2↓0

剣「、、まだまだ。」

ライフ6↓3

ガイアスカル「これで、終わりだ!」

剣「キャスト、覇竜の盾、攻撃を無効化し、ゲージ2追加。」

ゲージ5

ガイアスカル「、、ターンエンド。」

剣「俺のターン、ドロウチャージアンドドロウライトにバディコー

ル。ドラゴニック・エクス・カイザー。」

ゲージ5↓3 ライフ4

ドラゴ「我の出番か必ず勝つぞ。」

剣「おうよ。システミックダガーの効果ワンドロー。」

剣「ライフ1払い更に覇動ロボ ガンセウラーを搭乗。」

ライフ3↓2

アタックフェイズ

剣「俺とドラゴで連携攻撃。」

ガイアスカル「ソウルガード。」

ソウル9↓8

剣「ドラゴの効果、デツキをドロップゾーンに送り、そのカードが

霸王軍のモンスターならコールできる。」

ドロップゾーンに送られたカード

霸王の威圧

剣「今度は、ドラゴとダガーで連携攻撃。」

ガイアスカル「無駄無駄無駄無駄！ソウルガード。」

ソウル8↓7

創一「あいつ固すぎだろ。」

剣「ドラゴの効果発動。」

ドロップゾーンに送られたカード

霸王の盾

剣「ターンエンド。」

ガイアスカル「我のターンドロージャーリアンドドロージャー手札を使い過ぎたか。」

アタックフェイズ

ガイアスカル「我で攻撃。」

剣「手札の覇竜マツハブレードの効果手札のこのカードをセクターにコール。ダガーは、サイズオーバーでドロップゾーンへ。」

覇竜マツハブレード

ヒーローワールド

霸王軍

サイズ1

攻撃4000 防御1000 打撃1

「対抗」相手のモンスターが攻撃した時、ゲージ1払ってもよい払ったら手札のこのカードをセンターにコールする。そして攻撃対象をこのカードに変更する。

移動

ガイアスカル「くっそマツハブレーダーを破壊してターンエンド。」

ライフ9 手札1 ゲージ1

カナ「何とか耐えたけど次のターンからまたあの攻撃が始まる。このターンで何とかしないと。」

剣「俺のターンドロージャーリアンドドロー!!お前は。」

ドラグーン「頼む、俺を出してくれ。」

剣「分かった。覇竜騎士 エクシード・ドラグーンをレフトにコール。」

ドラゴ「おい、お前が出てくると我がー」

そのままドロップゾーンへ送られた。

ドラグーン「ガイアスカルもうやめろ。こんなことお前は、望んでいないんだろ。」

ガイアスカル「うるさい。」

ドラグーン「分かった。なら俺がお前を止める。頼むぜ俺の力を使ってくれ。」

覇竜騎士エクシード・ドラグーン

レジェンドワールド

サイズ2

攻撃10000 防御3000 打撃2

霸王軍

コールコストゲージ2払う

このカードの攻撃よってモンスターを破壊した時、このカードをスタンドする、その後自分のライフが5以下なら相手に1ダメージ。

???

アタックフェイズ

剣「いくぞ、ドラグーンでガイアスカルを攻撃。」

ガイアスカル「なんの、ソウルガード。」

ソウル7↓6

剣「ドラグーンの効果モンスターに攻撃して、破壊した後、スタン
ドして1ダメージ。」

ガイアスカル「なんだと?!」

ライフ9↓8

ドラグーン「いい加減、目を覚ましやがれ。」

ガイアスカル「くそが!」

ソウル6↓5↓4↓3↓2↓1↓0↓破壊

ライフ9↓8↓7↓6↓5↓4↓3↓2

剣「ラスト、ドラグーンでファイターに攻撃。」

ガイアスカル「くそやろうが!」

ライフ2↓0

勝者 弓風 剣

霸王の異変

剣「これで終わりだ。ドラグーンの攻撃。」

ガイアスカル「ぐわあ。」

ライフ1↓0

ドラグーンの攻撃によってガイアスカルが吹き飛ばされた。そして、中から黒い丸い物が出てきた。

ドラグーン「あれが原因か。」

ドラグーンがそれを破壊した。

ドラグーン「よし、これで暴走は、なくなるはずだ。」

剣「なんだよ、それ？」

ドラグーン「あ、えーとこれはだな。」

???「よくもやってくれましたね。」

いきなり謎の声が聞こえてきた。

声をした方を向くと黒いお面を被った人がいた。

創一「なんなんだよお前？」

???「おっと、私としたことが自己紹介がまだでしたね。私の名前は、

ダークネス。そう呼びください。」

ドラグーン「お前か、よくもやってくれたな。」

ダークネス「いえいえ、あなた達と戦うつもりは、ありませんよ。私の目的は、それです。」

そういつてを前に出すと、先程ドラグーンが破壊した

球体の破片がダークネスの手に向かっていき復元されてしまった。

ダークネス「では、また。」

ドラグーン「させると思っているのか。」

ドラグーンがダークネスにむかっていくがダークネスは、体を霧のようにして逃げ出した。

ドラグーン「待て、俺と戦いやがれー」

剣「ぐっは。」

いきなり剣が倒れた。

おそらく何度もガイアスカルの攻撃を受けた影響を受けたせいで

疲れが貯まってしまい倒れてしまった。

ドラゴ「剣、大丈夫か？ 剣しつかりしろ、おい剣ー」

それから数分後バディポリスが到着し、おそらくダークネスがおこした事件についての取り調べが行われた。

それから数時間後、被害は、3人と1体のモンスターが入院、カードバーンは、しばらくメンテナンスになることとなった。

そして、今、ドラゴとドラグーンが一緒の所にいた。

ドラグーン「久しぶりだな、レジエンドワールドの霸王龍。まさかこんな形で再開するとは思わなかったがな。」

ドラゴ「ドラグーン、今まで一体どこにいたのだ？ 他の覇竜騎士は、無事なのか？」

ドラグーン「いや、分からない。俺は、あの戦いの後、次元の狭間をさまよっていた。そんな時だ、あいつガイアスカルと出会ったのは。」

数十年前

ガイアスカル「我は、この地を出ることができないのだそのせいで次元竜でありながら、デストロイヤーの元へいけず、この地で力を蓄えてばかりしているのだ。そのせいで時期に我の体は、そのエネルギーに耐えることができず崩壊してしまうのだ。何とかならないか？」

ドラグーン「そうだな、あ！ ならばこの地を壊してみせる。」

ガイアスカル「なんだと!? そんなことができるのか？」

ドラグーン「可能だ。だがそのためには、力を貯えなければならぬ。だから頼む俺を封印してくれ。封印されている間に俺が力を蓄えてそうだな、数年後に外してくれそうすれば、俺がこの地を破壊してみせる。」

ガイアスカル「そうか、なら頼もう。」

それから数年後ドラグーン達は、ガイアスカルを縛っていた地を破壊してとある世界を旅をした。

その地その地で手伝いをしたり、狂暴になつてしまつたモンスターを元に戻したりしていった。

そうして活躍して行くうちにガイアスカルは、超次元竜と呼ばれるようになった。

そして現在

ドラグーン「そんなある日、俺達は、ある山で休んでいる時に、あいつがダークネスがやってきた。

不意打ちだった。

俺とガイアスカルは、あの謎の球体を投げつけられた。

俺は、避けたがガイアスカルがあたつてしまい、俺とガイアスカルは、別々の場所に連れていかれてしまったんだ。」

ドラゴ「そうだったのか。」

ドラグーン「にしてもかなり力を失つたみたいだな。よし、俺が以前の力が戻るまで力になるぜ。」

ドラゴ「いいのか？あのダークネスとかいう奴を探さなくてもいいのか？」

ドラグーン「いいつてどうせ、あいつもその内本格的に動き出す時がくるはずだ。そのためには、俺達霸王軍の力を使ってあいつを倒そうぜ。」

ドラゴ「まあそういうことでいいか。それより皆の所にいこう。」

お前のことも紹介したいしな。」

ドラグーン「おつ、いいね。どんな奴がいるか楽しみだよ。」

こうして2体の竜が再び出会い共に戦うことを誓いあった。

京子「そうなんですか。そんなことが。」

ガイアスカル「すまなかつた。こんなことに巻き込んでしまつて。」

今、京子にガイアスカルとあつて話をしている。なんでもバディポリスの調査によればあの球体が原因で暴走を引き起こしていたらし

く、その結果同族を探していたのだという。

その後特に問題の無かった京子がガイアスカルと話をしたいということで、現在にいたる。

京子「あなたにならいいかも。」

ガイアスカル「ん？」

京子「私のバディにならない？」

ガイアスカル「は？」

ガイアスカルがかなり驚いていた。

ガイアスカル「いやいや、おかしいだろ。我は、お主の体を奪ったのだぞ。我とバディになるだと？怖くは無いのか？」

京子「いえ。体を奪われている時、あなたの心を触れることができなかったので、観てみました。そして、あなたがあんなことを本当は、やりたくないことを知りました。私の心の闇の原因は、バディがいなかったのが原因だといっていました。なら、バディがいればなくなるのかなと思います。私とバディになりませんか。」

ガイアスカル「お前がいいというのなら罪滅ぼしの為に我の力を使ってくれ。」

京子「ええ、よろしくねガイア。」

こうして1組のバディが成り立った。

創一「それで話ってなんだ。」

もう少しで帰るといふ時間でいきなりドラグーンに呼び出された。一体なんだっていうんだ。

ドラグーン「いやなドラゴに聞いたんだがお前フレイムドラゴンをつかっているんだって？」

創一「そうだけど、それがどうかしたのか？」

ドラグーン「俺がこっちに来るときにな、ある竜と出会ったんだ。そして、その竜がお前達に会いたがっている。」

創一「一体どんな奴だよ？」

ドラグーン「それは、こいつだよ。」

ドラグーンがゲートを開けるとその中から1体の竜が現れた。」
??? 「探してましたぞマイ・ヴァンガード。」
オーバード 「お前は、まさかポータテックスドラゴンか。」
いきなりオーバードが実態化した。
ポータテックス 「ええ、これからよろしくお願いいたします。」
そういつてポータテックスは、カードとなった。
これからよろしくな。

とある日常

ガイアスカルの事件から1週間たった。

何とか全員が病院から退院した。

ガイアスカルも操られていたという事で釈放今は、京子のバディとして一緒にいるようだ。

そして今剣とドラゴとドラグーン+チームリバイバルとそのバディがそろってカードショップに集まりしゃべったり、テーブルフアイトしたり、して時間を潰していた。

剣「ドラゴで攻撃。」

豪太「ガード魔法が手札にない。負けたよ。」

光「いやーあの時は、本当に死ぬかとおもったよ。」

ガイアスカル「それは、、すまなかつた。」

光「まあいいけどさ。」

ダリルベルク「なあカオスでおしやべりな奴いることを世の中にアピールしたいんだが何かいい方法はないか？」

ボータックス「いや私、この世界に来て時間がたっていないので分かりません。というかカオスって？」

ドラグーン「ああ。」

ダリルベルク「そうか知らないのか、ならば教えようあれは、何年前だったかな。」

オーバーロード「そういうのいいから毎回毎回新しいモンスターに会うたびにそれやっっているではないか。もうやめたらどうだ？」

ダリルベルク「いやだ！」

オーバーロード「即答か。」

ダリルベルク「それはそうだ。なぜなら、」

ダリルベルクの長い話が始まった。

最近出番がないからストレスが貯まっていたようだ。

剣「まーたやってるよ。」

レイ「飽きないんですかね。」

京子「好きにさせとけば。」

レイ「そうですね。」

京子「それでこのカードどう思う？」

レイ「えーとそれならこれをいれたほうが、」

京子とレイは、新しい京子のデッキを作っている。

ガイアスカルがドラゴンワールドなので今まで使ったことのないワールドということでもカナのサポートをされていてカードもある程度覚えていてレイが手伝っている。元々そのために集まったのだが完成するまで暇なのでその他は、調整のためによべれたのだがなんだかんだ楽しくやっていた。

しかしそれもこれまでで。

豪太「そういえばなんでそっちのチームバディモンスターはいるのにファイターがお前だけなの？」

その一言で終わりを告げた。

剣「えーとそれはだな。」

数時間前

剣「なんかチームリバイバルの奴らに京子がデッキ作るから手伝ってくれていう理由で呼ばれたんだけど、一緒にいかねえか？」

創一「あ、俺今日用事あるから無理オーバーロードとポータックスだけ行かせる。」

カナ「私も用事ある。あ、でもデッキ作るならレイが得意だからつれてって。」

和人「じゃあ俺も。」

遙か「同じく。」

剣「、、分かった。俺一人でいくわ。」

回想終わり

剣「後でオーバーロード達に聞いたらそれぞれでデート行くとか

いってたんだと。ようは、バデイの面倒見ろって言われたんだよ。」
その他「、、」

ボーテックス「なんかごめんなさい。」

剣「いや、いい、お前達は、気にするな。」

何か気まずい雰囲気になった。

レイ「とりあえずデツキをつくりますか。」

京子「そうね。」

剣「俺、ちよつとジュース買って来る。」

豪太「おう、行ってこい。」

そうして一人で剣は、店をでていった。何故かその背中が、がっくりとしてるのは気のせいだろう。

光「あいつも苦労してるんだな。」

豪太「そうだな。」

ドラゴ「だからなのか知らないが最近、一人で大会に参加してるみたいなんだ。しかも、霸王軍とは、別のデツキで防御カードを全部抜いて回転率だけをあげたデツキをつかってな。」

その他「、、」

祝え、また空気が重くなった瞬間である。

しばらくして剣が戻ってきた。

手には、危険な導火線風グミスライムをたくさん持っていた。

これは、2個ある大きなグミがあり、片方は不味く、片方がうまいのグミというお菓子だ。

光「お疲れー」

剣「おうよ。」

剣は飲み物を買いにいったのと同様にいくつかのお菓子を買いにいったのだ。

豪太「なんか心配する必要がない気がする。」

京子「私もそう思う。」

ドラゴ「まったくだ。」

それからしばらくお菓子で楽しんだのは言うまでもない。

数十分前

カナ「お待たせー、待った？」

創一「いや、俺も今来た所だ。」

カナ「じゃあ行こうよ。」

と、デートのシーンを書こうと思いましたが、作者に力がなく書けないので省略します。

創一「おいー！それは無いだろ。」

和人「お待たせ。いやーごめん電車が遅れた。」

遙か「十分、遅れた。パフェ奢って。」

和人「あー仕方がないか。」

こちらもデートシーンは、書けないので省略します。

和人「あー！やっぱこつちもか。」

遙か「まつ仕方ない。作者が悪い。」

時を同じくしてカードショップに戻る。

剣達は、またしばらく色々なことをして楽しんでいると

謎の白服の集団がショップにきてファイトをしていた。

剣「ん？なんだあれ。」

弾「あ？あれか、俺達の学校のバディファイトを研究して4年のバディファイト研究会という部活の奴らだよ。年々部員数が増えるそうさ。」

剣「地味に年数がリアルだなおい。」

そう思いつつ、あんまり関わらないようにしようと思う剣なのであった。

動きだす組織達

剣の何か残念な所（もとから）が判明してから数時間後
京子のデッキができた。

ガイアスカルを主軸にしながら、様々なカードを入れてみた。
京子「誰か、私とファイトしない？デッキを回してみたい。」

剣「なら俺がやるよ。」

目から光が消えた剣がコアデッキケースを持って、準備するが、
豪太「いや、お前のデッキ、対ガイアスカルのカードがあるだろ、あれをいきなり相手にするのはだめだろ。」

豪太が止める、確かにファイトしたら間違はなく、ドラグーンで無限破壊して、前の話と同じ展開になりそうだと考えたからだ。

剣「確かに、それもそうだな。」

そう言っでデッキケースを戻した。

光「なら俺がやろう。ガイアスカルにリベンジがしたかったところだしな。」

シュベルト「我も同じ気持ちだ。」

京子「いいわよ。まとめて返り討ちにしてあげる。」

ガイアスカル「一応言っておくが今回は、前回みたいにファイトで負けても倒れるほどのダメージはないぞ。」

それはいいな。前回みたいにファイトが終わってまた入院は勘弁して欲しいかったからな。

「フィールド展開」

ダークネス「お待たせしました。」

???「遅かったなダークネス。」

ここは、暗い部屋で二人の人物がいてたくさん柵がありその上にた

くさん黒いカードが飾られている。

??? 「それで今回の成果は？」

ダークネス「私が手に入れたのは、超次元竜と言われていたモンスターの体の中に入れていたコアを取り出し、ここに持ってきました。さらに、これを。」

その手には、ドラグーンに壊されたが復元した「コア」と呼ばれるものと、黒いカードを謎の人物に渡した。

??? 「これは？」

ダークネス「これは、私の力で作りあげた！今ある技術の全てを取り込んだ最高傑作です!!その名も、ダークネスガイア!!いぎ、ここに現れ「待て！待て！待て！待てー！」なんですか？今いいところなんですが邪魔しないでもらいたい！」

??? 「ここに出されるとこの部屋が破壊されてしまっただろうが。」

謎の人物がそう言った瞬間ダークネスは、しまったという顔になった。

ダークネス「それは、、すいません。」

??? 「全くそういう所がなければ有能なやつだというのに、、なんでテンションが上がるところ構わず自分の力を見せようとする。もつと他に方法があるだろうに。」

ダークネス「すいません。」

なんだろう、前の話では、かなりの強敵感が出ていたというのに、今は、残念キャラの出来上がりだ。

??? 「それであれの復活の素材に出来るのか？」

ダークネス「ええこれだけあればおそらくあと1ヶ月もあれば蘇るか。」

??? 「そうか、、間に合うといいな。世界の終わりに、、」

ダークネス「全くです。」

場所が変わってバディポリス

???「フレイムドラゴン、それに霸王軍だけでなく超次元竜、、、この短期間でこれだけのモンスターが新たに現れるとは、、、」

バディポリスの中に一人がパソコンの画面に夢中になっていた。

彼の名前は、渡辺 竜次（わたなべ りゅうじ）バディポリスでも少し偉い人がいた。

そして、その隣に同じ映像を見ている女性が一人。

カスミ「ええ、私も驚いているわ、まさか彼らの旅行するということからついでに謎のエネルギーの調査でもしようかと思っていたけどまさかいきなりあんなのが現れて暴れだすとは思わなかったわ。」

竜次「ああ、まさかもう動きだすとはな、、、ダークネスと言ったか。あの力を持っているというので間違いないんだな?」

あの力というのは、昔暗躍していたという組織が持っていた力のことだ。ただし昔の資料にもその組織についてもほとんどなにも分かっていなかったのだが、、、

カスミ「ええあの仮面あれば、マジックワールドの「外道術師団」というモンスター達が持っていたと記載されていたの。」

竜次「それで?そのモンスター達は、今何処にいるんだ?」

カスミ「それが、、、わからないの。」

竜次「なに?」

カスミ「外道術師団」のモンスターは、何千年もの間マジックワールドはもちろん全てのワールドにおいて痕跡がないのよ。まるでいなかったかのように、だから私たち学者の間ではもう存在しないもしくは、何かに消されてしまったもの達と考えられていたの。」

竜次「そうだったのか、、、」

カスミ「それだけじゃない!そのモンスター達は、とてつもない技術をもっていたと言うわ。しかも今のマジックワールドのモンスター達でも使うことが出来ない魔法も使えたそうよ。」

竜次「なんだと!」

なんとということだ。それが真実ならかなり昔からの技術をつま

失われた技術をもっているということだ。その証拠にあの超次元竜と言われているモンスターを暴走させることが奴らには簡単に出来ただけだから。

竜次「その「外道術師団」というモンスターには、警戒する必要があるな。それに対抗する力も用意する必要があるな。」

カスミ「それならいいのがあるわ。」

いきなり、カスミが嬉しそうな声で話してきた。

竜次「なにかあるのか？」

カスミ「ええ今は、調整段階だけど、奴らが本格的に動きだすときにはおそらく完成するわ。フレイルドラゴンの力を持ったブレイブモンスター、その名も、

ブレイブドラゴン・THE・オリジンをね。」

新たななる炎

もうすぐお盆になりそうなこの時期、創一と剣は今、

「やっちまえ！」

「ヒヤハア」

大量の不良にリアルファイトを挑まれていた。

時間を少し遡る。

京子のデッキ調整から数日たった、今剣と創一は、公園のベンチでファイトしていた。

何故ベンチなのかって、いつもファイトしているショップが定休日
で他のショップも満員だったからだ。

創一「オーバーロードの上にボータックス・ドラゴンをセンターに
ライド。」

オーバーロード「それ、カードゲーム変わってしまうだろうが！」
ボータックス「しかたない、、のかな元々我々あつちのカードだし
ね。」

ボータックス・ドラゴン（咲野 皐月さん提供）

ドラゴンワールド

サイズ3

攻撃力13000 防御力13000 打撃力3

コールコスト君の場のフレームドラゴンの上に重ねて、デッキの上
から1枚をソウルにいれ、ゲージ3払う。

メインフェイズ開始時君のデッキの上から1枚をソウルに入れる。

”バーニングヘル”相手の場のカードを好きな枚数選び、ゲージ2
以上全てをドロップゾーンに置く。そうしたら、選んだカード全てを
破壊し、破壊したカードの数だけ相手にダメージ！

2 回攻撃

ソウルガード

創一「ボーテックスの効果はつど「おいおい兄ちゃん達いいガード持っているじゃねえか。」なんですか?」

ファイトを楽しんでいたのにいきなり、がたいのいい男が話かけてきた。が服装が不良っぽい。

不良1「いや、ただそれを譲ってほしいってだけの話だぜ!」
気づいたら周りに似たような男に囲まれていた。

不良2「悪いことは、言わねえからカードよこしな。」
創一「なんですか? バディポリス呼びますよ。」

不良1「は? そんなことする前に奪って逃げればいいんだよ。こんな風にな!」

いきなり男がなぐってきたが急いで避けた。

不良1「避けてんじゃねーぞガキが!」

また殴ってきたがよけて無言の腹パンをしてやった。

不良1「ぐはっ!」

不良2「大丈夫か?! このやろう。」

不良3「やっちまえ!」

不良4「ヒヤハアー」

不良5「覚悟しな。」

不良6「ネフィリム返して。」

不良7「趣味は、勉強尊敬する人は、、、誰だったけ。」

不良8「いや、俺に聞くな。」

おい、途中から変なの混ざってるぞ大丈夫かこいつら。
しかも、ネフィリム帰ってきただろうが。

まあそれはおいといて、俺達はというと

剣「超融合発動。俺とドラゴの魂を一つに。」

ドラゴ「出来るわけないだろ空気をよめ!」

剣「いや霸王繋がりでやれるかなと。」

ドラゴ「無理だ!!」

創一「オーバードロード、エターナル・フレイム、ボーテックス、バー

ニングヘル」

オーバーロード「いやここでやったら大変なことになるだろう場所を
考えろ。」

ポーテックス「マイ、ヴァンガードに同意。」

創一「、、すまん。」

かなりネタに走っているがこいつら普通に強かった。

不良4「なんなんだよこいつら、てつかネタに走ってこの強さかよ、
おい、ずらかるぞ。」

不良達「了解」

そうして、不良達は、帰っていった、、がに見えた。

不良1「よくもやってくれたな。さあてリアルファイトで勝てない
のは、分かったならバディファイトを始めようか。」

不良の後ろにデカイモンスターが現れた。

創一「いいだろう、俺がやる。フィールド展開。」

いつものフィールドが展開された。

「オープン・THE・フラッグ」

創一「ドラゴンワールド」

バディ ドラゴニック・オーバーロード

ライフ10 ゲージ2 手札6

不良1「ダンジョンワールド」

バディ アイアン・サイクロプス

ライフ10 ゲージ2 手札6

創一「俺のターンドロージャーアンドロー、ゲージ3払いセン
ターにドラゴニック・オーバーロードをバディコール。」

ライフ10↓11 ゲージ0 手札6

アタックフェイズ

創一「オーバーロードでファイターに攻撃。」

不良1「そんな攻撃きかんわ！」

ライフ10↓7

創一「ターンエンド」

不良1「俺のターン！ドローチャージアンドドロー、こい俺の最強バディ！！センターにアイアン・サイクロプスをバディコール。」

ライフ8 ゲージ0 手札6

アイアンサイクロプス

サイズ3

攻撃11000 防御7000 打撃4

2回攻撃 ライスリンク4

不良1「キヤスト、ボーナスクエスト手札のサイクロプスを捨てて2ゲージ1ライフ追加して2ドロー。」

ライフ9 ゲージ2 手札6

不良1「更にキヤストゲージ1払い、アルティメットバディ、このカードをソウルに入れて、攻撃力+5000 ソウルガードを与える。」

アタックフェイズ

不良「サイクロプスでオーバーロードを攻撃。」

創一「ソウルガード。」

オーバーロード

ソウル残り2

不良「2回攻撃。」

創一「ソウルガード。」

オーバーロード

ソウル残り1

不良1「ターンエンド。」

ライフ9 ゲージ

創一「俺のターンドローチャージアンドドロー。キヤストドラゴニックチャージプラスゲージ2追加。」

不良1「そんなことしてなんになるって言うんだ？」

創一「こうするんだよ、キヤストヘブンス・サンシャインセンターのサイクロプスを破壊、そしてサイクロプスのサイズは3だ、よって

デッキからセンターのオーバードロードの上にボータックス・ドラゴンを重ねて更にデッキの上から1枚をソウルに入れ、ゲージ3払ってコールする。」

ボータックス「出番を頂き感謝します。」

創一「更にレフトとライトにレッドパルスドラゴキッドを2体コール。」

レッドパルスドラゴキッド

ドラゴンワールド

属性 フレイムドラゴン

サイズ0

攻撃力4000 防御力0 打撃力1

■ゲージ1払ってこのカードを君の場のフレイムドラゴンのソウルにいれてもよい。いれたら、デッキの上から5枚まで見て、その中のサイズ3のフレイムドラゴンを手札に加えてもよい。

アタックフェイズ

創一「ボータックスでサイクロプスを攻撃。」

不良1「サイクロプス！ぐわー」

9↓5

創一「2回攻撃。」

不良1「ライフで受ける。」

ライフ5↓2

創一「レッドパルス2体で攻撃。」

不良1「くそー」

ライフ2↓1↓0

剣「なんでこんなことしたんだ。」

不良1「俺は、、バディであるサイクロプスで勝ちたかったんだ。だけど、ライフリンクが弱点でそれであまり勝てなくて、、レアカードの中にこのカードを強く出来るカードがあるかもって思ってたやつ

ていました。」

なるほど、こいつは、ただバディと一緒に勝ちたかっただけだったんだな。

創一「それなら、いい方法があるだろ剣。」

剣「!!そうか、ドラゴ、頼む。」

ドラゴ「よかろう、カードを借りるぞ。」

不良1「おい、なにやってんだよ。」

ドラゴが不良からカード借りて?自分の力を与えるとカードが変わった。

ドラゴ「これでよしつと。」

そういつてカードを返した。

不良1「なんだよこれ、、すげえじゃねえか。ありがとうこれで勝てるかもしれないよ。」

創一「そうか、、じゃあな。」

不良1「おうまたな。」

そうして解散した。

しかし、その後、今回の一件で剣と創一は、その喧嘩の強さが判明して不良達の間で恐れられることになったのは、また別のお話である。

バディ達の会話

ドラゴン「第1回、バディ集会開始。パチパチパチパチ。」

ボートテックス「なんだこれ？」

ドラゴン「簡単に言うとなだのモンスターが集まり。」

ドラゴ「それを早く言えよな。」

レイ「それで一体何の話をするのよ。」

ドラゴン「、、、、何も考えていない。」

レイ「、、、、何よそれ。」

ドラゴ「まあ仕方ない我らのファイターが全員宿題やっているのだから、それにドラゴンが考えたことだし。」

ドラゴン「ひどい。」

そう、今回集まった理由は、剣や創一などが宿題をやっていないことに気づいたカナが皆で宿題をやるうというところで今、2階に監き、、いやなんでもない。

とにかく勉強をしている。

そして何故かチームリバイバルも捕まり、一緒に宿題をしようというところでそのバディも来ている。

ガイアスカル「にしてもまさか、大会の内容が3人チームファイターだと思わなかったな。」

説明しよう。先日店舗予選が全て終わり、地区大会のルールが配布された。

因みにちゃんとチームリバイバルは、

それによれば、大会は店舗予選とは違い、負けたらそのまま、次のファイターが盤面を引き継ぎファイターするというルールだ。

前に声優とバディファイター研究して100年のおじいさんがやっていたのを思い出した。

ドラゴン「確かにあれは驚いたぜ。」

カードバーン「我々は属性や名称が大事なやつが多いからな。誰が最初に出るかで戦略が変わってしまうからな。」

ドラゴ「我は、デッキが変わるとただの2回攻撃持ちのモンスター

になつてしまう。」

ドラン「それは、俺もだ。サイズ3になれないからただのサイズ0のモンスターだ。」

カードバーン「私も、サポートないときつい、デッキが変わるとアルティメットにすら慣れないからな。」

ボーテックス「マイ、ヴァンガードは、問題ないとしても、私は、きついですな。」

オーバード「コールコストにフレイムドラゴンが必要だからな。だからといって我だけでもきつい。」

ドラン「お前は、オーバードだけでそれ以外は、汎用カード使えばワンチャンあるじゃねえか。」

そんな会話が続いたのだが内容は、ほとんどがきついとゆつているときに、

ダリルベルク「我は能力は属性や名称をあまりえらばないから関係ないし、なんの影響もない、だから活躍できる可能性が高い、そして、なんとしても活躍し、我をPRするチャンスだということに他ならない！」

バーンノヴァ「俺もだぜ。ピンチの時は、俺を呼びな。必ず力になるぜ！ただちよつとゲージを食うのが残念な所だけだな。」

2体だけハイテンションなのだった。

レイ「、、何あれ？」

ドラン「これだから汎用は、、」

オーバード「しかたがない。」

ドラゴ「我々は、、そうだな、、テーブルファイトでもするか。」

カードバーン「そうだな。」

そんなこんなでファイトをすることになった。

レイ「それで誰がやるの？」

ボーテックス「なら私がやりましょう。」

ドラン「相手は俺がするぜ。」

ボーテックス「いいでしょういぎ。」

「スタンド・アップ・ヴァン「いわせねえよ」なんだよ。」

とんでもないことをやろうとした2人をドラゴが止めた。

ドラゴ「お前らなにやろうとしてんだ。カードゲーム違うだろうが。」

ドラン「いやだつて俺達の元ネタこつちだし。」

ボーテックス「その通り。」

ドラゴ「そういう問題じゃない。それと仮にそうだとしてもやっちやダメだろ。」

なんかメタいことを言い出したのをドラゴが止めた。

レイ「これはバディファイトの小説なのよ、、しょうがない。私がやるよ。」

ガイアスカル「なら相手は我が。」

ドラゴ「さすがに今回は、大丈夫だよな？」

オーバードロード「多分大丈夫だと思う、、あ、でももしかしたらガイアスカルの元ネタに夜な。」

ドラゴ「え？」

ガイアスカル「始める言葉を言おう。」

レイ「ええ。せーの、」

「二ゲートオープン、かい「だから駄目だつて!!」「」

油断した、このメンバーの中では結構まともな方の二人だからふぎけないだろうと思っていたのが失敗だった。

ドラゴ「いい加減にしやがれ!!、、ハアア」

そういつてドラゴがため息をついた。

それに、ドラゴのキャラ崩壊している気がする。

ガイアスカル「なんだ調子でも悪いのか?そこらへんで休んでいろ。」

ドラゴ「誰のせいだと思っっているんだ!!」

いや訂正しよう。完全にキャラ崩壊している。

ドラム「てゆうかお前、何のカードが元ネタなんだよ。あのカードゲームにそんな姿の奴いなかったはずだぞ。」

ガイアスカル「私の元ネタは、幻羅星龍ガイ・アスラだ。」

その名前を聞いた全員が思った。

そんなの分かるわけないとメタいなど。

その頃の2階

和人（よし皆自分の課題に夢中だな。今のうちに。）

今日何度目かの脱出をしようとしている和人ばれないように、ドアに触れようとすると、

遥か「ねえ和人何しようとしてるの？」

こちらをすごい笑顔で見てる遥かがいた。（目が笑っていない。）

和人「ちよっとトイレにいかうかなと思ひまして。」

遥か「ふうーん1分以内に帰ってこなかったらどうなるかわかってるよね。」

和人「い、いややっぱいいかな、宿題終わってから行くことにするよ。」

そのまま急いで席について宿題を始めた。

男性陣（逃げ場がない）

女性陣（す、すごい）

遥か（ありがとう、ドラグーン）

ドラグーン（い、いえいえ役にたつて嬉しいであります）

集会でしゃべらないと思っていたら拉致されていたドラグーンなのであった。

こうして宿題をやっていたのであった。

剣「ここは？」

確かさつきまで宿題が終わらないということまで皆でやらされていたはずだ。

??? 「待っていたぞ、我を使うべきものよ。」

剣「ん？え!!」

そこにいたのは黒い剣にあった。

その剣にはもやのような物がかかっていた。

??? 「我が名は、覇龍剣。」

剣「覇龍剣?!まさかお前霸王軍に関係があるのか？」

覇龍剣「そうだ。その内お前の前に現れることが出来るかもしれない。それまでにお前に頼みたいことがある。」

剣「なんだよ。」

覇龍剣「我らの同士霸王軍を増やしてほしい。それが暴走を食い止める唯一の方法だ。」

剣「暴走?なんのことだ。」

覇龍剣「なんと!エクスの奴言ってないのか、、、暴走というのは、、、」

そこで俺の意識が離れた。

剣「ん?うーん夢か。」

少し寝てしまっていたようだ夢、、、なんだったんだあの夢。覇龍剣か、、、実際にあったらおもしろそうだな。

カナ「なに昼寝しているのよ。さっさと終わらせるわよ。」

剣「悪かったよ。さあてまたやるか。」
また宿題を始めた。

なお和人はやった宿題のほとんどが間違っていたことが判明して遥かに怒られていたのを皆で見なかつたことにするという判断をしたのはいうまでもない。

トリオファイト前編

ぶつかり合うバディ達

地区大会の練習をすることになった。

原因は、まあカナの突拍子もない発言から始まった。

カナ「地区大会の練習もしないで勝てるほど甘くはないと思うの。だからリバイバルも誘って練習しよ。」

ということが始まった。

ルールは、最初は普通のファイトと同じでファイターが敗北した時点でそのターンが終了、盤面とドロップゾーンのカードを残して、自分のデッキだけを持って、次の人と交代。次のプレイヤーは、ライフ+10してその人のデッキから6枚のカードをドロウして、ゲージ2追加してスタート。

そうして、3人目が敗北した時にそのチームの敗北となる。

剣「誰からいく?」

遙か「私は、ルールのきついから新しいデッキを作ってるからパス。」

まあデッキ破壊したりつい自分に自分のデッキも少なくなるからこのルールだときついよな。

カナ「私は行けるよ。」

そりや発案者なんだから当然だよなと考えていると、

レイ「今はダメよ。ブレイブモンスターのメンテナンスと新しいモンスターの調整のために私以外のブレイブモンスター使えないじゃないの。」

カナ「あ、そうだった。」

なにやっつてんだよ発案者だろ、ん?2ヶ月前にやったはずなのにそんなに時がたつてないのになんでこの時期に?

剣がそんなことを思っていると

光「準備はいいか?」

剣「あ、ああ大丈夫だ今いく。」

光「さあ始めようか。」

「オーブン the フラッグ。」

剣「霸王降臨」

バディ ドラゴニック・エクス・カイザー

ライフ9 ゲージ2 手札7

光「エンシエントワールド。」

バディ 武神剣帝シュベルト・ハイランダー

ライフ10 ゲージ2 手札6

剣「俺のターン、、、ドローチャージアンドドロレフトにシステミックダガー、ゲージ2払い、ライトに覇竜騎士ドラグーンをコール。システミックの効果でワンドロー。」

覇竜システミックダガー

攻撃2000 防御2000 打撃2

覇竜騎士エクシード・ドラグーン

攻撃10000 防御3000 打撃2

アタックフェイズ

剣「ドラグーンで攻撃。」

光「くっ。」

ライフ10↓8

剣「ターンエンド」

ライフ9 手札7 ゲージ1

光「俺のターンドロローチャージアンドドロ、ゲージ3払い俺のバディシュベルトをセンターにバディコール。」

武神剣帝シュベルトハイランダー

サイズ3 攻撃10000 防御10000 打撃2

剣「いきなりかよ。」

光「まあな。さらに俺は、ネルウアを装備、そして残りの全ての護剣帝の武器をシュベルト装備だ。」

護剣帝アントニヌス（雪咲さん提供）

アイテム

攻撃10000 打撃2

エンシエントワールド

護劍帝／武器

君の場に「劍竜帝国」のモンスターがいるなら、君の場の「護劍帝」が攻撃した時、このターン中、そのカードの打撃力＋１！

ライフリック２

『お主の他竜を神へと昇華させる力、使わせてもらおうぞ』

護劍帝マルクス（雪咲さん提供）

アイテム

攻撃１００００ 打撃２

エンシエントワールド

護劍帝／武器

「対抗」君の場の他の「護劍帝」のアイテムがあるなら、君の場の「護劍帝」の種類分見て、その中から１枚までを手札に加え、残りを好きな順番でデッキの１番したさに戻す。この能力は１ターンに１回だけ使える。

ライフリック２

「お主の知識を強さに変える力使わせてもらおうぞ」

護劍帝ネルウア

攻撃１００００ 打撃２

護劍帝トラヤヌス

攻撃１００００ 打撃２

護劍帝ハドリアヌス

攻撃１００００ 打撃２

シュベルトの背中と腰に２つずつあった鞘に４本の護劍帝が収まった。

劍「、、、は？」

創一「全ての護劍帝のアイテムを装備!？」

カナ「もうなんでもありね。」

弾「、、、初手強すぎね。」

京子「これは勝ったわね。」

光「それだけじゃない。シユベルトの効果で攻撃25000防御25000打撃力2のモンスターとなる。そしてマルクスの効果発動フィールドの「護剣帝」の種類分見て、その中から1枚を手札に加える。」

手札2↓3

アタックフェイズ

光「シユベルトでドラグーンを攻撃。トラヤムスの効果でライフプラス1ゲージ1更にアントニヌスの効果でシユベルトの打撃力をプラス1。」

ライフ8↓9 ゲージ0↓1

創一「なんだよ、、、あれ、、、あれがあと5回も発動するのかよ。」

カナ「これが護剣帝の本当の力なの?」

剣「すげえな、、、それでもこっちもドラグーンの効果発動。」

光「なに!?!」

剣「バトルフェイズ中のドラグーンを手札に戻してこのカード以外の「覇竜騎士」と名のつくモンスターをコールできる。」

そうこれが今まで隠されていたドラグーンの第二の効果

覇竜騎士エクシード・ドラグーン

サイズ2

攻撃力10000 防御力3000 打撃力2

コールコストゲージ2を払う。

このカードが相手のモンスターを破壊した時このカードをスタンドして自分のライフが5以下なら相手に1ダメージ。

覇竜転生「対抗」お互いのバトルフェイズ中に発動できる。このカードを手札に戻して手札のこのカード以外の「覇竜騎士」となつてくモンスターをコールできる。

覇竜転生は、ターン中1度しか使うことができない。

光「なんだと。」

剣「けど、、、手札に「覇竜騎士」がないんだよな。」

ていうかデッキにこいつ以外の覇竜騎士がないんだよな、、、ドラ

ゴとドラグーンが言うにはいるにはいるらしいんだけど行方不明なんだよなどこ行ったんだろ。

光「だめじゃん、ハドリヌスでファイターに攻撃。効果でライフとゲージ追加。」

ライフ9↓10 ゲージ1↓2

剣「なら手札の覇竜マツハブレイダーの効果発動センターにコー。さらにシステミックの効果でワンドロー。」

覇竜マツハブレイバー

攻撃 1000 防御4000 打撃1

光「だがマツハブレイダーは破壊される。」

マツハブレイダー破壊

光「そして、俺が装備している剣とシュベルトの剣で連携攻撃。効果でライフとゲージ追加。」

ライフ10↓11↓12↓13↓14 ゲージ2↓3↓4↓5

シュベルト「おう。」

剣「俺は、ここまでだあとは任せた。」

ライフ9↓0

ターン強制終了

和人「次は俺だ。フラッグはドラゴンワールド。」

ライフ10 ゲージ2 手札13

光「げ！手札13もあるのかよ。」

和人「まあ俺のターンドロージャーシアンドロー!!来たか。俺は、覇竜騎士エクシード・ドラグーンをレフトにコールしてシステミックの効果でワンドロー。更にセンターにゲージ1払い、未来竜ドランをバディコール」

手札13 ゲージ0 ライフ11

ドラム「俺の出番だぜ。」

光「だが防御力は、まだシュベルトの方が上だ。」

周り「あ、言っちゃった。」

それを人はフラグという。

和人「キャスト、ドラゴニック・チームワーク、全てのモンスター

の攻撃力を10000追加する。」

光「なに!?!」

このカードはトリオファイトをすることになった時に使えるかもってことでデッキに入れていたカードだ。

ドラグーン攻撃10000+10000↓20000

ドラゴン攻撃3000+10000↓13000

システムック攻撃2000+10000↓12000

アタックフェイズ

和人「行け、ドラグーンとシステムックで連携攻撃。」

光「ならば俺が装備しているネルウアの効果で場に残るライフリンクは受けるけどな。」

ライフ15↓13

和人「ドラグーンの効果、ドラグーンをスタンドしてドラグーンでドラゴンと連携攻撃。」

光「シユベルト!!」

ライフ13↓5

和人「ドラグーンの効果、ドラグーンをスタンドしてドラグーンで攻撃。」

光「ライフ持ってきたな。」

ライフ5↓3

和人「ドラグーンの効果で手札に戻す。更にドラゴンの効果フューチャーアクセス!!デッキから5枚めくって!!きたぜドラゴン!!」

ドラゴン「おうよ。」

和人「スペリオルコール「戦闘竜サムライドラゴン」」

ドラゴンの周りにいつもの魔方陣が現れドラゴンを取り込みしばらく中からサムライドラゴンがあらわれた。

だがシステムックが少し残念そうに場を離れるのは何とも言えない感じがした。

和人「行けサムライドラゴンファイターに攻撃。」

サムライドラゴン「おうよ。」

光「おれはここまでだあとは任せませ。」

ライフ3↓0

ターン強制終了。

まず一人

この調子で勝っていけるといいな。

とそんなことを和人が思っている

??? 「そうは行かないぜ。」

和人 「!!お前は？」

トリオファイト後編

和人「お前は、、、誰だっけ？」

モブ1「なんだよ、なんで忘れてるんだよ。俺だよ俺、ずっと一緒にいただろ。」

和人「いやだつてお前まずしゃべらなかつたじゃねえかそれを覚えていろだなんて、、、ねえ。」

モブ1「ひでえよ小説でしゃべらなかつただけじゃねえかそれだけでその扱いはひどい。」

なぜモブ1をしゃべらせなかつたか。

その理由は簡単、、、

名前出してないし考えて無かつたのと今さら名前を出しても中途半端だなど思つて。

モブ1「ひどいなんで俺だけこんな扱いなんだよ。」

和人「どうでもいいけどファイトしようぜ。」

モブ1「どうでもいいつてなんだよ。全く、、、エンシエントワールド！」

ライフ10 ゲージ7 手札9

モブ1「俺のターンドロージャーリアンドドロ。ゲージ3払つてギヤング・ザ・キングをコール。」

天輪霸王ギヤング・ザ・キング

攻撃7000 防御4000 打撃5

和人「打撃力5だと！」

アタックフェイズ

モブ1「行けギヤング・ザ・キングでセンターを攻撃。」

和人「サムライドラゴンの効果発動。サムライドラゴンの上にドランを重ねる。」

モブ1「何?!忘れてた、、、ターンエンド。」

ライフ10 ゲージ4 手札6

京子「なに忘れてんのよ。」

豪太「なにやったんだよ。」

仲間から攻められているがきにしないでファイトしている。

和人「俺のターンドロージャーリアンドドロ。ドランの効果ゲー

ジ1払い発動、フューチャーアクセス!!」

ドラン「おぉー!!」

モブ1「次は、一体何がくるんだ?」

しかし何も起こらなかった。

周り「え?!」

和人「、何も出来ねえターンエンド。」

ライフ11 ゲージ0 手札12

カナ「え!ドラグリーンは。」

剣「よく見ろ和人のゲージは無い、フューチャーアクセスやドラ
グーンをコールするためにはゲージが必要だ。だけどあいつのゲー
ジがゼロということは何もできない。」

モブ1「俺のターンドロージャーリアンドドロ。ゲージ1払い装
備兄貴の心意気。」

兄貴の心意気

攻撃5000 打撃2

アタックフェイズ

モブ1「ギヤング・ザ・キング、ドランに攻撃。」

和人「ドラン、ソウルガード。」

ドラン残りソウル1枚

モブ1「貫通。」

和人「ぐわぁー。」

ライフ11↓6

モブ1「兄貴の心意気で攻撃。効果でゲージ1追加。」
ゲージ6

和人「くっ、ドラーン！」
ドラン破壊

モブ1「ターンエンド！」

ライフ10ゲージ6 手札6

和人「俺のターンドロージャーリアンドロー、、、」

創一「どうしたんだあいつ。」

剣「なやんでるんだろうな。」

和人「キャスト、ドラゴニックチャージプラス、そして、ドランを
レフトコールゲージ1払いフューチャーアクセス!!外れだ、そして、

ゲージ2払いドラグーンをライトにコール。」

ドラン「俺の出番だぜ。」

アタックフェイズ

和人「いけ、ドラグーンでギャング・ザ・キングを攻撃。」

モブ1「キャスト、怒羅魂シールド漢気の盾、攻撃を無効化する。」

和人「、、ターンエンド。」

ライフ11 ゲージ3 手札10

創一「あいつ今日運ないな。」

カナ「結構戦闘竜入ったのにな。」

剣「その分事故りやすいからな。」

モブ1「俺のターンドロージャーリアンドロー。」

アタックフェイズ

モブ1「行け！ギャング・ザ・キングでファイターに攻撃。」

和人「キャスト、ドラゴンシールド・青龍の盾ゲージ追加。」

ゲージ4

モブ1「ならば心意気で攻撃。効果でゲージ追加。」

和人「ライフで受ける。」

ライフ6↓4

モブ1「ターンエンド。」

ライフ10 ゲージ8 手札5

和人「俺のターンドロローチャージアンドドロロー!!いくぞ! 未来竜ドランをレフトにコール。」

ドラン「おうよ。」

和人「そして、ゲージ1払い、フューチャーアクセス。そして現れろ、戦闘竜ヤマトドラゴン。」

戦闘竜ヤマトドラゴン

攻撃力15000 防御7000 打撃4

2回失敗したが今回は成功した。そしてドラグーンも消えた。

和人「ヤマトドラゴンの効果発動。ソウルを、1枚ドロップゾーンに送ることで能力発動。相手の全てに攻撃することができる。」

モブ1「なんだと!!」

アタックフェイズ

和人「いくぞヤマトドラゴン相手の全てを破壊しろ。」

ヤマトドラゴン「いぎ、参る。」

モブ1「うわー!!」

ギャング・ザ・キング破壊ライフリンク2

ライフ10↓6↓4

モブ1「だが俺のライフは残る次のターンで必ずお前を倒す。」

和人「次のターンなんてない!!ゲージ1払いキャスト未来襲来、立ち上がれ! ヤマトドラゴン!」

モブ1「何!!」

モブ1の手札には抵抗できるカードがあるがここは、

ヤマトドラゴン「いぎ、」

モブ1「、、、」

ライフ4↓0

そして、チームリバイバルは3人目のファイターになった。

京子「私よ。あの時負けたけど今回は負けない。ドラゴンワールド。そして、ターン強制終了だけど終了には変わらない。よってこのカードが使用できる。」

ライフ10ゲージ10 手札14枚

和人「まさか!!」

京子「そのまさかよ。ゲージ2払い現れよロストワールド。そして、私のターンドロージャーミアンドドロ。キャスト竜王伝、それと天竜開闢。」

ライフ9 ゲージ9 手札16

手札を増やした。

そして、

京子「来て、私の最強バディ、ゲージ3払ってガイアスカル・ザ・ルガスをセンターにバディコール。」

ガイアスカル・ザ・ルガス（ハナバーナさん提供）

ロストワールド

属性次元竜／ロストベイダー

攻撃35000 防御10000 打撃3

■「コールコスト」ゲージ3払い、ドロップゾーンのカード3枚までをこのカードのソウルに入れる。

■君の場のカードのソウルにあるカード

ド全てを「コールコスト」と「使用コスト」と「装備コスト」を払って使える。（使ったカードはドロップゾーンに送られるぞ。）

『2回攻撃』『ソウルガード』

そこに現れたのは、ガイアスカルより一回り大きくより黒くなったモンスターがいた。

京子「ザ・ルガスの効果発動、場のソウルに入っているカードを使うことができる。よってゲージ3払いソウルに入れてあるギャング・ザ・キングをレフトにコール。」

ザ・ルガスの中からギャング・ザ・キングが現れた。

アタックフェイズ

京子「ギャング・ザ・キングでヤマトドラゴンを攻撃。」

ヤマトドラゴン「すまない。」

和人「あああとは創一に任せよう。」

ライフ0

ターン強制終了

創一「、、俺の番か、、いくぞ。ドラゴンワールド。」

ライフ10ゲージ3 手札6

京子「(なにが来ても私の手札にはバーンノヴァがあるしザ・ルガスのソウルにも防御カードがある何がきても私のターンで勝ちよ。)」

創一「ファイナルターン!!」

京子「、、え?」

創一「ドローチャージアンドドロ。、、この世の全てを焼き付くす

黙示録の炎コールザ・バディドラゴニックオーバーロード!」

ライフ11 ゲージ2 手札5

現れたバディ。

創一「更にキヤスト、霸王の警告。お互いのゲージを全てドロップゾーンに送る。」

霸王の警告

魔法

レジェンドワールド

属性霸王軍

ドロップゾーンに覇龍がいるなら使用できる。

■お互いのゲージを全てドロップゾーンに送る。

京子「な、なによそれ!!」

創一「更にキヤスト、黙示録の炎、オーバーロードにスキルを与えらる。更にレッドパルスドラゴキッドをライトにコール。」

黙示録の炎(雪咲さん提供)

魔法

ドラゴンワールド

属性フレイムドラゴン

君の場のに「フレイムドラゴン」あるなら使える。

このターン中、君の場のサイズ2以上の「フレイムドラゴン」が攻撃した時、相手の場のカードを1枚を破壊し、相手に1ダメージ!「黙示録の炎」は1ターンに1回だけ使える。

『この世の全てを焼き付くすー黙示録の炎！』

オーバーロードが持っていた剣に炎が付いた。

アタックフェイズ

創一「行け！オーバーロード、ザ・ルガスを攻撃して効果でギャング・ザ・キングを破壊して1ダメージ！」

京子「なによその効果。」

ザ・ルガスソウル残り1枚

ギャング・ザ・キング破壊。

ライフ11↓8

創一「もう一度だ。オーバーロード、ザ・ルガスを攻撃。効果で破壊し1ダメージ。」

京子「ザ・ルガス！」

ライフ8↓7

創一「オーバーロードの効果発動手札を、2枚捨ててオーバーロードをスタンド。エターナルフレイム!!」

手札4↓2

オーバーロードの周りにあつた炎が更に強くなった。

創一「もう一度だ、オーバーロードでファイターにアタック。」

京子「きやあー」

7↓4

創一「もう一度だエターナルフレイム。」

手札2↓0

京子「、、まだよ。」

4↓1

創一「レッドパルスドラゴキッドでファイターに攻撃。」

京子「、、次は負けない！」

ライフ1↓0

結果としては俺達が勝ったわけだが、慣れないルールとそれに合わせたデッキにしたつもりだったが問題点が多いのでまた後日またやろうという事でその日は解散となった。

モブ1「おい、解散じゃねえよ。俺まだ名乗れてねえじゃねえか。」

京子「なら今名乗りなさいよ。」

モブ1「そうだな。俺の名前は、不動 炎馬（ふどう えんま）だ、改めてよろしく。」

ようやく名乗れたことに嬉しそうにしている不動に呆れながら皆それぞれの家に帰っていった。

そして、それから夏休みをそれぞれで楽しみ、たまにトリオフアイトの練習をして、

夏休みは、終わった。

絆の霸王龍編

激突 バデイフアイト研究会

夏休みが終わり数日がたった。

学校が始まりちゃんと宿題を出して（俺達は何人か地獄を見たらしいが）

剣達は平和な学校生活を過ごしていた。

学生「いたぞ!!かかれ!!」

「「ヒャハー!!」」

和人「助けてくれー!!!」

平和な日々を、、、

学生「こつちにもいたぞ!!行くぞ。」

「「おおー!!」」

創一「来い!相手してやる。」

平和な、、、

学生「いたぞ!!、、、ってお前は、、、俺達と同類か、、、なんかごめん。」
剣「いや気にするな（今日だけで3回目なんだよな。）

なんでこうなっているかというところ、原因は、夏休みの店舗予選で優勝した俺達は、あまり知られていないカード（ほとんどが世に出回っていないカード）を使っていたので少し有名になっていた。それをうまく利用しようということとで新聞部が記事にしたらしい。

だが、その記事に問題があった。

なんと、記事にカナと創一、和人と遙かが付き合っているということを書いてあったらしい。その後、カナと創一が新聞部に殴り込みに

行ったらしい。(カナと創一の間では付き合っていないらしい)

そして、それを読んだ複数の男子生徒が和人と創一に喧嘩をうりに、じやなかつたファイトを挑んでいる。それもほぼ毎日同じような奴らがファイトしている。あきないのかと思うぐらいだ。

そして、今一番剣をイラつかせているのは、その中に同じ場所にいるからファイトを挑んでくる奴がいる。間違ったことにきずき謝ってくるやつはいいけれどそのほとんどがその場の勢いでやってくるやつばつかで話にならない。

だからいつもワンキルに特化したデッキを使っている剣なのであつた。

和人「だあー疲れた今日だけでも15人は来たぞ。どんだけ暇なんだよ。」

創一「だらしないな。」

カナ「確かに。」

遙か「和人、鍛えた方がいい。」

和人「、鍛えようかな。」

剣「そうだなリアリストになれるぐらいな。」

カナ「そうね。」

和人「ん？今のなんかへんじやね？」

そんな話をしながら下校するために玄関に移動していた。

???「あなた達が霸王軍をリーダーとしているチームですね。」

そこにいたのは、俺達と同じ制服の男性がいた。

学生なのは間違いないだろうが、

剣「あなただれですか？」

???「あ、ごめんごめん僕は、バディファイト研究会の会長をしているものだよ。」

バディファイト研究会

前に見かけたことがある。あの変な集団か、会長さんは思ってたより話が通じようだな。

会長「今、失礼なこと考えなかったかい。」

剣「いえ、そんなことは、、ないです。」

何この人エスパーかなんかかよ。

会長「そうか、まあそんな話は置いて僕は君達に話があるんだよ。」

剣「なんですか？」

わざわざ玄関で待っていたんだから何かあるんだろうな。

会長「君達部活入ってないよね。」

剣「そうですけど、、まさか！」

会長「ああぜひ私達の研究会に入って欲しいという事なんだけどどうかな。」

剣「実際に見学して見ないとわからないですね。」

会長「ならば明日来てみるといういよ。」

剣「ええでは明日部室で。」

翌日バディファイト研究会の部室へ行ってみた。

カナ「じゃあ剣、開けてみてよ。」

剣「え!!俺なの?」

カナ「だって昨日話していたのは、剣だけじゃないのよ。」

和人「確かに。勝手に決められたしな。」

剣「見学だけだったからいいと思ってたんだよ。」

まあとりあえず入ってみようといこと中で中を見て見ると、、

研究会生徒A「私のターンドロージャージアンドドロー神竜属のドロースーツとロストの力を合わせたドラゴンアインの力見せてやるよ。」

そういうとドロースーツを使いまくってアドを稼ぎまくり最後に

ロストになり、必殺技で止めをさすといふかなりガチなデツキを使っていたが、

研究会生徒B「キャスト、ロイヤリティ。」

研究会生徒A「うわー!!」

あーそれ打たれたら終わるよな。

他にもD、シエアでハラハラ2体並べて初代アギトの能力を使ってライフを以上なほどに回復していたり、アトラのバーンデツキを使っていたりとかかなりガチなデツキを使いまくっているのだった。

和人「、、すごいな。」

遙か「うん。」

よく見ると近くの額縁にこんなことが書いてあった。

『汎用ジェネリック握ってないほうが悪い。』

5人「、、」

なんかかなりガチな部活だと思ってしまった。

会長「いまはガチデツキ体験をしているからね。」

そういうといつからいたのか会長がいた。

カナ「え！いつからいたんですか。」

会長「それは、、いたよ最初から。」

カナ「ごめんなさい。」

会長「いいよこの部活の中では、、地味な方だからなだから実務とか周りへの配慮だったり、もうやるが多すぎる。」

なんだろう俺とは少し違うけど大変そう。

そんな事を剣が考えていると、ガチデツキ体験が終わったらしく、中にいた生徒はそれぞれ自分のデツキを取り出し、いじり始めた。

会長「これが本来の部活だよ。皆自分のデツキをもっといいほうへ使いやすいよう、もっと勝てるようにするために研究する部活それがバディファイト研究会さ。まあやっていることは君のバディに似ているね。」

剣「!!」

霸王軍の力を知っているだとまだ知っている人は、ごく一部の人が知らないはずだ一体どこで、、

研究会生徒「会長、その人達だれですか？」

会長「ん、ああ言つてなかつたね。この研究会の見学に来た人達だよ。」

研究会生徒「へえ珍しい。この時期に見学ですか。」

会長「まあ、僕が誘つただけだね。」

そんな会話をしながら剣達も一緒に話をする事数分、、

研究会生徒「俺とファイトしませんか？」

その発言でファイトをする事になり、誰が出るかという話を話しあい、リーダーである剣が出る話になった。

剣「さあて始めるとしますか。」

研究会生徒「ええこちらの準備はできています。」

二人「フィールド展開」

いつものフィールドが現れた。

周り「二バディーフアイト」

二人「オープン・ザ・フラッグ！」

研究会生徒「デンジャーワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

剣「霸王 降臨」

ライフ9 ゲージ2 手札7

研究会生徒達「霸王降臨!」

研究会生徒A「なんだあれ？」

研究会生徒B「聞いたことがないぞ。」

研究会生徒C「お前ら知らないのか、あれは一部の大会で活躍しているすごい力を持ったフラッグだぞ。」

なんかだんだん知っている人増えてきたな、このフラッグ。そんな事を考えながらファイトを始めた。

研究会生徒「どんなフラッグやカードでも俺は負けないドロ
チャージアンドドロローゲージ1払いタイラント・ケルベロスをコール
更に効果で牙槍斧オウガ斬魔をサーチしゲージ1払い、そのまま装
備、更にライフ5払い打撃力を5上げる。」

ライフ10↓5

オウガ斬魔打撃2↓7

カナ「いきなり打撃力7か、、、ヤバくない?」

創一「確かにな。」

アタックフェイズ

研究会生徒「オウガ斬魔でファイターを攻撃、、、しない。」

剣「まさか!」

ファイナルフェイズ

研究会生徒「そのままかだ、行くぞ、ゲージ2払いケルベロスをケ
ルベロス・バイオレンス・ゲイザーにする。」

ケルベロス・バイオレンス・ゲイザー

攻撃8000 防御6000 打撃3

研究会生徒「バイオレンス・ゲイザーは、俺のアイテムの打撃力も
追加するよって、今のゲイザーの打撃力は、、、」

ケルベロス・バイオレンス・ゲイザー

打撃10

遙か「凄い、、、打撃力10。」

和人「ああ、あんまり見ないな。しかも剣のデッキのほとんどの
カードに場に霸王軍がないと使えないカードばかりだからな。あ
れはきついだろうな、つてかあのカードないと負けたな。」

研究会生徒「これが俺の全力だアタックだバイオレンス・ゲイ
ザー。」

剣「攻撃宣言時、手札の覇竜マツハブレイバーの効果発動。」

研究会生徒達「なに?!」

剣「このカードをコールして、攻撃対象をこのカードに変更させ
る。」

覇竜マツハブレイバー
攻撃1000 防御4000 打撃1
覇竜マツハブレイバー破壊

研究会生徒「、、ターンエンド」

剣「俺のターンドロージャーリアンドドロ。キャスト霸王の下準備ゲージ3増やす。覇竜シャドウスキューをライト、ゲージ2を払いドラゴニック・エクス・カイザーをレフトにバディコール。」
ライフ9↓10 ゲージ3 手札6

霸王の下準備

レジェンドワールド

フラッグが【霸王 降臨】なら使うことができる
次の2つから1つを選んで使う。

- ・君のデッキの上から3枚をゲージに置く。
- ・君のライフを+3！

ドラゴ「待っていたぞ！この時を。」

ドラゴニック・エクス・カイザー

サイズ2 攻撃 7000 防御4000 打撃2

アタックフェイズ

剣「行け、シャドウスキューファイターを攻撃。」

研究会生徒「うおと」

ライフ5↓3

剣「ドラゴでファイターを攻撃。」

研究会生徒「キャスト、闘気四方陣攻撃を無効化する。」

剣「ドラゴの効果発動デッキの1番上のカードをめくりそのカードが霸王軍なら場に出すことができる。デッキトップは、」

トップカード

霸王の威圧

魔法カード

剣「、、、ドラゴ2回攻撃だ。」

研究会生徒「(ここに)霸王軍のモンスターを引かれなければまだ希望はある)受けます。」

ライフ3↓1

剣「デッキトップは、、、」

霸王竜 アビゲール

モンスターカード

剣「よっしゃーセンターに霸王竜アビゲールをコール。」

霸王竜 アビゲール (ヤギリさん提供)

ダークネスドラゴンワールド

黒竜/霸王軍

サイズ1/攻6000/防1000 打撃2

【コールコスト】ゲージ1払う

□このカードが登場した時、君の手札のカード1枚すてて、相手のデッキの上から3枚をドロップゾーンに置く。更に(霸王軍)の能力で登場しているならカードを1枚引く。

□このカードが破壊された時、君のライフ+2
移動

剣「効果は使わない。行け！アビゲールファイターにラストアタック。」

研究会生徒「負けたー」

ライフ1↓0

勝者 弓風 剣

こうして、俺は勝つことができたがかなり手札も事故ってたし、デッキトップが霸王軍のモンスターじゃなければ負けていたかもしれない。

会長「と考えている君に提案がある。」

また、考えを読まれた。

会長「この研究会は今までの様々なファイトを記録している。それもかなりの量をだ、君達のこれからを考えてもこれを利用した方がいい。どうだろう内の部活に入ってはくれないか。」

確かに俺達は、地区大会で勝ちたいだからこそこの設備をつかえばかなりのレベルアップになるだろうだが、

剣「あなたの目的はなんですか？どうしてここまでしてくれるんですか？その理由を聞きたい。」

会長「それはね、、、」

そうして少し険しい顔をする、

会長「霸王軍、フレイムドラゴン、未来竜、それにブレイブなどのカードのデータがほしいのとあとは、、、この部の活動を手伝ってほしいそれだけだよ。」

その話を聞いて数分話あった結果

剣「分かりました。あなたの部活に入りましょう。」

会長「よかったよ。これからよろしくね。」

こうして、俺達は、バディファイト研究会に入ることになった。

会長「あ、そうだ今週末から内の研究会合宿をやるんだけど一緒にどうかね。」

剣「、、、マジっすか。」

地区大会まであと1カ月まだまだ濃い日常は続きそうだ。

秋だ!!野菜だ!バディファイトだ!

週末まで以外と何もなく、合宿となった。

合宿の場所は、少し遠く少し自然のある所に着いた。
近くに山がある。

研究会の人とも数日で仲良くなり今では、、

研究会生徒「これが我々が作っていた他のカードゲームの満足さんの道具を参考にして我らの技術を合わせた最高傑作その名も満足ディスク!!」

剣「おぉー」

そこにあつたのはデュエ○ディスクがあつた。

しかもデツキケースの所が空いていて、ちょうどデツキケースが収まりそうだ。

剣「でも、俺なんかが使っていないんですか?」

研究会生徒「いえいえ、むしろ使い心地もたくさんの人に使って頂いて改善点が欲しいんです。」

剣「なるほど。」

確かに改善点を洗い出すには、手伝う人は多いにこしたことはないしな。

研究会生徒「それとあのシーンを再現するための部品も取り付けてあります。ぜひ生かして下さい。」

剣「ありがとうございます、、、それであれはできますかね。」

研究会生徒「現在我々が持つ技術を合わせて可能かどうか調べています。ですがまだしばらくは無理ですね。」

剣「分かりました。」

まああれは時間かかるだろうからな。

剣「ところで、、、あれ、なんですか?」

研究会生徒「、、、さあ?私はまだまともな方だと思っ
ているのです
が」

そこで行われているのは、新しいパックの開封だった。

新しいカテゴリーが入ったパックを合宿前に買って今ここで開封しているのだが、

「おっしゃー新しいガルガだぜ!!」

「ヒヤハー!!」

「開けても開けても並しかでない（涙）」

「@イグニスター全部揃ったぞ!!」

「それ違うだろ。」

なんかみんなテンションがおかしい、てか最初の人以外、残念な奴しかいなかったな。

会長「よし、これでよしと。誰かファイトしないか？新しいデッキの調整がしたい。」

会長も何か作っていたみたいだな。

遙か「、、私したいです。（あのカード引けるかな）」

会長「いいよ。それじゃあ始めようか。」

周り「バディイイファイト。」

二人「オープン・ザ・フラッグ!!」

遙か「ダークネスドラゴンワールド！」

C，ダリルベルク

ライフ10 ゲージ2 手札6

会長「デンジャーワールド!!」

ライフ10 ゲージ2 手札6

剣「へえ新しいカテゴリーなんですネ。」

研究会生徒「会長は、色々なカテゴリーを使いますからね我々もいくつか持っているかわからないですね。」

遙か「私のターンドロージャーリアンドロー、、」

少し悩んでいるようだ。あのデッキはかなり回すからな。

遙か「まずは、C、ダリルベルクをセンターにコール、効果でデッキから3枚見て、1枚手札に加える。(来た私の覚悟見せてみせる)」
ライフ10↓11

ダリルベルク「よっしゃー出番だ。皆さんにも私がみたいにおしやべりなカオスモンスターがいるとうとうということを知らせてみせよう。」

「周りの研究会生徒が少し引いているのは見なかったことにしよう。」

アタックフェイズ

遙か「お願い、ダリルベルクで攻撃。」

会長「受けるよ。」

ライフ10↓8

遙か「ターンエンド。」

会長「それじゃあ俺のターンドロージャーアンドローいきなりいくよ。誰でもいいから鍋を用意してくれないかな?」

「なんで鍋がいるんだろ?そんな事を考えながらも研究会生徒の一人が鍋を用意している。」

会長「装備、加圧式美食調理鍋。」

周り「「え!!」」

鍋を装備!?なんで鍋が出てくるんだよ。

ゼツテーふぎけているだろなんだよ鍋を装備って。

料理でもするつもりか。

会長「更に、ナス中尉をコール。」

手札5

ナス中尉 サイズ1

攻撃3000 防御1000 打撃1

「ナスをコール!」

会長「鍋の効果発動ナスを破壊して、ワンドロー更にナスの効果発

動君の手札が3枚以上の時、手札を1枚捨てる。」

手札5↓6

そういうとナスが鍋の中に入り、中からカードが出てきた。

遙か「、、、え!」

手札7↓6

会長「キヤスト、産地直送。デッキから4枚めくるその中のヘデン
ジャラスベジダブル」を好きな枚数手札に加えて残りをゲージに送
る。俺は、2枚を手札、残りをゲージに加える。」

手札6↓7 ゲージ5

もうあのデッキなんでもありだな。なんだよあれ、

会長「そしてナス中尉をコール、更にジャガイモ伍長と玉ねぎ少佐
をコール。そして、」

手札7↓4

ジャガイモ伍長 サイズ1

攻撃1000 防御1000 打撃2

玉ねぎ少佐 サイズ0

攻撃2000 防御2000 打撃1

剣「何かくる!」

会長「ゲージ2払い、場の野菜を3枚ソウルに入れてセンターに
コール。戦略兵器デンジャラス野菜カレー!!」

戦略兵器デンジャラス野菜カレー サイズ3

攻撃20000 防御20000 打撃3

フィールドの野菜が会長の装備している鍋の中に野菜モンスター
達が入っていき、閉じてしばらくして中から一体のモンスターが現れ
た。

創一「なんだこれ?」

剣「戦車じゃないか。」

カナ「、、、カレー食べたい。」

その一言で周りが凍った。

会長「、、、今日の夕食はカレーだからそれまでまってね。それはと

もかく、デンジャラス野菜カレーは、ソウルのデンジャラスベジタブルの能力を受け継ぐ。」

アタックフェイズ

会長「行け!!デンジャラス野菜カレー、ダリルベルクを攻撃。こいつは貫通を持っている。」

遙か「ダリルベルク!」

ライフ11↓8

会長「2回攻撃。」

遙か「うっ、」

ライフ8↓5

会長「キャスト、う、うまい!うますぎる?!!

効果で野菜カレーを破壊してライフ+2して2ドロー更に、破壊された野菜カレーの効果手札とゲージを破壊する。」

遙か「、、まずい」

会長「3回攻撃。」

遙か「うっ、でも次のターンで、、」

ライフ2

祝い!!今フラグがたった瞬間である。

ファイナルフェイズ

会長「ゲージ2払い、必食!!野菜嫌い殲滅砲」

遙か「キヤアー。」

ライフ0

会長の必殺技が決まりライフが0になった、、

かに見えた。

遙か「まだ、、、終わっていない。」

会長「え？」

遙か「私のライフが0になった時、呪われた鎧がその姿を現す。」

そう言うとき遙かの周りに黒い霧のようなものが出てきた。

そして、それらが遙かの体に入っていく。

遙か「死してなを抗う黒き鎧よ今、私と共に一つになれ。装b、、、
何かを装備した瞬間いきなり倒れた。

それと同時にフィールドも消えた。

和人「遙か!!」

倒れた遙かを和人が意識があるか確認している。

どうやら息があるようだ。

和人「ダリルベルク、、、これどういうことだ？」

ダリルベルク「、、、実はだな」

いつもは、変なテンションで喋っているダリルベルクが今だけかなり、マジトーンで喋っている。

ダリルベルク「ダークネスと名乗る奴とあった時だ、あの時もつと力をつけないといけないと私と遙かが思いデツキを念入りに構築し直した。その時、心の闇を利用してガイアスカルを闇落ちさせたとダークネスが言っていたならば私達もやればいいと」

剣「ちよつと待て、そのカードはつまりダリルベルク、お前の闇から出たカードなのか？」

ダリルベルク「いや違うけど。」

剣「え？」

剣「じゃあ誰の？」

ダリルベルク「遙かの闇だ。和人が女性と話すときすぐにヤンデレオーラ出してたろあれを利用した。その影響か最近では、ヤンデレモードになってないしな。」

剣「確かに、、、言われてみれば。」

カナ「最近見てなかったわね。」

和人「でもなんで倒れたんだ。」

ダリルベルク「おそらくあのカードの闇が少しの時間で増大してしまっただろう。遙かですら押しえられないくらいに。」

和人「そうかならそのカードは、」

ダリルベルク「無論私が預かろう。何か大変な時に私が使うとしてしよう。」

和人「そのもしもが無いことを祈るよ。」

ダリルベルク「そう願いたいところだな。」

遙か「うっ、うーん。」

和人「遙か！大丈夫か？」

遙か「、、か、和人？」

和人「ああ俺だよ。」

遙か「そうか、、私あのカードで。」

和人「大丈夫か？」

遙か「うん。」

そうして和人は遙かを背負いながら休憩所に向かった。

剣「それで、これからどうします？」

会長「とりあえずさつきと変わらずデツキ調整と実戦を繰り返すことにしよう。それと変なカードを使う前に周りに相談してね。」

周り「(あんまりないと思うけど黙って)」

そんな事を考えながらもデツキをいじっていることにした。

和人「助けてくれー」

そう言っただけでいきなり部屋に入ってきた。

剣「どうしたんだ？」

和人「遙かがしばらく話していたらいきなり遙かが襲って来たんだよ。どういふことだよダリルベルク遙かはヤンデレかしないんじゃないのかよ。」

ダリルベルク「いや闇を素材にただけで闇が消えたわけでは無い、多分さつきの騒動で闇が元に戻ったのだろう。」

和人「そうか」

何かを悟ったような目をしている。

遙か「いたゝゝ、和人ゝゝ、殺す。」

和人「やっぱり無理助けてくれー」

そんな叫びを聞きながら剣達は、デツキをいじりだしたのであつた。

合宿の夜 大いなる闇の降臨

合宿の夜、軽く騒いでいたが会長の威圧により全員が布団に入り話し合いをしていた。

ドラゴ「では始めようか。」

ドラン「バディファイト会談話。」

「「いゝえー」「」

会長「では説明を、要するにバディファイトの関連の会談をしていこうと言うものだ。」

合宿の夜と言えば怪談という訳で始まった今回の会談まず始めにするのは、、

レイ「それじゃあ私からかいだんとは高低さのある場所への移動するための建造物。人の足、、」

研究会生徒達「なんの話だー!!」

レイ「え？階段の話だけ。」

カナ「ちよつとなんで階段の話なのよそつちじゃなくて怪談！怖い話よ。」

レイ「あ！、、ごめんごめん。」

何か最近レイのこういうことが増えてきた気がする。

聞き間違いや意味の間違いなどが多くて何か変だ。

そんな不信感を持っていると

会長「まあ気を取り直して何か他に怖い話言えるやついるか？」

研究会生徒「じゃあ俺が。」

会長「よし頼む。」

研究会生徒「これは、俺が体験した話です。あれは、部活帰りにパックを買ったんですよ。家に帰ってから開けようと思ってそのまま帰ったんですけどね、そのあとパックを開けたらなんと最初のカードをみたら、、

裏向きだったんですよ。」

研究会生徒「シークレット当たっただけじゃねえか！」

そう周りから攻められると怪談？を言った生徒は黙って布団の中に入った。

それから何人かが怪談を言ったがどれもこれも聞いたことある話だったり怖くなかったりしてイマイチだった。

話題を変えようとカナと創一それと遥かと和人のイチヤイチャ話を聞こうとしたらカナと遥かが話そうとすると、和人が止めるのを繰り返して話が全くといっていいほど進まず就寝時間となりもう寝ようと言うことで今回の怪談話？は、これにて終了となった。

ここは、合宿の近くの山のある所

??? 「遂に見つけたぞ。ここに伝説の剣があるということが分かった。あと少しだ。あと少しで、、、」

ドラゴ「剣、起きろ、剣！」

いきなりドラゴに起こされた。

剣「なんだよドラゴまだ1時だぞ。」

ドラゴ「この近くの山に何かとてつもない闇を感じるそれかなり規模のでかい。」

剣「なに！まさかまたダークネスが」

ドラゴ「かもしれない。」

それなら早く止めないとこの間のガイアスカルの時は俺達が止めたがあれはほおっておくとんでもないことになっていたのは誰が

見ても明らかだった。

剣は急いで着替えて宿屋を出ようとするが、

和人「何楽しそうなことに一人で行こうとしているんだ。」

そこにはチームメイトが全員いた。

剣「なんでいるんだよ？女子と男子は別々の部屋だっただろ。」

その通りきつききは普通に会話していたが何かあったら不味いので男子と女子は、分けて寝ることになっている。

それは付き合っても変わらない。

創「オーバードロードが懐かしい気配がああ山からするっていうからな。」

和人「俺はたまたま目が覚めていた。」

ドラン「嘘だぜ、こいつなかなか眠れなくて色々試していた時に創一が出て行ったからついてきただけだ。」

遙か「私は、、ダリルベルクが。」

そこで止まってしまった。おそらくなんて言ったのか忘れてしまったのだろう。

そこにダリルベルクが現れる。

ダリルベルク「いやな我と同質の騎士の力をああ山から感じてな。」

ドラゴ「むっ、騎士、闇、、!!まさか剣急ぐぞ。」

そう言つてドラゴが先に行つてしまった。

剣「どうしたんだよドラゴながあつた。」

ドラゴ「もしかしたら我が探していたものがダークネスに奪われるかもしれない。」

剣「!!探していたものってなんだよ。」

剣には心当たりがあつたがああ夢の話はドラゴに話していないかなあややくしくなるし確証がないから知らないふりをする事にした。

ドラゴ「それはだな、、 我ら霸王軍の切り札にして伝説の武器、、

その名も覇龍剣!」

うん知つてた(笑)

だけど詳しいことを知らないから

剣「それがダークネスに奪われるとどうなるんだ？」

ドラゴ「、、、実はな我々霸王軍は、ある勢力と戦っていた。それはドラグーンから聞いていたと思うがな。」

確かにそんな話をしていたなと思っていると

ドラゴ「そして我ら覇龍が覇龍剣の力を受けると霸王龍となる。」

剣「え！じゃあなんだ今は覇龍なんだよ。」

ドラゴ「その戦いで力を失ってしまったんだよ。文句あるのか。」

剣「言えないです。」

そう言ってからスピードを上げていった。

それから数十分後山頂についた。

なんか速くないかって途中でカナのブレイブモンスター使ったほうがいいんじゃないかという話になり

途中からブレイブモンスターで向かった。

山頂にあったのは黒い剣があった。

そして、そのとなりに剣を背負っていた。

???「!!なんだお前は！」

剣「なああれは覇龍剣なのか。」

ドラゴ「いや違う。そもそもあれから闇を感じる。」

なんだと！じゃああれはなんなんだ？

カナ「いや、よくよく思い出してみて、そもそもオーバーロードが

懐かしいとか言ってたんだから違うでしょう。」

そういえばそんなことを言っていたような気がする。

和人「なんだろうあの剣から遥かがたまに闇を出した時似たような感じがする。」

遥か「、、、和人後で話がある。」

和人「なんだよそれ」

???「何をごちゃごちゃ言ってる。こうなったらこの剣を抜いてやる。」

そう言っつて剣を抜こうとすると、、、

???「なんだよ。これ!!」

その剣からとんでもない量の闇が放出された。

ダリルベルク「!!あれは不味い急がないとな。」

そう言つてダリルベルクが前の話で出したカード遙かの闇の鎧のカードを前に出した。

そうすると剣が遙かの元に向かつていく。

遙か「え!」

遙かの手に闇の剣を手にした瞬間遙かの頭の中に何かのイメージが入ってきた。

「常闇より現れよ漆黒の亡霊。ライド□□□。」

「呪われし竜よ出でて邪悪なる力を振るえ。ライド□□□」

遙か「、、何これ?」

和人「遙かお前大丈夫なのか。」

遙か「和人、、うん、大丈夫。」

そう言うとき遙かを持っていた剣がダリルベルクが持っていたカードが実体化した。

カナ「何?!」

そして、剣と鎧がぶつかり1枚のカードになった。

遙か「!!これは。」

ダリルベルク「遙かの闇とあの剣が一つになったとこんなことがありえるのか?!」

???「何かよく分からなくなったな。」

それには賛成だが、、

剣「お前だれ?」

???「今さらかよ。まあいいけど、斎藤 良太郎(さいとう りょうたろう)ソードコレクターだ。世界中の剣を集めているものだ。」

遙か「誰でもいい。私と勝負してよ。私が勝ったらこのカードを渡そう。」

遙かの雰囲気がおかしいのときできるのかそんなこと。

周りがそんなこと出来るのかと思つていと

良太郎「そんなことできるのか。」

ダリルベルク「わからないがまあ多分(できないだろうな)。」
なんだろう今なにか幻聴が聞こえたような。

良太郎「まあいい。ファイトだ。フィールド展開。」
いつものフィールドが現れた。」

周り「二「バディイファイト。」三」

二人「オープン・ザ・フラッグ！」

良太郎「レジェンドワールド。」

バディ 降魔王剣 レヴァンティン

ライフ10 ゲージ2 手札6

遙か「ダークネスドラゴンワールド！」

バディCダリルベルク

ライフ10 ゲージ2 手札6

現出する闇の鎧

遙か「私のターンドロージャーシアンドロー。いくよ。ゲージ2とライフ1払い私とあの剣の力を一つにしたまさしく私の分身”変身”ブラスタードーク。」

遙かの周りに会長とのファイトでも出てきた闇の霧のような物がどンドン形になり、鎧と剣になり遙かが纏った。

ブラスタードーク（咲野皐月さん提供）

フラッグ：ダークネスドラゴンワールド／レジェンドワールド

種類：モンスター 属性：黒騎士

サイズ2／攻10000／防10000／打撃2

■【コールコスト】君の場のモンスター1枚以上をこのカードのソウルに入れ、ゲージ2を払う。

■このカードが登場または、変身した時、ゲージ1を払ってよい。払ったら、相手は自身の場のモンスター1枚を破壊する。

■【起動】君の手札1枚を捨ててよい。捨てたら、そのターン中、このカードは『2回攻撃』を得る。この効果は1ターンに1回だけ使える。

「変身」（ゲージ2とライフ1払う）

良太郎「これがあの剣の真の姿か！」

アタックフェイズ

遙か「私自身でファイターを攻撃。」

良太郎「うおっとなんだダメージがいつもよりリアルだな。」

ライフ10↓8

遙か「ターンエンド。」

ライフ9 ゲージ1 手札6

剣「すげえなああの剣攻守10000もあるのか。」

創一「確かにな。」

カナ「でも大丈夫かな？あれ、さっきのファイトで使って倒れたカードでしょ。使っていてまた倒れたりしないのかな。」

そんな不安がありながらも相手のターン

良太郎「俺のターンドロージャーアンドロー。早速いくぞゲージ2払い”降魔王剣”レヴァンティンをバディ装備。」

ライフ8↓9 ゲージ3↓1

良太郎「そして、降魔王剣”レヴァンティン”の

逆天殺を発動だ!!手札を1枚捨ててデッキから5枚めくってその中の剣を3枚まで装備する。俺はデッキから偽王剣無銘鉄刀・レプリカと王剣・エクスガリバーと偽王剣ガラドボルグ・レプリカを装備だ。」

偽王剣無銘鉄刀・レプリカ

攻撃2000 防御2000 打撃1

聖魔王剣・エクスガリバー・レプリカ

攻撃10000 打撃2

2回攻撃

偽王剣ガラドボルグ・レプリカ

攻撃2000 打撃2

アタックフェイズ

良太郎「いくぞ、エクスカリバーでファイターを攻撃。このカードの攻撃は対抗できない。」

遙か「その程度?」

ライフ9↓7

良太郎「ならばもう一度攻撃だ。もちろんこの攻撃でも相手は「対抗」を打てなくする。」

遙か「うっ、まだまだ。」

ライフ7↓5

良太郎「ならば残りの剣全てで連携攻撃。これで終わりだ!!」
遙か「キヤスト、黒竜の盾ダメージを0にして、ライフ+1」

ライフ5↓6

良太郎「ターンエンドだ。」

ライフ9 ゲージ1 手札5

遙か「なんでそんなにこの剣がほしいんですか?」

いきなり遙かがそんなことを聞いていた。

良太郎「それは、まあいいか俺のバディはな効果でモンスターを
コールできないだからその力を使うにはアイテムを使うしかない
だよ。」

そんなことを言いながら話始めた。

良太郎「俺はもうすぐ仲間とチームで大会にでるんだ。その時それ
なりに力をつけないといけないなと思ってなそこでこちら辺にさと
てつもない力を持った黒い剣があるって噂を聞いてな。それならそ
の剣を俺達の力にしようってことでここまで来たんだよ。ここまで
来て取り越し苦労ってわけにはいかないんだよって思ってたけどそ
の剣がそんな危ないもんだと知ってたら来なかったけどな。」

遙か「私も、そんな感じです。チームの為にも自分が強くなりた
いと思っても周りがどんどん強くなって、いつも私も負けてられない
と思っています。」

良太郎「……そうかい、ならかかってこいよお互い全力でいこう
ぜ。」

遙か「はい。私のターンドロージャージアンドロー。私は、煉獄
騎士団団長デimosソード・ドラゴンをレフトにコール。」

「煉獄騎士団!?!」

周りが一斉に驚いた。何せ今まで黒竜を色々といじって戦ってい

た遙かがいきなりの煉獄騎士団の登場に驚いた。

良太郎「煉獄騎士団か何か久しぶりに見たな。」

遙か「ええそうでしょうね私もさつきまでこのデツキになっていることに知らなかったんだから。」

良太郎「え!?!」

遙か「さつき、あの剣を取った時ブラスターダークと一緒にこのデツキもてにいれたのだからこのデツキを使おうと思った。」

剣「まじかよ。」

和人「ロイヤリテイ4積みしても意味ないじゃん。」

ドラゴン「お前それドロウできてないじゃん。」

今まで和人は勝つために彼氏としてのプライドのためこつそりファイト前に1枚しか入れていないロイヤリテイを4枚に変えてファイトしている。まあたまにしかドロウできないからたいささない。

遙か「和人そんなことしてたんだ。後で和人も殺ろつと。」

和人「ひっ!」

カナ「なんかいつもと違う?」

遙か「私はいつも通りだよ。更に煉獄騎士団エヴィルグレイブ・ドラゴン、煉獄騎士団ニードルクロウ・ドラゴンをコール。更に煉獄唱歌 呪われし永遠なる戦の調べとデスゲージ・タイマーを設置。」

煉獄騎士団エヴィルグレイブ・ドラゴン

攻撃3000 防御3000 打撃1

煉獄騎士団ニードルクロウ・ドラゴン

攻撃3000 防御1000 打撃1

アタックフェイズ

遙か「デスゲージ・タイマーの効果でゲージ1追加してデイミオスソードでファイターに攻撃。」

良太郎「ライフで受ける。」

ライフ9↓7

遙か「エヴィルグレイブ・ドラゴンで攻撃。」

良太郎「それも受ける。」

ライフ7↓6

遙か「デイミオスの効果でエヴィルグレイブを破壊してデイミオスをスタンドさらに煉獄唱歌の効果でデツキから1枚をドロップゾーンに送りライフ+1しエヴィルグレイブの効果でワンドローしてデイミオスで攻撃。」

良太郎「受ける。」

ライフ6↓4

遙か「デイミオスソードでファイターを攻撃。」

良太郎「キャスト、バディブロックこれ以上のダメージは受けない。」

遙か「ターンエンド。」

ライフ7 手札3 ゲージ4

良太郎「俺のターンドロージャーアンドローそして俺は、ゲージ1とライフ1払い、レヴァンティン・アビスを装備。」

ライフ4↓3 ゲージ1↓0

アタックフェイズ

良太郎「アビスの効果でデツキから王剣 エクスカリバーを装備する。」

アビスが光るとどこからか剣が降ってきた。

それをそのまま良太郎が手にした。

遙か「デスゲージ・タイマーの効果でゲージ1追加。」

良太郎「エクスカリバーでセンターを攻撃。」

遙か「破壊されたニードルクロウの効果、破壊されたら自身を手札に戻る。そして煉獄唱歌の効果でライフ+1」

ライフ7↓8

良太郎「ならばエクスカリバー・レプリカで攻撃。」

遙か「うっ。」

ライフ8↓5

良太郎「もう一度エクスカリバー・レプリカで攻撃。」

遙か「、、バトル終了時キャスト、バディブロック」

ライフ5↓2

良太郎「なに!？」

遙か「驚くことはないんじゃない？あなたも使っていたんだし。」

良太郎「、、、それもそうだな。だがダメージを当てられないだけで攻撃はできる。レヴァンティンでディミオスを攻撃。」

ディミオスソード破壊。

良太郎「ターンエンド。」

ライフ3 ゲージ0 手札5

遙か「私のターンドロージャーリアンドロー。、、、いくよ。ゲージ3払い、ファントム・ブラスター・ドラゴンを私に竜化。」

ファントム・ブラスター・ドラゴン》

(咲野 皐月さん提供)

フラッグ：ダークネスドラゴンワールド

種類：モンスター 属性：黒騎士／黒竜

サイズ3／攻13000／防13000／打撃3

■【コールコスト】君の場のカード名に「ブラスター」を含むモンスター1枚の上に重ね、ゲージ3を払う。

■【対抗】【起動】《ダムド・チャージング・ランス!!》 君のターン中、ゲージ1を払い、君の場のカード3枚を破壊する。そうしたら、相手の場のカード3枚までをドロップゾーンに送り、このカードの攻撃力+15000、打撃力+1!この効果は1ターンに1回だけ使える。

■【起動】相手の場にモンスターがない時、このカードのソウル3枚をドロップに置いてよい。置いたら、相手にダメージ2!

【竜化】(ゲージ3払い ライフ1払い、場かドロップゾーンの「ブラスターダーク」をソウルに入れる。)

『ソウルガード』『2回攻撃』

FT「呪われし竜よ、出てて邪悪な力を振るえ!」

ファントム・ブラスター・ドラゴンのカードを使おうとした時先ほども遙かを覆った闇がまた纏っていくしかも先ほどよりもあきらか

に濃くて量が多い。

気がつくとは私はそこにいた。

さつきまでファイトをしていたはずだ。

??? 「お前は何のために戦う。」

遙か「え!？」

後ろにいたのは、ブラスタードークがいた。

しかし顔が見えない。

ブラスタードーク「もう一度問うお前は何のために戦う。」

私は、、あのダークネスとかいうやつを倒したい。

あいつのせいで私の友達達が倒された。

私はあいつらを倒したい。

ブラスタードーク「あくまで私欲の為か……ならばそれをなし得た後はどうするつもりだ。」

それはその時考える。ジーとしてもどうにもならないんだから。

ブラスタードーク「ふっならば使え、我らの力を使って負けるなよ。」

遙か「、、もちろん。」

そう言うと言が人型の竜の姿になり手に巨大な槍を持っている。

良太郎「なんだこのドラゴンは。」

遙か「私は、3体の煉獄騎士団をコール。」

煉獄騎士団ニードルクロー・ドラゴン

攻撃2000 防御2000 打撃1

煉獄騎士団デimosソード・アーリー

攻撃5000 防御1000 打撃2

煉獄騎士団ガイラムランス・ドラゴン
攻撃6000 防御2000 打撃2

遙か（ファントム・ブラスター・ドラゴン）「ゲージ1払い、私の場の煉獄唱歌とデスゲージタイマーとガイラムランスを破壊して、攻撃力15000追加し、打撃力+1するダムド・チャージングランス
!!」

ファントム・ブラスターが持っていた槍に設置魔法2枚と煉獄騎士団ガイラムランスが吸収されて闇の力が増加した。

アタックフェイズ

遙か（ファントム・ブラスター・ドラゴン）「行くよ！私で攻撃。」
ファントム・ブラスター・ドラゴンの槍に貯まったエネルギーが相手に向かって放たれた。

良太郎「何もねえよ。」
ライフ0

良太郎「約束通りその剣のことは諦めるよ。また新しい剣を探すとするよ。（仮に勝てたとしても手に入らなかったとおもうけどな）」
剣「そうか、また会える時もっと強くなってるあんたと今度は、俺が戦わせてくれよ。」

良太郎「大丈夫だ。そう遠くない未来にあえるよ。」

戦場でな。」

そう言って山を降りていった。

何の話だよと思っっているといつの間にか日が登り初めている。速く帰らないと研究会の人達が心配してしまう。

創一「それじゃあ俺達も帰るか。」

遙か「、、そうしつ、」

和人「遙か!!」

いきなり遙かが倒れた所に和人が支える。

ダリルベルク「あのカードが強すぎる闇を持っていたから倒れるのは仕方ない。」

和人「遙か。」

しばらく様子を見て起きなかったので和人が背負って帰ることにした。

なおその姿を朝練をしていた研究会の一部の部員がニヤニヤしながら見ていたのは、研究会だけの秘密となった。

合宿最終日 研究会の話し合い

俺達か戻ってから無断で宿から出たことを引率の先生から注意され、会長からも怒られたがその日は山に行った全員で休むこととなった。

そして、次の日はとにかくファイトして更にファイトして、とことんファイトして自分の得意不得意をあらいざらいにするためのファイトが行われていた。そして最終日、研究会全員でのファイトスタイルなどの話し合いが行われていた。

研究会生徒「・・・以上が今回の報告です。」

会長「よく調べられていたと思う。だがもう少しカードのイラストなども資料に組み込んでみるといい。」

研究会生徒「はい!!ありがとうございます。」

研究会の人達は、自分達のデッキの特徴などをレポートにして会長に報告していた。

会長「まあこれはこれでいいとしてこれからが本番だ。私が連れてきたあの5人どう思う。」

この話をきりだした。

彼らは会長が連れてきたとはいえあまり知らない人たちだからな。皆から見てどう感じたか聞いておきたい。

ちなみに剣達はいない。剣達はというと今、

和人「よし、まずは俺からだな。」

和人の考えたこと

和人「生まれたワールドは違っていても。」

創一「共に進むロードは一つ。」

カナ「五人と5体永遠の絆で。」

遙か「、、我ら。」

5人「トライファイブ!!」

「「ってなにやらせるんだよ!!」」

和人「ぐへっ。」

剣「ほぼパクリじゃねえか!」

カナ「もうちよつとましたと思つてた。」

創一「駄目だな。」

遙か「、、同意。」

今チームの名前を考えている。

店舗予選では名前を考えなくてよかったのだから地区大会だとそうはいかない。だから時間を貰つてチーム名を考えているのだが、ろくなのが無い。

モンスターが出してくれたのだが自己主張が激しい名前ばかりだ。

ダリルベルク ↓ カオス、お喋り、ベストマッチ

ドラゴン ↓ フューチャーファイターズ

オーバーロード ↓ なんでもいい

もうめちやくちやなのであった。

~~~~~

研究会生徒「ではまず創一さんについてです。」

そう言う後ろにあったモニターに創一の今回の合宿での映像がながれた。



研究会生徒「創一さんは新しい種族フレイムドラゴンを使っている戦い型はオーバードロードやボータックスなどの大型モンスターを主軸にしたデツキです。ドラゴンワールドの汎用カードで守り、大型で攻めるといった大堂のファイトをします。」  
それに昨日はこんなこともありました。

昨日の夜

皆でカレーを作っているとき

研究会生徒A「玉ねぎを切っていると涙が出てくるよな。」

研究会生徒B「そうだな・・・!!」

そう言いながら涙を流しながら玉ねぎを切っているなか一人だけ違った。

創一「何か目線を感じるな）何かようか？」

研究会生徒A「以外な特技つてあるもんだな。」

研究会生徒B「でもカレーにみじん切りはないだろ。」

創一「!! 飴色に炒めた玉ねぎはルーにコクを与える。」

研究会生徒「失礼しました。」

研究会生徒「以上です。」

会長「ファイト関係無くないか？」

~~~~~

カナ「じゃあ次私ね。」

頼むからましなの来てくれよ。

カナ「私はねーこのチームねーええとね・・・すいません思いつきませんでした。」

何したいんだこいつ

ドラゴ「もうめんどくさいからモンスター全員を霸王軍にして、霸王進軍って名前でもいいんじゃないか？」

なにそれめっちゃ中二病かんあるんだけど、

ダリルベルク「断る。」

いきなりダリルベルクがいきなり出てきた。

ダリルベルク「そんなことされたら私の個性が無くなってしまう。それに、私の目的はカオスでもお喋りなモンスターがいると言うことを世の中に広めるために活動しているのだぞそんな霸王軍になったら目的が変わってしまうだから、」

ドラゴ「分かったもう分かったからこの意見は取り下げるから少し静かにしてくれ。」

ダリルベルク「本当に分かったんだろ？」

これ今日中に決まるのかな。

~~~~~

研究会生徒「続いてはカナさんについてです。」

先ほどと同じように映像が流れた。

研究会生徒「カナさんは、サイバー忍者レイとこちらも新属性のブレイブ・モンスターを使って戦う戦いかたです。まだまだブレイブモンスターの種類が少ないせいがかたまたまに事故を起こしたりします。またバディのサポートもあり、ブレイミスもすくなくないです。」

またしても昨日の映像今度はファイトシーンが出てきた。

会長「確かにブレイブが増えればかなり強くなるだろうな。」

研究会生徒「他にも必殺技はブレイブ・ドラゴンを登場させてその上に乗る、巨大なレーザーを打つのはかなり見えて爽快感がありま

した。」

会長「だからファイト関係ないじゃん。」

~~~~~

カナ「あ、思い付いた・・・カップル・パニッシャーなんてどう？」
この瞬間空気が凍った。

剣「カナ、覚悟はいいな・・・地獄を楽しみな。」

カナ「え、ええと拒否権は。」

剣「無い。」

即答した。

カナ「創一助けて!!」

創一「自業自得だ。」

そう言つて明後日の方向を向いていた。

剣「それじゃお☆は☆な☆しといこうか。」

カナ「いやあー!!」

その数十数分後燃え尽きたようなカナが見つかったのは言うまでもない。

剣「悪いな時間を食つちまつて。」

和人「別にいいよ。」

遙か「、、(だめだこりゃ(汗))」

~~~~~

研究会生徒「次は和人さんについてです。」

同じように映像が出てきた。

研究会生徒「我々の知らない可能性の塊、未来竜そのものを使うファイターです。その戦いかたはデツキという可能性を力に変え今よりも大きな力を使う。」

会長「ランダム性が高い分強力な効果を持つモンスターが多いのが

特徴だな。」

研究会生徒「それにドランはデュアルカードだ。まだスタードラゴンワールドもあるからまだまだ可能性の塊というというのは変わらない。」

会長「まだドラン本体の未来の姿が出てくるだろうからそれも楽しみだな。」

何か会長がメタい話を始めたからこの解説は終了ということにした。

~~~~~

和人「もうさっきの芸は止めるからトライファイブにしないか？」
カナ「他のカードゲームアニメでトライスリーがあるからだめだよ。」

創一「そうだな。」

和人「そんなー」

剣「他に意見ないのか？」

レイ「なら私よ。」

カナ「レイは一回落ち着こうか。」

何か最近レイが調子が悪そうなのでまた変なの出されてまたさつきみたいのを味わうのはごめんだよ（恐怖）

創一「(さっきのがトラウマになっているな。)」

~~~~~

研究会生徒1「次は遙かさんですね。」

その瞬間空気がまた凍った。

研究会生徒2「あの人は、、、最後までいいんじゃねえかな。」

研究会生徒1 「いやでもさ、どうせやるんだし今やつちまおうぜ。」  
研究会生徒2 「それもそうだな。頼む。」

研究会生徒2 「ではやらせていただきます。遙かさん、昨日の夜皆さんにトラウマを産みつけられた人もいたと思いますが戦い型は敵も味方も関係なくとにかく破壊、破壊、破壊してアドを稼ぎまくるデツキを使います。」

会長 「昨日は、速く寝てしまったから何があったのか教えてもらってもいいかい？」

研究会生徒1 「!!・・・分かりました説明しましょう昨日何があったか、」

昨日の夜

会長 「じゃあ寝るからあとよろしくね。」

研究会生徒達 「「お疲れ様でした。」」

研究会生徒達は明日の説明のための資料を作成していて少し速く終わった会長は、まだ午後9時だけど疲れたそうにして寢床に行ってしまった。まあ仕事を全部終わらせてくれているのでなにも言わな

いが。  
そして、彼女は現れた。

研究会生徒 「あつ遙かさんどうかしましたか。」

遙か 「いや単純にデツキを作り直したからデツキを試してみたいな  
と思つて誰か暇な人いない？」

いつもと感じが違うな。

研究会生徒達 「「俺で良ければよろこんで」」

あまり女子と関わらない研究会生徒達にとってこれはあまりない  
チャンスなのだ、、ふつうならば。

遙か「フアントム・ブラスター・ドラゴンでファイターを攻撃!!  
ムドチャージングランス!!」

研究会生徒「ぐはっ。」

ライフ4↓0

我々は知らなかった

遙かさんとの戦いはまさしく闇のゲームであるということ

ダメージがリアルに影響してしまうのである（けがしない程度だが）

遙か「私の分身、ブラスター・ダークでファイターを攻撃。」

研究会生徒「ひっ、キャスト、ドラゴンシールド青竜の盾、攻撃を無効化してゲージ追加。」

遙か「ならデイミオス、お願い。」

研究会生徒「ウソダードンドコドン。」

ライフ2↓0

他にもL0黒竜を使ってきたりしたお陰でメタデツキも使えずその日は研究会生徒達の悲痛な叫びが宿内に響いたのであった。

遙か「ふうようやくブラスター・ダークと私の闇を発散できたわ。これでしばらくは大丈夫ね。」

会長「そんなことがあったのか、、よしやはり皆でメンタル面も鍛えないと駄目だな。これからバスまでの時間リアリストになるべく、これから特訓をしようではないか。これからはそういうことも増えてくる可能性があるのだからな。」

研究会生徒達「「はい!!」「」

そうやって彼らは特訓を始めた。

なお一人説明を忘れてるのは黙っておくでしょう。

~~~~~

剣「ならこれはどうだ seekers (シーカーズ) 英語で探求者達という意味だ。俺達のデッキはまだまだ完成しているわけじゃない。それは俺達も同じだ。なら、その完成させるために探していけるそういう意味でこの名前をつけたどうだ？」

カナ「今までの中で一番ましだしいいんじゃない。」

遙か「、、むしろこれがいい。」

和人「俺の意見なんかよりもかなりいいな。」

創一「それ自分で言うか？」

和人「うっそれは何も言い返せないな。」

皆賛成してくれるみたいだ。あつでも、

バディ達「異論なし(だ)(よ)。」

何でこう俺の周りには人の心を読むやつばかりなんだよ!!
はあ、まあいいや、

俺達は今日からチーム seekers だ。

地区大会スタート 初戦 孤高の戦士対最強の竜

司会「これより地区大会を開始します。」

司会「その発言により始まった地区大会、この日のために剣達チームシーカーズは1ヶ月の特訓を行ってきた。」

司会「今回は全32チームのトーナメントを行います。それでは早速始めましょう。第一試合はチームシーカーズとチームマツスルの試合を30分後に行います。」

カナ「いやー遂に来たね。」

遙か「、、緊張感が無い。」

創一「確かにな。」

剣「どうでもいいけど誰から行く?」

カナ「私から行くよ。」

レイ「ちゃんとフォローするよ。」

カナ「最近調子悪いようだけど大丈夫?」

レイ「大丈夫だよ。ようやくアップデートが終わったからね。ようやく本調子で戦えるわよ。」

アップデート? 一体何をしていたんだ?

剣「じゃあ二人目は創一で三番目は遙かでいいな。」

遙か「?なんで私と創一なの?」

剣「それはな、「それでは第一試合スタートです。準備をしてください。」おつと理由はあとでな。頼むぜカナ暴れてきてくれ。」

カナ「ええいつてきます。」

そう言っつてステージの方へ向かった。

対戦相手はチームマツスル。

なんかすごい筋肉がある人ばかりなチームだな。

マッスル1「お前が相手か？貧弱そうや奴だな。これは俺達のチームの勝ち確定だな。」

プチッ

カナ「レイ、行くよ。」

レイ「ええ私達の見せてあげましょう。」

めっためたにしてあげる。

審判「それでは試合、始め。」

二人「オープン・ザ・フラッグ。」

カナ「カタナワールド。」

サイバー忍者レイ

ライフ10 ゲージ2 手札6

マッスル1「エンシエントワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

マッスル1「俺のターンドロージャーリアンドロー俺は、覇竜紋章を設置これで俺は、サイズ6までモンスターをコールできる。」

レイ「いきなりキーカードを引かれたわね。」

マッスル1「はっはっはっ俺の最強のモンスターを見せてやる。センターに王覇 ゼルベリオスをセンターにコール。そして、効果でデッキからサイズ4の最強竜を手札に加え、一騎当千により攻撃力と防御力が2000上がり、打撃も1プラス。」

王覇 ゼルベリオス

攻撃8000+2000＝10000

防御8000+2000＝10000

打撃2+1＝3

アタックフェイズ

マッスル1「やれ、ゼルベリオスファイターを攻撃。」

カナ「うっ、まだまだ。」

ライフ10↓8

マッスル1「はっはっはっ、気合いだけはあろうだなターンエンドするときに覇竜紋章の効果で手札の制覇 ゼルベリオス・オークを

センターにコール。こいつも最強竜をサーチ出来る。サイズ5の最強竜を手札に加え、更にこいつも一騎当千を持っている。更に防御力+15000よって今のゼルベリオスのステータスは、

制覇 ゼルベリオス

攻撃力10000 防御力25000 打撃3

ゼルベリオスがさつきよりも大きくなった。

マッスル1「これで俺はターンエンドどうだ防御力250000だぞこれられまい。」

ライフ10 ゲージ3 手札5

カナ「余裕ぶっこいているところ悪いけど私の相手はあなたであつてそのでかいモンスターじゃない。私のターンドロージャーリアンドドロージャー手札を2枚捨ててキャスト、ブレイブ起動!!」

ブレイブ起動

使用コスト手札の「ブレイブ」を2枚捨てる。

■デツキから変身を持つブレイブを1枚変身コストを払わずに変身する。

カナ「デツキからお願い、サイバー忍者レイをバディ変身。」
レイ「行くわよ。」

カナ「更に、ブレイブ・イーグルをレフトにコールしてそのままブレイブ。」

ブレイブ・イーグル（ヤギリさん提供）

ヒーローワールド／カタナワールド

ブレイブ

サイズ2／攻4000／防2000／打撃1

??「フェザーカイト」このカードがブレイブしているアイテムは潜影を得る。（このカードは相手のセンターにモンスターがいても相手を攻撃できる。）

「ブレイブ」（ライフ1払う。）

レイの背中にブレイブ・イーグルの翼が着いた。
サイバー忍者レイ

攻撃力7000+4000 防御力3000+2000 打撃2

＋1

攻撃力11000 防御力5000 打撃3

アタックフェイズ

カナナレイ「私達でファイターを攻撃。」

マッスル1「何!？」

ライフ10↓7

カナナレイ「2回攻撃。」

マッスル1「うおっと何のまだまだ。」

ライフ7↓4

カナナレイ「更にキャスト、ブレイブ・アタック!!」

ブレイブ・アタック

ヒーローワールド／カタナワールド

自分の場にモンスターがない時に使える。

使用コスト「場のブレイブを1枚破壊する。」

■相手に1ダメージ与えて山札から2枚をゲージに送る、更にド

ロップゾーンに魔法が5種類以上ならカードを1枚引く。ブレイブ・

アタックは1ターンに一度しか使えない。

ブレイブ・イーグルの翼取れてが相手に向かって発進した。

マッスル1「ぐはっ、だがまだやれるぞ。」

カナナレイ「いえ、あなたの終わりよ。」

マッスル1「何?」

カナナレイ「私達の効果でドロップゾーンのブレイブ・イーグルを

再びブレイブしてスタンドする。」

マッスル1「な、なんだと!!」

カナナレイ「これでラストアタック!!」

手札2 ゲージ3 ライフ8

マッスル1「だが、まだだ。俺のライフが0になったことでこの

ターンは強制終了だが、ターンの終わりにゼルベリオスを進化させ

る。現れよ！凱覇 ゼルベリオス・ジード!!更に、効果でデッキからサイズ6を手札に加える。」

ライフ3↓0

凱覇 ゼルベリオス・ジード

攻撃25000 防御15000 打撃4

相手のライフが0になったのだがゼルベリオスがまた進化した。

剣「よし、まずは一勝だな。」

創一「ゼルベリオスは強い、だが直接相手に攻撃することで、実質ゼルベリオス自分のターンではない事になる。」

和人「なるほどなそれなら相手のターンの攻撃だけに気を付けなければならない程度は勝負になるということか。」

遙か「、、なるほど。」

次の人はわりと普通そうな人だ。

筋肉もりもりだけど、

マッスル2「あいつが失礼なことを言ってしまったな、謝罪するよ。」

カナ「いえいえ、いらないますよ謝罪なんてファイトを楽しみましょう。」

マッスル2「そうか、では手は抜かないぞ、フラッグはドラゴンワールドだ。行くぞ、ドローチャー吉安ドロ。」

アタックフェイス

マッスル2「やれ、ゼルベリオスで攻撃「ちよっと待って下さい。」なにかない?」

カナ+レイ「キャスト、サイバー忍法グラウンドホール!これによりゼルベリオスはこのターン攻撃出来ない。」

サイバー忍法グランドホール
場にモンスターがないときに使える。

「使用コスト」ライフ3払う。

■相手の場のカード1枚を選び、そのカードを攻撃出来ない。更に、君のドロップゾーンに魔法カードが5種類以上ある時、山札から2枚をゲージに置く。サイバー忍法グランドホールは1ターンに1度しか使えない。

マッスル2 「それは不味いな、ターンエンド。」

手札12 ゲージ6 ライフ10

カナナレイ「私達のターンドロージャーリアンドドロージャー私達はブレイブ・ライガーをレフトにコール。ライガーの効果で攻撃力+3000 打撃力+1。」

サイバー忍者レイ

攻撃11000+3000=14000

打撃3+1=4

アタックフェイズ

マッスル2 「さすがにそれはまずいキャストドラゴトラップ対象はもちろん君自身だ。」

ライフ10↓8

カナナレイ「キャスト、サイバー忍法エレキショット、その魔法は無効よ。私達でファイターを攻撃。」

マッスル2 「まじか、だがキャスト、緑竜の、、センターにいるから使えないだ!!」

ライフ8↓4

カナナレイ「2回攻撃。」

ライフ5 ゲージ4 手札2

マッスル2 「また戦うことがあったらよろしくな。」

ライフ4↓0

この人はわりといい人だったわね。さて次は、、また筋肉もりもりな人だよ。

何このチーム本当に筋肉ムキムキな人ばかりなんだけど。

マッスル3「俺が三人抜きをして見せるぜ。俺にはそれをする事の出来る力が場にあるからな。」

カナ「え!」

レイ「わすれたの? あいつよ。」

マッスル3「ターン終了時に覇竜紋章の効果でドロップゾーンの帝覇ゼルベリオス・ロストをコール。そして効果で相手の場のカード全てを破壊してその数ダメージを与える。」

カナ「キャ、それでもまだライフは0じゃない。」

ライフ5↓2

マッスル3「オープン・ザ・フラッグ、デンジャーワールド。ドロージャージアンドドロ。」

アタックフェイズ

マッスル3「ゼルベリオスでファイターを攻撃。」

カナ「私は、未来を信じるキャスト、ブレイブ・ユナイト!!」

ブレイブ・ユナイト

ヒーローワールド／カタナワールド

場にモンスターがない時に使える。

使用コスト全ての手札を全てドロップに送る。

■「対抗」このターンの終わりにドロップゾーンのブレイブを2枚選んで1枚を変身し、もう1枚をブレイブする。

カナ「あとは、お願い。」

ライフ0

マッスル3「よし、このままあと二人倒して俺達の勝ちにしてやる。」

???「それはどうかな。」

マッスル3「誰だ。」

創一「俺だ。」

そこにはレイを装備した創一がそこに立っていた。

マツスル3「何故だそのアイテムはさつき破壊したはずだ。」

創一「さつきカナが使った魔法、あれはあとのやつらのために使ったんだよ。まあ本来は使いづらいし、まずデツキには入れないがこういう時のためにあいつが託してくれた力だ。」

レイ「（いや私の力なんだけど、）」

そんなことを思いながらも力を貸すレイなのであった。

マツスル3のターンが始まる時、

剣「創一準備してくれ。」

創一「分かった。」

そう言つてステージの近くに近づいた。

遙か「そろそろ教えてよなんで2番目が創一なのか。」

剣「それはな、レイがさつき、言つてたんだよ。ブレイブの新しいのを試したいから創一か遙かを2番手にしてくれって

遙か「なんでそんなことを？」

剣「レイが変身するだろ、和人と俺は嫌なんだってよ。」

遙か「そんな理由だったんだ。」

まあ創一を嫌がらないのはさすがカナのバディだよな。

創一「俺のターンドロージャーアンドロー。俺は、ブレイブ・ホースをレフトにコール。」

そこに現れたのはカナが創一に渡していたモンスターだった。

ブレイブ・ホース

ヒーローワールド／カタナワールド

サイズ1 攻撃1000 防御1000 打撃2

このカードがブレイブしているとき、君のアイテムは「貫通」を得る。

ブレイブ（ゲージ1払う）

創一「行くぞ、ゲージ1払いブレイブ！」

いつものブレイブとは違い、今回はブレイブ・ホースがバイクになりそれに創一+レイが乗った。

サイバー忍者レイ

攻撃7000+1000=8000

打撃2+2=4

マッスル3「だがしよせん攻撃力8000俺の場のゼルベリオスには勝てない。」

創一「そうだな、このままならな。キャスト、サイバー忍法シャドウダンスこの魔法は相手の場のカードの攻撃力と打撃力を俺自身に追加する。そして、エレキショットを手札に加える。」

マッスル3「なんだと!？」

サイバー忍法シャドウダンス

カタナワールド

君の場にモンスターが無くてブレイブのアイテムがある時に使うことができる。

「対抗」相手の場のカード1枚を選んでそのカードの攻撃力と打撃力を君のアイテムに追加する。更にドロップゾーンに魔法が5種類以上ある時ドロップゾーンのサイバー忍法と名のつくカードを1枚手札に加える。

創一+レイ「おおー!!」

サイバー忍者レイ

攻撃力8000+30000=38000

打撃4+4=8

ゼルベリオスの力が奪われていき、創一達に力を与えているそして、

マッスル3「ゼルベリオスの力を利用しただと!？」

アタックフェイズ

創一+レイ「これが、ブレイブの力だー!!」

カナ「(あれ私のセリフじゃないの?)」

マッスル3「キャスト逆鱗これで場に残る。」

創一+レイ「これを忘れてる。キャスト、サイバー忍法エレキ

ショットその魔法は無効だ。」

マツスル3 「しまった!!」

ライフ9 ↓ 1

創一+レイ 「もう一度だー!!」

マツスル3 「(手札にはガード魔法があるがこれは、、、俺達の負けか。))こゝは潔く負けを認めよう。素晴らしい君達の勝利だ!!」

ライフ0

創一 「ふっ、勝ってきたぞ。」

剣 「お疲れー次の相手は誰だろうな。」

剣は速くも次の相手の準備をしているようだ。

まあ、次もシーカーズが勝って優勝してみせる。

2回戦 増殖する手札

前回までのあらすじ

1回戦では、ブレイブイーグルの能力を生かしてファイトを有利に進め、勝利することができたシーカーズ。

そして、第2回戦の相手は、

チームバディファイト研究会ドロー実習班だ。

シーカーズ「え!?!」

剣「バディファイト研究会にドロー実習班なんてあったか?」

創一「しらん。」

カナ「多分なかったと思うけど。」

会長「彼らは別の学校の研究会だよ。」

「うおっと!」

いきなり現れるなこの人。

会長「あれは、きみ達が関わっているチームリバイバルの学校のバディファイト研究会のチームだよ。ほら白衣を着ているだろ。」

そういえば前に見たことがあったな。

ちなみにこっちは全員が学校指定の制服だ。

まあ服装ではこっちの方が普通なんだろうけど、やってることはあんまり変わらなそうだな

そう思っていると相手側の一人おそらくリーダーと思われる人がこっちにきた。

???「ほう、貴様らか、そちらの学校の新しい研究会のメンバーか。」

剣「:だとしたら?」

???「警戒しなくていい。何もしないさ。ちょっと自己紹介をしようとおもってな。俺の名前は、佐藤 太郎だ。よろしくな。お互いファイトを楽しもうではないか、はっはっはっ。」

なんか楽しそうな人だな。

そこに会長が挨拶に行く。

会長「こんにちは、今日は大会出るメンバーだけですかね。」

太郎「まああいつらがいると面倒なことになるからその予定だが、」
会長「じゃあ、あれはなんですか？」

会長が指を指すとそこには、

「お前ら今日こそ決着をつけてやる。」

「その言葉そのまま返してやろう。いざ、勝負だ。」

それぞれの学校のバディファイト研究会のメンバーが、一斉にファイトを始めていた。

太郎「なっ！お前ら邪魔になるから今日は休みだと言ったはずだぞ。」

太郎が注意するが、

「見学にきたんですよ。」

「けどこいつらがいた。ということは、」

「今日こそ決着をつけるしかないでしょうが。」
「そう言っただけでまたファイトにもどった。」

会長「お前達もだ。周りの迷惑だから止めろ！もしくはフィールドでやれ!!」

「大丈夫、瞬殺するんで、」

「こいつらを倒すだなんて朝飯前ですよ。」

「シャドールのストラク買って待っててください。」

会長「ふざけるなすぐ止めろ！それに最後の奴、違うカードゲームのだろそれ。」

両方のリーダーが止めるも言うことを聞かないので双方止めに入った。

剣「大丈夫なのかあれ？」

カナ「もう、ほおっておこう。」

創一「それもそうだな。」

そう言ってシーカーズのメンバーは何処かに行ってしまった。

研究会生徒「シャドール最高だせ!!」

この男こそ毎回ふざけているシャドール研究会生徒だ。

???「待ちやがれ、ひゃあははは。」

そこにはちよつとあれな服装をした男がいた。

研究会生徒「!? 貴様は満足男。あちらの学校のソリティア担当じゃあねえか。」

満足男「説明ありがとう。それよりためえ満足させてくれよ。」

研究会生徒「ふっ面白い満足アンカー、ゴー!!」

そういうと満足ディスクに取り付けられていたアンカーで相手の腕に投げつけた。

満足男「!? なんだこれ?」

研究会生徒「満足アンカー、俺達研究会が新たに開発されたものだ。効果は相手を強制的にフィールドに転送させることができる。もともとは別の世界から来たモンスターのように作られたのだがそんなことがあまりないので対リア充ように改良したものだ。」

なおこの機能はある程度の安全性は保証されているのでそこら辺の問題はない。

満足男「なんだと!」

研究会生徒「これで、周りには迷惑をかけずにファイトができる行くぞ。」

そういうと思い出したかのようにそれぞれが満足アンカーで相手を強制的にフィールドを展開した。

会長「お前ら絶対忘れてたろ。」

研究会生徒達「……………オープン・THE・フラッグ!!」

色々あったが（結局勝負は決まらなかったようだが）

ようやく、始まる2回戦

カナ「最初は誰が行くの？」

剣「相手がどんな戦術か分からない以上ここは、遥か頼めるか？」

遥か「…分かった。」

剣「いちおう念のために言っておくがファントム・ブラスター・ドラゴンの力を使う時は自重しろよ。あれのせいで何人かにトラウマ与えたんだから。」

なおそのトラウマは今では全員が克服している。

遥か「うん分かった。」

そうして始まったファイト

遥か「あなたが対戦相手？」

???「そうだ俺はバディファイト研究会ドロウ実習班の初陣を飾らせて

もらうものだ。炎竜 絆（えんりゆう ばん）だよろしくな」

遥か「こちらこそ。」

周り「バディファイト!!」

二人「オープン・THE・フラッグ。」

遥か「ダークネスドラゴンワールド。」

バディC，ダリルベルク

ライフ10 ゲージ2 手札6

絆「エンシエントワールド。」

雷斧 アギト

ライフ10 ゲージ2 手札6

遥か「!!アギトのバディ。」

絆「おうよ我ら絆竜団力の限りお前を倒す。」

アギト「ようしやしないぞ！」

遙か「だけど私達は負けない。私のターンドロージャーチャージアンドドロージャー、私は蓮獄騎士団ニードルクロージャーをセンターにコール。」

蓮獄騎士団ニードルクロージャー・ドラゴン

攻撃3000 防御1000 打撃1

アタックフェイズ

遙か「ニードルクロージャーでファイターを攻撃。」

相手「くっ。」

ライフ10↓9

遙か「ターンエンド。」

相手「俺のターンドロージャーチャージアンドドロージャー私達の力見せてやるよ俺のドロージャーコンボをな。まずはキャスト、竜王伝、ライフゲージ増やしワンドロージャー。更にキャスト、天竜開闢ライフ2払い2ドロージャー。そして、いくぞ、センターにアギト、レフトにハラハラ、ライトにエンピをコール。エンピの効果でニードルクロージャーを破壊。」

手札9 ゲージ2 手札5

雷斧 アギト

攻撃6000 防御3000 打撃2

満腹 ハラハラ

4000 4000 打撃1

熱誠 エンピ

攻撃4000 防御1000 打撃1

遙か「うっニードルクロージャーはバトルフェイズじゃないから手札に戻せない。」

相手「更に、ライフ1払い、装備、絆手袋”ボンドクラブ”。そして、D’シエア発動!!」

ライフ8 ゲージ2 手札5

絆手袋”ボンドクラブ”

攻撃4000 打撃2

剣「不味いな。」

創一「ああ。」

カナ「？何が不味いの？」

遙か「：あのモンスター達とアイテムはそれぞれ自分が持っている能力を他のカードに与えることができるの。」

カナ「え！それって。」

レイ「今の彼らの能力は、2回攻撃持ちで、攻撃時にライフ2回復して、ライフ2を払えば1ドローできて、効果で破壊されないというものよ。」

相手「まだまだいくぞキャスト、絆竜団の狩り俺の場の絆竜団の数だけドローしてライフ追加。」

ライフ13 ゲージ1 手札8

アタックフェイズ

相手「行け！我々の力を見せてやれ!!」

「「おう。」」

モンスター達が遙かに襲いかかる。

遙か「きゃっ！」

ライフ10↓8↓7↓6

相手「効果でライフ2増えるが全て手札にかえる。」

ハラハラが味方を攻撃するたびに料理を、ファイターに渡そうとするとエンピがそれを食べて、ドローする。

そして、それを見て、呆れるアギト。 手札10

相手「ははは、今度は俺だ。効果でまたワンドロー。」

手札11

遙か「キャスト、バディブロック。このターン私はダメージを受けない。」

相手「ならば残りは連携攻撃だ。」

全員で襲ってきたがバリアのようなものに妨げられてダメージを与えられない。

ならばとハラハラが料理を作りファイターに投げようとしたハラハラ「いくぞ、絆受け取れ!!」
だが投げられたのは皿だけだった。

ハラハラ「え！なんで、料理は？」

エンピ「応援するためにはまず体力をつけなないと。」

そこには全ての料理を食べたエンピがいた。

ハラハラ「俺の料理が!!」

エンピ「受け取れ!!絆。」

絆「：うん、ありがとうな。……俺はこれでターンエンドだ。」

手札11↓15

カナ「ターンが終わってみたら手札15!？」

和人「すごいな。それより気になるのは、」

剣「多分俺も同じ事考えている。」

カナ「どうしたの。」

二人「いやあのハラハラ大変だなと思った。」

カナ「……まあ確かにそうね。」

遙か「私のターンドロージャーリアンドドロー行くわよ。立ち上がれ私の分身ゲージ2とライフ1払い、ブラスター・ダークに変身。」

遙かのカードから前にも出た霧の様なものを纏い暫くするとその霧を切り裂き闇の騎士が現れた。

ブラスター・ダーク

攻撃10000 防御10000 打撃2

絆「!!なんだ、そのアイテムは？」

遙か「これが、私の闇の力よ!さあ反撃開始よ。」

2 回戦中編 未来からの使者

前回までのお話

対戦相手のバディファイト研究会ドロロー実習班は、後攻の1ターンで攻撃するたびにドロローするコンボを行うことで手札がなんと12枚となってしまった。

遙か「手札が何枚あろうと負けない。蓮獄騎士団デimosソード・ドラゴン・ドラゴンをレフトにコール。蓮獄騎士団ルナシーワンド・ドラゴンをライトにコール、更にそのみ身を砕き我を支えよ。を設置。」

蓮獄騎士団デimosソード・ドラゴン

サイズ2

攻撃6000 防御3000 打撃2

蓮獄騎士団ルナシーワンド・ドラゴン

サイズ1

攻撃2000 防御2000 打撃2

デimosソード「蓮獄騎士団に栄光あれ。」

遙か「ブラスター・ダークの効果手札を1枚捨てればこのターン2回攻撃を得る。」

アタックフェイズ

遙か「蓮獄騎士団ルナシーワンド・ドラゴンでセンターを攻撃。」
センター破壊。

残りソウル0

遙か「デimosでセンターを攻撃。」
センター破壊。

安心しろ敵討ちはしてやる。

遙か「そうはいかない。私でファイターを攻撃。」

ファイター

残りライフ8

遙か「二回攻撃。」

ファイター

残りライフ6

遙か「デイミオスの効果サイズーの蓮獄騎士団を破壊し、スタンド、破壊された蓮獄騎士団の効果でライフ追加。して攻撃。その身を碎き我を支えよの効果でゲージ追加。」

ライフ6↓7

ファイター「ライフで受ける。」

ライフ4

遙か「駄目だったかーターンエンド。」

ライフ7 ゲージ2 手札3

剣「最近さ、ファイトの時だけ遙か何か違うよな。」

カナ「確かに、なんかいきいきしている感じがするね。」

和人「ダリルベルクが言っていたんだけどさ、なんでもプラスター・ダークを手に入れた後からファイトの時だけ闇の力が強くなってあんな感じになるらしい。理由は多分闇の力が精神に何かの影響を与えてるらしいんだよな。」

それってまずいんじゃないか。(汗)

絆「俺のターンドロージャーシアンドロー。何度たおしても新しいモンスターを呼んでやるよ。俺はセンターにアギトをもう一度コール。」

ダリルベルク「不味いもう一度あの大量ドローが来てしまう。」

アタックフェイズ

絆「え！防御10000もあるのか！ならば全員で連携攻撃。」

またしてもハラハラが全員分の料理を作り、ファイターにプレゼン

トしようとするが、またしてもエンピに食われてドロローを繰り返した。

遙か「キャストドラゴンシールド黒竜の盾ダメージを0にして、ライフ＋1」

ライフ8

絆「ならばまた全員で連携攻撃。」

遙か「くっ、まだまだ。」

ライフ8↓2

絆「ターンエンド。」

手札20 ゲージ0 ライフ6

創一「手札20枚だと！」

カナ「なんかドロローに執着しすぎじゃない？」

遙か「私のターンドロローチャージアンドドロロー!!私は蓮獄騎士団ガймランスをコール。」

蓮獄騎士団 ガймランス・ドラゴン

サイズ2

攻撃6000 防御2000 防御2

絆「ん?なんでサイズ2のモンスターをコールしたのにデイミオスは場を離れないんだ?」

遙か「このモンスターはサイズ2だけど場に蓮獄騎士団がいるとサイズ1となるの。」

そう言っつて遙かの体にまた霧が出てきた。

ファイター「!!また何か出すきか?」

遙か「私はゲージ3払い私とブラスタ・ダークの力を一つにする。現れよ。ファントム・ブラスタ・ドラゴン!!」

再び現れた漆黒の竜その眼に捕らえるのは相手の姿のみ。

アタックフェイズ

遙か「デイミオスソードでファイターを攻撃。」

センター破壊

ソウル残り0

遙か「ガймランスでファイターを攻撃。」

ファイター「ライフで受ける。」

ライフ1

遙か「フアントム・ブラスター・ドラゴンでファイターを攻撃。(これで決まるとは思わないけどな。)」

フアントム・ブラスター・ドラゴン

サイズ3

攻撃13000 防御13000 打撃3

ファイター「…」

ライフ0

周り「え!」

遙か「!!なんで防がないの。」

ファイター「ふつデツキの回転率を上げるためにはガード魔法など不要だ。」

そう言つて晴れ晴れとした表情で仲間のもとへ向かった。

絆「これだけあれば十分だろ。あとは任せた。」

雷電「おう任せられた。プレイヤーネーム雷電参る。」

こうして始まった第2ラウンド

雷電「俺のターンドロローチャージアンドドロロー!!まず俺は友ノ心をレフトにライトにグロブスをコール。友ノ心の効果でデツキから3枚見て一枚を手札に加える。更にキイロバットをセンターにコールして効果発動。手札を1枚捨ててチャージアンドドロロー。更に捨てられたデイベアの効果でゲージ1増やして手札に戻る。そしてゲージ1とライフ2払い覇竜剣解放を使うぜ。場のワールド数ドロロー。更に更に、ゲージ2払い、雷帝竜バールバツをレフトにコール。ゲージ2を払い場のキイロバットをコストに破壊の王剣 トリシューラを装備する。」

手札が30枚を越えてしまった。

アタックフェイズ

雷電「トリシューラでデイモスソードに攻撃。」
デイモスソード破壊。

雷電「2回攻撃でサイズ2のモンスターを攻撃。」
サイズ2のモンスターが破壊。

雷電「残りのモンスターでフルアタック。トリシューラの効果で
フアントム・ブラスター・ドラゴンを破壊。」

遙か「……後は任せたよ。」

ライフ0

フアントム・ブラスター・ドラゴン

ソウル0

カナ「遙かの次は誰が行く?」

剣「次は俺が行こう。」

そう言つてステージに向かった。

剣「俺がこのチームのリーダーだ。よろしくな。」

雷電「大将が2番目に出てくるとは珍しい」

剣「まあ作戦のうちだ。さっそく始めようか。俺のターンドロ
ーチャージアンドドロ―! 覇竜システミックダガーをレフトにコール。
更に覇竜マツハブレイバーをコール。システミックの効果でワンド
ローしてマツハブレイバーを素材に、ゲージ1払い覇竜騎将 ドラグ
ルールをコール。」

《覇竜騎将 ドラグルール》

モンスター

サイズ2 / 攻撃力6000 / 打撃力2 / 防御力6000

クラン: ドラゴンW 属性: 武装騎竜 / 竜騎士 / 霸王軍

【コールコスト】君の場のモンスター1枚の上に重ねて、ゲージ1を払う。

【対抗】【起動】君の場のモンスター1枚をドロップに置く。置いたら、手札の「霸王軍」のモンスター1枚までを【コールコスト】を払ってコールする。

このカードが攻撃した時、君の場の他のモンスター2枚まで選ぶ。そうしたら、選んだカードを裏向きにして、「サイズ0／攻撃力6000／防御力6000／打撃力2 属性：ドラゴン／霸王軍」のモンスターとしてコールする。

【ソウルガード】

『人の理を超越し、竜となったもの。彼は、選ばれし者達を竜へと作り変えた』

『俺自身がドラゴンになることだ……！』

『なれたんだな……、ドラゴンに！』

アタックフェイズ

剣「システムミックダガーでグロブスを攻撃。」
グロブス破壊。

剣「ドラグルールでバールバッツを攻撃。効果でシステムミックを新たなモンスターに変える。」

そういうとシステムミックが光輝き少し大きくなった竜となった。

そのままドラグルールとバールバッツが激しくぶつかり合いその衝撃が会場全体に響いた。

バールバッツ破壊。

剣「ドラグルールの効果で手札からドラゴニック・エクス・カイザーをバディコール。」

ドラグルールがゲートを開き、その中からエクス・カイザーが出てきた。その後ドラグルールは消えた。

ドラグルール「あとは任せた。」

ドラゴ「おうよ。」

剣「ファントム・ブラスター・ドラゴンとドラゴで連携攻撃。」

ファイター2「ライフで受ける。」

ライフ9↓5

剣「もう一度だ。」

ファイター2「クツソー。」

ライフ0

カナ「よしこれで相手はあの大将だけだね。」

創一「でも手札が36枚になるんだよな。あれ、」

和人「それ不味くね」

遙か「噂をすれば変なの出てきたよ。え！何あれ。」

そこにいたのは全身が金色の伝説のスタードラゴンワールドのモンスターがそこにはいた。

???「私は絢爛朱雀 ヴァリアブルコードあなた達の實力見せてもらいますよ。」

2回戦後半 嵐の中での勝機

ヴァリアブルが出る少し前

太郎「俺のターンドロージャーシアンドローキャスト、竜王伝更に天竜開闢の効果で2枚ドロ。」

剣「大将のために残しておいたのか!」

太郎「そうだ。あいつらの為にもこのファイト負けるわけにはいかない。そして、これが我らの力だ。ゲージ3払い、俺の手札を3枚残してそれ以外を全てソウルに入れ、センターにバディコール。展覧朱雀 ヴァリアブルコード!!」

突然周りの風が強くなり、それが嵐となった時上から機械のような黄金の竜が現れた。」

ヴァリアブル・コード「ここからが本当の戦いですよ。」

太郎「ソウルに入れたエルガーカノンとトリプルバスターの効果で打撃2増やし、貫通も得る。」

ヴァリアブルコード「:貫通は元から持っていますよ。」

こうして、前回の終わりとなった。

アタックフェイズ

太郎「ヴァリアブルコードの効果発動デツキから好きなカードをソウルに入れられるそれはカオス・トリプルバスター!更にカオストリップバスターの効果でファントム・ブラスター・ドラゴンを破壊。」

剣「うおっと、これは不味い。」

太郎「行け!ヴァリアブルコードでファイターを攻撃。」

ヴァリアブルコード「ヴァリアブルタイフーン」

剣「キャスト、覇龍の盾攻撃を無効にして、ゲージ2追加。」

太郎「さすがはそのチームのリーダーだ一発では決めさせてはくれないか。」

剣「流石になそれはさせねえよ。こつちも意地があるんでね。」

太郎「そうか。それは楽しみだ。ターンエンド。」

剣「俺のターン！ドロー。」

どうするべきか、アタックフェイズに入ればまず確定でドラゴは破壊される。今、ドラグーンがいないが仮にいたとしてもアタックフェイズに入れば即破壊されちまう。とりあえず

剣「チャージアンドドロー!!」

なるほどその手があったか。

剣「俺は覇流鎧 アームズ・エイドをコール。」

覇流鎧 アームズ・エイド

ヒーローワールド

サイズ1

霸王軍

攻撃5000 防御1000 打撃1

このカードは場のカードのソウルに入れることができる。

このカードがソウルにあるカードは『ソウルガード』を得て打撃力＋1する。

デカイ手が現れた。

剣「俺は、ドラゴにアームズ・エイドをクロスナイズする。」

ドラゴ「違うだろ。」

そう言いつつドラゴは腕にアームズ・エイドをつけた。

剣「更に俺はゲージ1払い。覇龍 拳を装備。」

アタックフェイズ

大将「(普通ならドラゴを破壊したいがここは…)そのアイテムを破壊させてもらう。」

剣「まあそうだよな。でも行け、ドラゴヴァリアブルのソウルを破壊しろ。」

ドラゴ「任せろ。」

ヴァリアブルコード破壊

残りソウル33

剣「ドラゴの効果でデッキトップオープン。」

めくれたのは覇竜 サウザントレイピア

剣「サウザントの効果でゲージ2追加。更にシステミックの効果でワンドロー。サウザントでヴァリアブルを攻撃。更にドラゴでも攻撃。」

ヴァリアブル破壊

残り32↓31↓30

普段剣で戦っているドラゴが拳で戦っていると違和感があるな。

デッキトップオープン

覇竜 クロスバスター

攻撃7000 防御2000 打撃3

剣「システミックの代わりにコール。そのまま攻撃。」

ヴァリアブル破壊

残りソウル29

太郎「そんなことでは俺のヴァリアブルコードは倒れないぞ。」

剣「ならばキャスト、エクスブレード・ドライバー！更に奮起せよ、霸王軍をキャスト。全ての霸王軍をスタンドする。」

《エクスブレード・ドライバー！》(雪咲さん提供)

魔法

レジェンドW 属性：霸王軍

このターン中、「霸王軍」のモンスター4体以上をコールしているなら、アタックフェイズ中に使える。

【対抗】カード3枚を引き、君の手札2枚をゲージに置き、君のライフ＋1！ 「エクスブレード・ドライバー！」は1ターンに1回だけ使える。

『霸王軍よ、今こそ限界を超えろ！』

《奮起せよ、霸王軍！》(雪咲さん提供)

必殺技

克蘭：ドラゴンW 属性：霸王軍

君の場にカード名に「エクスカイザー」を含むモンスターがあるなら使える。

【使用コスト】ゲージ4を払う。

「対抗」君の場の「霸王軍」全てをスタンドする。「奮起せよ、霸王軍！」は1ターンに1回だけ使える。

『お前達、こんな所で膝をついている場合ではないだろう?』

今までレスト状態だったモンスター達が立ち上がった。

ドラゴ「まだまだいくぞ。」

サウザント「もちろん。」

クロスバスター「まだまだ。」

剣「一斉攻撃。」

ヴァリアブルコード破壊

残りソウル26

剣「ターンエンド。」

太郎「俺のターンドロージャーシアンドローそしてそのままアタックフェイズ。デッキからトリプルバスターをソウルに入れる。更にドラゴニック・エクス・カイザーを破壊。」

剣「ソウルガード。」

アタックフェイズ

太郎「行けヴァリアブルコードでセンターを攻撃。」

剣「サウザント。」

太郎「貫通。」

剣「うっ。」

ライフ9↓3

太郎「ターンエンド。」

創一「ここまでは互角だな。」

カナ「そう?かなりギリギリだと思うけど。」

和人「確かにヴァリアブルコードのあの守りをどうやってくずすかな。」

剣 side

剣「俺のターンンドローチャー吉安ドドロー。うっ、」
なんだこれ、…体が熱い！

お前はなんのために戦う!!

剣「誰だ!!」

誰がの声が聞こえてきた気がしたが周りを見るが誰もいない。

太郎「?どうした何かいたのか?」

剣「いえ、何でもないです。」

ドラゴ「大丈夫か?」

剣「ああ、多分。」

とりあえずファイトに集中だ。このターンでヴァリアブルコードの破壊は無理だし手札にガード魔法が無い。ならば、

剣「俺は、ライフ1払い、霸道ロボガンセウラーに搭乗。」

ライフ3↓2

アタックフェイズ

太郎「ならば、そのバディモンスターを破壊させてもらう。」

ドラゴ「あとは任せた。」

剣「ああ、任せろ。バスターでセンターを攻撃。更に俺も行く。」

ヴァリアブルコード破壊

残りソウル25

剣「ターンエンド。」

太郎「そろそろ摘んできたんじゃないか?俺のターンンドローチャー吉安ドドロー俺は竜装備ガベルアンカーをレフトにコールしてクロスナイズそのままアタックフェイズだ。ガンセウラーを破壊して更にデツキからもう一枚のエルガーカノンをソウルに入れる。」

剣「まだだ。まだ負けないキャスト、覇龍の盾。」

太郎「そのあがきは見事だが、ガベルアンカーの効果で無効だ。」

剣「何!？」

ライフ2↓0

和人side

ソウル25枚だと!?そんな量どうやって倒すんだよ。

そう思いながらも剣とすれ違う。

剣「すまないたいして破壊できなかった。」

和人「気にするなよあとは俺に任せろ。」

剣「ああ、任せる。あと一つ言っておきたい。」

和人「なんだよ。」

剣「バディファイトは相手のモンスターを破壊することが目的じゃない。相手のライフを0にすることだ。」

和人「!!」

剣「それじゃあとは任せた。」

なるほどな確かにそうだわ。

俺はあの化け物を倒すことだけに捕らわれてたんだよな。

和人「よし、やってやるぞ。」

ドラゴン「おう。」

ヴァリアブルコード「(来ましたか、可能性の竜よあなたの可能性見させてもらいますよ。)」

和人「俺のターンドロージャーアンドロー。いきなり行くぜ、

未来竜 ドランをバディコール。」

ドラゴン「いきなりの出番だぜ。」

アタックフェイズ

太郎「…クロスバスターを破壊。」

和人「ならばタイムリープ発動現れる、戦闘竜 サムライドラゴン

!!」

和人「サムライドラゴンの攻撃、三連斬!!」

ヴァリアブル破壊

残りソウル22枚

和人「俺はこれでターンエンド。」

太郎「俺のターンドロージャーリアンドドロ、確かにお前は強いようだな。ならば俺も全力でいこう。設置コスモスペース”G・アトラクター”この効果でゲージ1払い、手札の竜装備エルガーカノンをソウルにいれる。更にガールアンカーをコールしてクロスナイズ。更にアタックフェイズに入ることサムライドラゴンを破壊し、最後のエルガーカノンをソウルに入れる。」

和人「サムライドラゴンの効果でドランをレフトにコール。」

ドラン「まだまだ行けるぞ。」

太郎「ならばそのカードを破壊するまで、ヴァリアブルコード、ドランを攻撃だこれでお前のバディは倒せるぞ。」

ヴァリアブルコード「(可能性を見れないのは残念ですがこれも勝負なのでね。)」

和人「タイムリープ発動、俺達はまだまだこれから勝ち続けるんだー!!」

ドラン「当たり前だぜ!!」

和人とドランの思いが一つになった。

その時周りの時空が崩れてドランの体が大きくなった。

デッキの一番上のカードが光輝いた。

和人「!!これは……行くぜドラン。」

ドラン「これが俺の本当の姿だ。」

和人「現れるクロノグラフ・ドラゴン！」

クロノグラフ・ドラゴン

サイズ3

未来竜

攻撃10000 防御7000 打撃2

ドラゴンワールド／スタードラゴンワールド

コールコスト(ゲージ2を払う。)

このカードは効果で破壊されない。

「シン・タイムリープ」(対抗)手札を一枚捨てて発動できる。この

カード以外のデッキのサイズ3以上の（未来竜）を一枚選びそのカードを（コールコスト）を払わずにこのカードの上に重ねる。シン・タムリープは1ターンに1度しか使えない。

2回攻撃

人型の竜に時計を肩に着けた姿をしたドランの本来の姿となった。

ヴァリアブルコード「ついにその姿に覚醒しましたか。あなたの本来の力見させてもらいますよ。」

クロノグラフ「もちろんだぜ絢爛朱雀さん、あなたを倒して俺達が勝つぜ。」

ヴァリアブルコード「!!……ええそうですね。」

太郎「進化には驚いたが攻撃は無効化されたか。ターンエンドだ。」
和人「俺のターンドロージャーアンドロー、俺はまだ諦めないぜ」

アタックフェイズ

太郎「ヴァリアブルコードのソウルに入っているC、トリプルバスターの効果発動。ヴァリアブルコード、クロノグラフを破壊しろ。」

ヴァリアブルコード「進化したあなたには悪いですが破壊させてもらいますよ。」

ヴァリアブルのレーザーがクロノグラフに襲いかかるが、そのレーザーがクロノグラフの前で消えた。

周り「なに!?!」

クロノグラフ「俺にはあらゆる効果で破壊されない能力がある。行くぞ、ヴァリアブルコード」

そうやってヴァリアブルを殴った。

太郎「ソウルガード」

ヴァリアブル破壊

残りソウル22枚

和人「2回攻撃。」

ヴァリアブル破壊

残りソウル21枚

太郎「くっだがもうこれであなたは攻撃出来ない。(次のターンで私は、手札にあるトリプルバスターとデッキのトリプルバスターを合体させれば打撃力11となり魔法で防いでもガーベルアンカーで無効にできる俺達の勝利は揺るがない。)」

和人「俺達のアタックフェイズはまだ終わっていないぜ。」

太郎「なに！」

和人「クロノグラフには可能性を引き寄せる力がある。それがシン・タイムリープ！」

クロノグラフ「やってやるぜ！」

そう言うときクロノグラフは輝き出した。

和人「クロノグラフのタイムリープは手札を1枚捨てるとでデッキから好きな未来竜になれる。俺達の可能性は無限だ。」

クロノグラフ「俺の可能性はこれだ。現れる！」

時空竜クロック・フューチャー・ドラゴン

巨大な爆発が起きたかと思ったらそこにいたのは時計の針のような槍を持った白いドラゴンがそこにいた。

時空竜 フューチャー・クロック・ドラゴン

ドラゴンワールド/スタードラゴンワールド

サイズ4

時空竜

攻撃力20000 防御力6000 打撃力5

■このカードが未来竜の効果で登場した時このカードのサイズは3となる。

■このカードが登場した時このカード以外の全てのカードの効果

を無効にしてデッキの1番下に好きな順番で戻す。

■このカードと登場したターンの終わりにソウルの（未来竜）を1枚選びこのカードの上に重ねる。

フューチャー・クロック・ドラゴンが現れた時フィールド全体の時が止まった。

太郎「(なんだこれ体が動かない)」

ヴァリアブルコード「(これは!!)」

止まった時の中でクロック・ドラゴンだけが動けた。

クロック「時よ戻れ。」

時空が崩れてその中にヴァリアブルコードが飲み込まれた。

太郎「馬鹿なソウルが20枚以上もあつたんだぞ。」

ようやく動けるようになった体で場に起こったことに驚いていた。

クロック「時よ、暴れよ。」

太郎「ぐわー!」

ライフ9↓4

和人「ターンエンドした時、クロノグラフに戻る。」

クロックがクロノグラフに戻った。

遙か side

遙か「和人……すごすぎ。」

何あれ全てのカードを時空に飛ばした上での5ダメージなんてま
ず防げないじゃないの。

さつきまで研究会の圧勝だと思っていた観客もいきなり
のことで驚いている。

和人頑張って

太郎「まだまだ俺のターンドロージャーリアンドドロークつ、竜装備

トリプルバスターとエッジシユーターをコール。そのままアタックフェイズで攻撃。」

和人「ソウルガード」

クロノグラフドラゴン破壊

残りソウル1枚

太郎「ターンエンドだ。」

和人「俺のターンドロージャーリアンドロー、キャスト霸王毫竜波。お前のモンスター全て破壊する。そして破壊した分ドロージャー。」

太郎「…俺の負けか、楽しかったぜ。」

和人「ああ俺もだ。クロノグラフでラストアタック。」

太郎「……」

ライフ4↓2↓0

ヴァリアブルコード「まさかあなたの記憶が戻ったのですか？」

ドラン「ああ、少しだけだな。まだ全てを思い出せないけどな。」

ファイトが終わり絢爛朱雀とドランはお互いにチームから抜けて話をしていた。

絢爛朱雀「ならいいでしょうこれを持っていきなさい。私達の力を一部託します。あなたが記憶を完全に戻るまで使いなさい。」

絢爛朱雀の力の一部を託した。

ドラン「確かに借りた。必ず返すよ。」

絢爛朱雀「ではまた。」

そう言つて絢爛朱雀は立ち去つた。

剣「いよいよ準決勝だ。気合いを入れるぞ！」

シーカーズ「おうよ。」

強襲　ダークネスの脅威

剣side

司会「これより準決勝第二試合及び決勝戦を始めます。」

何でこうなったのか。それは準決勝第一試合が理由だ。

第一試合はどちらも一步も譲らない展開だった。

しかし、最後の攻撃が問題だった。それは対戦相手がドラゴニツク・フォーチュンを使ったのだ。

その時お互いにドロップゾーンに送られたのがモンスターカードしかもそれでお互いにライフが0になってしまい、大会のルールによりお互い失格となり今に至るのだが、もううるさい主に外野が。

「俺達のチームが勝利がする。」

「いや俺達だ。」

「いや、俺達だ。」

「アクセルシンクロー」

「それカードゲーム違う。」

お互いのチームが同じ学校だということでお互いの研究会が上下を決めたいという事でまあうるさい近所迷惑考えろよ。あとあつちのチームさつき俺達が勝つたのにもういいだろ。

まあいい。

俺達はただ勝つだけだ。

最初は俺からいくとするか。

司会「では初めてくださうおと。」

始めようとする地震が起きた。

カナ「…何これ！地震？」

観客「なんだよあれ!!」

窓の外を見ると地面からビルと同じ位のモンスターが現れた。

司会「たつた今、バディポリスから連絡が入りました。突如現れたモンスターが未確認と言う情報が出てきたので皆さんに避難指示が出ました。皆さん避難して下さい。繰り返しします。皆さん早急に避難して下さい。」

ヤバいなこんなことが起きるなんて、なんか前にもあったような、まあ急いで避難しないとな。

ドラゴ「剣、ヤバいぞ！あのモンスターからダークネスの気配がする」と

なんだと！あの夏休みに入る少し前にあったガイアスカルの闇を使つて暴れさせたあいつか。

剣「ならばあいつが関わっているなら行かないとな。」

ドラグーン「俺も行くぞ。」

当たり前だいくぞ。

創一「なに一人でいこうとしているんだ。俺達もいくぞ。」

和人「ジートしててもどうにもならないからな。」

京子「あいつには借りがあるからね私達も行かせてもらおうよ。」

チームリバイバルも来るのか、まあ行くとするか。

???「ちよつと待って。」

声をした方を向くとカスミさんがいた。

???「カナ、あなたに渡したいものがあるの。これを持って行って。」

そういうと何枚かのカードをカナに渡した。

カナ「カスミさん、これは？」

カスミ「新しいブレイブモンスターとあらゆるブレイブモンスターの原点のモンスターよ。それをあなたに託すわ。」

カナ「えー！でも新しいブレイブモンスターを使うにはレイの調整をしないといけないって前言ってましたよね。いつやったんですか？」

カスミ「最近よ。そのせいでレイには少し負荷をかけてしまったけどね。」

なるほど、だから最近変なこと言ったり変な行動をしていたのか。

カナ「分かりました。お借りします。」

レイ「それでカスミさんはこの後どうするんですか？」

カスミ「私はいつらを倒すわ。」

周りに黒いモンスターが沢山いた。

カスミ「こいつらはあのモンスターの近くにゲートが開いて、その中から出て来てるのよ。だからバディポリスもこいつらのせいで本体までたどり着けないみたいなのよね。」

剣「なら俺達が本体へ向かいます。」

カスミ「最初からそのつもりよ。お願いね。こっちはこいつらを倒すから。」

「はい！」

そう言っただークネスの元へ向かった。

カスミ「頼んだわよ、みんな。」

ダークネス「もう少しだ。もう少しであれが完成する。そうすれば、」

剣「見つけたぞ、ダークネス！」

ダークネス「ふっやはりきたか。」

剣「今度は何をするつもりだ。」

ダークネス「そんなことこれから死ぬお前達には関係ない。やれ!!」

命令されたモンスターがこちらに光線を打ってきた。

剣「!!頼むドラゴ、ドラグリーン！」

2体「おう。」

ドラゴが光線を受けて、ドラグリーンが槍を投げた。

???「ギャーオー。」

攻撃をくらったがあまりダメージを与えられてないようだ。

ダークネス「くっやはり貴様らには一筋縄には行かないようだな。ならば奥の手を出すまで。はっ！」

ダークネスはゲートを5つだした。

ダークネス「現れる、闇の象徴のモンスター達ダークネスモンス

ター達よ。」

4体のモンスターが現れた。

京子「な、なんなのよこれって、」

そこにいたのは、アジ・ダハーカ、ヒャクガンヤミゲドウ、デストロイヤー、ゾディアック、まさしく闇の象徴となったモンスター達が目の前に現れた。

ガイアスカル「デストロイヤー様、いや気配が違う貴様何者だ。」

ダークネス「やはり、次元竜主を間違える訳がないか。こいつらはなガイアスカルお前にやったように様々なところから闇を奪い、モンスターを複製したのさ。」

ガイアスカル「なんだと、よくもデストロイヤー様を許さん。行くぞ京子。」

京子「ええ。」

ドラム「俺達でアジ・ダハーカを倒すぞ。」

和人「分かった。」

遙か「私たちは、ゾディアックを止めるよ。」

ダリルベルク「今回はさすがに出番があるだろうな。」

カナ「私たちはヤミゲドウよ。」

レイ「行くわよ。」

みんなそれぞれのモンスターを止めに行った。

ダークネス「そして、これが私の最新作だ。」

ダークネスが手から闇を出し、一体のモンスターを生み出した。

ダークネス「現れる、ドラゴニック・オーバーロード The
Rebirth!」

オーバーロード「なんだと!？」

そこにはオーバーロードの闇落ちしたようなモンスターが現れた。

ダークネス「はっはっはっ。驚いたか。貴様が別の世界で”リンクジョーカー”といわれたユニット達によって変えられた、このモンスターで貴様を終わらせて見せよう。やれい。」

ドラゴニック・オーバーロード “The Re—birthが周りを一体を攻撃を始めた。”

そこにはまだ避難が終わっていないところへの攻撃だった。

光「!!まずい。シユベルト頼む、」

剛田「俺達も、いくぞ。」

リバイバルのメンバーが急いでバディを出し、攻撃を防いだ。

だが、攻撃を防いだせいで力を使い果たしてしまったようだ。しばらくうごけなそうさ。

光「すまない、ダークネスを頼む。」

オーバーロード「まさかこの世界でその姿を見ることになるとはな。創一 行くぞ。」

創一「勿論だ。お前はダークネスの元へ行け。」

創一は強制的にフィールドを展開した。

ダークネス「くっ来てしまったか。だがここでお前を殺せば何の問題もないやれ！」

剣「ここまでできてリアルファイトを始めるってかそれでもバディファイターか！」

ダークネス「勝てば正義だ。それはすでに歴史が証明している。ここで朽ちるがいい。」

ダークネスが打った波動により、2体が吹き飛ばされてしまった。

ダークネス「これでしまいだ、死ね。」

また波動と謎のモンスターが攻撃を仕掛けてきた。

剣「くそ（俺は、ここまでなのか。）」

??? 「諦めるな!!」

どこからともなく黒い剣が降ってきた。しかも波動と光線を切り裂いて、

ダークネス「なんだと!」

??? 「よくも俺達の仲間を苦しめてくれたな。仕返しさせてもらうぜ。」

剣「お前は?」

??? 「はじめましてと言うべきか。俺が霸王軍を指揮する竜の剣”覇龍剣”だ。」

激突 封印されし竜王と最強進化した竜

創一 side

ドラゴニック・オーバロード “The Ye—birth”が暴れている場所にたどり着いた創一は、止める為に満足ディスクを構えた。

創一「まさかこれを使うことになるとはな……フィールド展開！」
バディファイト研究会が渡された（押し付けられただけ）

満足ディスクには強制的にバディファイト用のフィールドを展開する能力を持っていた。

こればつかしはあいつらに感謝するしかないな。

まあ普段もアドバイスとかもらっていたからそういうところでも感謝するしかないな。

まあそれはおいといて、今はファイトだ。

黒いオーバロードから闇が溢れたかと思うと人のような姿をした黒い物体を現れた。

??? 「ここは何処だ？そして貴様は何者だ？」

創一「俺は創一だ。このフィールドを出した者だ。そして、お前は俺とファイトして勝たないかぎり、お前は外に出ることはできない。」

??? 「面白い……相手になろう。」

そういうと黒い靄をだしてデツキをだした。

何でもありかよあの靄！

??? 「さあ始めようか本気のファイトを！」

創一「もちろんだ。」

二人「オープン・THE・フラッグ！」

二人「ドラゴンワールド、バディはドラゴニック・オーバロード。」
お互いに同じフラッグの同じバディこれは似たようなデツキかもしれない。ならば、

創一「俺のターン、ドローチャージアンドドローゲージ2を払い、センターにドラゴニック・オーバロードをセンターにコール。」

ライフ10↓11 ゲージ3↓1 手札7↓6

ドラゴニック・オーバロード

サイズ3 攻撃13000 防御13000 打撃3

いきなり現れる黙示録の竜、その炎にはいつもよりすこし、少ない気がする。

アタックフェイズ

創一「オーバロードでファイターを攻撃。」

???「くっ。」

ライフ10↓7

創一「ターンエンド。」

ライフ11 ゲージ1 手札6

???「ふっ、俺のターンドロージャーアンドロー俺はゲージ2払い、俺の分身、ドラゴニック・オーバロード！をセンターにコール。」

ドラゴニック・オーバロード

サイズ3 攻撃13000 防御13000 打撃3

相手の場にも現れる黙示録の竜普通ではあり得ない盤面だ。

アタックフェイズ

???「オーバロードでセンターを攻撃！」

創一「くっソウルガード。」

オーバロード破壊残りソウル2枚

???「オーバロードをスタンド、もう一度攻撃。」

創一「ソウルガード」

オーバロード破壊残りソウル1枚

???「ターンエンド。」

ライフ8 ゲージ1 手札6

ここまではどちらもバディを、現れて殴りあっている感じだ。だが、このままでは先にこっちのオーバロードが破壊されてしまうな。

創一「オレのターンドロージャーアンドロー。そのままアタックフェイズに入る。」

アタックフェイズ

創一「オーバロード相手のオーバロードを2回攻撃してソウルを減らしてくれ。」

オーバロード「おう。」

??? 「ソウルガード。」

オーバロード破壊残りソウル3↓2↓1

創一「ターンエンド。」

ライフ11 ゲージ2 手札7

??? 「この程度か……足りないな。」

創一「何!?!」

オーバロード「!? (あの雰囲気やはりお前は、)」

??? 「俺のターンドロローチャージアンドドロキヤスト、ドラゴニック・チャージ・プラスゲージ2追加して全てを焼きつくす煉獄の炎の中で、再び蘇る! 再誕、炎の最強竜! クロスブレイクライド!

《ドラゴニック・オーバロード》 The Reebirth》をセンターにコール。」

センターにいた、オーバロードが黒くなっていき、鎧も黒を含んだ武装となり、背中には黒い円が出てきた。

《ドラゴニック・オーバロード》 The Reebirth》

(咲野 臯月さん提供)

フラッグ：ドラゴンワールド

種類：モンスター 属性：フレイムドラゴン

サイズ3／攻13000／防13000／打撃3

■【コールコスト】君の場の《フレイムドラゴン》1枚の上に重ね、ゲージ3を払う。

■【起動】ゲージ1を払い、このカード以外の場のカード全てを裏向きにする。そうしたら、このカードは攻撃力+10000、打撃力+1し、能力に『3回攻撃』を得る。この効果は1ターンに1回だけ使える。(裏向きにしたカードは、持ち主のターンの終わりに元に戻る)

■ソウルに「ドラゴニック・オーバロード」があるなら、このカー

ドの攻撃力+2000。

「2回攻撃」

FT「お前たちに興味など無い……。あるのは、白き剣の剣士なり！」

???「俺は、レッドパルス・ドラゴキッドをレフトにコール。そして、オーバロードの効果ゲージ1払い、レッドパルスを呪縛して発動。オーバロードは3回攻撃が可能。更に攻撃力+10000、打撃力+1。」

オーバロードが雄叫びをあげるとレッドパルス・ドラゴキッドを黒い円を囲んだ。

創一「なんだあれ!？」

???「これが呪縛だ。リンクジョーカーの影響を受けた者しか使えない力だ。」

アタックフェイズ

???「オーバロードでセンターを攻撃!」

創一「ちよつとまで、キャスト、ドラゴトラップ。これでお前のオーバロードは攻撃できない。」

ライフ11↓9 ゲージ1 手札6↓5

俺のカードからデカイ落とし穴が出てきて、それにオーバロードが落ちた。

そんなんで攻撃できないのか。

???「何!?!…:ターンエンド。呪縛されていたレッドパルス・ドラゴキッドは元にもどる。」

ライフ8 ゲージ1 手札5

そう言うのとレッドパルス・ドラゴキッドの周りにあつた黒い輪が消えた。

創一「なあ教えてくれないか一体あいつはお前の何なんだ?」

オーバロード「ああ、あいつはかつて我々がいた世界を襲ってきたもの達によって我が変えられた姿だ。我はあの時強さだけを求め周

りを全て破壊して回った。そんな時、我を救ってくれたものがいた。そいつのおかげで我は元に戻ったのだ。」

創一「そうか、なら俺達の手で倒さないとな。」

オーバロード「おう。」

創一「オレのターンドロージャーアンドロー。」

アタックフェイズ

創一「頼むオーバロードでセンターを攻撃。」

オーバロード「おぉー！」

???「ソウルガード。」

オーバロード破壊残りソウル1枚

創一「オーバロードもう一度だ。」

これでオーバロードの能力を使って倒す。

???「キャスト、ドラゴンシールド」オーバロードの盾 攻撃を無効にして、ライフ＋1して、オーバロードがいるからワンドロー。」

ライフ9 ゲージ1 手札5

ドラゴンシールド" オーバロードの盾"

(ヤギりさん提供)

ドラゴンW

魔法：防御／フレイムドラゴン

??相手の攻撃中、君の場にへフレイムドラゴンがいるなら使える。

??【対抗】その攻撃を無効化し、君のライフ＋1！さらに、君の場にサイズ2以上のへフレイムドラゴンがいればカードを1枚引く。

オーバロードの前にオーバロードの顔した盾が現れて攻撃を無効にした。

何!?それまで入っているのか!?

俺まだ小説で使ってるシーン1度もないというのに。

オーバロード「おい、何メタイこと考えている。フアイトに集中しろ。」

創一「悪い、俺はこれでターンエンド。」

??? 「ファイナルターン!」

創一「何!?!」

ファイナルターンだと、俺のライフは9もあるんだぞどうやってそんなライフを削るっていうんだ?

創一「俺のターンドロージャーアンドドロージャーオーバロードのスキル発動レッドパルスを呪縛して3回攻撃を与え、更に、攻撃力+10000打撃力+1そしてキャスト、黙示録の炎この効果で、攻撃時、お前のカードを破壊して1ダメージ与える。」

成る程なそのカードもあつたのか。まさしくミラーマッチだな。

アタックフェイズ

??? 「オーバロードでセンターを攻撃。効果で更に破壊。」

オーバロード「ぐはっ!」

残りソウル1↓0↓破壊

創一「オーバロード!」

ライフ9↓8

??? 「もう一度だ。」

創一「うわー!」

ライフ8↓4

??? 「もう一度、オーバロードで攻撃。」

確かに強い。だがな俺だつて負けられないんだよ。

1週間前

今俺は、デツキ診断をしてもらっている。

もうすぐ大会だから俺も勝てるように調整しないとな。

研究会生徒「ここは、やっぱりドラゴニック・グリモだろ。」

研究会生徒「いいや、ここはドラゴジーニアスだろ。」

研究会生徒「それはゲージを増やすために、ドラゴニック・チャージ・プラスだろ。」

研究会生徒「属性サポートが少ないのは痛いな。いつそのこと他のサイズ3例えばグランガデスとかどうかかな。」

なんかカードがぽんぽん出てくるな。グランガデスか、懐かしい、前のデッキ使ってたしな。

研究会生徒「それならばこれはどうだ？ドラゴンシールド竜王の盾これを入れればダメージを受けたときに使えるカードも使うことができるぞ。」

研究会生徒「それはセンターにいたら使えないだろ。防御を考えてもやっぱりドラゴデスパレードとかだと思うけどな。」

確かにそれも使えるな。けど俺は、
創一「それなら俺は……………」

創一「キャスト、ドラゴンシールド白竜の盾。ダメージを2軽減する。」

ライフ4↓2

???「何だと!?そんなの入っているのか!…………ターンエンド。」

オーバロード「まさかそんなカードを入れているとはな。」

創一「まあ俺も気まぐれで入れたカードだ。とにかくあいつを倒すぞ。」

オーバロード「ああ。共にあいつを倒すぞ!」

創一「当たり前だ。いくぞー!!」

オーバロードと創一の思いが一つになった時デッキの一番上のカードが燃え始めた。

創一「なんだ。」

オーバロード「この炎は、まさか！創一、そのカードをドローしろ。それが我らの新たな力だ。」

創一「分かった。俺のターンドロロー!!このカードは？」

オーバロード「それが我の進化形態だ。そのカードを使いあいつを倒すぞ。」

創一「おう。チャージアンドドロロー。キャストドラゴニック・チャージ・プラスゲージ5追加。」

アタックフェイズ

???「何だ、ただの演出か？」

創一「オーバロードで攻撃。」

???「ソウルガード。」

オーバロード破壊残りソウル0

創一「2回攻撃。」

???「くっ、だが次のターンで勝ってみせる。」

創一「それはどうかな。」

ファイナルフェイズ

創一「俺は、ゲージ2を払い、終わりになき探求の果て、たどり着きし最終進化、あらゆる魂を消化させ今こそ真の姿を現せ、クロスライド!!ドラゴニック・オーバロード・ジ・エンドをセンターに必殺コール。」

ドラゴニック・オーバロード・ジ・エンド

(雪咲さん提供)

必殺モンスター

サイズ3／攻撃力13000／打撃力3／防御力13000

クラン：ドラゴンW 属性：フレイムドラゴン

【コールコスト】君の場のサイズ3の「フレイムドラゴン」1枚の上

に重ね、ゲージ2を払う。

【対抗】【起動】君のターン中、君のライフが6以下なら、ゲージ1を払い、このカードのソウル1枚を捨ててもよい。そうしたら、このカードをスタンドし、このターン中、このカードの打撃力1。この能力は1ターンに1回だけ使える。

【対抗】【起動】このカードのソウルにサイズ3の「フレイムドラゴン」があるなら、手札1枚を捨ててもよい。捨てたら、このカードをスタンドし、このターン中、このカードの打撃力1。この能力は1ターンに1回だけ使える。

【2回攻撃】【ソウルガード】

『ジ・エンドは終わらない。エターナル・アポカリプス!』

??? 「何!?! 貴様ら進化出来たのか。」

オーバロード「たった今だけだな。」

創一「行け! オーバロードでファイターを攻撃。」

??? 「くっは。」

ライフ9↓6

創一「2回攻撃。」

??? 「うおっと。だがここまでだ。」

ライフ6↓3

創一「更に、手札を1枚捨てて、発動打撃力を1減らし、オーバロードをスタンドする。」

??? 「何だと!?!」

創一「オーバロードで攻撃。」

??? 「おのれー!」

ライフ3↓1

創一「更に、オーバロードの効果ゲージ1払い、もう一度攻撃できる。やれ! ラストアタック!」

??? 「うおー。」

ライフ1↓0

ファイトが終わりフィールドも消え、対戦相手も消えようとしている。

オーバロード「お前はやはりあいつの偽物だったのか？」

???「ああ、俺はあの世界からのエネルギーによってできたものだからな。だからフレイムドラゴンを持っている。そしてファイトに負けたことで俺は消滅する。」

オーバロード「そうか。」

???「また会おう。」

オーバロード「そうだな。さらばだ、リバースしたマイヴアンガーだよ。」

創一「これからどうする？」

オーバロード「どうするといわれてもな。」

創一「!!これは。」

いきなりデツキが光だし、その光が剣達が向かった方向に放たれた。

創一「そうか、後は頼んだぞ。リーダー。」

遂に起動!! 始まりのブレイブモンスター

和人 side

??? 「これでお前も俺の実験台だ。ゾディアックの効果でお前のクロノグラフをレストだ。」

ゾディアックが出した重力にクロノグラフが巻き込まれた。

和人 「ゾディアックのレスト能力を使っても無駄だ! クロノグラフ、超進化」

クロノグラフ 「クロノグラフ、超進化! クロック・フューチャー・ドラゴン! って違う! 超進化じゃなくて」 シン・タイムリープ ” だろうが! ”

カツコよく超進化したと思わずツツコミを入れてしまうドラゴンなのであった。

和人 「どつちでもいいだろ。効果でゾディアック、お前をデツキに戻す。」

??? 「馬鹿なこんなはずでは。」

和人 「??? を見るとまた俺もされそうで怖いんだよ。いけ、フューチャー・ドラゴンでラストアタック! 」

??? 「クソガ! 」

ライフ0

フィールドが消えるのと同時にゾディアックは消えた。

そして、和人から光が出て来て、何処かへ向かった。

和人 「そうか…あとは任せませ、剣。」

京子「お願い、ガイアスカル、ファイターにいやあんたの王の偽物にラストアタック。」

ガイアスカル「おう。さらば、偽物のヴァニティ様。」

ヴァニティ「……いいバディに出会えたよ。」

ライフ0

ガイアスカル「そうだな。その言葉を偽物とは言え、ヴァニティ様に言われるのは嬉しいものだな。」

ヴァニティ「そうか。では本物に会えることをたのしみに行っているよ。」

そう言って消えていった。

京子「ガイアスカル……」

ガイアスカル「悲しいなダークネスが生み出したとはいえ我が主を倒すことだ。」

京子「そうね。」

暗い雰囲気の中虚悪の根元の元へ向かうのであった。

京子 side out

遙か side

遙か「フアントム・ブラスタードラゴンの効果でお前のアジ・ダハーカをドロップゾーンに送る。」

???「馬鹿な、それではアイテムを装備出来ない。」

遙か「あんまりあんに構ってられないからね。私自身でファイターを攻撃。ダムド・チャージングランス！」

???「……」

ライフ0

アジ・ダハーカが消えた。

遙か「(はあ速く帰って寝たい。)」

ダリルベルク「あのー我今回もファイトも出ることが出来なかったのだけど。」

遙か「そんなの知らない。」

ダリルベルク「そんなー！」

そんな悲鳴のようなものを聞くのであった。

遙かout

カナside

フィールドを展開して相手と戦うことになった。

目の前にはヒヤクガンヤミゲドウがいる。

そしてその頭には変な化け物がいた。

???'「我が名はイカツチこのヤミゲドウのバディださあ始めよう世界の破滅への道をな。」

カナ「行くわよレイ、こいつを倒してダークネスのところへ急ぐわよ。」

レイ「当たり前よ！」

二人「オープン・THE・フラッグ！」

イカツチ「百鬼夜行。」

ライフ10 ゲージ2 手札6

カナ「カタナワールド。」

ライフ10 ゲージ2 手札6

イカツチ「私のターンドロージャーリアンドドロージャーキャスト、デッキからヤミゲドウを手札に加えて更に、導魔 ダインガスをレフトにコール。効果でドロップゾーンの2枚をゲージを加える。そして

ゲージ3払い、2枚のカードを合わせることでコール。ヒャクガン
ヤミゲドウ！」

と言つてももう目の前にいるのであんまり変わらない。

アタックフェイズ

イカツチ「ヒャクガンヤミゲドウで攻撃。」

カナ「キヤ！」

ライフ10↓8

イカツチ「ターンエンド。」

ライフ10 ゲージ1 手札6

カナ「私のターンドロージャーアンドドロー！（きたカスミさん
からもらったモンスターそれで能力は!?何これレイどういうこと
？）」

そこには絵柄とブレイブコストしか書かれてなかった。

レイ「えつとそのカード事態がまだよくわからなくてあくまで修理
が終わったんだけどプロテクトがあつてそれをはずすことが出来な
かったのよ。」

カナ「何よそれ！」

じゃあプロテクトを外さないと不味いわね。

まあそれはおいといて、

カナ「私のターンドロージャーアンドドロー。行くわよレイ。」

レイ「ええ。」

カナ「ゲージ2払い、変身サイバー忍者レイ。」

レイ「誰じゃ、ワシじゃ、いや忍者、私の出番よ。」

カナ「…何それ。」

レイ「ふざけただけよ。」

カナ「…いやこのどっちかってゆうとシリアス的な場面でそれは止
めてほしいんだけど。」

レイ「いいじゃない作者は最近ネタに走れなくてこういうところで

入れときたいのよ。」

カナ「そういうメタ発言は止めて。」

アタックフェイズ

カナ+レイ「私たちでセンターを攻撃。」

ヤミゲドウ「私の効果発動。デツキの上から5枚をドロップゾーンに送ることで我は復活する。」

デツキ残り89↓84

カナ+レイ「2回攻撃！」

ヤミゲドウ「私の効果発動。」

デツキ残り84↓79

カナ+レイ「私の効果発動。ドロップゾーンのブレイブ タイガーをブレイブしてスタンド。して攻撃。」

レイ+ブレイブ ライガー

ヤミゲドウ「私の効果発動。」

デツキ残り79↓74

カナ+レイ「ターンエンド」

ライフ11 ゲージ1 手札6

イカツチ「私のターンドロージャージアンドロー。ゲージ1払うことで我はこのターンサイズ2以下のモンスターをコールすることができる。我は導魔 ダイングスをコール。効果でドロップゾーンのカード2枚をゲージに送る。更に、氷獄王 コキュートス・グリードをコール。効果で相手のゲージを1枚奪う。」

ライフ11 ゲージ3 手札5

導魔 ダイングス攻撃3000 防御1000 打撃1

氷獄王 コキュートスグリード

攻撃4000 防御4000 打撃2

ヒャクガンヤミゲドウの両隣に2体のモンスターが現れた。しかも氷った悪魔がこつちのゲージを奪った。

コキユートスグリッド「俺の物は俺の物、お前の物も俺の物だ。そして、奪えない物は破壊する。俺のの効果ゲージ3払い相手の場のカードを1枚破壊する。」

レイ「しまった。」

カナ「これは…不味いわね。」

アタックフェイズ

イカツチ「そのまま全員で攻撃。」

カナ「くつ。」

ライフ8↓6↓4↓2↓1

イカツチ「ターンエンド。」

レイ「カナ大丈夫？」

カナ「…ええ…大丈夫、よ。」

不味いわ、次の攻撃を受けたら流石に気絶しそう。

レイ「このままだと不味いわ。このままじゃ、私の力でこのフィールドを破壊するからあなたは逃げて。」

カナ「…!!そんな事出来ないわよ。そんな事したらレイが壊れちゃうじゃないの。」

必死に説得する。

カナ「…諦めないでよ、はあはあ何か方法があるはずよ。私は絶対に諦めない!」

惚れたぜその魂

カナ「え!」

手札の1枚が光だした。そのカードの名はブレイブ・ドラゴン・T

HE・オリジン

ブレイブドラゴン「我の力を貸そうその力であのデカ物をたおそうじゃねえか。」

カナ「…全く私のターン、ドロージャージアンドドロ。キャスト、明鏡止水ゲージ3追加して、行くわよゲージ3を払い、ブレイブドラゴン・THE・オリジンをセンターにコール。」

ブレイブドラゴン・THE・オリジン

ヒーローワールド／カタナワールド

サイズ3 攻撃10000 防御7000 打撃3

「コールコスト」ゲージ3を払い、ドロップゾーンの「ブレイブ」を3枚をこのカードのソウルに入れる。

■このカードが攻撃した時、相手の場のカードを1枚破壊する。

3回攻撃 貫通

ブレイブ（ゲージ2を払う。）

以前出てきたブレイブドラゴンより二回りほど大きくなった初代ブレイブモンスターの登場だ。

カナ「…登場時ドロップゾーンの3体のブレイブをソウルに入れる。」

アタックフェイズ

カナ「…ブレイブドラゴンでヤミゲドウを攻撃。そして攻撃した時相手の場のカードを1枚破壊。」

イカツチ「我の効果発動我は滅びない。我は不滅だ。」

デッキ残り71↓66↓61

カナ「…確かに、あんたのヒャクガンヤミゲドウは倒せないかもしれない。だけど、あんたは倒すことはできる。ブレイブドラゴンには貫通を持っている。」

イカツチ「何だと!？」

ライフ10↓7

カナ「…2回攻撃。」

イカツチ「くっそ。」

デッキ残り61↓56↓51

ライフ7↓4

カナ「…3回攻撃。」

イカツチ「だが、ライフは残る。」

デツキ残り51↓46↓41

ライフ4↓1

カナ「まあね。私はこれでターンエンド。」

後はあいつがやらい通りに動いて来るのを待つだけよ。

イカツチ「私のターンドロージャーリアンドドロ。ゲージ1払い、能力発動。」

来た。それを待っていたのよ

イカツチ「我はレッドドラゴン・イグニールをレフトにコール。」

カナ「それを待っていた。キャスト、忍法 電光の舞イグニールを破壊して相手に1ダメージ。」

イカツチ「何!?バカな。」

ライフ0

レイ「ある意味百鬼夜行の得意戦術”爆雷”を使った勝利ね。」

カナ「…ええ。そうね。」

正直賭けだった。あいつが何かモンスターを出さないバーン戦術を使っていたら負けていたわ。

カナ「…はあはあまさしく計画通りね。」

レイ「そんなボロボロで何言ってるんだか。」

レイとそんな会話をしていると体が光だし、何処かへ向かって行った。回りを見ると色んな場所から光が出て、一ヶ所に向かっている。

カナ「…そう後は任せたわよ。」

新たな仲間 その名は覇龍剣

剣「お前が覇龍剣か！」

覇龍剣「ああ、久しぶりだな。絆の霸王龍よ。」

ドラゴ「何故剣が覇龍剣のこと知っているんだ？それにお前、前の戦いから姿を見せなかったからってつきり死んだと思っていたぞ。」

覇龍剣「まあその辺の話は後にしてだ、まあさっさとこいつを倒して話を始めようか。」

ダークネス「そんなにうまくいくと思うか。私には最高傑作のモンスターがいるのだからな。」

お互いに戦闘体制をとり、距離を取っていると、

???「その前に聞きたいことがあるわ。」

いきなりコアデツキケースから声が聞こえた。

剣「あのーカスミさん、何で俺のコアデツキケースからあなたの声が聞こえるんですか？」

カスミ「それはハッキングして……まあそれはおいといて、聞いたのはダークネスあんたよ。」

おい、今話すらそうとしたろ。

それとハッキングって言わなかったか？

ダークネス「何かな？」

カスミ「あなたこれだけのことを起こすのに必要なエネルギーはあのガイアスカルから取ったエネルギーとそれ以外にもガイアスカルの証言から考えると1ヶ月前には確保できたはずよ。なんでここまです時間をかける必要があったの？」

ダークネス「それは……だな……そう、別のことに使っていたのだよ。」

1ヶ月前

???「準備はいいな。ダークネスよ。」

謎の空間にいた謎の人物とダークネスの会話をしているようだ。

ダークネス「はい、準備は整いましたこれより町への襲撃するための準備を始めます。ではまずは、」

???「簡単なのにしろよ。」

そうやってダークネスが闇を放出してモンスターを形成を始めた。だが思っていたよりでかくなつていく。

???「おい、なんかでかくないか。」

ダークネス「いえいえこれくらいはあ！」

そうして更に闇の力を注いだ結果黒い 究極にいたるCギアゴツ
tverl0000が現れたのだが、

???「おお?なんかヘンだぞ。」

ダークネス「え?」

しばらくすると、その空間を維持している機械にあたり、ギアゴツトが不安定になり消滅した。

???「おい、ダークネスだから言ったのだ最初は簡単なものからしろと。どうするのだ、あれだけの闇の量をもう一度集めてこい！」

ダークネス「はっ、申し訳ございませんでした。」

そうやってその空間からでていった。

剣「(なんだ?いきなり険しい顔をして)」

いきなり険しい顔をしたがすぐに元に戻った。

ダークネス「まあそれはおいといて速くあなた達を始末するつもりでしょう。やれ、終焉竜 カオス・ダークネス・ドラゴンよ奴らを喰らい尽くせ。」

覇龍剣「絆の霸王龍よ、もう一度我の力をお前に託す。その力でやつを倒せ。」

ドラゴ「おう、はあー！」

覇龍剣からエネルギーを受け取ったドラゴが力をこめた。

更に、光を放ったがすぐにカードとなった。

ドラゴ「我をデツキにいれよ。そうすれば我らの本来の力を使用可能になるぞ。ただし進化したばかりでしばらくは実体化できないがファイトでは使えるから問題ない。」

剣「そうか。ならお前のカファイトで使わせて貰うぜ。」

ダークネス「進化したところで私には勝てないということを証明してやろう。」

剣「とにかく、フィールド展開。」

ダークネス「だが断る。」

剣「何!?!」

ダークネス「ふっ誰がファイトで勝負すると言った貴様らなどリアルファイトで十分だ。」

ドラゴ「お前、それでもバディファイターか!」

ダークネス「ふっリアルリストだ。」

剣「それ違うアニメのやつだろ。」

ダークネス「そうだなだが、メタ発言は止めて貰おうか、それではそろそろ終わりだ、始末しろ。」

カオス・ダークネスが動き出した。そして、ブレスを打とうとしたとき、

覇龍剣「剣と言ったな俺を持て。そうすれば我の力を託すことができる。」

いきなり覇龍剣が剣の元へ飛んでいった。

剣「え!うおっと。まあ分かった。覇龍剣の力、いや霸王軍の創始者の力借りるぞ。」

覇龍剣を持った瞬間黒い何かが全身を包んだ。

覇龍剣「意識をしつかりと持て。さもないと俺の力に喰われるぞ!」

なんだよそれ！聞いてないぞ。

そう思いつつ体に乗っ取られないよう集中してわいるが少しでも油断したらそのまま喰われそうだ。

このままじゃ不味い。

そう思った時ふとあるイメージが浮かんできた。

ドラゴとあつてから今日までの日々

オーバーロードとバディとなった創一との初めてのファイト

ブレイブモンスターとあつたあの研究所での衝撃

浜
ガイアスカルとドラグーンそれにボータックスとであつたあの砂

そして、

あの4人と過ごした楽しかった日々

全てが経験全てが俺を作ってくれた。
ここまで頑張らせてくれた。

あいつらが頑張っているんだ。
俺は、こんなことで、こんなことで、

剣「倒れる訳にはいかない！」

覇龍剣を使い、モンスターのブレスを切った。

ダークネス「何!?それにその姿は。」

ダークネスが驚くのも無理はない。背中に黒い翼があり、両腕は赤と黒が混じった狂暴そうな腕、先ほどまでと違い体の所々が黒い。まるで人が龍になったような姿をしていた。

覇龍剣「やはりな我の見立ては間違っていないかった。あの男は絆の霸王龍いや、ドラゴ、お前と出会い、様々なことを経験して今までよりも人との繋がりが強くなった。そうでなければ我を使うことはできないししんでいた。」

剣「なんだよそれ失敗したら俺死んだんじゃねえか！」

衝撃発言に思わずツツコム剣。

ドラゴ「相変わらずむちやくちやだなあんた。」

覇龍剣「そうでなければこの剣だけの存在が生きては行けないぜ。」

ドラゴ「それもそうだな。共に行こう。やつを止める為に。」

覇龍剣「背中を任せろ。」

剣「いやお前進化したばかりで実体化出来ないんだろうが。」

ドラゴ「あ。忘れてた。」

ダークネス「何をごちゃごちゃ喋っている行け。破る奴を踏み潰せ。」

黒いモンスターはその巨体で俺を踏み潰そうとしてきた。俺は、そっこうで避けた。

その一瞬でそのモンスターと4、5メートル離れた。

凄いな身体能力が凄く上がっている。

これが覇龍剣と一体化したからできる芸当か、これなら行ける。

こんどはその巨体に近づき覇龍剣で切った。

切った所からとんでもない量の闇のエネルギーが出てきた。ただだけ圧縮して入ってたんだよ。

それから何度も相手の攻撃を避けつつ相手を切りつけたていった。その姿を見てだんだんダークネスの顔に余裕がなくなっていった。

ダークネス「何故だ、何故こんなガキどもに私の計画をじゃまされなければいけないのだ。」

なんか前あったときとだいぶ違うな前はもったかなり余裕があったのに。

ダークネス「そうだな、まあいいならば君達の予定通りファイトで決着をつけるとしようかな。」

剣「霸王の力を今ここに、ルミナイズ、霸王の絆。」

ダークネス「あらゆる闇の力今集まり世界を震撼させよ。ダークルミナイズ　ダークネス　キメラテック。」

二人「オープン・THE・フラッグ」

剣「霸王　降臨」

ライフ9　手札7　ゲージ2

ダークネス「ドラゴン・アイン」

ライフ12　手札4　ゲージ2

絆の霸王龍の力

ダークネス「私のターンドロージャーリアンドドローフフキヤスト、竜王伝、天竜開闢、更に竜騎士 ピサロをレフトにコール。効果でレストすることでワンドロー。」

ライフ12↓13↓11 ゲージ2↓3↓4 手札5↓6

いきなりドラゴンアインで使える汎用ドローカードで手札を増やした。

ダークネス「魔竜の落とし子 アビスゲイトをレフトにコール。効果で手札を1枚捨てることでゲージ1増やしデツキから罪過の標 アジ・ダハーカ・SYSを手札に加える。そしてドラゴンスロー・竜の玉座を設置してゲージ3払い、場のピサロをドロップゾーンに送ることで罪過の標 アジ・ダハーカ SYSをセンターにコール。」

罪過の標 アジ・ダハーカ SYS

サイズ4

攻撃10000 防御10000 打撃2

小さな竜が現れたかとおもうとそれを踏み潰して現れたダークネスの闇を纏ったアジ・ダハーカ：なかなか光景だ。

アタックフェイズ

ダークネス「アジ・ダハーカでファイターを攻撃、ダークネスブレス。」

剣「……」

ライフ9↓7

ダークネス「ターンエンド。」

手札3枚 ゲージ2 ライフ11

剣「俺のターンドロージャーリアンドドロー、俺は覇竜システムミックダガードラゴンセンターにコール。更に、覇竜騎士エクシード・ドラグーンをレフトにコール。システムミックの効果でワンドロー。」

覇竜システムミックダガー

攻撃2000 防御2000 打撃2

覇竜騎士 エクシード・ドラグーン

攻撃10000 防御3000 打撃2

ドラグーン「この間のお返しとガイアスカルに行ったことを倍返し
で返してやるよ。」

いつものように覇王軍を展開していく。

ドラグーンはこのガイアスカルのこともありやる気いっぱいだ。

アタックフェイズ

剣「ドラグーンでアジ・ダハーカでセンターを攻撃。」

ダークネス「そんなこと想定範囲ないだ。アジ・ダハーカ効果で
ライフ1払い、デッキから2枚のアクワルダ・グワルナフを装備。」

ライフ11↓10

終焉魔剣 アクワルダ・グワルナフ

攻撃12000 打撃6

創世神剣 アクワルダ・グワルナフ

攻撃10000 打撃3

アジ・ダハーカの倒れたところから二つの塊がダークネスの元に近
づき2本の剣となった。

ドラグーン「だが俺の効果でお前に1ダメージ与えて俺自身をスタ
ンド。」

ダークネス「そのくらいくれてあげますよ我が勝利の為にね。」

ライフ10↓9

剣「ドラグーンとシステミックダガーで連携攻撃。」

ダークネス「ならばアクワルダ・グワルナフの効果で手札を1枚捨
てて攻撃を無効にする。」

剣「やはりか…ターンエンド。」

ライフ7 ゲージ1 手札7

ダークネス「私のターンドロージャーアンドロー私のデッキに
とって先程のモンスターなどまだまだ序章に過ぎないんだよ私は更
に、C, アルベリオンをレフトにコールして更に、竜騎士カリオスト
ロをライトにコールして効果でワンドロー、更にゲージ3払い、私の
場のカード2枚をドロップゾーンに送ることでコールできる。私は

C、アルベリオンと竜騎士 カリオストロをドロップゾーンに送ること
とで終焉竜 カオスダークネスドラゴンをレフトにバディコール。
アルベリオンの効果でデッキを2枚ドロップゾーンに送ること
でワンドロー。」

ライフ9↓10

終焉竜 カオスダークネスドラゴン

ダークネスドラゴンワールド

サイズ3

属性 カオス ドラゴン 百鬼 次元竜

攻撃12000 防御12000 打撃3

「コールドコスト」ゲージ3払い、君の場のカード2枚をドロップゾーンに送る。

■このカードが登場した時、ドロップゾーンから4枚をソウルに入れる。

■このカードが攻撃した時、ドロップゾーンの(百鬼)(ドラゴン)(カオス)(次元竜) 1枚ずつデッキに戻すことで相手の場のカードと手札を1枚ずつドロップゾーンに送り相手のデッキを5枚ドロップゾーンに送る。

「ソウルガード」「2回攻撃」

今まで後ろにいた黒く様々な所にラスボス達のパーツがくっついていた。

剣「出たな。奴のバディモンスター!」

ダークネス「いやはやバディ?そんなものではない。様々な世界を破壊し支配しようとしたアジ・ダハーカ、世界の全てを喰らおうとしたヤミゲドウ、世界から孤立させられ世界に復讐をしようとしたヴァニティ・終・デストロイヤーそして、世界は違えど全てを焼き付くそうとした《ドラゴニック・オーバーロード》The Rebirth」
「《そういつた世界を破壊しようとしたもしくは世界に影響を与

えようとしたモンスターを使い、世界を変える。」

剣「お前は一体何をするつもりなんだ？」

ダークネス「そんなことはこれから消えるお前には関係のないことだ。」

アタックフェイズ

ダークネス「行けカオスダークネスドラゴン攻撃する。その時に能力を発動するドロップゾーンの『百鬼』『ドラゴン』『カオス』『次元竜』の力を使い、お前のドラグーン、そしてお前の手札とデッキを破壊する。」

ダークネスドラゴンの前に黒い塊のようなアジ・ダハーカ、C、アルベリオン、竜騎士ピサロ、次元竜 が現れ、ダークネスドラゴンがそれを飲み込みしばらくするととんでもないりょうのブレスを吐き出した。

アジ・ダハーカ以外はデッキの都合で入れられなかったのは何となくわかったのであえて突っ込まないようにした。

ドラグーン「剣、あとは任せたぞ必ず奴を倒せ！」

剣「ドラグーン！くっ」

手札7↓6 デッキ5 ライフ7↓4

ダークネス「2回攻撃。」

剣「またか。」

ライフ4↓1

ダークネス「あとは、これだけだ。」

その手には2本のアクワルダがあった。

あの2本はさすがに不味いな。

ダークネス「これで終わりだ。2本の攻撃を食らえ。」

剣「キャスト、覇竜の盾更に、センターにマツハブレイダーをコー。システムックダガーの効果でワンドロー。」

ゲージ1↓3↓2 手札7↓6↓7

ダークネス「何!? ターンエンドだ。」

ライフ9 手札2 ゲージ2

剣「こつからだ。俺のターン反撃だぜドローチャージアンドドロー!! これは?」

ドラゴ「我を引いたか、新たな私の力特と堪能せよ。」

剣「そうかお前の力借りるぞ。ゲージ2を払い、絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザーをレフトにコール。」

絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー

レジェンドワールド

サイズ2

攻撃10000 防御5000 打撃2

霸王軍／霸王龍

コールコスト「ゲージ2払う。」

■このカードは相手の効果で破壊されない。

■このカードが登場した時、デッキかドロップゾーンの霸王龍のアイテム1枚を選びそのカードを装備する。

■”絶ちきれぬ絆”このカードが攻撃した終了時、デッキトップをめくりそのカードが霸王軍のモンスターならそのカードをドロップゾーンに送り、ドロップゾーンのモンスター1枚を選びそのカードをコールコストを払い、コールできる。コールされたモンスターのサイズは0になる。それ以外のカードだった場合デッキの1番下に置く。

カードを上にかざした時、赤と黒の鎧を来た片手に剣、片手に大盾をもったまるで騎士団長のようなドラゴが現れた。

ドラゴ「我らの前に立つ者よ、我らとの勝負受けてもらうぞ。」

剣「そして、ドロップゾーンの霸王龍のアイテムを1枚装備できる。俺はドロップゾーンの「覇龍剣」を装備する。」

覇龍剣

レジェンドワールド

アイテム

属性 霸王軍／霸王龍

攻撃10000 打撃2

■このカードは他のカードの効果でしか装備出来ない。

■このカードが攻撃した時、ドロップゾーンのワールドの種類が3種類以上なら場のカードの打撃力を+1更に、5種類以上なら場の全てのカードの攻撃力+5000更に7種類以上なら相手の場のカードを1枚破壊する。

「2回攻撃」

先程と同じく姿が変わるかと思ったが予想に反しそのままの姿になった。

ダークネス「またその剣か！おのれー私の力でお前達を倒してやろう。」

剣「やれるもんならやってみやがれ」

アタックフェイズ

剣「ドラゴ頼むシステムックダガーとファイターに連携攻撃だ。」

ドラゴ「任せろ、今までのやり返しさせてもらおうぞ。」

ダークネス「ふっ貴様の能力は知っているぞ1回しかチャンスがないうえに貴様のデッキはほとんどがサイズ1たかが1体増えた所で私は負けない。アクワルダの効果手札を1枚捨てることで無効だ。」

剣「バトル終了時ドラゴの能力発動、デッキトップをめくりそのカードが霸王軍ならそのままドロップゾーンへ送りその後、ドロップゾーンの霸王軍をスペリオルコールできる。」

ダークネス「なんだとドロップゾーンからだ?!」

剣「デッキトップは：よし、覇竜 サウザント・レイピア 霸王軍のモンスターだ、よってドロップゾーンのサウザント・レイピアをレフトにスペリオルコール。効果でゲージ2追加。絆は絶ちきらせないこれが絆の霸王龍の力だ。」

覇竜 サウザントレイピア

攻撃5000 防御0 打撃2

レイピア「我らの王の降臨である、道を開けよ。」

ダークネス「なんだと！そんなのありか！」

剣「行くぞサウザントレイピア、俺とお前で連携攻撃だ。覇龍剣の効果発動。サウザント・レイピアの打撃力＋1だ。」

レイピア「任せろ。」

ダークネス「くっ手札を1枚捨てることで攻撃を無効にする。まだまだ負ける訳にはいかないぞ。」

剣「くっターンエンドだ。」

ライフ1 ゲージ1 手札

なかなか勝負を決めきれない剣、このままだとまずいかもしれない。

ダークネス「私をここまで追い詰めたことは称賛にあたいますだがここまでです。ドロージャージアンドドロー」

アタックフェイズ

ダークネス「私で終わらせてあげますよ。さようなら霸王軍。」

ダークネスは持っていた剣をこちらに刷りかざした。

剣「まだ諦めないキャスト、霸王の奇跡。」

霸王の奇跡

レジェンドワールド

魔法

霸王軍

「使用コスト」手札を全て捨てる。

■君の場に（霸王龍）がいるなら使うことができる。

■君の場の霸王龍意外のカードをドロップゾーンに送り、このターン君はダメージを受けず、君の場の霸王龍は場を離れない。霸王の奇跡はファイト中に一度しか使用出来ない。

剣とダークネスの間に霸王軍のモンスター達が現れその攻撃を防いだ。

レイピア「後は任せた。」

ダークネス「おのれおのれおのれターンエンド。」

ライフ9 手札1枚 ゲージ1

剣「俺のターンドロージャーリアンドロー!!これは?」

霸王龍「どうやら引いたようだな新たなワールドのカードを。」

剣「これは一体?」

霸王龍「俺たち霸王軍の力はモンスターに新たな力を与えるだけじゃない。時空を越えて様々な世界のモンスターと共に戦えるんだそのカードはその力で手に入れたお前の新たな力だ。」

それって大丈夫なのか?

ドラゴ「我々はそれも有り今までの戦いに勝ってきたのだ遠慮などいらない構わず使え。」

まあドラゴがいうならいいか。

剣「行くぞ俺はボイジャーワールドのモンスターをコールする。」

ダークネス「ボイジャーワールドだど!」

《星詠みの宝花 ステラ》（雪咲さん提供）

モンスター

サイズ1／攻撃力6000／打撃力1／防御力1000

クラン：ボイジャーW 属性：スターゲイザー／マクロコスモス／

霸王軍

【起動】君のデッキの1番上を見る。そのカードを君のデッキの1番上に戻す。

【起動】ゲージを払い、君のデッキの上から1枚を捨てる。捨てたら、その中の「スターゲイザー」か「霸王軍」のモンスター1枚までを「コールコスト」を払ってコールする。この能力は1ターンに1回だけ使える。

『エクス様は、まるでお星さまのような御方で

剣「このモンスターは自分のメインフェイズであればデッキトップを好きなだけ見ることが出来る。」

ダークネス「何！それではほぼ確実にデッキトップが霸王軍のモンスターということか。」

剣「その通り。」

アタックフェイズ

剣「ドラゴ更にステラの連携攻撃。」

ダークネス「くっ手札を1枚捨てることで無効だ。」

剣「デッキトップをドロップゾーンに送り、送られたのは霸王軍のモンスターよって効果でもう一度戻ってこい。ドラグリーン」

ドラグリーン「任せろ」

ステラが消えて、いた場所にドラグリーンがあらわれる。遂にならびたった2体のドラゴンその方向には憎き敵がいた。

剣「更に、キャスト、覇龍の目覚め 効果でドラゴをスタンド、立ち上げれドラゴ。」

ドラゴ「おお力がみなぎるぞ！」

剣「ドラグリーン俺と連携攻撃だ。カオスダークネスに連携攻撃。効果でドラグーンの打撃力＋1」

ドラグリーン「了解。」

ダークネス「ソウルガード。」

カオスダークネス残りソウル3枚

ドラグーン「俺の効果発動。スタンドして1ダメージ与える。」

ダークネス「くっ」

ライフ9↓8

剣「これでラストだ全員で連携攻撃。覇龍剣効果でドラゴの打撃力+1よって打撃力の合計は8だ。俺達の怒りを受け取れダークネス！」

ダークネス「まさか私がこんなところで、こんなところでー!!」

ライフ8↓0

「これが新たな霸王軍の力だ。」

今明かされる衝撃の真実！

剣「俺達の勝ちだ。この騒動を起こした目的を言え！」

ダークネスを倒し、状況が有利になったことで今回の黒幕であるダークネスに目的を聞いた。

ダークネス「ふっ私はまだ真の意味で負けてはいないのだよ私には最後の切り札がある。」

ダークネスの手には4枚のカードが握られていた。

そのモンスターはヤミゲドウ、アジ・ダハーカ、デストロイヤー、ギアゴットの能力がなく絵柄だけのカードが握られていた。

そしてもう一回カオスダークネスドラゴンを実体化した。

ダークネス「ファイト中ではあんまりの威力だったからな、今ここで私の最高傑作のモンスターの最大威力の攻撃をみせようじゃないか。」

ダークネスの4枚のカードの力をカオスダークネスドラゴンの光線を打とうとしている。

覇龍剣「剣、俺がいればこの世界でも霸王軍のモンスターは本来の力を使うことができるぞ。」

剣「本当か、なら覇龍剣もう一度頼む。」

覇龍剣「おうよ。」

覇龍剣を手にとると剣の体が再び覇龍剣の力をまといファイト前の姿になった。

剣「ドラゴさすがにもう実態化出来るよな。」

ドラゴ「当たり前だ。」

そういうと絆の霸王龍の姿になった。

カスミ「何をするつもり？」

またコアデッキケースから声が聞こえるが関係ない。

覇龍剣「霸王軍全てのエネルギーを使って奴の攻撃に迎え撃つぞ。」

剣「おう。」

デッキケースからでたエネルギーと共に攻撃を仕掛けた。

そして、ブレスとぶつかったが徐々に押されてきている。

剣「くっさすがはラスボス4体分のエネルギーだ。とてつもないエネルギーだな。」

流星にこれは不味いな。

ドラゴ「絆の霸王龍の底力みせてやろう。はっ！」

また町のあちこちから光が輝いた。

しまし、違うところがある。

それはかなりの量の光が現れた。

不良「ん？なんだこれは。」

サイクロプス「これは、我らに力をくれたものが力を欲している。」

不良「!!あいつか、ならば、お礼をしないと受け取りやがれ。」

光「なんだこれ？」

弾「まあなんとなく予想がつく。奴が、この体が光る原因なのだろうな。」

豪太「そういうことなら力を貸さないと。」

そうして、様々な場所の光がこちらに向かってきた。それを全てドラゴに力を与えた。

ドラゴ「剣、これが我と出会い、その間に出会い、戦い、絆を繋いだもの達の力だ！」

剣「すっげえ。スゴすぎるぜドラゴ全身からとてつもない力を感じるこれなら、負ける気がしないぜ。」

絆の力によってを増したエネルギーの塊が大きな力になってブレスを押しきり、カオス・ダークネス・ドラゴンの体に当たり消滅して

いく。

ダークネス「バカな、私の最高傑作がこんなところで、こんなところでー！」

そんなことが聞こえながらカオスダークネスドラゴンが大爆発した。

カスミ「みんな、怪我はない？」

あれから約1時間後

ダークネスの消滅と共に黒いモンスター達が消えていった。

その後警察は町の被害の調査を行う為に忙しそうにしているところで取り敢えず、全員の安否を確認するために一回集まった。一応みんな大丈夫そうだ。

和人「剣、お前大丈夫か？ダークネスと戦ったんだろ？」

剣「まあな、まあ覇龍剣のおかげで奴を退けることができたよ。」

周り「「覇龍剣!？」」

剣は覇龍剣のカードを実体化してみんなに見せる。

覇龍剣「初めまして。私は霸王軍の創始者？いや、創始者剣？まあいいか。とにかくよろしく。」

めちやくちやな自己紹介を始めた。口調は軽いのだが見た目は剣なので何か変だ。

周り「よ、よろしくお願いします。」

周りも付いていけてない。

創一「それでダークネスはどうなったんだ？」

剣「多分俺達の力で何とか倒せたと思う。けど、」

創一「けど？」

剣「もしかしたらあいつはまだ生きているかも知れない。」

周り「!!」

あの時確かに見えた。奴はゲートを開いて何処かに逃げた。

ドラゴン「それはまずいんじゃないか。」

カードバーン「この件はバディポリスに連絡しておこう。何か痕跡があるかも知れない。」

ドラゴ「頼む。」

ダリルベルク「我今日何回もファイトしたのに出番が無かった。」

レイ「大丈夫よ。いつものことだから。」

ダリルベルク「一体何が大丈夫なのだ！」

モンスター達がそれぞれの意見を言っていた。

カスミ「まあ、それはそうとして、カナ、ブレイブ・ドラゴンの調子はどう？」

カスミさんが話題を変えた。

カナ「大丈夫でしたよ。ファイトでも活躍してくれましたし。」

カスミ「え！あなたヒーローワールド使ったの？」

カナ「いえ、カタナワールドですけど。」

カスミ「あのカード私見たとき、ヒーローワールドだけだったわよ。」

カナ「え！それってどういうことなんですか？」

カスミ「分からないわ。」

一体どういうことなのだろうか。

ダークネス「くつまさかあのような力を持つていようとはな。」

ダークネスはあの爆発から何とか逃げ延びても主の元へ戻っていた。

???「せつかくのエネルギーが失くなってしまったな。」

ダークネス「それも、そうですがそれだけではありません我々が所持していたアニメの歴代のラスボス達のモンスターのエネルギーのかけらも消えていったしまいました。申し訳ございません。」

ん？今何かメタ発言が、あつた気が。

???「大丈夫だ。誰でも過ちや失敗はある。問題はその失敗をどう取り返すかだ。我々の場合はあいつがこの世界に来る前に準備を整えておかなければならないのだがな。」

ダークネス「はっ。では今回じゃまをしたあの者達も警戒する必要があるのでしょうか。」

???「いいや、問題はない。奴らはとてつもない可能性の塊だ。我々の問題は我々で解決したいがどうしようもなくなった場合には、奴らの力を借りることも考えなければならぬかもしれないな。」

創一「……」

カナ「どうしたの？創一！何そのカード、見たこと無いんだけど？」

創一「ああこのカードはちよつとな。」

数時間前

ファイトが終わって、剣達の元へ行こうとしたらオーバーロードが消えた場所に突然ゲートが現れた。

創一「何！」

その中からデカイ鎌をもったドラゴンが現れた。

オーバーロード「!?お前は、」

???「我は何故ここに、うっ。」

具合を悪そうにするといきなりカードになった。

創一はそのままそのカードを手に取るがなにも起こらない。

オーバーロード「気をつけろそのモンスターは油断の出来ないモンスターだ。」

創一「分かった。気を付けよう。」

ドラゴ「あー剣さん言いたいことがあるんですが。」

全員の安否が確認され、大会については後日改めてファイトする場所を設けるかもしくは両方とも全国大会に出場させるかは運営が考えることなので解散となったのだがドラゴと覇龍剣が何か気まずい雰囲気です話をしてきた。

剣「なんだよドラゴまだ何か隠してたのか。」

ドラゴ「いや、そうではなくてだな、……ええとそのなんだあのーダークネスとの最後の決戦の時にだな、ええと我の力でつながりの強い者の力を活性化させてその力の一部をこちらに来てもらって、あの攻撃を放ったのだがその時に、その、ええつとあれだな。」

こんなドラゴ初めて見たな、それにしても話がさつきから進まないんだけど。

剣「結局何があつたんだよ。前置きはいいいから結論から言ってくれよ。」

ドラゴ「分かった。要約するとだな。剣、まず霸王軍のカードが1週間ほど使えなくなった。」

剣「えー！」

ドラゴ「それと剣が持っていた迅雷騎士団のカードも使えなくなつた。」

剣「えー!?なんでそんなことに。」

ドラゴ「それはあの時エネルギー源として剣の迅雷騎士団のデッキとリンクしたら思ってた以上にエネルギーが出てな。そうしたら、なんか迅雷騎士団のモンスターが白紙のカードになっていて、その、すいませんでした!!」

大変なことになった。俺今、使えるデッキが失くなってしまった。

つかの間の日常 華子さん、ハロウィンでの恐怖

あの激闘から2、3週間がたった。

霸王軍のカードはなんとかファイトで使えるようになったが未だに迅雷騎士団のカードが白紙のままファイトに使えるようにならない。

そんな中俺達は……

剣「覇龍剣！」

剣が覇龍剣を持ち、名前を叫ぶと前のダークネスとの戦いでみせた龍のような、人のような姿になった。

カナ「これが霸王軍の根源の力なの？」

レイ「何怖じ気ついてんの上行くわよカナ。」

カナ「ええ。変身！」

いつものような姿になった。

遙か「私もブラスター・ダークに変身。」

闇の霧がまとった闇の騎士となった。

和人「……」

創一「……」

前回の戦いでダークネスがリアルファイトを挑んできたことをきっかけとしてこちらもありアルファイトを出来るようにしておこうということまで今に至る。

二人「今に至るじゃねえだろ（無い）。」

和人「女性陣と剣の特訓じゃねえか。俺達いる意味ないじゃねえか。」

創一「お前のデツキ未来竜だからそのうちフューチャーフォースとかなできるんじゃないの？その時のために見ておけば？」

和人「無理だな、それならお前もヴァンガードはそもそも自分が

ヴァンガードとなって戦うゲームなんだからなんかあるだろ。」

創一「残念な話そんなものは無い。」

最近真面目な話が多かったからかメタ発言が多い。

剣「覇龍剣、覇龍切り」

覇龍剣のエネルギーを出して二人を同時に攻撃した。

カナナレイ「くっ。」

遙か「…まだまだ」

和人「剣のやつ結構まじになってんな。」

創一「そりゃああんなことがあったからな。」

あの戦いの時、俺達すら知らなかった秘密兵器でダークネスに不意打ちで何とか倒せたようなものだからな。奴がまた動きだすのは恐らくこの間とは比べ物にならないくらいにの化け物と策をぶちこんでくると思う。その時の為にはもっと力をつけておかないとな。

そんなことを考えていたら状況が変化したようだ。

カナナレイ「まだまだ、行くわよ。ブレイブ・タイガーをブレイブ。」
ゲートからブレイブ・タイガーを呼び出してカナナレイとブレイブした。

遙か「私も…竜化、フアントム・ブラスター・ドラゴン。」

遙かもさつきより濃い闇の霧を出して巨大なドラゴンとなった。

二人の強化形態になった。

和人「なあカナナにいたってはブレイブすれば何でも強化形態になるんじゃないか。」

創一「説明文に文句をいうな。」

そうだそうだ文句をいうな。

和人「なんで説明文が便乗するな。」

剣「今回はめちやくちやメタ発言が多いな。うおっと。」

カナナレイ「油断しないでよね。」

遙か「こつちもあるよ。食らえ」

2対1で戦っているのだが、なかなかかなり劣勢にたたきられていった。

剣「こつからだぜ。行くぜ。」

???「なにやっておるのだおぬしら?」

全員「え?」

そこにいたのはトイレの華子さんだった。

ドラゴ「きていたのか。」

華子さん「ああ、おぬしも力を取り戻したのだな。」

ドラゴ「まあな。覇龍剣も生きていたし。」

華子さん「何?それは本当か。」

ドラゴ「まあな。おい剣、変身を解除してくれ。」

剣「?ああそつか分かった。」

そういうと変身を解除してドラゴ達の元へ向かった。

覇龍剣「おお。トイレの華子さんではないか。どうしてここに?」

華子さん「それはの今日はハロウィンだから。せっかくだからこつちの世界に来て人間どもを驚かそうと思つてのということだ。」

何か少し違う気がするがまあいいか。

剣「それじゃあ近くにハロウィンイベントやっている会場があるからそこ行こうか。」

その後、すぐ近くのハロウィンの会場にいった。

ちなみに俺達の格好はいつも通りだ。

全員いつも通りの服装だ。流石にブラスター・ダークとかサイバー忍者レイとかに変身しても場違いな気がするし俺も覇龍剣と一体化するのはかなり疲れるしな。

しかし目立つ人?というかモンスターが一人いた。

「あれ仮装か?凄いや完成度だな。」

「あれ本人じゃね。」

「サインもらおうかな。」

「やめろ（無言の腹パン）」

「（腹パンすることでもないきがするけど無視しとこ）」

会場をあちこちしてるとまあ物珍しい目でこっちを見てくる奴の多いこと多いこと。

何人か変なのがいたがすぐに警備員に連れていかれた。

剣「何も見なかったZ」

和人「いきなりどうしたんだ。」

剣「いやなんでもない。」

創一「おい、あれどうするんだ？」

創一が指をさしたほうを見るとトイレモンスター達が大量の人達と一緒にいた。

子ども「何かやってやって。」

一反木綿 ペーパー「いいよ。ベロベロバァー！」

子ども「ワァー！ママー！」

親「…すいません。」

一反木綿 ペーパー「いえいえこちらもすいませんでした。」

女性「きゃー半分人体模型の変態がいるわー！誰か警察読んでー！」

男性「子供達はこっちに来い。」

ミギー・ナイスガイ「あつまって警察は止めて私モンスターなんです。あつそこの人110番しようとするの止めて。」
なんだろう悲しいな。

華子さん「あいつらも楽しんでるようじゃな。」

剣「何処がだ？」

華子さん「それでいつ肝試しをやるのじゃ？」

あ、説明するの忘れてた。どうしよう凄い楽しみにしている顔している。

周りも少しどうしたらいいか考えていたら、

ドツカーン

周り「!!」

和人「なんだ？一体。」

剣「まさかもうダークネスの奴動き始めたのか。」

創一「そんな分けないだろ。この間の騒動があったばっかだぞ。」

爆発があったほうを見るとゲートがあった。つまり外の世界からモンスターが来たのか。

剣達は急いでゲートがあった場所に向かった場所

そこにいたのはデンジャーワールドっぽいモンスターアーマナイト・デーモンがいた。

しかし、何かようすが変だ。

そのモンスター黒い何かがまとわりついてた。

アーマナイト・デーモン「お前は強いのか？」

華子さん「!!なんじゃあれは？」

創一「あのモンスターの周りについてるはまさか。オオーバーロード！」

オーバーロード「!!まさかあれは、行くぞ創一。」

創一「おうよ。フィールド強制展開。」

剣「おい、待て。」

創一はそのまま謎のモンスターとフィールドに入ってしまった。

創一「よっと。さあてファイトを始めようか。」

アーマナイト・デーモン「うわー俺は俺は、……俺とファイトしろ。」

創一「いきなり雰囲気が変わった？まあいいファイトだ。」

オーバーロード「気をつけるあいつからはこの間のあいつの力を感じる。」

創一「分かっている。怒りの炎でこの世の全てを焼き尽くせ！ルミナイズ、リミッター・オーバーロード！」

アーマナイト・デーモン「……ルミナイズ 呪縛されしもの達」
二人「オーブン・THE・フラッグ！」

創一「ドラゴンワールド」

バデイドラゴニック・オーバードロード

ライフ10 ゲージ2 手札6

アーマナイト・デーモン「デンジャーワールド」
バディ???

ライフ10 ゲージ2 手札6

アーマナイト・デーモン「俺のターンドロージャーリアンドドロ。」
アーマナイト・イーグルをレフトにコール。そしてそれを素材にゲージ2払い、アーマナイト・デーモンをレフトにコール。」

アーマナイト・デーモン

攻撃 8000 防御8000 打撃3 「2回攻撃」

アタックフェイズ

アーマナイト・デーモン「…ファイターを攻撃。」

創一「くっ。」

ライフ10↓7

アーマナイト・デーモン「ターンエンド。」

ライフ10 ゲージ1 手札5

創一「(なんであいつ本人のはずなのにバディギフトが発生しないんだ?)」

そんな不安を持ちながらもファイターに集中する。

創一「俺のターンドロージャーリアンドドロ。センターにドラゴニック・オーバードロードを、バディコール。」

ライフ7↓8 ゲージ1 手札6

アタックフェイズ

創一「オーバードロードでファイターを攻撃。」

アーマナイト・デーモン「……」

ライフ10↓7

創一「2回攻撃。」

アーマナイト・デーモン「……」
ライフ7↓4

手札にガード魔法が無いのか全く動かないアーマナイト・デーモン。創一はこのチャンスを逃さなかった。

創一「オーバードロードの効果手札を2枚捨ててスタンド。」

手札6↓4

アーマナイト・デーモン「……」

ライフ4↓1

創一「オーバードロードの効果。この効果にターン規制はない。止めたオーバードロード！」

手札4↓2

オーバードロード「くらえ！エターナルフレイム。」

アーマナイト・デーモン「……」

ライフ1↓0

ファイトが終わりフィールドが消えた時にポケットに入っていたカードが黒い光を出した。

創一「!?なんだ。」

アーマナイト・デーモンから黒い何かが消えようとした時、創一のポケットから出て来た正体不明の何かがそれを吸収していき、全て吸収したあとポケットにもどり、アーマナイト・デーモンもカードになった。

創一「何なんだ一体それとこのカードは？」

創一「おい無事か？」

創一「ああ大丈夫だ。」

創一「なんだよいきなりあのモンスターが暴れ始めた時に急いでフィールドを展開してどうしたんだよ。」

創一「なんでもない。ただファイトしたかっただけだ。」

創一「……まあいいか。もうすぐバディポリスが来る。事情を説明しなきゃだから行くぞ。」

創一「ああ。」

オーバーロード「(あれはまさしくあの者達の力だった。何故あいつらの力がこの世界に?)」

それから数時間たってバディポリスの事情聴取も終わり、解散となった。

華子「やれやれ久しぶりに来てみれば何かようわからんものと鉢合わせるは、バディポリスに捕まるはで大変じゃったな。」

ドラゴ「まあそれもよからう。また来るといい。」

華子さん「ああ。次回こそは驚かせてみせよう楽しみにしているそれじゃあな。」

ドラゴ「あつまつてくれ。」

剣「行っちゃまった。」

ドラゴ「どうするんだ?あの人勘違いしたままだぞ。」

和人「まあ多分他のトイレのモンスター達が教えるから大丈夫だろう。」

創一「だといいがな。」

遙か「もう帰ろう。」

そうしてそれぞれの帰路についたとき。

数日後なぜかぼろぼろのトイレのモンスター達が発見されたらしいが全員触れないでおくことにした。

怒りの炎

ドラゴside

平和な日々は一瞬で終わる。その瞬間は唐突に訪れた。

朝一人で登校して校門の前の先生にあいさつをして、下駄箱を開けるとそこにはピンク色の手紙が入っていた。

剣「なっ！」

剣は叫びたい気持ちを抑えた。

近くにふざけておいた奴がいるかもしれない、と考えたからだ。改めて内容を見してみる。

剣さん

お話したいことがあります。

ご予約が無ければ、今日の放課後、学校の体育館でお待ちしています。

一人できて下さい。

ドラゴ「(これ本当にラブレターか？何か違う気がする。)」

ドラゴはそう思っていたのだが、剣はというと。

剣「(これラブレターじゃないか？そうだよな。きつとそうだよな。そうじゃないとおかしいよな。よっしゃー遂に俺にもモチ期が来たか。)」

ドラゴ「(バリバリ行く気なんですけど。)」

バデイのことがかなり不安になった。

ドラゴ「おい、剣、お前まさか行くつもりじゃないよな？そうだよな。あきらかに変だぞ。」

剣「い、いや、別に、行くつもりだけど、まさかこれ罠のわけがないだろ。それに仮に罠でも行くしかないだろ。」

ドラゴ「そうか。」

あつもうこれ、行くき満々だ。もうどうなつてもしらない。

和人 side

昼休み

和人「何か今日、剣のやつ変じゃね？」

俺は今日、一番気になってることを皆に聞いた。

創一「そうか、確かに少しそわそわしているが気のせいだろ。」

カナ「そうだよ。剣なんていつも変なんだから。」

レイ「いやカナよりもましだと思わよ。」

カナ「なんでよ。」

いや変だよ。休み時間はもちろん授業中も先生からの質問も間違えまくっている。

授業中

先生「じゃあこの英文を日本語にしてみる。はい、弓風答えてみて。」

剣「……」

先生「弓風大丈夫か？」

剣「あ、はい酸化鉄です。」

先生「弓風、今の時間は科学じゃないぞ。英語だ。」

剣「え、あつすいません。」

クラスメイト「今日、大丈夫か？お前間違えまくっているじゃねえか。風邪か？」

剣「大丈夫だ……多分。」

クラスメイト「多分かよ。」

昼休みに戻り、

カナ「言われてみれば創一、確かに剣今日変かもね。」

創一「多分な。」

ダリルベルク「まあ、思春期だし、そういうこともあるだろ。」

ドラゴン「あ、何かダリルベルクが久しぶりに喋った。最近全くと言っているほど作品では空気だったのにな。」

和人「おい！メタ発言やめろ。」

ダリルベルク「そうだぞ。てか誰が空気だよ。我の目的はカオスマスターでもお喋りだということを世界に広げるのだから。」

和人「お前も止めろややこしくなる。」

メタ発言の後にダリルベルクが何か喋りまくっているがもうめんどくさい。

和人「話戻すけど剣だ。あいつ今日どうしたんだよ。一体？」

ドラゴ「それは我が説明しよう。」

そこにドラゴがやってきた。

あれ、剣は？

遙か「ドラゴ、それどういうこと？」

ドラゴ「それがな、かくかくしかしかなのだ。」

和人「おい、それ

何言ってるのか分からない。」
何だよかくかくしかしがかって古いアニメでもあんまり使わないぞ。

ドラゴ「なに！たまにこれでやってる作品があるからこれで大丈夫だと思っただぞ。」

和人「だからそういうメタ発言するんじゃない。」

ドラゴ「それはすまない。それでは説明するでしょう。」
ようやく説明を始めた。

和人「なるほどな。」

レイ「そりやそうなるわよね。」
遙か「なつとく。」

??「話は聞いたぞ。」

そこにいたのは会長だった。

会長「なんでそんな(面白そうな)話をしてくれなかったんだい?」

ん?何か意味が違う気が。

カナ「いえ。私達もいま知ったことだったので。」

会長「よーし話は聞いたな野郎ども!」

研究会生徒「「イエッサー!」」

会長「ならば、答えは一つだ。」ニヤ

研究会生徒「盛大に祝ってやろうじゃないか。」

会長「行くぜ野郎ども!」

研究会生徒「イヤッハー!」

そういつて何処かに向かっていった。

ドラン「そういえば当の本人は何処にいるんだ?」

ドラゴ「分らん。」

数分後、家に弁当忘れて購買でめちやくちや時間が遅れてきた剣が来たとき。

剣 s i d e

ようやく放課後になった。

さてと、体育館に行くとするか。

青春の一ページを作り。ワクワク

すると目の前に、複数の男子生徒がやってきた。

見るとバディファイト研究会の生徒達だった。

研究会生徒「なあ、今からファイトしようぜ。」

剣「わりい、今日用事あるだよ。今度でいいか?」

研究会生徒「逃げるのか？シーカーズのリーダーがファイトで逃げるのか？」

剣「はあ、しょうがないー回だけだからな。」

オープン・THE・フラッグ

剣「霸王 降臨」

剣「やれ。ドラゴン全てのモンスターを攻撃だ。」

研究会生徒達「「ぐわあー」」

ライフ0

剣「それじゃな。」

研究会生徒「まだまだもう一度だ。」

剣「……はあ、もう一回だけだぞ。」

数分後ボロボロの研究会生徒が見つかったという。

会長「あいつらミスしやがって。よし、ここは覗きをしよう。」

和人「そうですね。」

カナ「まあ、気になるわよね。」

遙か「楽しみ。」

創一「どうなっても知らねーぞ。」

和人「そう言っつてついてきてるんじゃないか。」

ドララン「そうだ、そうだ。」

オーバーロード「(ドラゴの話が本当なら不味いことにならなければいいのだがな。)」

剣「ここか。さあてどうなるかな。」

ドラゴ「(どうなるかな。)」

ポケットの中に覇龍剣のカードを持っている。

もしも、何かあつたらすぐにも対処してやる。

まあ、多分大丈夫だと思っけどな。

さあて、誰が手紙をくれたのかな。ワクワク

遠くから見ている人達がいた。

和人「すげえな。あいつあんなそわそわするんだな。」

レイ「まあ、ようやくつて感じよね。最近なんて、私たちともあんまり遊びたがらないくらいよね。」

カナ「そうかな。前から変わらないと思うけど。」

遙か「同じく。」

レイ「ずっと二組のカップルがイチャイチャに夢中だったからね。私たちなんて、何回も、コーヒーを飲みまくっていたわよ。」

ダリルベルク「(お前らがイチャイチャし過ぎて剣と我々がいづらいんだよ。)」

ドラン「どっちかというどあいりバイバルとのほうが、ファイトの練習のほうがいいってことでよく行ってるしな。」

剣がラブレターを信じた理由も分からなくなってきた。

??? 「来たか、殺れ。」

剣「なに!」

後ろに気配を感じると後ろを向いたら

たくさんの男とモンスターがいた。

そしていきなり襲ってきた。

その中のリーダーっぽい人が

??? 「よお。元気か。」

剣 「お前は誰だ？」

??? 「俺か？俺はあんたに戦いを挑みにきたものだよ。最近噂でお前がこの近くでバディモンスターとコンビ最強というからな。勝負を挑みにきたんだよ。」

剣 「何!?あの手紙を下駄箱に入れたのはお前か？」

??? 「ふっ、そうだとしたら。」

剣 「ならば答えは一つだ。」

てめえらを皆殺しだ。」

??? 「は?。」

剣 「覇龍剣。」

剣と覇龍剣からの力からめちやくちやな怒りを周りに放った。

??? 「なんだよ！お前人間なんだよな？」

剣 「はあ、そんなの半分止めてるよ。」

龍をまとった姿になった。

そして、モンスター達に向かって襲いかかった。

??? 「姿が変わっただと！」

剣 「おりゃ！」

まずはモンスターを切りつけた。

一撃で倒れた。

??? 「何だと！」

剣「お前達は俺一人で倒してやろう。」

カナ「不味い、止めよう。」

遙か「ええ。」

和人「ああ、つて俺と創一は無理だろが。」

創一「まあ俺達は相手側を止めよう。」

レイ「止めた方がいいと思う。」

ダリルベルク「同感だ。」

和人達が止めようとするがバディモンスター達は反対している。
理由は単純。

あいつの邪魔したら後々めんどくさそうだからだ。

剣「おーりや！」

剣を一振りしたら何人も吹き飛んだ。

剣「お前らは絶対に許さん！」

剣「（ようやく恋人できると思ってたのに、ようやく、周りからもチームリバイバルやバディモンスター達から変な目線を受けずにするんだかも知れないのに。）」

とんでもない怒りを放出しているそして、その怒りの限り相手に攻撃をしている。

しかし、覇龍剣が力をコントロールしているみたいで周りに被害があまり出ていない。

??? 「くっならばファイトで。」

剣「おりゃ！」

??? 「くつ、なんでだよ。これ、バディファイトの作品だぞ。なんで主人公がファイト拒否して、リアルファイト持ち込もうとしてんだよ。」

剣「黙れ。人の思いを踏みにじるお前を許さない。」

モンスターが一瞬にして消えた。

もちろん

??? 「……こうなったら。逃げるが勝ちだ。」

そう言つて逃げ出した。

剣「逃がすと思つているのか。」

??? 「ギヤアー!! 名前も名乗つて無いのに！」

数十分後ボロボロの人達が発見されたが訳を聞いてもなにも答えなかつたようだ。

翌日

剣はいつものように登校すると何か空気が変だ。

理由を隣の和人に聞いてみることにした。

剣「なあ今日どうしたんだよ。」

和人「いや、別に、何でもない。」

何か変だな。

創一「おい、剣大丈夫か？」

剣「どういう意味だ。」

創一「いや、実はな。昨日の、お前結局どうなったんだよ。ドラゴから聞いたよ。(知らないふり知らないふり。)」

なるほどなそれでみんな変な空気だったのか。

剣「罨だったよ。」

創一「やっぱりか。」

剣「? どういうことだ。」

創一「お前のことが不良達が噂しててな。お前に関わると命が無い

という噂が立ってるんだよ。」
どうしよう。
噂がどんどんすごいことになっている。

バディ達の会話2

ドラン「始まりました。第2回バディ集会！」パチパチ
ドランがまた変な空気で始まった。

因みに今回の場所はドラゴが生み出した空間だ。
この空間は色んな所から直接来ることが出来る。

これにより離れた場所からでもこの空間に来ることが出来るようになった。

これが絆の霸王軍の力だ!!

因みにこの空間はモンスターしか入れない。

ドラゴ「またやるのか。」

レイ「まあ、いいんじゃないの。それより気になるのは、
そう言つてレイが見ていた方向を見ると、

剣「まーたあいつらデートだと、こつちに来いよなまったく。」

覇龍剣「まったくだ。最近の若いのは強調性がないな。」

剣と覇龍剣がチームメイトの愚痴を言っていた。

周り「なんでお前がいるんだよ!!」

剣「知らねえよ。何か気づいたらここにいた。それだけだ。」

ポーテックス「まあ、いいじゃないか。」

ダリルベルク「ポーテックス！ポーテックスではないかどうしてここに、まさか自力で脱出を。」

ポーテックス「止める（いきなりの腹パン）。」

ダリルベルク「ぐはあ。」

ポーテックスがいきなりの登場にダリルベルクがふぎけた所に作者がそれにのかった。

ポーテックス「まあ、そんなことはおいといて、何故剣がいるのだ？」

話を戻した。

剣「さっきも言ったがいつの間にかここにいた。それだけだ。」

覇龍剣「おそらく我と一体化したから人としてではなくモンスターという扱いなんだろう。」

剣「嫌だ！俺はまだ人でいたい。」

いや、竜みたいな姿になれる時点でもう人じゃないとおもうんだが。

ドラン「まあいいじゃねえか。きつと慣れれば都だぜ。」

レイ「それを言うなら住めば都よ。」

間違ったことわざを使ったドランをレイがその間違いを直した。

ボーテックス「そう言えばマイ・ヴァンガードは何処に行ったのか
知らないか？」

ドラン「さあ？」

レイ「ああ、そういえば創一とオーバーロードはカスミさんに呼ば
れていたわよ。」

ボーテックス「まさか、何も言われていないぞ。まさかこれがたま
に聞きたい忘れというやつか。」

レイ「もうツツコミするのもめんどくさいわ。」

ダリルベルク「諦めたのか。諦めたらそこで試合終了だぞ。立て！
立つんだレイ！」

レイ「試合してないでしょうが！」

ダリルベルク「ぐはあ。」チーン

レイの我慢が限界を越えておもいつきりダリルベルクを殴った。
そして、ダリルベルクは倒れた。

ドラン「さつきツツコミはしないって言ったのに。」

カスミ「それは確かなの？」

創一「おそらく、このカードが最近のモンスター騒動の原因だとかんがえられる。」

カスミ「確かに最近謎のエネルギーをまとったモンスターがあなた達の住んでいる近くに発見されてはいるけど、それはまだ原因がはっきりしていないのよね。」

創一「その原因がこのカードの可能性がある。」

そうやって謎のカードを渡した。

そのカードを解析しているとエネルギーが最近謎のエネルギーと一致していた。

カスミ「確かにこのカードは不味いわね。」

創一「ああ、なんでこんなモンスターがゲートから現れたのやら。」カスミと創一は二人であるカードをみていた。そのカードは少し前に創一が拾ったカードだった。

その中に見たことが無い能力があった。

それは、創一がファイトしていた時に見た能力があった。

カスミ「こんな能力いったいあの世界のどこにあったのかしら？」創一「それは分からないが多分オーバーロードと同じ世界のモンスターだと思われる。」

オーバーロード「こいつはあの時、ドラゴニック・オーバーロード“The Yeerbirth”が倒れた場所から現れたこのモンスターそして、最近この付近で起こっている謎のモンスターの騒動何か関係があるはずだ。」

カスミ「そうね。このカードは一度あなたに返すわ。後で設備が整い次第解析をするためにここに来て頂戴。」

創一「分かった。」

しばらくするとリバイバルのバディが合流した。

カードバーン「何とか改造が終了したよ。」

レイ「そんなこといつしてたのよ。」

ドラム「いきなりすぎないか。」

カードバーン「いやあのダークネスが起こした騒動の時に故障していたんだよ。」

ガイアスカル「何かお前ダークネスが関わると毎回破壊されるよな。」

カードバーン「……お前に言われたくない。」

ガイアスカル「……そうだな。」

何か気まずい雰囲気になりつつ話は続いた。

カードバーン「まあそんなことがあり足りない部分を改造して新しいパーツを追加して私は再び戦うことができるようになった。またよろしくな。」

レイ「よろしく。」

カナ「ムカムカ創一いつになったら来るのよ!」

今日デートの予定があったはずなのにいつになっても来ない。おかしいわね。

さつき連絡したけど既読すらつかない一体どうなってんのよ。あつようやく既読がついた。どんだけ寝坊してんのよ。

しかし、次に来た連絡で固まった。

何か勘違いしてねえか、デートは今日じゃなくて明日だぞ。

レイ「ニヤニヤやってやったわ。」

バーンノヴァ「おうよ。一体どうしたんだよ？結構嬉しそうじゃねえか。」

レイ「いやね。創一とのデートの日時をカナのスマホに送ったのよ。」

バーンノヴァ「お、おう。そりやすげえかな？」

レイ「普段からダメダメだからこういうことしないともっと駄目になるのよ。」

バーンノヴァはもう何も言わなくなった。

和人「なあ、この問題はどうやって解くんだ？」
遥か「はあ、ここは因数分解をして、 X の値を求めてグラフに変えるのよ。」

剣はデートだと言っていたが何か勉強会をしていた。あと1ヶ月後にテストがあるということがあり、遥かが和人を心配して、勉強会をしているのだが、

和人「ここは？」

遥か「ここは、過去形にして文章にするのよ。」

和人「じゃあここは？」

遙か「もう自分で調べてよ。」
もう、遙かが力尽きるほど勉強が出来ない。
遙か「だから、ここは、えっと、ごめん、もう無理。」
和人「お、おい大丈夫か？遙か、遙かさん。」
遙かが力尽きた。

ダリルベルク「そういえばダークネスが暴れた日に我以外は強化形態もしくは新たな切り札をてに入れたよな。」

ドラゴン「そういえばそうだな。」

レイ「まあ私達はブレイブ・ドラゴン。剣達は覇龍剣と絆の霸王龍に覚醒したドラゴ。未来竜のサイズ3に覚醒したドラゴ。そして、ドラゴニツク・オーバーロードジ・エンド。」

それがどうしたんだ？

ダリルベルク「何故我らだけ強化形態がないんだ！」

周り「しらねえよ。」

周りのメンバーが全員突っ込んだ。

カードバーン「それを言うなら我らも、来てない。まあ私は技術によつて進化しただけだが。まあ一言自分で鍛えれば新たな道は開かれんだよ！」

カードバーンがダリルベルクが殴られまくった

それからしばらくしてもう、辺りは暗くなった。

レイ「じゃあ今日はお開き。」

ドラゴン「そうするか。」

それから皆帰っていった。

剣「(迅雷騎士団のカード、どうやったら復活するのかな。)」

そう思いながらあの戦いで白紙になってしまったカード達を、思う。

あの時のドラゴの判断は間違っていなかったと思う。けれどその後俺が使ってきたカード達が白紙になった時はショックでしばらく動けなくなった。

あれから色々やってみたけどカードは一向に元に戻らない。

剣「はあ、あいつらを何とかしないとな。(そうしないと

俺はダークネスと戦うことが出来ないかもしれない。)」

未知なるカプラーネットワールド

周り「挑戦状？」

あれから数日がたち、学校生活を楽しんでいるといきなり会おうと創一が突然の発言があった。

創一「ああ。」

剣「誰からだよ。」

創一「分からん。」

剣「なんだよ、それ。」

創一「今日、下駄箱の中にこんなのが入っていた。」

剣「この学校の下駄箱やたら何かしら入っているよな。」

挑戦状

本日午後6時公園に來い。さも無くばお前の恋人がどうなっても知らない。

印刷されたその文字は誰が書いたものか分からないものだった。

創一「恋人って、付き合っただけなのに誰に何するんだよ。」

剣「(あーそういえばそんなこと言っていたな。まあ周りから見れば変わらないんだけどな。)」

和人「…まあそれはおいといてどうすんだよ？」

剣「こんなの送ってくるんだから本当に」

カナ「警察に連絡しよう。」

レイ「取り合ってくれる分けないでしようが。」

カナ「じゃあどうするのよ？」

剣「方法ならあるぜ。」ニヤリ

創一「どうするんだ。」

剣「それはな、普通に返り討ちにすればいい。」
普通じゃねえか。

創一「なんでこんなことに。」

カナ「まあまあ。」

学校が終わり、下校しているのだがまだ時間じゃないので適当に時間を潰すことにした。

まあそれはいいのだが、

創一「なんでお前と。」

カナ「別にいいじゃない。たまにはこういうのもいいよ。」

学校帰りに近くのカフェでお茶していた。

あんまりしないことなのだがまあ追い払うと面倒だからいいし
よう。

カナ「ねえ。そのケーキ頂戴。」

創一「好きにしろ。」

カナはそのまま食い掛けのケーキを食べた。そのついでにみたいな感じでジュースまで飲んだ。

創一「おい。」

カナ「いいじゃん別に減るもんじゃないし。」

創一「減るわ。」

そんな感じで食べ続けた。

その周りでは二人を監視をしている人物がいた。

和人「あいつら本当に付き合っていないのか？」

剣「知らん。」

遙か「絶対言えない。」

ドラン「もう、俺達必要ないだろ。」

一応不安だったから付いてきてきたが、何か必要のない感じが出て
いる。

剣「なあもう帰らないか。」

和人「そうだななんかあればオーバーロードとボータックスだけですみそうだし。」

遙か「それもそうだね。」

剣は創一に簡単なメールを打って帰っていった。

その数十分後カナも帰った。結局一人でいくことになった。

まあそんなこんなあつて6時になって公園にいた。

そこにいきなり、現れたのは黒づくめの男がいた。

??? 「まさか、本当に来るとはな。」

創一「何のようだ。」

??? 「まずは自己紹介をしよう。私の名前はそうだなアンノウンとでも名乗っておこう。今日はあなたにあることを伝えさせてもらいに来たんだよ。」

創一「そうか。ならばファイトしろ。」

アンノウン「いや、その前にあなたに真実を伝えよう。」

創一「真実だと?」

アンノウン「君とあのダークネスが呼びだしたモンスターとの戦い。あの時この街にとんでもないものがばらまかれてしまった。」

創一「!何故お前がそんなことを知っている。」

アンノウン「まあ、そんなことはどうでもいいだろう。いいから続けるぞ。その時ばらまかれたのだよ。」

創一「一体何をばらまいたというんだ?」

アンノウン「プラネットワールドの力。」

創一「プラネットワールド?」

アンノウン「お前の持つドラゴニック・オーバーロード、ボータックス・ドラゴンがいた世界のモンスターの内のあちらの世界ではリンクジョーカーと呼ばれていた者達、それがこちらの世界ではプラネットワールドのモンスターだよ。彼らの中にはまだ世界を支配したいと考えているモンスターがいるらしくてね。そのモンスター達がこ

こちらの世界に来て再び進行を開始しようとしているのだよ。」

創一「何だと!」

そんなことになれば大変なことになる。

ただでさえダークネスが面倒なことを引き起こしているというのに。

ダークネス?

創一「おい、その事はダークネスが狙って起こしたことなのか?」
アンノウン「おそらく事故だろうね。ダークネスはこの大きなエネルギーをばらまくとは考えられないからね。」

創一「何故その事を俺に教える。そういうことなら俺だけじゃなくてもいいだろう。」

アンノウン「その理由は君の持つカード星輝兵 カオスブレイカー・ドラゴンがプラネットワールドのモンスターの中でもリーダー的存在だからだよ。そのモンスターの好き勝手にされるのはこちらとしては困るのだよ。」

創一「何!」

このカードがプラネットワールドのモンスターのリーダー!?

アンノウン「まあこちらに来たときにだいぶ力を失ったようだからね。そこでこれだよ。」

アンノウンはこちらにデッキケースとカードケースを投げてきた。

創一「!?これは一体どういうことだ。」

アンノウン「どういうことも何も見たまんまなのだが?」

創一「どうしてお前がプラネットワールドのカードを持っている。中を確認したらプラネットワールドのカードが入っていた。」

アンノウン「そのカードはこちらに来ようとしたモンスターを捕獲して、カード化したものだよ。そして、そのデッキケースはプラネットワールドのモンスターの力を抑える為のものだ。せいぜいそれでこれからの脅威に備えたまえ。」

アンノウンはその場から立ち去ろうとしている。

創一「待て!」

アンノウン「ああ、そうだいい忘れていたがここ最近のモンスター
の狂暴化はプラネットワールドの力が影響している。ファイトで倒
せば新たなプラネットワールドのカードが手に入るだろうよ。それ
ではな。」

創一にその事を告げて一瞬にしてアンノウンは消えてしまった。

その夜

一人の男がある人物に終わっていた。男は拾ったカードを奪われ
ないように、逃げていた。

??? 「はあ、はあ、はあここまでくれば問題ないはず。」

創一「見つけたぞ。さあお前の力俺に寄越せ。」

後ろに追っていた人物が現れた。

??? 「何？くつ、こうなったら。バディファイトだ。」

創一「いいだろう。」

二人はフィールドの中に入っていった。

創一「集え、世界を侵食する輝かしき戦士達、ルミナイズ 侵略

スターベイダー！」

??? 「闇に落ちた結晶よ、今現れよ。ルミナイズダーククリスタル。」

二人「オープン・THE・フラッグ！」

創一「プラネットワールド。」

手札6 ゲージ2 ライフ10

プラネットワールド》(咲野 皐月さん提供)

【種類】 フラッグ

■君は《プラネットワールド》と《ジェネリック》のカードを使え
る。

??? 「プラネットワールドだど!? (バカなそんなフラッグ聞いたこと
がない。どうなっているんだ?)」

創一「どうしたんだ？はやくお前のフラッグもオープンしろよ。」

??? 「スタードラゴンワールドだ。」

手札6 ゲージ2 ライフ10

創一「俺のターンドロージャーリアンドロー、星輝兵 ラドンをセンターにコール。」

星輝兵 ラドン

プラネットワールド

サイズ2

属性 サイバロイド

攻撃5000 防御3000 打撃3

『表情も感情も失くして無双する。』

コールされたモンスターは両手両足に黒い輪がはめられたゴーレムが現れた。

??? 「何だそのモンスターは？」

創一「星輝兵、俺の使うモンスター……そして最強の力だ。」

アタックフェイズ

創一「ラドン、ファイターを攻撃。」

ラドン「了解。」

??? 「ぐわぁ。」

ライフ10↓7

創一「ターンエンド。」

ライフ10 手札6 ゲージ3

??? 「俺のターンドロージャーリアンドロー。ふふふ私の勝ちは決まった。」

創一「何？」

??? 「俺は暗黒晶竜 アトラをセンターにバディコール。更にキャストスタービリーバーアトラのソウルを減らして2ドロ。」

ライフ7↓9 手札7

暗黒晶竜 アトラ

攻撃7000 防御7000 打撃2

2回攻撃

黒いアトラが現れたその力から闇のようなエネルギーが出ている。
これは、プラネットワールドの力だ。

アタックフェイズ

??? 「行け、アトラでラドンを攻撃。」

創一「……」

??? 「もう一度だ。」

創一「……」

ライフ10↓8

??? 「ターンエンド。」

手札7 ゲージ0 ライフ8

創一「俺のターンドロージャーアンドロー。ゲージ1払い、星輝兵 メビウスブレスドラゴンをセンター、星輝兵 ネオンにコー
ル。」

星輝兵 メビウスブレスドラゴン

プラネットワールド

サイズ2

属性 サイバードラゴン

攻撃力9000 防御力3000 打撃2

「コールドコスト」ゲージ1払う。

このモンスターが相手にダメージをあたえた時相手のモンスター
1枚選び、そのカードを裏返しにする。

星輝兵 ネオン

プラネットワールド

サイズ1

属性 サイバロイド

攻撃力4000 防御1000 打撃2

■このカード以外に星輝兵がいるなら攻撃力+3000

黒い輪を背中につけた白い竜と黒い巨人が現れた。

創一「キャスト、呪縛されし者」

呪縛されし者

プラネットワールド

魔法

属性 侵略者 呪縛

使用コスト（ゲージ1払いとライフ1減らし、自分のカード1枚選
び裏返しにする。）

相手の場のカードを1枚選び裏返しにする。（カードを裏返しにす
る。そのカードは持ち主のターン終了時に元にもどす。）

創一がカードをかざしたと思うとメビウスブレス・ドラゴンの周りに
黒い輪がついたとおもうとアトラにも同じ輪がついた。

??? 「何だよこれ！」

アタックフェイズ

創一「やれ、ネオン。」

??? 「無駄だ。」

アトラが迎え撃とうとすると黒い輪に邪魔され反撃出来ない。

??? 「何!？」

ライフ9↓7

??? 「なんでだよ。何で俺のセンターにはアトラがいるのにこっちに
ダメージが入るんだよ!」

創一「黙れ。ターンエンド。お前のターンだ。」

手札5 ゲージ3 ライフ8

??? 「くっ俺のターンドロージャーアンドロー。攻撃出来ないな
ら!新たにモンスターをコールすればいい。」

新たにセンターにモンスターをコールしようとする呪縛されて
いるアトラがいてコール出来ない。

??? 「どういうことだ?」

創一「呪縛されたモンスターがいるところには新たにモン
スターをコールする事は出来ない。どうしたんだ速くしろ。」

アトラ「くっ、ターンエンド。」

ターン終了と同時にアトラの周りにあつた輪が消えた。

創一「俺のターンドローチャー吉安ドドロー。キャスト、星輝兵の作戦。ゲージ2追加してライフ+1。場のネオンとメビウスブレイドラゴンをソウルに入れ、カオスブレイカー・ドラゴンをレフトにコール。」

世界侵略の準備

プラネットワールド

魔法

属性 サポート

「使用コスト」手札を1枚捨てる。

デッキの上から2枚ゲージに置き、デッキから「星輝兵 カオスブレイカー・ドラゴン」1枚、手札に加える。

《星輝兵 カオスブレイカー・ドラゴン》

「フラッグ」プラネットワールド

「種類」モンスター「属性」サイバードラゴン

「サイズ」3 「攻」13000 「防」13000 「打」2

■【「コールコスト」君の場のカード名に「星輝兵」を含むモンスター1枚以上をソウルに入れ、ゲージ3を払う。

■【「対抗」相手のターン終了時、君のライフが5以下で、相手の裏向きのカードが表になったなら、このカードのソウル1枚をドロップしてよい。そうしたら、そのカードを破壊する。その後、君はカードを1枚引く。

■【「起動」ゲージ1を払い、ライフ1払い、君の手札2枚を捨ててよい。そうしたら、相手の場のカード1枚を選び、裏向きにする（裏向きにされたカードは何も出来ない。持ち主のターン終了時に元に戻る）。

「2回攻撃」

「聖も邪も粉碎せし雄叫び。光も闇も切り裂く牙。全てがひれ伏す絶

対竜！」

黒い輪をつけた大きい鎌を持った、白い竜が現れた。

??? 「なんなんだよ。お前一体なんなんだよ。」

創一 「カオスブレイカーのスキル発動。お前の、アトラを”呪縛”」。

アトラ 「ギャアー！」

何度もアトラの周りに黒い輪がつけられだいぶ疲れてきたようだ。

アタックフェイズ

創一 「行け、カオスブレイカーで攻撃。」

??? 「ぐはあ。」

ライフ7↓5

創一 「もう一度だ。」

??? 「まだだ。」

ライフ5↓3

創一 「ターンエンド」

手札2 ゲージ1 ライフ7

??? 「なんだよ。なんなんだよお前は？」

創一 「怖じ気づいたのか速くしろよ。お前のターンだぜ。」

??? 「俺のターンドロージャーリアンドドロ。くつ、ターンエンド。」

センターにモンスターをコール出来ないのでファイトができない。しかし、アトラが苦しそうだったが解放され一息ついたところ。

創一 「俺のターンドロージャーリアンドドロ。カオスブレイカー・ドラゴンの効果でアトラを再び”呪縛”」。

再びアトラが”呪縛”された。

アタックフェイズ

創一 「カオスブレイカーファイターを攻撃。」

??? 「キャスト、プロトバリア。」

創一 「2回攻撃。」

??? 「まだだ。まだ俺は、」

ライフ3 ↓ 1

創一 「ターンエンド。」

手札1 ゲージ1 ライフ6

??? 「俺のターンドロージャーアンドドロ。ターンエンド。
何も出来ない。アトラが解放されただけだった。」

創一 「俺のターンドロージャーアンドドロ。」

アタックフェイズ

創一 「カオスブレイカーで攻撃。」

??? 「……」

ライフ1 ↓ 0

ファイトが終わり横に倒れた男には見向きもせずその男からプラネットワールドの力を奪いカードにした。

俺は決めた。

自分がやってしまったことは自分でけりをつける。

ダークネスが原因のプラネットワールドのカードを全て俺が手に入れる。

対決研究会の決戦

ここはバディファイト研究会の部室

ある生徒は悩んでいた。

どうしたら昔のカードを使うことができないかと。

インフレが進んでいく現代。

1年前のカードが今では上位互換のカードがでるのだから

そしてその生徒は剣から2種のカードを借りて新たなデッキを作ったのだ。

??? 「!!これであいつにも勝てるかもしれない。」

??? 「剣、例のデッキができたからテストいいか?」

剣「ああ、不動か?え、えつとあ、あれか分かったファイトしよう。」

話かけてきたのは不動 楽(ふどう らく)最近ドラゴに頼んでバディを霸王軍に進化させてもらった研究会の生徒だ。

そのバディはシステミックダガー・ドラゴンかなり初期のカードだ。

あれは真の意味での霸王軍といってもいいデッキだからな。

数日後

「いよいよ決着をつけようじゃないか。」

「ああ、その通りだな。いくぞ!」

学校のグラウンドに二つの集団がいてそれぞれの代表が中央にいる。
剣達は片方の陣地にいた。

その集団は違う学校のバディファイト研究会の激突だった。
もちろんファイトでだが、

「キャスト、タイムセール2枚ドロ。」

「それは駄目だキャスト、シャイニング・レインその魔法は無効だ。」

「な、なんだと!?!」

「アクセルシンクロー!!」

「それ違うカードゲーム。」

「スターバースト「それは言っちゃ駄目だ!」すみません。」

途中からずれているような気がするが対決は続いているのだがその間に突然一体の大きなモンスターが現れた。

研究会生徒「あ、あれは!」

???「おい、お前達ちゃんと学校の許可を取ったんだろうな。」

「か、会長。」

そこにいたのは機械の巨人とその肩に乗っている一人の少年、この学校の生徒会長だ。

カイト「聞こえなかったか?ちゃんとグラウンドの使用許可を取ったんだろうな。」

会長「え、ええとどうだったかな?」

カイト「安心しろ、取っていないのは知っている。やれギアゴツト。」

ギアゴット「イエス ボス。」

ギアゴットが命令を実行して、その場にいた全員をグラウンドから追い出した。

「うわー!!」

和人「やりすぎだろ。」

ドラン「まったくだな。」

会長「くそ、しかし今日こそはどちらが上か決着をつけなければ。」

カイト「まだ、やる気か？」

ゴゴゴゴゴゴ

もうめっちゃやくちやなプレッシャーを放っている。

会長「…よし、不動あとは任せた。」

不動「え！会長がやるんじゃないんですか。」

会長「ああ、お前に譲る。」

譲るんじゃないなくて押し付けているだけでしょうが！

まあいい。ファイトです。

カイト「いいだろう。ファイトだ。カオスの力がお前を砕くルミナイズ、カオスゴーレム。」

不動「小さき力結集せよ。ルミナイズ、システミックダガーオーバー」

二人「オープン・THE・フラッグ

不動「ドラゴンワールド。」

ライフ10 ゲージ2 手札6

会長「THE・chaos」

会長「私の先行だ。私のターンドロージャーチャージアンドドロージャーにC，ダリルベルクをコール。」

ダリルベルク「久しぶりだなようやく戦えるここ最近は全くといっていいほどに出番が少ないのだから今回はしばらくいさせてもらおうぞ。」

ダリルベルクがあらわれたがめちやくちや喋るな…まさか!!

遙か「あんなんで会長のデツキに入ってるのよ!」

やっぱり。

ダリルベルク「そりやもちろん出番が少ないから。」

剣「(こいつ手段を選ばなくなっているな。)」

会長「更に、ゲージ3払い、C，の先導者ギアゴットver零をセクターにバディコール。」

ギアゴット「イエス ボス。」

後ろにいたギアゴットが前に出てきた。迫力あるなー。

アタックフェイズ

会長「ドロップゾーンからC，トリプルバスターをライトをコール。」

C，トリプルバスター

攻撃4000 防御3000 打撃3

カイト「ギアゴットでファイターに攻撃。」

生徒「ぐわー!」

ライフ10↓7

カイト「ターンエンド」

手札4 ゲージ0 ライフ11

不動「俺のターンドロージャーチャージアンドドロージャー。蒼弓騎士団システムミックダガー・ドラゴンをレフトにコール。更にシステムミックダガー・ドラゴンをライトにコール。蒼穹騎士団のシステムミックダガーの効果。ライフ+1してワンドロー。」

手札5 ゲージ3 ライフ9

蒼穹騎士団システミックダガー・ドラゴン

攻撃2000 防御2000 打撃2

システミックダガー・ドラゴン

攻撃3000 防御3000 打撃2

周り「システミックダガー・ドラゴン!?!」

何でそのカードをって周りはなっているな。俺は理由を知っているからだけど周りは理由を知らないから仕方ないか。

「何でそんなのいれてるんだよ。」

「もつと別のカードをいれろよな。」

周りがデツキ構成に文句を言っている。

剣「まああと少しでそれも変わるがな。」ニヤリ

不動「これが俺のバディだ。ゲージ2を払い、デツキの上から1枚をソウルに入れてシステミックダガー・オーバーエッジセンターにバディコール。」

新たな刃 システミックダガー・オーバーエッジ

ドラゴンワールド

サイズ1

属性 霸王軍

攻撃 3000 防御3000 打撃2

「コールコスト」ゲージ2を払い、デツキの上から1枚をソウルにいれる。

■このカードがと攻撃した時に、ドロップゾーンにこのカード以外の（システミックダガー）と名のついたモンスターを1枚を選んでコールコストを払ってコールできる。この効果は1ターンに1度しか発動出来ない。

■このカードが場にいるとき場のシステミックダガーと名のつくモンスターは効果で破壊されず、相手の効果でレストされず、攻撃力+5000して打撃力+1して2回攻撃を与える。

カイト「これが霸王軍のシステミックダガーか。」
もうひとつあるんだけどな。

アタックフェイズ

カイト「ギアゴットの効果ドロップゾーンからもう一体C，トリプルバスターをライトにコール。」

研究会生徒「構わない。システミックダガー・オーバーエッジの効果このカードがある限り場のシステミックダガーと名のつくモンスターは効果で破壊されず攻撃力+5000、打撃力+1、2回攻撃を与える。」

蒼弓騎士団システミックダガー・ドラゴン

攻撃2000+5000↓7000

打撃2+1↓3

システミックダガー・ドラゴン

攻撃3000+5000↓8000

打撃2+1↓3

システミックダガー・オーバーエッジ

攻撃3000+5000↓8000

打撃2+1↓3

カイト「何！面白い来い。」

研究会生徒「行きます。普通のシステミックダガーでギアゴットを攻撃。」

カイト「カオスドレイン。トリプルバスターをドロップゾーンに。」
研究会生徒「もう一度だ。」

カイト「カオスドレイン。今度はもう一枚のトリプルバスターをドロップゾーンに送る。」

研究会生徒「蒼穹騎士団のシステミックダガーでギアゴットを攻撃。」

カイト「カオスドレイン。今度はダリルベルクをドロップゾーンに

送る。」

ダリルベルク「嫌だ、まだ活躍したい。あ、ギアゴット捕まえようとすんのやめて。グワァー!!」

ダリルベルクの悪あがきは全員見てみぬふりをした。

不動「2回攻撃。」

カイト「くどい。ギアゴットの逆転殺ReBoot発動。その攻撃を無効にしてターンを強制終了だ。」

不動「やっぱりか」

ライフ9 手札4 ゲージ1

カイト「まだまだだな。俺のターンドロージャーアンドロー。レフトにゲージ1払い魔岩機兵ドラゴレムをコール。更にカオス、オシリスをライトにコール。効果でチャージアンドロー。そして、ドラゴレムの逆転殺発動。ゲージ1払い、場のカード全ての打撃力を+2する。」

魔岩機兵ドラゴレム

攻撃7000 防御5000 打撃2↓3

ギアゴット打撃力3↓5

オシリス打撃力2↓4

ドラゴレム打撃力3↓5

アタックフェイズ

カイト「ドロップゾーンからC，ダリルベルクをコール。効果でデッキから3枚見て1枚を手札に加える。」

ダリルベルク「再び出番キター！こんなこと始めてだ。よっしゃー」

カイト「ドラゴレムセンターを攻撃。」

不動「ソウルガード。」

カイト「貫通。」

不動「そんな。」

ライフ9↓4

カイト「オシリスやれ。」

不動「システミックダガー！」

カイト「ギアゴット止めだ。」

ギアゴット「イエス ボス。」

不動「キヤスト、青竜の盾。攻撃を無効にしてゲージ1追加。」
ゲージ2

カイト「もう一度だ。」

ギアゴット「イエスボス。」

不動「キヤスト、緑竜の盾。今度はライフを回復。」

ライフ4↓5

カイト「ダリルベルクやれ。」

ダリルベルク「攻撃だなんて先行以外だと始めてだ。レッツゴー。」

不動「うわー」

ライフ5↓1

カイト「ターンエンドそろそろ諦めたらどうだ。」

不動「まだまだ諦め切れませんよ。俺のターンドロージャーリアン
ドロロー。キヤスト、タイムセールライフ1だから2枚ドロロー。そし
て、もう一度きたれゲージ2を払い、センターにシステミックダガー
オーバーエッジ。蒼穹騎士団の効果ライフ+1してワンドロー。」

ライフ2 手札4 ゲージ1

アタックフェイズ

不動「普通のシステミックダガーでギアゴットを攻撃。」

カイト「カオスドレイン。オシリスをコストにする。」

不動「2回攻撃。」

カイト「カオスドレイン。ドラゴレムをコストにする。」

不動「蒼穹騎士団のシステミックダガーでギアゴットを攻撃。」

ダリルベルク「またさっきのようなのはいやだぞ。」

カイト「キャスト、カオスウォール 完全の障壁、攻撃を無効にしてライフゲージ+1してワンドロー。」

ライフ12 ゲージ2 手札4

ダリルベルク「ふーよかった。」

不動「2回攻撃。」

カイト「カオスドレイン。ダリルベルクをコストにする。」

ダリルベルク「いやーだ!!」

不動「こつからだ、オーバーエッジでファイターを攻撃そして、効果でドロップゾーンのシステミックダガーをスペリオルコール。」

カイト「ギアゴットが破壊されただど!?!」

不動「オーバーエッジ、普通のシステミックダガーと連携攻撃。」

カイト「くつ、まだだ。」

ライフ12↓6

不動「システミックダガーもう一度だ。」

カイト「まだまだだ。」

ライフ6↓3

不動「くつ、ターンエンド」

ライフ2 ゲージ0 手札4

カイト「俺のターンドロージャーアンドロー。センターにC・イヨノラセツリユウをセンターレフトにC・ライジングフレアをコー。効果でデッキトップ三枚めくるその中にサイズ3のモンスターがいるなら相手のモンスターを破壊できる。」

ドロップゾーンに送られたカード

ドラゴニック・カオス

ドラゴニック・カオス

カオスウォール 完全の障壁

カイト「……」

不動「……………」

周「……………」

剣「(またか。)」

カイト「キャスト、ドラゴニック・カオスドロップゾーンのドラゴ
レムをライトにコール。」

不動「え！」

アタックフェイズ

カイト「やれ、ドラゴレムセンターを攻撃。」

不動「ぐわー。」

ライフ2↓0

カイト「次からはちゃんと許可を取ってからやれよ。」

「は、はい。」

カイト「じゃあな。」

ダリルベルク「もうカオスはこりこりだ。」

というがダリルベルクの扱いなんて今回はまだいい方でひどいと
相手と自分それぞれのターンで復活してコストにされるデッキだっ
てあるんだからな。

不動「きつかったな。」

会長「これからもバディファイトの研究をすればきつとカイトにも
勝てるはずだ。」

不動「はい。がんばります。」

会長「今度の3月には絶対決着をつけよう。」

別の学校の会長「もちろんだ。」

研究会生徒「その前に受験を頑張ってください。」

その場の空気が凍った。

会長「そうだった！あと1ヶ月くらいで入試だ。不味い。」

三年生の先輩達がめちやくちや焦りでした。

あ、この人ら忘れてたな。

「あつちの学校の生徒も何人か冷や汗をかいている。」

和人「もう帰ろうぜ。」

遙か「そうだね。でもダリルベルクあんたはあとでお仕置きだよ。」

ダリルベルク「……………」

数日後黒騎士であるはずのダリルベルクが真っ白に燃え尽きた姿が発見された。

2つのお話

和人、遙か編

それはある日曜日の事。

和人は出された課題をやっているのだが

和人「……………この問題わかんねえ…仕方ない遙かに連絡を。」
ピコン、スマホの通知音があった。

和人「誰だよ。剣かな？」

ファイトの練習かなと思ひ、スマホを開いて見ると、

遙か『その問題は、37ページの例題を見ればとけるよ。』

和人「……………なんでわかんだよ。…まあ助かるけど。」

少し、怖いがまあアドバイスを見て問題を解いた。

数分後

和人「疲れたー！ゲームでもしようっと。」

ピコンまた通知音が鳴った。

和人「……………まさかな。」

少し恐怖を覚えながらスマホを見てみると、

遙か『サボってないでさっさと宿題やったら？』

和人「……………はい。」

そのまま机に戻り勉強を再開した。

数時間後

デッキを組んでいると新しくドラランがスタードラゴンワールドのデッキでいいカードがないか探していると、

和人「ん？このカード達もしかして今の俺のデッキに合うんじゃないか、どう思うドララン？」

ドララン「確かにこのカード達なら俺のデッキにあうな。」

和人「よし、ならこのカード達をデッキに加えて、新しいデッキを作ろう。」

いきなり電話がなった。まさか、また遙かか、流石にこれで遙かだったら怖いぞ。

恐る恐る電話に出てみると、

和人「もしもし、」

剣「あ、和人か。」

なんだよ、剣かよ。

和人「どうしたんだよ。こんな時間に。」

剣「そんな遅くはないと思うけど、まあいいか今、バディファイト研究会の方から連絡が来たんだけど例のあれが完成したってさ。」

和人「何!？」

あれがか。ほぼ不可能だと思ってたのにまさか半年ほどで完成するとはな。

剣「バディポリスとかブレイブ研究所からも技術提供があったらしいけどな。」

和人「なるほどな。」

剣「しかもあの機能も完成したらしいんだけど、それで来週の日曜

日にテストすることになったからドランによろしく。」

和人「了解。」

あの機能は俺とドランに必要なかもしれないからな。

剣「よし、じゃあそういうことだからよろしく。」

まあそういうことらしいからなるだけなるよな。

ドラン「例のあれが完成したのか？」

和人「ああ、これでお前にも新しい可能性が出てきたな。」

ドラン「そうだな。たのしみだぜ！」

ピコン

またスマホがなった。

なんだ剣のやつ資料かなんかを送ってくるならそうだと行ってくれればいいのにな。

遙か『例のあれって何？』

和人「……………」

いや怖過ぎだろ！何でわかるんだよ！

ドラン「ん？何か今上から変な音が鳴ったような。気のせいかな。」

答え合わせ

遙か「ふふふ、驚いてる驚いてる。」

なぜ、和人が行っていることを遙かが知ることができたのかその理由はなんと、和人の部屋の天井に隠れていたのだ。

遙か「さすがにこれをばれることは絶対に無い。こんな所に隠れていたのは流石にばれないはずだ。」

ダリルベルク「我がバディはもうダメかもしれない。今の内に行つた犯罪を資料をまとめておかないと。」

ダリルベルクはそういうと持っていたパソコンを持って資料をまとめていく。

バデイがツツコミを放棄するところなるのだ。

霸王軍編

新たなる霸王軍が来たんだけど問題が起きた。

それは

??? 「第1回最強は誰だ。霸王軍選手権。」

「いいいいいい。」

ドラゴ「なんだこれは?」

ドラグーン「いやね。霸王軍は新しくなって増えてきていたからさこの際新生霸王軍の中で誰が一番強いのか決めようぜって話になったんだよ。」

ドラゴ「なるほどそれで?」

ドラグーン「まずはこいつだ。霸王軍の中でもサポート系のモンスター、参考にしたのは蒼穹騎士団のシステムミックダガーだ。」

システムミックダガー「再戦の機会感謝するぞ。」

ドラゴ「サポート系だから結構出番があるよな。」

ドラグーン「続いてはこいつ、システムミックダガーと同じく武装機竜のサウザントレイピアだ。少し効果が使いづらいがゲージを増やすことのできる霸王軍だ。」

ドラゴ「我が霸王龍になったことで前よりは使いやすくなったな。」

ドラグーン「続いてはこいつ、人々をレスキューするためヒーローワールドから現れたマツハブレイダー」

マツハブレイダー「ファイターは俺が守る。」

ドラゴ「システムミックダガーがいると相手ターンにも能力でドロ―できて手札は減らないから何回か助かったな。」

ドラグーン「最近はガード魔法に出番を取られがちだけどな。」
マツハブレイダー「ぐはっ。」

システミックダガー「マツハブレイダーが死んだ。この人でなし！」

ドラグーン「続いてはこいつだ。ガンセウラーとプロミネンスバーストこの2体は切り札をサポートする役割を持っている。だけど最近はお出番が無いがな。」

システミックダガー「無視するな！」

二人「……」

ドラゴ「覇龍剣が来るまではかなり助かっていたのだがな。」

ドラグーン「残りも色々いるのだが、まあ色々面倒だから以下略。」

その他「ふざけるな！」

ドラグーン「ギャー!!」

ドラグーン「まあ色々あったが最後にレジェンドワールドの覇龍と覇龍剣よ、2代目の覇龍はこの中にいるのか。」

ドラゴ「そんなやついない。」

覇龍剣「まだあいつらの死体も確認していないのに、もう2代目の話か、そんなにお前ら覇龍になりたいのかお前ら？」

ドラグーン「いえ、そんなつもりは、ええと、なあ、みんな。」

システミックダガー「そうだ。決して覇龍になって更に強化を貰おうとは考えていない。」

マツハブレイダー「うんうん。」

周り「そうだそうだ。」

ドラゴ「おい、誰も強化の話なんかしてないぞ。」

「「あ！（汗）」」

ドラゴ「全員肅正だこのやろうども！」

周り「ギャー!!」

ドラゴ「まったく新しく入ったメンバーも前の奴らと変わらないな。」

覇龍剣「まったくくだな。して、ドラグーン、あいつらを誘導したのはお前か。」

ドラグーン「なんのことやら。」

ドラゴ「隠す必要は無いぞ。証拠は上がっているだからな。」

そういうと手には録音機があり、そこには他のモンスター達と適当に喋っていたのだがだんだん次期霸王龍になろうとする話に変わっていった。

ドラグーン「ちっ、いい余興になると思ったのに。すまなかったな。」

ドラゴ「気にするな。とは言うほど傷は言えてはいないがまあ今回は許してやろう。ただし次は無いぞ。」

ドラグーン「……………助かったー!!」

その夜ドラゴと覇龍剣は剣の屋根の上にあった。

覇龍剣「あいつもお前を元気づけようとしてやったことだ。つまり、あいつも俺も気づいているということだよ。お前、迅雷騎士団の事を気にしているのだろう?」

ドラゴ「……………ばれていたか。」

覇龍剣「気にするなどは言わない。ただ、お前は、」

覇龍剣が続きを言おうとしたときにドラゴがそれを遮った。

ドラゴ「少し、時間をくれ、必ず元に戻る。」
覇龍剣「……分かった。」

しんみりとした空気の中ドラゴの手には属性に霸王軍と武装騎竜が書かれた白書のカードがあった。

つかみ取れ可能性

創一「これで10枚目か？」

あれからプラネットワールドから何枚かのカードが、手に入った。

創一「!?これは。」

カードを触れた瞬間体にとんでもない負担がかかった。

創一「くっ、この！」

しばらくすると落ち着いた。

創一「何だったんだ今の？」

???「あと少し、あと少しで。」

何かが動き出すまであと少し。

12月24日

クリスマスイブだが剣達と生徒会長とバディファイト研究会の會長はある場所へ向かっていた。

和人「ついに、ついにこのときがきた!!俺はこのときを待ち望んでいたんだ。」

遙か「和人はしやぎすぎだよ。」

和人「え!そんな風に見える?」

遙か「めちやくちや見える。」

カナ「どうか遙かじゃなくても分かるよ。」

和人「まじか!」

剣「まあ分からはくない。」

和人のテンションがあがっている理由はかねてより色々準備されてきたドランのフューチャーアクセスを強化するという計画だ。

ちなみに場所はブレイブ研究所だ。

カイト「少し遅いんじゃないか？」

會長「その通り。」

剣「あれ、生徒会長なんでここに？」

カイト「生徒がなにやら大きな事を起こそうとしているときいたからな。飛んできたのだよ。」

カナ「え！進路大丈夫ですか？」

カイト「安心しろ。すでに推薦が決まっている。」
すげえ。

会長「一応、私も進路決まっているぞ。」

その時空気が固まった。

周り「「えー！」」

会長「……何みんな私が勉強サボっているのかと思っていたのか？」

和人「いやだってこの間進路の話したら焦っていたから。」

会長「ああ、あの時は、周りの空気にのっただけだ。」

周り「(いや乗るなよ。)」

カスミ「みんなー準備出来たわよ。」

和人「よっしゃー早くいこうぜ！」

剣「テンション高いなおい。」

ブレイブ研究所の地下にあった一台の赤いバイクがあった。

和人「これが、」

カスミ「そうよ。ドランのフューチャーアクセスをバディファイトだけでなく、この世界でも、できるように強化した物。それがこのバイク」

和人「何故バイク？」

剣「！まさか、」

会長「そう。お前から頼まれていたあの装置も組み込んだのだ。ドランの力を採用することで初期案より強力なものになっているぞ。」

剣「まじでか？」

会長「もちろんだ。さつそくテスト行くか？」

剣「そうするか。」

カスミ「じゃあスペックとかの話ね。」

そのまま会長と剣とカスミがバイク話しているのだが、チームメイ
トが完全に置いてかれている。

和人「で、結局ドランの強化の話はどうなったんだ？」

会長「え、えーとそれはだなこのバイクにはドランのエネルギーが
入っていてそのエネルギーを使って未来の可能性つまりドランお前
の未来の可能性のカードをてにいれるのだ。」

和人「は？つまりどうゆうことだ？」

和人はまだ理解していないみたいだ。

遥か「つまりドランの力を使ってカードを手に入れるのよ。」

和人「そういうことか。」

会長「…やっと理解したか。それじゃ始めるぞ。」

剣「了解。」

和人「なんで剣何だよ。普通俺じゃね？」

剣「仕方ないだろ。未来の可能性を得る為にはこのバイクを使うし
かないだろ。でも計算上体にとてつもない負担がかかることが分
かった。その為に俺が覇龍剣をまといながらこのバイクを操って未
来の力を手に入れてやるぜ。」

和人「あ、そっか」

会長『こちらの準備は出来たそっちは大丈夫か？』

会長は別の部屋で剣に指示を出してる。

剣「いつでも行けます。」

会長「よし、行こう。」

???「そううまくいくかな？」

周り「えー！」

後ろから声が聞こえたかと思うと振り向くと、黒い塊と創一が倒れ
ていた。

カナ「創一!？」

???「ははは、ようやく戻ってきたぞ。我が力。そして、お前の時の力を奪い我は更なる力を得る。」

創一「ま、待て、カオスブレイカー。」

創一がさげんだ時にカオスブレイカーが実体化した。

カオスブレイカー「感謝するぞ創一、これでようやく完全体になった。」

創一「ふざけるな、」

オーバーロード「そうはさせるか!」

オーバーロードから炎のエネルギーをカオスブレイカーの周りにまとわりついた。

オーバーロード「早くエネルギーを使い尽くせ。」

会長「!急げエネルギーをフルで使い!それと遙か、カナ奴をフィールドを展開して奴を一時的にでも足止めするんだ。」

遙か「了解。」

カナ「私たちも行くわよ。」

レイ「了解。」

遙かとカナとレイが強力してカオスブレイカーの周りにフィールドを展開した。

会長「急ぐぞ剣、生徒会長ギアゴットであいつの足止め頼む。」

カイト「了解。ギアゴット、頼む」

ギアゴット「イエス、マイボス。」

ギアゴットがフィールドの維持を始めた。

会長「いつでも行けるぞ。」

カスミ「一応シミュレーションでは問題は無かったけれど一応気を付けてね。」

剣「気をつけろって言われてもね。まあいいか。覇龍剣!」

いつもの龍のような姿になりそのままバイクに乗った。

覇龍剣「事情は分かっている。剣、急ぐぞ。」

剣「勿論だ。ドララン頼む。」

ドララン「ほい来たー！タイムリープ発動。」

ドラランが次元を開き、ゲートのようなものを作った。

剣「行くぜ、フルパワー!!」

いきなりフルパワーでゲートに突進した。

会長「頼んだぞ。」

剣「ここは？」

ドララン「ここが時の間だよ。ファイトではここから未来竜になる。」

剣「そうだったのか。今回はどうするんだ。」

ドララン「いつもはカードに導かれてその力を得るんだけど今回の目的は新しい力だ、だからこの近くで一番大きなエネルギーのあそこに行く。」

ドラランが指指した方を向くとそこには大きなクリスタルがあった。この中には1枚のカードがある。

ドララン「あれが俺の本来の可能性だ。多分スタードラゴンワールドの力だと思うからかなりのプロテクトが、張られていたんだよ。」

剣「何でお前のだけ？」

ドララン「スタードラゴンワールドは遠い未来のドラゴンワールドだからその分その恩恵を受けるにはスタードラゴンワールドに行くくらいエネルギーが必要だったんだよ」

ドララン「この、なんて力だ。」

剣「もつとパワーを上げるぞ。急いで戻らないと行けないんだからな。」

少しずつひびが入っていくのだが、

剣「まずいこのままじゃ先にこっちのエネルギーが尽きる。」

ドラン「どうするんだ？」

剣「……どうすればいいんだ。」

ドラゴ「そうだ、私の絆の力で」

剣「それはだめだ！絶対だ。」

ドラゴが提案するが剣が否定した。

ドラゴ「(剣、お前やはり)」

少しづつひびは大きくなっているが絶対に追い付かない。

ドラン「そうだ！戦闘竜の力よ。力を貸してくれ。」

ドランが持っていた戦闘竜のカードのエネルギーを得てそのままクリスタルにぶつける。

ドラン「俺は、いや俺達は絶対に未来への希望を手に入れて見せる。絶対に。」

剣「うおー!!」

そして、ついにクリスタルが壊れた。剣がその中であつたカードを手にいれた。

剣「急いで戻らないと。」

ドラン「ああ、急ぐぞ。」

会長「あいつらは無事なのか。」

カイト「まずいこのままじゃ、フィールドが破壊されてしまう。」

カスミ「フィールドが破壊される前にあそこにいれる。」

カスミはパソコンをいじり始め、黒く染まり始めたフィールドをブレイブ研究所のファイトスペースに移動させた。

カスミ「これで壊れても大丈夫。それと和人あなたに頼みがあるの。」

和人「なんですか？」

カスミ「あなたにはこれを使ってあいつの足止めをお願いします。」

カナ+レイ「キヤー！」

遙か「キヤー！」

ダリルベルク「ぐおー!!」

フィールドをファイトスペースに移動させた瞬間にフィールドが爆発し、ファイター達が飛び出してきた。

カオスブレイカー「ははは、軟弱なり。」

ダリルベルク「くつまさかりアルファイトになるとはな。それにしては強すぎやしないか？」

カオス・ブレイカー「ふっ、我をなめるなよ様々な世界を侵略してきたのだからな。何、心配するなお前たちもこの力で汚染して我的手の下にしてみせようぞ。」

カナ「まだよ。まだ負けるわけにはいかないのよ。」

遙か「私もまだ負けない。」

和人「俺もいるぞ。」

カナと遙かの前にブレイブ・ウォーリアーに変身してた和人が現れた。

和人「こっからは俺のターンだ。」

カオスブレイカー「ふっ、面白いお前たちのその強い意思を潰すのは楽しそうだな。」

カオスブレイカーはニヤリと笑ったかと思うと再び襲いかかった。

カスミ「このままじゃ二人も倒れてしまう。どうすれば？」

カスミが考えていると、外部からのアクセスがきた。

カスミ「こんな時に誰よ！もしもし、」

剣『もしもし、俺です。もうすぐそっちに戻れそうなんですけどそっちの状況はどうなっていますか？』

カスミ「剣、良いところに。これなら……」

カオスブレイカー「ようやく力尽きたか。」

ついに最初から戦っていた者達が倒れてしまつてギアゴツトも力尽きた。

残っているのは和人だけになった。

カオスブレイカーがカナと遥かに自分の力を与えようとしたときにカオスブレイカーとカナと遥かの間でゲートが現れた。

カオスブレイカー「何!?!」

ゲートからバイクが現れつつ、カオスブレイカーに突進した。

ドラン「和人待たせたな、和人。反撃返しだ。」

和人「待つてたぜドランさあ、始めようぜ!」

未知なる魔法

カオスブレイカー「ふっ、ようやく戻って来たか、貴様から時の力を奪ってやろう。」

和人「それはどうかな。こっちは剣もまだファイトできる。2対1なら負けないぜ。」

カオス「それはどうかな。その剣とやらの様子を見てから言ったらどうだ？」

和人「え!？」

和人が後ろを向くと剣が苦しそうにしていた。

剣「くっそ、なんでだよ。なんで体が動かない上に胸がくるしいんだよ!」

カスミ「剣くん!？」

カナ「どう言うこと? 何で剣が」

カイト「おのれ、剣に何をした!!」

カイトの叫び声にたいして、カオスブレイカーは

カオス「お前達は気がつかなかったようだ。そいつはもう命をかけたファイトをすることができないんだよ!」

周り「「え!？」」

カオス「お前達は気づかなかったのか? まあ、お前達のような生ぬるい世界で生きていたのだから仕方ないか。そいつはモンスターを殺して仲間の力も失ったことで心にかなりのダメージが戦いたくても戦うことはできないよのだよ。」

確かに剣はあの事件以降ファイトをしていない。

まさかこんなことになるとは。

和人「なら俺一人でも。お前を、」

???「その辺にしときなよ。カオスブレイカー。」

いきなり少年のような男の声が聞こえたかと思うと、いきなり上空にゲートが開いた。

中から一人の二十歳位の少年が現れた。

和人「お前は誰だ?」

??? 「さあ、誰だろうね？」

創一 「なら、何故カオスブレイカーを知っているんだ？」

??? 「フフフ、君には計画に協力してもらったからねその問いには答えてあげよう。僕はねカオスブレイカーをこの世界に呼んだものだよ。」

創一 「呼び寄せた!? どういうことだ!!」

??? 「こいつはね、君とダークネスの刺客が戦った時、少しだけどこちらの世界とオーバードロード達がいた世界が繋がった。その時僕が呼び寄せたまではよかつたんだよね。そこまではよかつたんだよね。」

創一 「お前にとって想定外だったのは俺が手に入れたことか？」

??? 「それもある。それとこちらの世界に来るときに他のプラネットワールドのモンスター達が散り散りになってしまったようだからな。それで君にはその散り散りになったモンスター達を回収してカオスブレイカーを完全復活させたかったのだよ。」

創一 「つまり、お前はあの時の!？」

??? 「そうだよ、そして君は見事に利用された。」

創一 「このやろう!」

カナ 「というかい加減名乗ってくれないか?なんて呼べばいいかわからない。」

アンノウン 「まあ、確かにそれもそうだね。僕はアンノウン。覇龍剣、君によって葬られた者達の亡霊だよ。」

ドラゴ 「なんだと!? お前はあいつらの仲間か!？」

アンノウン 「まあ、今回はあいさつだよ。それじゃあまた会おう。」

剣 「待て、お前達!!」

アンノウン 「戦えない人間は用は無い。これでもくらえ!!」

アンノウンの手から魔力の塊を剣達に向かって投げつけた。

カイト 「みんな、逃げろ!!」

??? 「そこまでだ！」

いきなり謎の人物が剣達の前に現れ、アンノウンが放った魔力を防いだ。

アンノウン 「!!、貴様か、まあいい。さらばだ。」

そのままアンノウンはゲートの中に入って行ってしまった。

カスミ 「助けていただきありがとうございます。それであなたは？」

その人物顔がフードで見えないが声を聞くと男性のようだ。

??? 「名乗る者でもない……さらばだ。」

和人 「待て、お前あいつらについて何を知っているんだ。あいつらは何者だ！一体何を知っている！」

??? 「……さらばだ！」

和人 「させるか！フィールド展開。」

和人がフィールドを展開し、謎の人物を閉じ込めた。

和人 「ここから出たければファイトしろ。そして俺が勝ったらお前の知っていることを全て教えろ！」

??? 「いいだろう。我に勝てるのならな。」

二人はふあいて

二人 「オープン・THE・フラッグ」

和人 「スタードラゴンワールド」

バディクロノグラフドラゴン

手札6 ゲージ2 ライフ10

??? 「大魔導！」

バディ???

手札6 ゲージ4 ライフ15

《大魔導》（花蕾さん提供）

フラッグ

攻12000／打撃力1／防11000

??君は全てのワールドの魔法が使える。

??君の最初の手札は6枚、ゲージは4枚、ライフは15になる！

??このターン中に君が使った魔法の種類分、このカードの攻撃力＋5000、防御力＋5000、打撃力＋1！

??君の手札の魔法全ては、追加で「??」【使用コスト】ゲージ1を払う。」を得る。

??このカードは君の場のカードとして扱い、破壊されず、フラッグエリアから離れず、能力を無効化されず、このカードの上にフラッグのカードは重ねられない。

そのフラッグは魔方陣のようなものが書かれた紫色の禍々しい色をしていた。

カナ「何あのフラッグ？」

レイ「私のデータベースにもないフラッグよ。」

ファイトの映像はカナ達が見学していると、謎の人物が謎のフラッグを出してきた。

??「これが私の研究の成果だ。このフラッグはあらゆるワールドの魔法を使用することができ、ライフ15ゲージ4手札6からのスター

トだ。』

カイト「なんとめちやくちやな。」

会長「あらゆる魔法を使えるだど！ソリティア出来そうじゃないか。」

カナ「関心してる場合じゃないと思いますけど。」

カスミ「こんなものがあるだなんて。」

???「まあコストとしてあらゆる魔法は使用コストにゲージ1払う。を追加されるがな。」

ドラゴ「なんてフラッグだ。油断するなよ。和人。」

和人「当たり前だ。必ず勝つぞ。」

???「私のターンドロローチャージアンドロー、ゲージ1払い、キャスト、竜王伝ライフ+1してゲージ1追加してワンドロー。更にキャスト、ナイスワン、ゲージ2を払い、2ドロロー。更にキャスト、ハイパーエナジーゲージ1払い、ゲージ4追加。」

ライフ15 ゲージ7 手札7枚

エンシヨントワールド、ヒーローワールド、マジックワールド一体いくつのワールドの力を使うつもりなんだ!?

アタックフェイズ

???「フラッグは魔法を使った数分攻撃力+5000 防御力+5000

0 攻撃力+1使った魔法は4枚よって今の状態は、」

大魔導

攻撃27000 防御26000 打撃4

「この状態でファイターを攻撃。マジック・ブラスター!!」

フラッグが大量の魔力が解き放たれ和人を襲った。

和人「くっ、」

ライフ10↓6

「ターンエンドだ!」

ライフ15 ゲージ7 手札7

和人「俺のターンドロージャーアンドロー、いきなり行くぞ！
クロノグラフドラゴンをレフトにバディコール。更に未来竜 ドラ
ンをライトにコール。」

ライフ7 ゲージ1 手札5

クロノグラフドラゴン

攻撃10000 防御7000 打撃3

2回攻撃

未来竜 ドラゴン

攻撃3000 防御1000 打撃1

強化携帯とその前の姿、カードゲームではあまりない光景だ。

アタックフェイズ

和人「クロノグラフとドラゴンの連携攻撃。」

???「キヤスト、ドラゴンシールド赤竜の盾ゲージ1払いダメージを
0にして、デツキの上から3枚をドロップゾーンに送る。魔法を使っ
たことで防御力が増加する。」

今度はドラゴンワールドのドラゴンシールドが現れた。

和人「まだまだシン・タイムリープ発動。手札を1枚捨てて、デツ
キからクロノグラフを超越未来竜王 ヴァリアブルコード・テンペス
トをコール。」

超越未来竜 ヴァリアブルコード・テンペスト

サイズ4

属性 未来竜／ネオドラゴン

攻撃23000 防御12000 打撃3

コールコスト(ゲージ3を払い、ヴァリアブルコードと名のつくモ
ンスターの上に重ねる。)

■このカードが未来竜の効果でコールされたか、ソウルにヴァリア
ブルコードがあるのならこのカードのサイズを1減らす。

■このカードが登場した時に発動できる。山札のカードを3枚選び、このカードのソウルにいれるその後山札をシャッフルする。

2回攻撃 ソウルガード

クロノグラフが手を上に挙げるとゲートが現れその中にクロノグラフが入った。その後中から今までより更に大量の武装を搭載し、一回り大きくなったヴァリアブルコードが現れた。

和人「これがヴァリアブル・コードから受け継いだ力だ！効果発動。デッキから3枚をソウルに入れる。俺はエルガー・カノンを3枚ソウルに入れる。」

ヴァリアブルコード

攻撃力26000 防御12000 打撃6

2回攻撃。

和人「ヴァリアブルコードでファイターを攻撃。」

「受けようではないか。」

ライフ15↓9

和人「2回攻撃。」

「ゲージ1払い、キャスト グリムリンの嘲笑攻撃 攻撃を無効化する。」

和人「ターンエンド。」

ライフ7 ゲージ0 手札4

「おっとその宣言は少し待ってくれないか、キャスト天唱の祝福このターン攻撃した回数は3回よってデッキから3枚めぐりその中から2枚選び手札に加え1枚ゲージに送る。」

ライフ10 ゲージ5 手札6

お互いに1ターン目が終わり、場を確認すると少しだが謎の人物の方が有利に見える。だがカイトにはある違和感を感じていた。

カイト「(きっきの防御魔法、もつと他のカードがあつた筈なのにどうして?)」

???「私のターンドロージャーアンドドロージャスト、ゲージ1払いアクセルエンドデッキから5枚をドロップゾーンに送り、ゲージ1追加。」

カイト「今度はデッキを減らした? 一体何をするつもりなんだ?」
???「そろそろこのフラッグの真の力を見せてやろう。ゲージ5を払い、キャスト七天魔導書!!」

手札6 ゲージ0 ライフ10

七天魔導書 (花蕾さん提供。)

魔法

攻撃力6000 / 打撃力2

■【設置】

■【使用コスト】ゲージ4を払う

■この魔法はバディにすることが出来る

■相手のモンスターにサイズを+1する

■このカードが攻撃したとき、デッキから《魔法》をコストを払って使用してもよい

■このカードは場から離れない

■このカードは場に二枚まで設置できる

■サイズが無いモンスターにサイズ0を与える

周り「!!」

謎の人物がカードを掲げるとその威圧がフィールドだけでなくフィールドの外まで伝わってきた。

カナ「何これ!?!」

???「この魔法はバディにすることが出来る設置魔法、そして、攻撃

することができ、相手の場のモンスターサイズのサイズを全て1増やす。これこそが私の最高傑作これで私の勝利だ。』

カードから黒い霧が出て、和人を飲み込もうとしていた。

会長「和人！何という力だ。」

カイト「あんな魔法まで使えるのか。」

遙か「和人！」

みんなが心配するなか、黒い霧が和人を襲おうとした時和人が手札を1枚を掲げ力だ。すると大量の光の槍が霧を切り裂いた。

???「なんだと!？」

和人「俺が使用したのはシャイニング・レインその魔法を無効にするぜ。」

???「な、なんだと!?!私の最高傑作が姿を見せることなく無効化させられただど!？」

和人「どんな効果を持つカードでも発動出来なきや意味ないぜ。」

???「確かにその通りだ！だが私はまだ私は負ける訳にはいかない。」

アタックフェイズ

???「我で攻撃。使った魔法は2枚よって打撃力は3だ！」

和人「グハア。」

ライフ3

???「我はこれでターンエンド。」

手札6 ゲージ0 ライフ10

和人「俺のターンドロージャーアンドロー!!」
アタックフェイズ

和人「ヴァリアブルコードとドランで、ファイターに連携攻撃。」
???「キヤスト、ゲージ1を払いプロトバリア攻撃を無効化しゲージ1追加。まあプラマイ0だがな。」

和人「だったらヴァリアブルコードで2回攻撃。」
???「ノーガードだ。けどお前はもう何も出来まい。」
ライフ4

和人「まだだ。ドランのフューチャーアクセス発動。ゲージ1払いデッキの上から5枚見てその中の（未来竜）をコールする。デッキオープン!!ゲット現れる時空竜フューチャー・クロック・ドラゴン」
時空竜 フューチャー・クロック・ドラゴン
攻撃力20000 防御力6000 打撃力5
ドランからいつものようにタイムリープしてフューチャー・クロック・ドラゴンが現れるとそのままヴァリアブルコードがサイズオーバーで場を離れた。

???「馬鹿なそんなことが。」
和人「これが未来の力だ!!フューチャー・クロック・ドラゴンでラストアタック!」
???「:負けてしまったがくいはない。」
ライフ0

勝者 朝倉 和人

和人「俺の勝ちだ。さあ、あいつらについて知っていることを全て教えろ!!」

「分かった全てを話そう。といっても、

我もあまりあいつらについて知らないのだ。」

周り「「え!?!」」

??? 「あ、紛らわしい言い方をしてしまった。こちらよりもそこにいるドラゴンの方が知っていると言うことだ。」

ドラゴ「と言うことはやはりあれは、奴らなのか。」

??? 「その通りだ。」

剣「ドラゴ一体何を話しているんだ。」

??? 「その前に自己紹介をしよう。」

そういうと謎の人物が名乗った。

ジョーカー「我、いや私はマジックワールドの外道術師団団長 トリニティジョーカーだ。そして、お前達と戦ったダークネスの上司にあたる人物だ。」

周り「……………は?」

覚醒の霸王龍編

ダークネスとジョーカーの秘密

和人「ダークネスの上司だと!? どういうことだ! なぜ俺たちを助けた!」

衝撃の真実に全員が驚き、同様していた。

なぜならダークネスは様々な悪事を働き、裏で暗躍した謎多き人物だったからだ。

ジョーカー「我々の目的はあの少年のバディだ。その為に非情な様々なことを引き起こしたのだ。」

カイト「なんで、なんであそこまでの事件を引き起こしてまでそいつを呼ぶ必要があつたんだ?」

和人「生徒会長の言うとおりだ。何でそんなことをした。あれだけのことをしてただですむとはお前も思っていないだろ。」

剣「(そうだ。ダークネスは様々なところで事件を引き起こしていた。ガイアスカルとドラグーンを封印してその後ガイアスカルを暴走させたり、ヤミゲドウやアジ・ダハーカなどを使って町中を破壊していったあそこまで大きなことを起こしてまで一体何が目的だったのか未だに分かっていない。)」

剣がそんなことを考えているとジョーカーが口を開いた。

ジョーカー「それはだな……それを説明するにはまずはあれから話さなければならぬ。君達を襲った奴らの正体について、奴らは、」

ドラゴ「様々な世界の戦などで無念の思いで散っていった者達の怨念の集合体なんだろ。」

外道が話そうとした瞬間ドラゴがいきなり喋りだした。

周り「!?!」

剣「ドラゴ何でそんな事知っているんだ?」

ドラゴ「それはだな。」

ドラグーン「待ってくれ。」

剣のデツキケースからドラグーンが現れた。

ドラゴ「ドラグーン、どうしたんだ。」

ドラグーン「俺もこいつの話には興味がある。俺も話に参加させてもらえないだろうか。さつきまでは喋る人数が多くなならないように黙っていたがな。」

剣「(ドラグーンもこいつらに利用されたからそれなりの思いがあるんだろうな。)」

和人「そういうメタいことをいうんじゃない。」

ジョーカー「…話を戻そう。まずは約100年ほど前に遡る。ある者達が各地の戦場から生物の魂を集めていたのだ。」

カナ「ちよつと待ってよ。魂を集めるってそんな事が可能なの?」

ドラゴ「可能だったからあんな悲劇が引き起こったんだよ。」

カナ「悲劇?」

ドラゴ「そいつらはな。怨念の集合体を自分達の体と融合して、凶悪なモンスターになったんだよ。そしてその力を試すために世界を破壊を始めたんだ。」

剣「そんな事が。」

ジョーカー「奴らは世界を我が物にしようと動き始めたのだ。」

ドラゴ「その被害は普通じゃなかった、いくつもの世界が崩壊してしまいそうになったからな。」

ドラグーン「そして、そいつらに対抗するために作られたのが俺達霸王軍だ。」

周リ「!!」

まさかここで霸王軍の名前が出てくるとは、だからドラゴやドラグーンが話に参加しているのか。

ジョーカー「まあ今は霸王軍の話はいいだろ。今回はあいつらに新しい勢力が加わっているのだ。」

ドラゴ「新しい勢力とは?」

ジョーカー「タイムドラゴン。時間を操る力を持ったモンスター達だ。」

周り「!!」

今日何度目か分からない驚愕の真実。あのアドの塊のようなカテゴリーが敵になるとは。

和人「な、なんだと!」

カイト「(さすがの和人もこれには驚くしかないか。)」

和人「そ、そんなの出て来たら

作者、ファイトシーン書くことができるのか?」

創一「そこじゃないだろ!」

カナ「まあ確かにそうね。ファイトするたびにミスしてるからね作者。」

レイ「論点ずれてるわよ。タイムドラゴンが敵として出て来るのはかなりの強敵ってことよ。」

ジョーカー「それだけじゃない。タイムドラゴンで最も警戒するべき能力は様々な次元、時間からモンスターを呼び寄せることができる力を持っているということだ。」

剣「そんなのめちやくちゃじゃないか!」

カイト「ということは、敵の勢力はこちらの何倍もあるということか。」

ドラン「……」

和人「ドラン?どうしたんだ。」

ドラン「!!いや、なんでもない。」

和人「それならいいけど。」

カスミ「……」

カナ「カスミさんさつきから何でそんなけわしい顔をしているんですか？」

カスミ「あ、いやなんでそんなことを知っているのよ。」

ジョーカー「それは我々外道術師団が奴らに襲われたのだよ。」

周リ「!!」

外道「あれは、我々は今から約1000年前の話だ。我々が生きていたのだがいきなり我々のいたところに大きなゲートが開いたかと思うと我々はすぐにそのゲートに飲み込まれた。何も抵抗することが出来なかつた。ただし我とダークネスを覗いて。」

カスミ「なぜあなた達だけ？」

ジョーカー「それは、……我々はその場にいなかったのだよ。我とダークネスはマジックワールドの調査をしていたのだが我々の拠点に異変があり急いで戻ってみればそれはもう後の祭りだった。」

カスミ「ではなぜその事を知っている！しかもあなた達は1000年間これといって活動を確認していない。一体何をしていたの？」

ジョーカー「一つずつ答えていこう。我々はその場を徹底的に調べた。痕跡をたどると彼らは未来に向かったことが分かった。我々は影を潜めながら仲間を追っていたのだ。活動が確認出来なかったのはちゃんと痕跡を消していからな。しかし、90年程前謎の反応があった。我らがそこにいくと我々の仲間がいた。しかも全員死んでいた。」

カスミ「！なんでそんなことに？」

外道「彼らは死ぬ直前に殺ったやつらの事を痕跡として残していた。それによれば呼び寄せたのはタイムルーラー・ドラゴンだったそう。奴は自分に協力しろと脅迫したそうだが、仲間達はそれを拒否したから殺されたらしい。」

カナ「そんな！」

あのドラゴットがそんなことをするだなんて誰も想像できなかった。

ジョーカー「我々は奴に復讐をするために情報と力を集めた。その

為にドラグーンとガイアスカルを封印、エネルギーを取ったのだ。そして奪ったエネルギーを使いヤミゲドウやアジ・ダハーカの力を町を襲わせた。」

カスミ「何のために？」

ジョーカー「奴らを誘いだす為と我々は考えていたが、正直な話……八つ当たりしたかったのだろうな。仲間達を救えなかったことに対する自分たちへの。」

その言葉に誰も何も言えなかった。

もしも自分がその立場にたつたとしたらもし、仲間が死ぬ時に自分が何も出来なかったとしたら、そう考えるとその場にいた全員が固まってしまった。

数分後バディポリスがやってきて

ジョーカーといつの間にかいたダークネスが連行された。

剣達も事情聴取されたが1時間位したら解放された。

1年で何回もされた為かなり短かった。

創一「悪かった。迷惑をかけて、」

帰り道で創一とカナは、一緒に帰っていった。

カナ「そんなことないよ。創一は自分がやったことの責任をとろうとしただけなんだから。」

創一「そうだとしても、俺はお前達を危険な目に合わせてしまった。すまない。」

カナ「そんなの誰も思っていないよ。……あ、そうだ今日ってクリスマスイブだからはい、クリスマスプレゼント。」

カナはそう言っつて綺麗にラッピングされた箱があった。

創一「こ、これって？」

カナ「そうだよ。クリスマスプレゼント開けてみてよ。」

開けてみると中には黒い時計が入っていた。

創一「ありがとう、俺なんかの為に。」

カナ「そ、そんなの決まってるじゃない。」

創一「そ、そうか。」

カナ「創一は間違っつていないからね。これからも一緒に頑張ろ。」

創一「そうだな。これからもよろしくな。」

剣「……すまなかった、何も出来なくて。」

ドラゴ「……剣。」

ドラグーン「……」

剣は、カオスブレイカーが襲つて来たとき自らの恐怖に勝つことが出来ずにただその場で苦しむことしか出来なかつたことをかなり気にしていたようだ。

剣「俺、どうしたらいいかな？次、アンノウンが攻撃を仕掛けて来たら俺は……」

覇龍剣「ならば特訓だ。」

剣「え？」

覇龍剣「お前が強くなりたいのなら特訓しかあるまい。明日からあるところで特訓をするぞ。」

剣「一体どこでするんだ？」

覇龍剣「決まっているだろう。レジェンドワールド。ドラゴの故郷だ。」

戦国の竜王

剣 side

レジェンドワールド

剣「ここは？」

ドラゴに連れてこられた場所は荒れた城跡だった。

長い間放置されたようで、あちこちに崩壊しそうな場所があるが何とか保っているような場所だ。

ドラゴ「ここは、我らがばらばらになった最終戦の前に全霸王軍が揃い、戦いの前の準備をしていた場所だ。そして、霸王軍に何かあった時の集合場所でもあった。」

剣「それがどうしてこんな、荒んじまってしまったんだ？」

ドラゴ「戦いが始まってすぐここも戦場になった。それから復旧されてないんだろ。」

剣「じゃあなんで俺をここに？」

それはだな。覇龍剣がアイツの反応を感じたようなんだよ。

剣「アイツ？」

ドラゴ「かつてドラゴンワールドの霸王軍を率いていた戦国の霸王龍 バーニング・イクサ・ドラゴン！」

剣「戦国の霸王龍？霸王龍ってドラゴだけじゃなかったのか。」

ドラゴ「我だけのわけなからう。覇龍剣は各ワールドにそのワールドを指揮するリーダーそれが霸王龍を決めてその者達を主軸にして戦ったのだからな。そして戦いの後我は仲間達と合流するためここに訪れたのだが我は戦に出会った。だが、やつは戦いの中で傷つきその傷を癒すためにここで眠っていることにしたのだ。」

剣「え、じゃあこの辺りに寝ているのか？」

ドラゴ「そうだそして戦った奴等が蘇った。ということであいつも起こして、戦力アップとお前の根性を鍛えてもらうことにした。」

剣「へー。でどうやって起こすんだ？」

ドラゴ「剣、覇龍剣を地面にさしてみろ。」

剣「？分かった覇龍剣！」グサ

覇龍剣「目覚めよドラゴンワールドの霸王龍!!」

覇龍剣から赤いエネルギーが周りに放出されると、剣達がいるところから数メートルの地面から1枚のカードが飛び出してきた。

カードが赤くなり、中から炎を吹き出し球体の炎を形成して大きくなっていく。

ドラゴ「そろそろ起きる時間だぞ!キズも十分癒えただろ。」

???「ああ、そうだな。」

謎のの声が聞こえたかと思うと大きくなっていく球体がいきなり爆発した。

周り一帯が煙に包まれる。

剣「くっ、何も見えない。」

辺り一帯が煙が、いきなり晴れた。

ドラゴ「元気そうだな。」

???「ああ、そうだろ。何十年も寝ていたのだからな。」

炎の球体が龍を纏うための鎧になった。更に、右手に矛を持ったドラゴと同じくらいの大きさの赤い龍がいた。

イクサ「うん?ドラゴ、その少年は誰だ?」

ドラゴ「ああ、それはだな。この少年はな、我のバディだ。」

剣「弓風 剣だ、よろしく。」

イクサ「そうか、俺は戦国の霸王龍 バーニング・イクサ・ドラゴンよろしく。それとエクス、こいつがお前のバディなのだな。」

ドラゴ「その通りだ。(まさかこいつも気づいたのか?)」

イクサ「……お前、戦いに恐怖を抱いているな。」

剣「!!」

覇龍剣「やはりこいつは戦いに関係することとなるとその勘のよさは霸王軍でも随一だな。」

イクサ「いたのか、覇龍剣。久しぶりだな。」

覇龍剣「ああ、やつらとの戦い以来か?」

戦「そうだな。あの時は、大変だったな。それでここに来たのはそ

の小僧を鍛える為か？」

覇龍剣「察しがいいな。」

戦「ならばファイトだ！俺の特訓にお前が耐えられるかどうか試してやる。」

剣「分かった。フィールド展開。」

剣がファイトを了承し、いつものフィールドを、展開した。

戦「いつでも良いぞかかってこい。」

剣「分かった。それじゃあ、始めよう。」

二人「オープンTHE、フラッグ。」

戦「ドラゴンワールド！」

ライフ10 ゲージ2 手札6

剣「霸王 降臨」

ライフ9 ゲージ2 手札7

イクサ「ほう、霸王 降臨か。そいつを使えるということはそのそこ強い精神力を持っているようだな。」

剣「え？それはどういう意味だ？」

イクサの変なことをいいだしたので不思議に思った剣は質問をした。

イクサ「お前ら話してないのか？」

覇龍剣「話してなかったのか？」

ドラゴ「ああーそういうえば話して無かったな。」

剣「おい、何がどういことなんだ？」

ドラゴ「ええとな。霸王 降臨はな、お前も何回か感じていたと思うがこの力が人間が使うとな普通のファイトよりも、体力を使うんだよ。その証拠に、お前何回かファイト後に倒れただろ。あれはそういうことだよ。」

剣「え！あれってそういうことだったのか。」

じゃああの後見たあの映像ももしかして、

剣「じゃあ、」

イクサ「もういいだろ、そのフラッグについてはその辺でいいだろ。」

剣が前から気になっていたことを話そうとすると、イクサが話を止めてファイトを始めようとした。

イクサ「俺のターンドロージャーリアンドロー。ターンエンドだ！さあ、お前の実力を見せてみる。」

ライフ10 ゲージ3 手札7

剣「何もしないのか？」

ドラゴ「ああ、あれがあいつの戦い方だ相手の全力を受けきり、それを越える力でねじ伏せるのがやつのやりかただ。」

剣「なるほどな。俺のターンドロージャーリアンドローレフトに、覇竜 システミックダガー、ライトにバディコール。絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー、更にシステミックの効果でチャージャンドロー。」

手札7 ゲージ2 ライフ10

覇竜システミックダガー

攻撃2000 防御2000

打撃2

絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー

サイズ2

攻撃10000 防御5000

打撃2

システミックダガーとドラゴが並び立った。

イクサ「久しいな、その姿も、」

剣「ドラゴの効果発動。ドロップゾーンの覇龍剣を装備する。」

覇龍剣

攻撃10000 打撃2

「2回攻撃」

すでにドロップゾーンに落ちていた覇龍剣を手に取り、龍の姿に変わった。

イクサ「!!すでにその姿になれるとはな。」

アタックフェイズ

剣「覇龍剣で攻撃。」

イクサ「受けよう。」

ライフ10↓8

剣「2回攻撃。」

イクサ「受ける。」

ライフ8↓6

剣「更にいくぞ!!ドラゴで攻撃。」

ドラゴ「おう。」

イクサ「キヤスト、ドラゴンシールド緑竜の盾。攻撃を無効化して
+1。」

ライフ7

剣「ドラゴの効果発動。デツキトップオープン引いたカードは覇竜
マツハブレイダー、属性は霸王軍だよって覇竜 マツハブレイダー
をドロップゾーンからセンターにコール。」

ドラゴがイクサに、攻撃を決めた後、デツキトップが光センターに
マツハブレイダーが現れた。

剣「更に、システムミックダガーとマツハブレイダーでファイターに
連携攻撃だ!」

イクサ「キヤスト、ドラゴンシールド青竜の盾、攻撃を無効にして
ゲージ1追加する。」

ゲージ4

剣「くつターンエンドだ。」

ライフ10 ゲージ1 手札7

イクサ「なるほどな。確かに少しはやるようだな。俺のターンド
ローチャージアンドドロ、ゲージ3を払い、センターにバディコー
ル。俺自身、戦国の霸王龍 バーニング・イクサ・ドラゴン」

戦国の霸王龍 バーニング・イクサ・ドラゴン

サイズ3

ドラゴンワールド

属性霸王軍／霸王龍

攻撃力20000 防御7000 打撃3

「コールコスト」ゲージ3を払い、デツキの上から2枚ソウルに入れる。

■このカードが登場した時、ドロップゾーンのカード1枚選び、選んだカードをこのカードのソウルに入れる。

■”連刃”このカードが攻撃する時相手の全てのモンスターも相手に攻撃する。

■このカードが相手のモンスターを破壊した時、相手に2ダメージ与える。

『俺達の戦いの歴史を後世に残してみせるぜ!!』

アタックフェイズ

イクサ「俺自身で参る。バトルだ！エクス、システミックダガー、マツハブレイダーとファイターに同時攻撃！」

剣「初代アジ・ダハーカと同じ効果発動だ!!？」

システミックダガーが襲いかかってくると矛で防ぎ、ドラゴが反対側からきて攻撃しようとする、ドラゴの攻撃を避けて、システミックダガーつかみドラゴに向かって投げた。

ドラゴ「くっ。」

更にたたみけるように追撃をし剣にぶつけた。

ドラゴ+剣「ぐっは！」

ライフ10↓7

剣達が動けなくなっているところに、マツハブレイダーを捕まえてドラゴに向かって投げつけた後で矛で全てのモンスターを貫いた。

ドラゴ「すまない、剣。」

剣「ドラゴ!!」

イクサ「そして、俺は破壊したしたモンスター1体につき2ダメージ与える効果を持っているこれでも食らえ！」

イクサが炎を矛を与えて剣にむかって投げつけた。

剣「ぐっは。」

ライフ7↓1

イクサ「俺はこれでターンエンド。諦めよ小僧、今のお前では俺を倒すことなど不可能だ。それに、傷つくことに恐怖している今のお前では我を倒すことはおろか、あいつらを倒すことなど不可能だ。」

ライフ8 ゲージ1 手札5

ドラゴ「確かに傷つくことを恐れては戦いにもならないと我も思う。だがな、我のバディならば乗り越えて見せよ。」

俺は、一体何に怯えていやるんだ？

あの時、カオスブレイカーと戦わなければたかさんの物を失っていたのは分かっていた。

あの時は、和人が何とかしてくれたから助かったけどもうあんなことは、仲間が危険な目にあうようなことは繰り返させない!!

剣「まだだ、俺は一人でも、勝って見せる俺のターンドロージャー
ジアンドドロ。いくぞ!!俺は、「もういい!」何!?!」

イクサ「お前は今、一瞬でも恐怖を乗り越えて俺に戦いを挑もうとした。ということとは、これを繰り返すことが出来れば、完全に恐怖を乗り越えることが出来るはずだ。」

ドラゴ「あいかわらぬちやくちやな理論だな。」

覇龍剣「ああ、だがそれが一番効果がありそうだ。」

イクサ「それじゃあ、始めようか。俺の特訓は甘くはないぞ!」
剣「おっす。」

剣「え、何これ？」

剣は今いる状況を理解することが出来なかった。

剣の前には崖があり、その上から鉄球があった。

イクサ「今からこの鉄球をお前に向かっておもいつきり、ぶつける。それを避けるのではなく、受け止める。」

剣「は!?!そんなこと出来るわけないだろ。」

イクサ「うるさい!やれ。とつとと始めるぞ。あ、ちなみに後ろにはお前の昼飯の弁当を置いておいたから避けたらお前の昼飯が無くなるからな。」

剣「鬼すぎるだろ!!」

イクサが鉄球を動かし、鉄球がこつちにきた。

剣「まじかー!!ぎやあー!!」

ドラゴ「……………」

覇龍剣「……………」

数分後弁当が潰れてしまった。

数時間後

剣「ぎやー!!たーすーけーて!!」

剣は今全速力で走っていた。

ドラゴ「恐怖に打ち勝つためとはいえ、」

覇龍剣「流石にあれはないだろ。」

ドラゴ「ガチなほうだしな。」

何か逃げないと行けないと行けないということだけを考えて逃げていた。

イクサ「どうした?早く逃げないと死んでしまうぞ。」

剣「この鬼がー!!」

そう、剣は今10体のモンスターに追われていた。
理由は簡単だ。イクサが刺激して、剣に戦わせようとしているのだ
が、

イクサ「さあ逃げろ！さもなくなれば死んでしまうぞ。」

剣「くつこの、くつそー!!」

数十分後

捕まってしまう傷だらけになった剣を見て哀れんでいたドラゴ達
なのであった。

二つの勇気

カナ side

剣が地獄の特訓が2日目に突入し、剣がひどい目にあっていると、同じチームメンバーのカナはというと、

カナ「いくよ。ガイアスカル」

ガイアスカル「いつでもかかって来るがいい。」

レイ+カナ「ブレイブ!!ブレイブ・ゴリラ!」

レイが新たなブレイブモンスターであるブレイブ・ゴリラを呼び出し、そのままレイとブレイブした。レイの腕がゴリラの腕になりガイアスカルの砲撃代わりの骨を壊し、ガイアスカルに向かっていく。

レイ+カナ「どうよ。これならあなたの攻撃なんて軽いわよ。」

ガイアスカル「そのようだな。ならばこれならどうだ?」

そう言うとガイアスカルは自ら突進した。そして、レイ+カナとぶつかり合いをした。

カナ+レイ「こんなの、キャー!!」

ブレイブ・ゴリラでパワーアップしたカナ+レイだったがガイアスカルにパワー負けをしてしまい、かなり吹き飛ばされた。

京子「まだよ。ガイアスカル畳み掛けて。」

ガイアスカル「そんなポケ○ンみたいに我に命令するな。」

カスミ「そうだよ。もっとバディなんだから連携を大事にしないと。」

チーン!

カスミ「あ、出来た。……うんやっぱり私って天才で最高ね。」

カスミさんが何か作っていた物を見て感動しているみたいだけどほっとくことにした。

私はガイアスカルと特訓をしていた。

最初は京子さんとカスミさんとこの間の騒動であちこちにダメに

なった機材を片付たり、ブレイブ研究所の修理をしていたんだけどあらかた終わって、実際にちゃんと動くかのテストを今しているんだけど、どうせならってことでガイアスカルと模擬戦をしている。それにしてもガイアスカルは強い。

接近戦になれば、その巨大な体でパワー勝負を挑んできてまず勝てない

だがらといって距離をとって攻撃するために離れようとするとも身の周りの骨を使ってガイアスカルは距離をとらせないようにしている。

カナ「だったらブレイブ、ブレイブ・イーグル!」

ブレイブ・ゴリラのブレイブを解除して、ブレイブ・イーグルをブレイブすることにしたがブレイブを解除した瞬間、目の前にガイアスカルの骨が迫ってきていた。

カナ+レイ「!!」

そのままぶつかり、吹き飛ばされたがそこにブレイブ・イーグルが、駆けつけそのままブレイブして壁にぶつからずにすみ、空を飛べるようになった。

カナ+レイ「はあ、ビックリした今度は空中戦で勝負よ。」

ガイアスカル「ほう、ならばこれならどうだ。」

ガイアスカルはカナ+レイに向かってエネルギー弾を体のあちこちから放った。

カナ+レイ「え!そんなことできるの!?!」

何とかよけようとするが何発か被弾してしまった。

それが原因で機体のバランスが崩れてしまい、カナ達は近付くことができず、そのまま削り切られてしまったであった。

カスミ「あなた達、大丈夫?」

カナ「ええ、何とか。」

レイ「空中戦にすれば何とかなると思ったんだけどね。」

京子「しょうがないわよ、私のバディ最強なんだからね。」

ガイアスカル「ただの大きさの差のような気がするのだがな」
レイ「それは仕方のない話なのよね。」

確かに、大きさはどうにもならないわよね。

カナ「あいつらもかなり大きかったよね。」

レイ「そうね。カオスブレイカーや、話によるとタイムドラゴンもらしいしね。」

カナ「そんな敵と私達戦えるのかしら。」

私はかなり不安になった。パワー勝負になれば私達はほとんど勝てない。私には剣や、遙かのようなむちゃくちゃな強さはないのだから。

カスミ「大丈夫よ。そのための秘密兵器はすでに作っているから。」
レイ「え?。」

カナ「それはどういうことですか?。」

カスミ「これよ。」

そう言うとカスミさんは私達にノートパソコンの画面を見せてきた。

そこにはレイと二つのブレイブがあった。

カナ「カスミさん、これは?。」

カスミ「ふ、ふ、ふ、聞いて驚きなさい、これはねダブルブレイブの設計図よ。」

周り「ダブルブレイブ!。」

聞いたことのない単語に驚いていた。

カスミ「さつきブレイブ解除から再ブレイブの時に攻撃を受けてしまったでしょう、だからブレイブをもう一枚出来るようにしようと前から考えていたのよ。」

カナ「そうだったんですか。」

確かに2枚のブレイブが同時に使えるんだったら、かなりこころ強い。私のデッキは基本的にモンスターは展開せず、アイテムだけで戦うから2枚もブレイブ出来るのはかなり強いわね。

レイ「それってもうできるんですか?。」

カスミ「いいえ。まだ構成段階だから実用化にはもう少し時間がか

かると思うわ。」

カナ「分かりました。暫くはブレイブ・ドラゴンやレイ達と一緒にフアイトしてデッキを強化していきますね。」

カスミ「それと今話に出てきたブレイブ・ドラゴンについてなんだけど、少し問題が出てきたわ。」

カナ「え？何が問題なんですか？」

カスミ「ブレイブ・ドラゴンなんだけどもしかしたら、中にモンスターがいるかも知れないの。」

カナ「え？それはどういうことですか。」

カスミ「実は前から気になっていたのよ。最初私がブレイブ・ドラゴンを見たとき、カタナワールドは書いて無かったのよ。」

カナ「え、じゃあ何で今はカタナワールド書いてあるんですか？」

カスミ「私もそれが気になって色々調べてたんだけど昨日のことよ。ちようどお昼頃、ブレイブ・ドラゴンの中から生命体反応が出たの。」

周り「！！！」

ブレイブモンスターは基本的にカスミさんが作ったモンスターだけどブレイブ・ドラゴンは全てのブレイブモンスターの基盤になったモンスターだけど機械の身体をしていて、生命体反応が出るのはおかしい。

カスミ「それで気になってブレイブ・ドラゴンをスキャンしてみたの。そしたら中心に1枚のカードがあったのよ。それがこれよ。」

そう言っカスミさんが出したカードは周りをスリーブのようなもので守られていてよく見えないけど、フレームを見た感じカタナワールドのような気がする。

カナ「これは一体？」

???「それについては我が話そう。」

いきなり野太い声が聞こえて来たかと思い、後ろを向くと1枚の

カードがあり実体化して、覇龍剣となった。

カナ「覇龍剣!?!なんで剣達とレジエンドワールドに行ったんじやないの?」

覇龍剣「ああ、行ったよ。だけど我は戻ってきた。他の霸王龍を探すためにな。(まあ本当の理由は面倒になりそうだったからだけだな。)」

イクサ「さて次は、覇龍剣と一緒に戦ってもらうぞ。対戦するのは、俺だ。」

剣「てことは今回はかなりきびしそうだな。」

イクサ「それでおい、エクス!覇龍剣どこ行ったか知ってるか?」
ドラゴ「あいつは、他の霸王龍の反応があったから会いにいった。(言えねえそろそろ出番になりそうだからって前から放置していた霸王龍の所にいくだなんてな。)」

ドラゴも余り関わりたくないようだ。

イクサ「マジか、仕方ないじゃあこれを使え!」

そうして渡して来たのはイクサがいつも使っている矛を人間サイズにしたものだった。

剣「え?これを使ってお前と戦えばいいのか?」

イクサ「そうだ。剣だけだと、戦い型が偏り相手に読みやすくなってしまうからな。」

剣「なるほどな。え、でもイクサはどうするんだ?」

イクサ「俺は素手で戦う。覇龍剣と一体化していかないのだからな。まあハンデとも言えないものだけだな。」

剣「分かった行くぞ!」

イクサ「さあかかってこい。」

数分後ぼろぼろになった剣がいたのであった。

覇龍剣「まあ、それはおいといて問題はお前の持っているそのカードだ。そのカード多分霸王軍だ。」

レイ「あ、やっぱり。」

カナ「レイ知ってたの?」

レイ「ええ、何となくそんな感じがしたのよ。まあ正直この作品と霸王軍の特征的に、」

京子「メタ的な発言をするのは駄目だよ。」

レイが何か言おうとしたが京子が、何かを察したようで止めた。

覇龍剣「それだけじゃない。そのカードは、かつての霸王龍だ。」

周り「霸王龍!」

覇龍剣「だが、カナが持っているそのカードを覚醒させるには少し時間がかかるみたいだからな。しばらく預からせてくれないだろうか。」

カスミ「分かったわ。」

数分後

覇龍剣「!!この気配は、まさか!」

話が落ち着き、適当に話を、しているとレジエンドワールドに、戻る準備をしていた覇龍剣が何かに驚いた。

カスミ「?どうしたの?」

覇龍剣「まさか、あいつまで生きていたのか?」

そう言っって覇龍剣は何処かに向かつて行った。

カナ「え、どうしたの?」

レイ「急いで追うわよ。」

??? side

不良1「なんだよ、お前。何でそんなフラッグを持っているんだよ。」

???「さあ、どうする。」

不良1「だったらあいつからもらったこの力でお前を倒す。センターにバディコール。鋼撃霸王 サイクロプス!!登場時手札を3枚捨てて打撃力3追加する。」

ライフ4↓5 ゲージ4↓0 手札4↓0

鋼撃霸王 サイクロプス

フラッグ：ダンジョンワールド

種類：モンスター 属性：Dエネミー／魔王／霸王軍

サイズ3／攻10000／防12000／打撃2

■【コールコスト】ゲージ4を払う。

■君のアタックフェイズ開始時、ゲージ1を払ってよい。払ったら、このカードの攻撃力と防御力を入れ替える。

■このカードが登場した時、君の好きな枚数の手札を捨ててよい。捨てたら、そのターン中、捨てたカード1枚につき、このカードの攻撃力+5000、打撃力+1。

『2回攻撃』『ライフリンク6』

FT「俺は《霸王軍》の力を得た……!ドラゴ殿下のお役に立って見せよう!」

新たな力を得たサイクロプスが仮面の男を襲う。

鋼撃霸王 サイクロプス

打撃力2↓5

2回攻撃

???「ほおう。」

アタックフェイズ

不良1「行け!サイクロプス奴のセンターのモンスターを、攻撃!!」

???「キャスト、覇龍の盾攻撃を無効化して、ゲージ1追加。」

不良1「だったら2回攻げ…ってあれどうしたんだ？サイクロプス。」

攻撃の終了したサイクロプスの周りに何かレフトにいたモンスターが鎖の様なものを出して動けないようにしている。

不良1「なんだよ。これ、どうしたらいいんだよ。」

???「ターンエンドだ虫けらターンエンドしろ。」

不良1「くっ、ターンエンド。」

???「私のターンドロージャーアンドロー」

アタックフェイズ

???「やれ。我がバディよ。奴のバディを壊せ。」

謎のドラゴンはサイクロプスを襲い破壊した。

そのままライフリンクでライフが0になった。

不良1「くっそー！」

ライフ0

勝者???

??? side out

カナ side

覇龍剣を追ってきてみると、前に関わった不良1が倒れていてその前には変な仮面を着けた人がそれを見下ろしていた。

カナ「何やってるのよ、あんた!!」

カスミ「その君大丈夫!？」

不良「あ、あんたらはあの時の。」

京子「あんた。この人に何したのよ？」

???「何もしていない。挨拶はこれくらいにして帰るとするか。」

覇龍剣「待て。ダンジョンワールドの霸王龍よ。姿ぐらいみせてもいいのではないか?」

???「あ?なんだ貴様は?」

!!なんだと言うんだ。いきなりおい

!!

謎の人物のデツキケースから1体のモンスターが現れた。その姿はドラゴとは違い、4足歩行の龍で頭には立派な角があり背中には黒い翼を持った白いモンスターがいた。

「我はダンジョンワールドの霸王龍、魔の霸王龍 ドラゴニック・デーモン・デストロイヤーなり！ 久しいな覇龍剣！」

大晦日の宴会

12月31日

集まったのは、シーカーズ、リバイバル、カスミさん、バディボリスの偉い人らしい人と生徒会長とバディファイト研究会のリーダーがいた。

ダークネスとの戦いで関わったメンバーがここに揃った。一体何が行われるかというと

カスミ「これより今までの敵についての情報を整理して行きたいと思いたいです。」

竜次「じゃあ俺からしていこう。バディボリスからだ。今の所カオスブレイカーに関して調べてはいるがやはり、大きな行動はしていないようだ。」

オーバーロード「あいつは慎重な奴だそう簡単にしつぽをつかませんだろうな。」

カスミ「私も同意するは。それ以外の奴らについては？」

竜次「まだ何も。奴らはかなり用意周到なようであるで存在しないかの様に情報を出させないんだ。」

カナ「ならダークネスが何か知っているんじゃないの？」

竜次「あいつらも情報を集めていたそうだが、あまり有力な情報は手に入れることができなかったらしい。」

レイ「なら、霸王軍からはあいつらの有力な情報はないの？」

ドラゴ「そうだな。我らもあの時はいきなり現れて世界中を襲われてな。元凶も結局分からなかったし、奴らとの戦いでこっちの仲間もかなりやられちゃった。霸王軍を指揮していた霸王龍だって、今じゃ俺とイクサしかいねえしな。」

郷田「イクサって誰？」

ドラゴ「ああ、紹介していなかったな。ドラゴンワールドの霸王龍だ。」

光「霸王龍は、ドラゴだけでは無かったのだな。」
ドラゴ「近々紹介する場を用意するつもりだ。因みに今は、レジエ
ンドワールドの霸王軍の拠点を守ってもらっている。」

イクサ「ハクシヨン！風邪か？もしくはドラゴのやろう俺の噂して
いるか、だな。」

戦い以外でも勘のいいイクサなのであった。

霸王龍「いや、ドラゴもう一体いるぞ。魔の霸王龍がな。」

霸王軍「!!」

魔の霸王龍という言葉聞いて、その場にいた全ての霸王龍が驚い
た。

ドラゴ「何!?あいつも生きていたのか!」

霸王龍「ああ。」

カナ「私達と一緒にいたときにあったの。ちょうど剣が修行中の話
よ。」

レイ「あつた後すぐにどこかへ行ってしまったけどね。確かにオー
ラがドラゴと似ていたわ。」

剣「(修行中に?ということは、まあそれはおいといて。)魔の霸王
龍?どんな奴なんだ?」

ドラゴ「あいつはダンジョンワールドの霸王龍でな。その力もすさま
じく、敵からもかなり恐れられていたのだがな。少し、問題があつ
てな」

剣「何かあつたのか?」

霸王龍「……」

ドラゴ「……戦いが終盤に差し掛かったところであいつが討たれた

という連絡があつたんだ。」

周リ「!!」

ドラゴ「だが、奴は生きていた。どういふことかは分からない。だがそれは今度あつた時に聞くでしょう。」

竜次「他に生きているのが確認出来ている霸王龍についての情報はなにか?」

覇龍剣「後はカタナワールドの霸王龍が確認している。だが目覚めるのもう少し後だと思う。」

竜次「分かつた。こちらでも霸王龍についての調査を始めよう。協力的な戦力になってくれそうだしな。」

それから話し合いをしたいたがあまり有力な情報は出てこなかつた。

カスミ「まあ、この堅苦しい話し合いもそろそろ止めるとしますか。」

竜次「そうだな。そもそも、料理が届くまでの時間潰しだったしな。」

剣「いや、結構重い話しだった気がしますけど。飯待っている間の話し合いじゃ無かつたような気がしますけど。」

カスミ「そういうのは気にしたら負けよ。」

剣のツツコミを軽く受け流して、全員分のジュースを用意していた。

カスミ「それじゃあみなさんジュースは持ったね。それじゃあ亡年回始めますよー! かんぱーい!!」

全員「かんぱーい!!」

その場にいた全員がジュースやら酒やらを持って乾杯をしていた。

郷田「いやー今年は色々と有りすぎたな。」

京子「そうね。私にもバディが出来たりカードバーンが大破したり、訳の分からない奴らに襲われたり何かさんざんだったな。」

郷田「そうだな、まあ大半はダークネスがやったことだが、あいつは今刑務所にいるんだろ。」

京子「いや、あそこにいるんだけど、」
「え？」

京子が指さした方を見るとダークネスとジョーカーが竜次と一緒に酒を飲んでいたのであった。

京子「あの一何でここにいますか。」

ダークネス「ん？そんなの酒があるからに決まっているだろ。」

京子「いや、そういうことじゃなくてですね。」

ダークネス「そうですね。全くこういうところはまだまだですわが主。」

京子「そうですね。ちゃんと説明してください。」

ダークネス「宴会だから酒を飲んでいるんです。」

京子「いや、何も変わってませんけど!? あんたら刑務所に入ったんじゃないの？」

ジョーカー「まあそうですね。今回の忘年会の前の会議で知っていることを話して欲しいということでもここに来たのだが、呼ばれなかったのでお詫びにということ、この忘年会に参加させてもらっているのだよ。」

京子「あ、そうなの。」

ジョーカー「それはそうと、お主達にはすまないことをした。我々の復讐の為の道具としてお主のバディをあんなことにしようとしてしまったことを謝りたい。」

京子「!？」

ジョーカーのいきなりの謝罪に驚きを隠せていないようだ。

京子「私がかまわない。ダークネス、それにジョーカーあんたらのしたことは許されないうことだけど私は感謝しているのよ。」

ジョーカー「か、感謝だ!?」

京子「ええ。あんたらがいなかったら私のバディに会うことは出来なかったんだからそれだけは感謝しているわ。」

ジョーカー「そうか、だがそれでも、犯してしまった罪は我々の一生をかけてつくなっていくつもりだ。本当にすまなかった。」

カナ「剣、大丈夫？」

剣「え、ああ大丈夫、大丈夫。」

レイ「あんたよくあんなぼろぼろの状態で参加出きるわね。」

剣「これくらい軽い方だよ。3日目に比べればな。」

カナ「本当に何してきたの？」

カナ達が心配する理由は簡単だった剣が帰って来たのは今日の朝だった。しかも身体中ぼろぼろで眠っていたのだ。それから数時間で元気になっているのだそれは心配するだろう。

和人「本当にお前何して来たんだよ。」

剣「……………」

和人「急に無言になるな。」

剣「三途の川を5、6回見てきたそう言えば分かるか？」

「(本当に何してきたの?)」

ガイアスカル「剣は本当にどうしたのだ。様子が少し違うが。」

ドラグーン「まあ、色々とな。」

カードバーン「1週間前からレジェンドワールドで何回か、変なエネルギー反応があったのだが知らないか。」

ドラグーン「……………知らない……………と思う。」

シュベルト「そう言えば俺の強化まだか？」

ドラグーン「それは本当に知らん。作者に聞け。」

バーンノヴァ「俺は？」

ドラグーン「お前リバイバルがあるだろ。」

バーンノヴァ「くっ、知っていたか。」

ダリルベルク「は、は、は、そりやお前かなり有名だからな。それより私の強化形態まだ？」

全員「お前の強化形態何かない!!」

ダリルベルク「ヒドイ!!なんだ。」

カードバーン「それはもちろんサポートカードだからだよ。」

ダリルベルク「ならば我も切り札並みのスペックになりたい。」

ドラグーン「しようがない。じゃあ、この書類にサインして、強化形態出るかも知れないから。」

そう言つてドラグーンはある書類を、ダリルベルクの前に出した。

ダリルベルク「おお、ありがとう。？これは？」

そこにはこう書かれていた。

霸王軍希望届け

ダリルベルク「え！霸王軍つて書類書かないといけないのか？」

ドラグーン「ああそうだぞ。だからそこにサインをしてくれ。大丈夫、変なことにはならないからな。」

ガイアスカル「詐欺みたいな感じだな。」

カードバーン「絶対詐欺だろ。」

ダリルベルク「いや、まだ書かないぞ。まだ物語も「メタ発言すんじゃないぞ!!」ギャー!!」

ダリルベルクが、変なこと（メタ発言）を言おうとするとドラグーンが止めた（武力で）。

竜次「これは？」

カスミ「頼まれていた物よ。それとこれね。まさか、本当にあったなんて探して見るものね。」

カスミは黒いアタッシュケースとよく分からない物を渡した。竜次は、その中身を確認した。

竜次「テストは？」

カスミ「もうしてあるわ。問題も無かった。まああんたが設計したものだしね。問題があったら笑おうと思ってたのにな。」

竜次「よくカオス・ブレーカーから守れたな。あそこかなり壊されたって聞いていたけど。」

竜次はすなを

カスミ「念のため、別の場所に移動させていたのよ。だから守ることも出来て、奴らにも知られずにすんだ。まさに、不幸中の幸いな。」

竜次「こいつは、アンノウン達の切り札になるといいな。」

カスミ「それはそうと、ファイトしない？その力試してみたいでしょ。」

竜次「そうだな。だけど、対戦するのは、お前じゃない。」

カスミ「え？」

そう言つてある人の元へ歩いていった。

カスミ「なるほどね。」

竜次「創一、俺とファイトしろ。」

構築された戦士

創一 side

いきなり竜次さんがファイターを仕掛けてきた。いきなり過ぎないか？

創一「どういうつもりですか？」

竜次「なあに、ちよつとした余興だよ。ファイトしたくてな。ファイトしないか？」

創一「まあいいですけど。」

デッキを用意してフィールドを展開した。

ジョーカー「お、ファイトか、いいぞやれやれ。」

ダークネス「そうですね。いい勝負が起きそうですね。」

ガイアスカル「創一1ダメージもくらうなよ。」

ドララン「それは無理だと思う。」

ガイアスカルがふざけるがドラランが突っ込んだ。

竜次「覚悟をきめろ。そうしなければ大事な物は守れない。」

創一「よく分からないけど分かった。」

竜次「どっちだよ。」

その後しばらく無言になり、

二人「オープン・ザ・フラッグ!!」

創一「ドラゴンワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

バディ ドラゴニック・オーバロード

竜次「ヒーローワールドそして、クロスワールド！」

ライフ10 ゲージ2 手札6

バディ 構築戦士 フォマティブ

クロスワールド（辻 逆月さん提供）

フラッグ

■君は「クロスワールド」のカードを使える。

■このカードはファイト開始前に君のフラッグの下に置いておく。

■”ワールドクロス”ファイト開始時、ライフ1払って良い、払ったらフラッグの下にあるこのカードを君のフラッグの横に置き、君はクロスデッキをこのカードの上に置き、そのクロスデッキを使える。”ワールドクロス”はファイト中一度だけ使える。

周り「「クロスワールド!?!」」

聞いたことの無いフラッグに全員が驚いた。

竜次「クロスワールド、まだ俺が若く、様々な世界を冒険していたときに見つけた世界だ。その世界の力とこちらの世界の技術を混ぜたヒーローデッキだ。ファイト開始時、ライフ1を払うことでクロスデッキが使用許可がでる。ちなみにクロスデッキは1〜10枚までで、クロスデッキの内容はいつでも確認することができる。そしてクロスデッキのカードは手札にあるカードと同様にコストを払って使用できる。まあ、ようやくすると、遊○王のエクストラ「それはだめ!!」おっと」

竜次さんが何かを言おうとすると、カスミさんが止めた。何がしたかったんだ？

創一「どんなカードを使おうが勝つのは俺だ。俺のターンドロージャーリアンドドロ、センターにゲージ3を払い、デッキの上から3枚をソウルに

入れてバディコール。」

ライフ11 手札6 ゲージ0

ドラゴニック・オーバード

攻撃13000 防御13000 打撃3

アタックフェイズ

創一「オーバード、ファイターを攻撃。」

竜次「受ける。」

ライフ9↓6

創一「ターンエンド。」

ライフ11 ゲージ0 手札6

竜次「俺のターンドロージャーアンドドロ。見せてやるよ。俺が世界中を回って手に入れた力を。俺はレッドラビットをレフトに、ブルータンク小队をライトにコール。」

ライフ5 ゲージ3 手札5

カスミ「ちよつとそれ形にしたの私なんですけど。」

竜次「うるさい。ちよつと黙ってる。」

レッドラビット（辻 逆月さん提供）

ヒーローワールド

属性、マテリアルソルジャー

サイズ1 攻撃力5000 防御力1000 打撃力1

■ゲージ1払ってもよい。払ったらこのターンこのカードは相手のセンターにモンスターがいてもファイターを攻撃することが出来る。

ブルータンク小队（辻 逆月さん提供）

ヒーローワールド

属性、マテリアルソルジャー

サイズ2 攻撃力6000 防御力4000 打撃力2

■このカードが攻撃した時相手に1ダメージ与える。

赤いうさぎと青い戦車が現れた。

竜次「そして、2体のモンスターと一つに変身!!」

竜次が叫ぶとうさぎと戦車が竜次に向かって突っ込んだ。

そのまま辺り一面が煙に包まれた。

周り「「え!?!」」

竜次「構築戦士 フォマタイプ 参上!!」

フォマタイプ “ラビットタンク”（辻 逆月さん提供）

クロスワールド

属性、ヒーロー

サイズ3

攻撃力10000 防御力10000 打撃3

■このカードが攻撃した時、相手に2ダメージ与える。

■このカード以外にマテリアルソルジャーが2枚以上ある時このカードをデッキに戻し、ドロップゾーンから「レッドラビット」と「ブルータンク」を手札に加える。

” 潜影”

「変身」(場の「レッドラビット」と「ブルータンク小队」1枚ずつをソウルに入れる。)

「ソウルガード」

煙が晴れると青い身体に右腕に銃、足に赤いバネのようなものがついた戦士がいた。

剣「あんな風な変身ありか？」

カスミ「一瞬自爆したかと思っただわ。」

カナ「カスミさん作ったんじゃないの？」

カスミ「作ったのは私んだけどまさか”変身”のしかたがあんななるとは思わなかったのよ。」

竜次「俺は構築戦士 フォマタイプ 様々な世界の技術で構築された戦士だ。よろしくな。」

アタックフェイズ

竜次「俺自身でファイターを攻撃！」

竜次は足についたバネのような物を使ってジャンプした。そのままオーバードロードを飛び越え創一の前まで着いた

オーバーロード「何!？」

竜次「この姿で攻撃した時相手に2ダメージ与える。」

そのままの体制で右腕の銃を創一攻撃した

創一「くっ。」

ライフ11↓9

更に、竜次は創一にパンチした。

創一「ぐっは!」

ライフ9↓6

竜次「ターンエンド。どうした?その程度か?そんなんじや大事な物は守れないぞ。」

ライフ6 ゲージ3 手札5

創一「くっ、舐めるな。俺のターンドロージャーアンドドロージャーキャスト、天竜解放ライフ1とゲージ1払いドロップゾーンのカード3枚をデッキに戻して2ドロウ更に、キャスト、ドラゴニック・チャージャープラスゲージ、ライフが5以下だからゲージを5追加。更に、キャスト黙示録の炎!!効果で攻撃する度に相手の場のカードを破壊して1ダメージ与える。」

ライフ5 ゲージ5 手札6

竜次「何!？」

アタックフェイズ

創一「いけ!オーバーロードでファイターを攻撃。効果で構築戦士フオマティブを破壊して1ダメージ与える。」

竜次「ソウルガード、そしてライフで受ける。」

ライフ9↓8↓5

マテリアル残りソウル1枚

創一「2回攻撃。効果で1ダメージ。」

竜次「キャスト、本気でこいよ。攻撃を無効にしてライフ+1。」

ライフ6↓5↓6

マテリアル残りソウル0枚

ファイナルフェイズ

創一「必殺コール!!ドラゴニック・オーバーロードをジ・エンドに!!」

ドラゴニック・オーバーロード ジ・エンド

攻撃力13000 防御13000 打撃3

オーバーロードが更に、炎が増し、武装も剣から銃に変わった。

創一「いけ!オーバーロード、ファイターを攻撃。そして、完全にマテリアルを破壊。」

竜次「キャスト、お前の技は見切った!!その攻撃を無効にする。くっ。」

ライフ6↓5

マテリアル破壊

創一「もう一度だ。ジ・エンドでファイターを攻撃!」

竜次「キャスト、バディブロックこのターン俺はダメージを受けない。」

ライフ5↓4 ゲージ2

創一「(スタンド効果を使ってもこのターンじゃ削り切れない。)ターン終了だ。」

ライフ5 ゲージ2 手札6

剣「このターンで決めきれないのはきついな。」

カスミ「そうね。もう一回マテリアルになったら負ける可能性がないかもね。」

竜次「俺のターンドロージャーアンドロー、俺はライトブルー

ロケット、パープル忍者をレフトにコール。そしてこの2体を素材に変身!!」

パープル忍者

ヒーローワールド

サイズ1

属性マテリアルソルジャー

攻撃力5000 防御1000 打撃1

マテリアルソルジャー

■このカードが攻撃した時、相手のゲージを1枚選んでドロップゾーンに置く。

ライトブルーロケット

ヒーローワールド

サイズ2

属性マテリアルソルジャー

攻撃力6000 防御4000 打撃2

マテリアルソルジャー

”貫通”

創一「マテリアルソルジャーが2体。だけどその組み合わせのフォマタイプがそのデッキにあるのか？」

竜次「ふっ、無いな、だが、マテリアルソルジャーにはこういう使い方が出来るんだよ。変身!!トリアルフォーム!!」

構築戦士 フォマタイプ “トリアルフォーム” (辻 逆月さん提供)

クロスワールド

攻撃力10000 防御10000 打撃3

属性、ヒーロー

■このカードはこのカードのソウルに入っているマテリアルソルジャーの能力を全て得る。

「変身」(場のマテリアルソルジャー2枚をソウルに入れる)「ソウルガード」

先程とは違い、紫色の忍者と水色のロケットのようなモンスターが現れてまた竜次に突っ込んでいった。

和人「さつきも思いましたけどあの変身方法は危なくないんですか？」

カスミ「多分、本人が元気そうだしいいんじゃないの？」

遙か「そうね。大丈夫よね・・・本当に大丈夫？」

京子「マテリアルは決められた2体を選ばなくてもフォマタイプになれるのね。」

郷田「確かに事故がすくなそうだな。」

カスミと遙かが心配しているが京子と郷田はグッズの内容の話をしていた。

竜次「ついでにイエローレッツシャーをライトにコール。」

ライフ3 ゲージ5

イエローレッツシャー

ヒーローワールド

サイズ2

属性 マテリアルソルジャー

攻撃力5000 防御4000 打撃2

■このカードが攻撃した時、ドロップゾーンのサイズ1のマテリアルソルジャーを1枚選んでコール出来る。

周りが不安になっている変身のしかただが本人は気にしていないようだ。

アタックフェイズ

竜次「フアマタイプ」トリアルフォーム”はソウルに入っているマテリアルソルジャーの能力を全て得る。俺とイエローレッツ

シャードで連携攻撃。イエローレッツシャードの効果でレッドラビットを
レフトにスペリオールコール。更に、俺の効果でゲージを貰う。」

黄色い列車の中からレッドラビットが現れた。

何の芸だ一体？

創一「キャスト、ドラゴンシールド」オーバーロードの盾 攻撃を
無効にしてライフ＋1してワンドロー。」

残りライフ6

ゲージ1

オーバーロード残りソウル3

竜次「レッドラビットは単体でもファイターを攻撃出来るレッドラ
ビットでファイターを攻撃。」

創一「くっ、だがこれで俺のターンだ。」

ライフ6↓5

竜次「それはどうかな？」

ファイナルフェイズ

竜次「ゲージ2を払い必殺変身!!鏡界戦士 ランページソニック”
ブラスターナックル!!」

創一「え?」

周り「「え、えー!!」」

鏡界戦士 ランページソニック”ブラスターナックル!!”

攻撃15000 防御3000 打撃3

「貫通」

竜次が光に包まれ中から現れたのは鏡の中の伝説の戦士達の一人
ランページソニックが現れた。

竜次「ランページソニック参上!!行くぞ」

創一「くっ、キャスト、『ブーブーブー』何故だ。」

竜次「ランページソニックが攻撃するとき相手は対抗出来ない。そ

してランページソニックは相手のモンスターを破壊する度にスタンドできる。」

創一「流石伝説の戦士だな。ぐっは。」

オーバードロード残りソウル2↓1↓0

ライフ5↓2↓0

竜次「これで分かったか？」

創一「一体何の話だ。」

竜次「お前一人の力じゃ絶対にカオスブレイカーは倒せない。」

創一「!!」

剣「一体何の話をしているんですか？」

竜次「こいつは、この1週間一人でカオスブレイカーを探っていたそう。」

確かに俺は一人でカオスブレイカーを追っていた。誰にも気づかれていないと思っていたんだけどな。流石バディポリスだ。

周り「「えー!」」

創一「……」

竜次「お前が、考えていることは分かる責任を感じているのだろう。」

創一「そうだ。俺があいつに手を貸さなければ、あんな事態にならずにすんだ。俺がこの事態を引き起こしたんだ。」

竜次「確にお前は誰かに相談すべきだった。だがな、それを理由に自分を殺すようなことはしてはいけない。」

創一「だったらどうすればいいんだよ!!どうやってこの罪を償えばいいんだ!!」

創一の心の叫びが聞こえその叫びに呼応するかのように竜次は叫んだ。

竜次「仲間と共に戦え!」

創一「え?」

竜次「確にお前は罪を犯したのかもしれないだがな、お前一人の力じゃ、カオスブレイカーには勝てない、だったら仲間と共に戦うこ

とでその罪を償えばいい」

創一「……剣、みんな改めて頼みがある。俺に力を貸してはくれないか。あいつらにやり返したいんだ。」

創一の本音を聞いた剣達は、

剣「当たり前だろ。俺達でカオスブレイカーを倒そう。」

ドラゴ「ついでに我ら霸王軍の因縁にもけりをつけよう。」

和人「あいつらに傷つけられた奴らのためにもな。」

ドラン「ついでにタイムドラゴンも倒してやるよ。」

カナ「えつと、私も、あれ？何も無い。」

レイ「変なところに乗らなくていいのよ。」

ダリルベルク「その通りだお喋りなカオスモンスターである我を広めるためにもあいつらにこの世界をめちゃくちゃにされてたまるか!!」

遙か「こういう時ぐらい空気を読んで欲しかったわ。」

竜次「頼もしいな。」

カスミ「私達も出来る限りのことをしましょう。」

竜次「そうだな。奴らがまた動き出す前に対策をこうじておかないとな。」

今度こそカオスブレイカーお前の野望を潰してやる。

平和な敵の組織

アンノウンスide

ここは我らの拠点

カオスブレイカー「では始めるか。」

アンノウン「そうだな。」

我はエネルギーを謎の塊に与えた。

その塊がプラネットワールドのカードになった。ただ、何も書かれておらず、絵柄が真っ黒だった。

アンノウン「そしてこのカードを。」

カオスブレイカーが1枚のカードを乗せた。

そうすると2枚のカードが融合して1枚のカードになった。

カオスブレイカー「これでまた1枚完成したか。」

???「ちやくちやくと軍勢が整いつつあるようだな。」

アンノウン「来たか、ピーー！」

カオスブレイカー「・・・」

ピーー! 「・・・なんで名前がピーー! になっているんだい?」

低い声で放った声なのだが、なんとも発言がなんとも言えない。

アンノウン「ネタバレになるからだ。」

カオスブレイカー「なるほどな。それなら仕方がない。」

ピーー! 「良くないだろ。何でピーー! なんだよ! 何でやましいこ

とが無いのにそんな感じになるんだよ! 変えてくれ!」

アンノウン「わかった。じゃあ???でいいだろ。」

???「最初からそうしてくれ。じゃあな。」

アンノウン「何しに来たんだ。」

フアントム「まあいいじゃないか。まだまだ計画の最終段階まで時間が掛かるのだから。」

カオスブレイカー「フアントムか、久しぶりだな。」

フアントム「ああ、そうだな。マイナスエネルギーの回収に時間がかかってしまったよ。」

アンノウン「なんでさっきのあいつは、???にしたのに、お前は速攻

で名前をだしたんだ？」

ファントム「それは次の章で「それはネタバレになるから止めて貰おうか。」お、おう。」

ファントムが何か言おうとしたがカオスブレイカーが止めた。

カオスブレイカー「我と似たような気配を感じるな。お前出来る奴か？」

カオスブレイカーが何かを悟りにらみつけた。

ファントム「カオスブレイカーよそれではマイナスエネルギーを回収勝負をしようではないか。」

カオスブレイカー「いいだろう勝負だ。」

アンノウン「あまり派手に動くなよ。このタイミングでバディポリスに気づかれたらおわりだからな。」

ファントム「まあいいだろうそうだな、ただやるだけじゃあつまらない。負けた方は自分のエネルギーをマイナスエネルギーに変換させてもらおうか、そうすれば計画は更に進む。」

ファントム「いいだろう。」

アンノウン「やれやれ、血気盛んなことで、善きかな善きかな。」

カオスブレイカー side

さあて、適当や奴を見つけてファイトを挑んで、

カオスブレイカー「お、いたいたあいつにするか。」

ヤンキー「何か面白いことないかなー」

カオスブレイカー「なら起こしてやろうか。」

ヤンキー「!!お前一体どこから？」

カオスブレイカー「フフフ」

カオスブレイカーが不適な笑みを浮かべるとカオスブレイカーの体から謎の霧が現れ、ヤンキーを包んだ。

ヤンキー「!!ここはっ？」

ヤンキーが気がつくところそこはあちこちに骨がばらまかれた謎の

フィールドだった。

カオスブレイカー「ここから出るにはファイトで勝たなければならぬ。さあファイトしろ。」

ヤンキー「よく分からないがファイトで勝てば出してもらえるんだな。だったらファイトだ。」

二人「オープン・ザ・フラッグ!!」

ヤンキー「デンジャーワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

カオスブレイカー「プラネットワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

ヤンキー「プラネットワールド!!(噂で聞いたことがある何処かの研究所で起きた事故の原因のカードだったって。まさかこんな所で見られるなんて。)」

カオスブレイカー「私のターン、ドローチャージアンドドロー、キャスト世界侵略の準備手札を1枚捨てて2ゲージ追加してデッキから星輝兵 カオスブレイカーを1枚手札に加える。ゲージ1払いセクターに星輝兵 フォトンをコール。」

ライフ10 手札5 ゲージ4

星輝兵 フォトン

サイズ2

プラネットワールド

属性 サイバロイド

攻撃9000 防御0 打撃2

「コールコスト」ゲージ1払う。

■このカードが登場した時、相手の場に裏返しになっているカードがあるなら相手の場のモンスターを1枚選んで裏返す。

現れたのは、黒い戦士。

ヤンキー「なんだよ。そのモンスターは?」

アタックフェイズ

カオスブレイカー「黙れ。フォトンでファイターを攻撃。」

ヤンキー「くっ。」

ライフ10↓8

ヤンキー「俺のターンドロージャーシアンドロロー、俺は相手のフォトンとライフ1とゲージ1を払わせ、センターにコール。絶拳独尊 ドガゼウス!!」

絶拳独尊 ドガゼウス

攻撃6000 防御2000 打撃2

ゲートが、開き中から出てきた2本の手の片方がフォトンを掴みもう片方がゲージを掴んでドガゼウスが現れた。

カオスブレイカー「ほおう、我の力を利用するとはこれは面白い。」

ライフ9 ゲージ3 手札6

ヤンキー「もらった物はすぐ返してやるよ。レフトに殴打天 ダイパーンをコール。効果で相手にゲージ1プレゼントしてこつちにゲージ2追加。」

カオスブレイカー「勝負だと言うのに律儀なものだな。」

ライフ9 ゲージ4 手札6

ヤンキー「まあすぐにまた貰うだけだな。相手のゲージ1払い、凶魔女 ゴシイレスをレフトにコール。サイズオーバーでダイパーンはドロップゾーンに送られる。更に、会員制クラブ 全NO神を設置。」

凶魔女 ゴシイレス

サイズ1

攻撃6000 防御2000 打撃2

今度はケバい女番長が現れた。

アタックフェイズ

ヤンキー「ドガゼウス、ファイターを攻撃。更に、ダメージを与えたことで能力発動相手に2ダメージ与えて2回復。」

ライフ10

カオスブレイカー「受ける。」

ライフ9↓7↓5

ヤンキー「ゴシイレスでファイターを攻撃。」

カオスブレイカー「……」

ライフ5↓3

ヤンキー「俺はこれでターンエンド。」

カオスブレイカー「私のターンドロージャージアンドロー。」

ヤンキー「メインフェイズ開始時会員制 全NO神の効果お前の手札を1枚捨てて俺はワンドローする。」

カオスブレイカー「キャスト、世界侵略の準備手札を1枚捨ててゲージ2追加して、デッキから星輝兵 カオスブレイカーを手札に加える。ゲージ2を払い、星輝兵 コールドデスドラゴンをレフトにコール。効果でお前のドロップゾーンのカード1枚を選び裏返しされた状態でコールさせる。」

星輝兵 コールドデスドラゴン

プラネットワールド

サイズ2

属性 サイバードラゴン

攻撃0 防御8000 打撃2

「コールコスト」ゲージ2払う。

■このカードが登場した時、相手はドロップゾーンのモンスターを1枚選ぶそのカードは裏返しの状態で見えている所にコールする。

ヤンキー「なんだよこれ!？」

カオスブレイカーが呼び出した黒い竜によってドロップゾーンにいたダイパーンが黒い輪によって拘束された状態で現れた。

カオスブレイカー「更に、フォトンコールサイズオーバーでコールドデスドラゴンはドロップゾーンに、フォトンの効果相手の場に裏

返しされているカードがあると相手の場のカードを1枚呪縛する。更に、ゲージ3払い、場のフォトンを生け贄に現れよ我自身カオスブレイカーをコール。」

星輝兵 カオスブレイカー

サイズ3

攻撃力13000 防御13000 打撃2

「2回攻撃」

フォトンがドガゼウスに黒い輪をぶつけて拘束した。その後コストとされカオスブレイカーが現れた。

カオスブレイカー「更に、キャスト、呪縛の呪い相手の場の裏返しになっているカード1枚につきライフとゲージを追加する。更に、2枚以上裏返しだとワンドロー。」

呪縛の呪い

プラネットワールド

魔法

属性 サポート

■相手の場の裏返しになっているカード1枚につきライフ+1山札の上のカードをゲージに置く。更に、裏返しになっているカードが2枚以上ある時カードを1枚引く。”呪縛の呪い”は1ターンに1度しか使えない。

カオスブレイカー「そして我の効果ゲージとライフを1払い、手札を2枚捨てて最後のお前のモンスターを裏返す。」

カオスブレイカーによって最後のモンスターも拘束されてしまった。

アタックフェイズ

カオスブレイカー「我の攻撃。」

ヤンキー「ライフで受ける。」

ライフ8↓6

カオスブレイカー「2回攻撃。」

ヤンキー「くっ。」

ライフ6↓4

カオスブレイカー「ターンエンド。」

ライフ5 ゲージ1 手札0

ヤンキー「俺のターンドロージャーリアンドドロージャーターンエンド。けどまだだ、お前の手札は0、カオスブレイカーは2回攻撃しかない。俺の設置魔法 全NO神によって手札も捨てる。次のターンでお前からコストを奪ってお前を倒してやる。」

カオスブレイカー「ふっ、確かにお前の状況ならお前の勝ちに近いかもしれない。けどな、お前に我の2つ目の能力を教えてやろう。お前のモンスターがもとに戻った時だ!!」

ヤンキー「なんだと!？」

カオスブレイカー「我のソウルを1枚ドロップゾーンに送り、お前のセンターのドガゼウスを破壊してワンドロー。」

ヤンキー「なんだと!？」

ドガゼウスが黒い輪から解放されて戦おうとすると、カオスブレイカーによって破壊された。

カオスブレイカー「どうした?まだ耐えられると思っていたら我の効果で逆転されてしまった気分は?」

ヤンキー「このクソヤロウ!!」

カオスブレイカー「我のターンドロージャーリアンドドロロー」

ヤンキー「設置魔法の効果で手札を貰うぞ。ど、どうだこれでお前の手札は1枚じゃ逆転は無理だ諦める。バディポリスに行けよ。」

恐怖に支配された顔でこんなこと言っているが迫力が無い。

カオスブレイカー「:いいカードを引けなかったようだな。ファイターを攻撃。」

ヤンキー「ぐはあ。」

ライフ4↓2

カオスブレイカー「2回攻撃。」

ヤンキー「ぐはあ。」

ライフ0

ライフが0になるのを確認するとカオスブレイカーの手をヤンキーの手に当てて何かを奪った。

カオスブレイカー「これでよしと。全くいちいち記憶を消去しないといけないのか。」

カオスブレイカーが今行ったのはこのファイトの直前とこのファイトに関する記憶を奪ったのだ。

理由は、そうしなければバディポリスにプラネットワールドのカードの情報を与えてしまうのと、出来る限り穏便に済ますようにというアンノウンの命令によるものだ。

それから数戦適当な奴を選んでファイトしてエネルギーを回収したのだった。

カオスブレイカー「ファントムこれならどうだ。」

ファントム「そうだな。私の負け、と言うわけではない。これを見よ。」

そうやって見せてきたのはカオスブレイカーのエネルギーよりも大きなエネルギー体があった。

カオスブレイカー「私の負けか。まあよい。次は勝つために、作戦を立てておくか。」

ファントム「そうするといいさ。ハハハハ。」

不適な笑い声が辺りに広がった。

看病のつもりが

剣 side

和人が風邪をひいたらしい。

夏に風邪ってあんまり聞かない話だけどまあみんなでお見舞いに行くことにした。

メンバーは、シーカーズ、リバイバルのメンバーだ。

因みに遥かは、先に行って看病をしているらしい。

剣「こんなにたくさんで行って大丈夫か？」

京子「確かに迷惑じゃないかしら。」

レイ「大丈夫よ。マスクをつけていけば。」

カナ「そうだね。きつと大丈夫だよ。」

郷田「そうだな。まあ風邪ひいても気合いで何とかなるしな。」

今フラグだったような気が？

気のせいだと思いたい。

和人の家の前についた。

カナ「こんにちはー!!」

そのまま中に入ってしまった。

レイ「何やってんのよ。」

カナ「え？だって、私達チームメイトじゃない。なら別に相手の許

可なく入るんじゃないの。」

レイ「あなたはまず礼儀を覚えなさい。」

郷田「すいませんバディポリスです。家入らせてもらいますね。」

剣「職権乱用するな。」

ゴンガラガツシャーン

全員「!？」

いきなり家の中から大きな音があった。

和人「ぎゃー!!」

その後和人の叫び声が聞こえた

剣「和人!？」

「おい、待ってって!」

急いで声の聞こえた所まで走った。

剣「和人大丈夫か!? って、あれ?」

そこで見たのは和人が遥かを押し倒しているのだっだ。

全員「……………」

和人「……」

遥か「……」

剣「あ、これお見舞いの品だから。それじゃ、お邪魔しました。全員撤収!!」

レイ「だから言ったのよ。こんなことになると思ったからよ。」

カナ「うそつかなくていいから。……………まあ確かにそうね。次から気をつけるわ。」

急いで全員で家を出た。

和人「いや、待って!マジで待ってくれ!誤解なんだ!いや本当に待ってくれ!」ゴホゴホ

遥か「和人、まだ寝てないとダメだよ。」

和人「いや何でそんな冷静なの!」

数分後

剣「で?結局何やっていたんだ?」

和人「お、俺は何もしていないただ寝ていたら起きたら顔の前に遥かがいて、驚いたらああなった。」

剣「あ、そう。」

和人「なんか軽いな。」

剣「だってお前にあんなことする度胸ないことくらい知ってるし。」

和人「くっ、反論出来ない。」ゴホゴホ

遥か「まだ風邪がひどいみたいだね。おじや作ってくる。」

和人「頼む。」

剣「これ今日の授業ででたプリントな。あとこの英語の課題来週までだつてさ。」

和人「了解。風邪治ったらやるわ。」

カナ「そういえば遥かつて料理しているところ見たことないよね。」

剣「言われてみればあいつって料理出来るのか？」

和人「……知らない。」

剣「……もしかしたら丸焦げな料理だったりしてな。」

和人「そんなことはないと思うぞ。」

カナ「そうよ。」

全員「ハハハ。」

遥か「お待たせ持ってきたよ。」

遥かが持つているのは紫色の鍋を持っていた。

和人「遥か……これなに？」

遥か「何っておじやだよ。ただのおじや。フッフ」

和人「なんか怖いんだけど!!」

ダリルベルク「闇鍋ならぬ闇おじやだな。」

和人「うまくねえんだよ。」

遥か「ほら早く食べてよ。」

和人「いや、いま急に食欲がなくなってきたわ。後で食うからそこ置いて。」

ドラン「逃げてんじやねえぞ。男なら食えよ。ほら、ハリーハリ。」

和人「お前楽しんでるだろ。」

ドラン「もちろん。」

遥か「ならフアイトしよう。私が勝ったらこのおじやを食べるそれでいいよね。」

和人「え？ちよつとそれは、あ、ほら俺は今風邪引いているし、フアイトはちよつとね。」

剣「そうだな。じゃあ俺がやろう最近超事故りやすいデツキを作ったんだ。」

和人「俺を殺すきか!？」

剣「リア充なんて滅べばいい。まずはお前からだ。」

和人「いやひどいんだけど!？」

郷田「どんどん考えがヤバい方へ向かってきているな。」

光「そりやそうだろ。あいつのチームあいつ以外リア充なんだから。」

京子「最近なんて月5位でドランとかと一緒にこっちくるしね。」

目がヤバい方へとなってきたら剣が和人をにらんでいた。

カードバーン「いや待てさすがにそれは不味い。私達が相手をしよう。」

郷田「そうだな。俺達で止めよう。」

オーブン・ザ・フラッグ

郷田「ヒーローワールド」

バディ カードバーン

ライフ10 ゲージ2 手札6

残りデッキ42枚

遙か「ダークネスドラゴンワールド」

バディC, ダリルベルク

ライフ10 ゲージ2 手札6

「私のターンドロージャージアンドドロ。センターにC, ダリルベルクをセンターにバディコール。効果発動。」

ダリルベルク「よっしゃー!! ようやく出番だ。私の活躍を刮目せよ。いつもいつも序盤に登場した後にそれいこう出番が無いが、今回は関係ない。私の目的を達成するために、「うるさい、黒い鎧 アビゲールをレフトにコール。」うそだー!!」

いつものようにダリルベルクをサイズオーバーでドロップゾーンに送られた。

遙か「更に、悪夢の檻を設置。沈鬱の蛇黒竜 バルザムをセンターにコール。効果でアビゲールを破壊してチャージアンドドロ更に、アビゲールの効果でデッキを更に、1枚破壊。更に、悪夢の檻の効果でデッキを1枚破壊。」

ゲージ4 手札5 ライフ11

郷田「くっ、」

残りデツキ40枚

遙か「デスナバームをセンターにコール。キャストブラックリチュアル効果で破壊して1ゲージ1ライフ2ドロウ更に、デスナバームの効果ゲージ1払い、デツキを5枚破壊。」

郷田「くっ、」

残りデツキ35枚

遙か「バルザムでファイターを攻撃。」

郷田「くっ。」

ライフ10↓8

遙か「ターンエンド。」

ライフ13 ゲージ2 手札5

郷田「俺のターンドロウチャージアンドドロウ。ゲージ2を払い、カードバーンにバディ搭乗。」

ライフ8↓9

カードバーン「久しぶりの登場だ!!」

攻撃4000 防御3000 打撃1

郷田「キャスト、ハイパーエナジーゲージ4追加。更に、”私に力を貸してくれ”デツキから超友合体アルティメット・カードバーンを手札に加える。そしてゲージ4を払い、超友合体 アルティメット・カードバーンに搭乗!!」

手札4 ゲージ1 ライフ11 残りデツキ33枚

超友合体 アルティメット・カードバーン

攻撃40000 防御20000 打撃4

全員「な、なんだあの巨大ロボは!?!」

カードバーン「これが私の最強の姿超ロボットの力を得た超友合体アルティメット・カードバーンだ!!」

遙か「ぼ、防御力20000!?!」

アタックフェイズ

郷田「アルティメット・カードバーンでセンターのバルザムを攻撃。アルティメット・カードバーンは貫通持ちだ！」

遙か「くっ。」

ライフ13↓9

郷田「2回攻撃」

遙か「くっ。」

ライフ9↓5

郷田「キャストさせる…ものか!!」をキャスト手札の超友合体 アルティメット・カードバーンを捨ててアルティメット・カードバーンをスタンド!!ラストアタック!!」

遙か「キャスト刃ノ黒衣攻撃を無効にしてワンゲージ追加。」

郷田「ターンエンド。」

ライフ9 ゲージ1 手札4

残りデッキ33

遙か「私のターンドロージャージアンドドロージャーセンターにダリルベルクを、コール。」

ダリルベルク「またでれたぞー!今まではファイト開始時1枚目しか出てこれなかったのに、今回は2回、2回も出番があるだなんて。」

遙か「うるさい。黒き王冠 ザクラウンをレフトにコール。効果で2ゲージ追加。悪夢の檻の効果で1枚破壊。」

ダリルベルク「またサイズオーバー!!」

郷田「また破壊された。」

残りデッキ32枚

いつものごとく速攻でサイズオーバーのせいで退場させられたダリルベルク果たして活躍出来る日はあるのか?

遙か「逆襲の黒死竜 アビゲールをセンターにコール。キャストブラックリチュアル、アビゲールを破壊して1ゲージ1ライフ2ドロ。アビゲールが破壊されたことよって相手のデッキを2枚破

壊してワンドロー。」

ファイナルフェイズ

遙か「ターンエンド。」

ライフ7

郷田「俺のターンドロージャージアンドドロージャー4払い、アル
ティメット・カードバーンをレフトにコール。」

アタックフェイズ

郷田「2体のアルティメット・カードバーンで攻撃。」

遙か「……」

ライフ0

郷田「はあはあ、お、俺の勝ちだ。それは止めたほうが、あれ？さつき
の鍋は？」

剣「あれ？さつきまでそこにあつたのに。」

和人「彼女が作ってくれた物、彼女が作ってくれた物は、彼女が
……」

カナ「何かそこで食べようとしている人がいるんですけど。」

光「男だな。」

和人「パク……ガツガツ」

和人は一口入れたしばらくしたらめちやくちや食べ始めた。

剣「お、おい和人大丈夫か？」

和人「お、おいしかったです。」ガク

遙か「そつか。良かった。」ニコニコ

皆「か、和人ー!!」

数分後

意識を取り戻した和人は風邪が治り、元気になっていた。
いったい何が入っていたんだ？

絶望へのカウントダウン

ワールドとワールドの亀裂

作業員「また派手にやってくれたよな。」

作業員「全くだ。イリイガルモンスターが現れる度に俺達が修復するんだからな。」

作業員達がしているのはイリイガルモンスターによって破壊去れちまったワールドとワールドのゲートを修復していた。

作業員「それにしても最近多くないか？ゲートが壊れるの。しかもイリイガルも現れていないんだよ。」

作業員「ゲートが壊れるのは仕方ないとしてもモンスターがいないのは気になるよな。」

作業員「普通はイリイガルが現れるとゲートが壊れるんだけどな。」
そうイリイガルはゲートから現れる以外にも方法

『……………』

研究者「ん？今何か変な声が聞こえなかったか？」

研究者「いやこれといって聞こえなかったけど。」

そういうしばらくすると二人の後ろのゲードからどす黒い人型のモンスターが飛んできた。

ゲートが現れる

二人「うわぁー！！！！」

ドラゴside

夜の誰もいない学校のグラウンドにドラゴは1人でいた。あるモンスターを待っていたのだ。

??? 「遅くなって悪い。少し遅れてしまった。」

ドラゴ「構わない。それよりもどうして俺を1人で来いと覇龍剣に言ったらしいな。デストロイヤー」

そうドラゴが待っていたのは黒い龍、魔の霸王龍　ドラゴニック・デーモン・デストロイヤーだ。そしてダンジョンワールドの霸王龍でありドラゴとも旧友の仲である。

デストロイヤー「まあそれは他のやつらも来ても良かったんだと思うけどな。まあ一々説明するのが面倒だったからだ。」

ドラゴ「まあ確かにな。」

デストロイヤーが言っているのはまだ他のやつらに教えていないことや、いい忘れていたことを質問されてそれを答えるのが面倒だからドラゴと話たかったみたいだ。

ドラゴ「まあそれはいいとして、どうして討たれたお前がいきいてるんだ？」

デストロイヤー「それはだな。企業秘密だ。」

ドラゴ「いやなぜ教えてくれないんだ。」

デストロイヤー「企業秘密だ。」

ドラゴ「いや、だから」

デストロイヤー「企業秘密だ。」

ドラゴ「そうか。分かった。」

何があったのか本当に教えるきは無いようだ。そこまで不味いてを使ったのか、それとも復活もしくは生き残っている間に何かあったのかもしれない。

ドラゴ「まあそれでお前が生きていたのは分かった。それで」

???「ああ、それはダンジョンワールドで何体かのモンスターが白と黒のドラゴンで黒い鎌を持っていたモンスターに襲われたという話を聞いた。」

その特徴はあのモンスターしかない。

ドラゴ「カオスブレイカーか。流石はダンジョンワールドの霸王龍だな情報が速い。それで一体あいつの狙いは何か分かっているのか？」

デストロイヤーの情報収集能力を驚きつつ、まだ何か無いか聞いた。

デストロイヤー「いや、全くだ。しかしあいつはあちこちのワールドに行きモンスター達を襲っているらしい。しかも、厄介なのが討伐隊を編成してもまた別のワールドに逃げてしまうそうだ。」

ドラゴ「カオスブレイカーの目的は一体？」

デストロイヤー「それは分からないけれど、危険なのはあいつだけじゃないかも知れない。」

ドラゴ「どういうことだ？」

デストロイヤー「実は正体不明のモンスターがゲート間を移動しているらしい。しかもそれが何体も確認されていてその全てこの世界を目指していたらしい。」

ドラゴ「らしいとはどういうことだ？お前にしては確証の無い言い方だな。」

デストロイヤー「奴らを追跡していた奴言うにはいつの間にかいなくなっていたそうだ。」

ドラゴ「……バディポリスに報告しておこう。」

デストロイヤー「頼む。じゃあ俺はこれで。」

ドラゴ「ちよつと待て今のお前のバディについて聞きたい。」

デストロイヤー「ああ、あいつは喧嘩ばっやいが大丈夫だ。」

ドラゴ「そうか、それとやっぱりこちちに来る気は無いんだな。」

デストロイヤー「そうだな。そつちにいくと情報が来るのが遅いかな。他にもこつちはこつちで戦力を蓄えておくぜ。」

ドラゴ「分かった。じゃあな。」

そうして2体の龍は夜に消えていった。

イクサ side

イクサ「ふう、ここかあいつが気になるって言っていた場所は。」

そこは荒廃した場所戦いによって滅んでしまった文明そこで普段はレジェンドワールドの拠点を守っているイクサは自分のやるべきことを再確認しにきたのだ。

イクサ「こんな世界が2度と起きないようにここにもう一度誓おう。必ずあいつらを倒してみせる!!」

???「そんな事はさせませんよ。」

イクサ「!?!」

誰もいないはずの後ろから聞き覚えの無い声が聞こえてイクサが振り向くとそこには、黒い輪を体のあちこちについたドラゴンがいた。

そう、カオスブレイカーだ。

カオスブレイカー「残念ながらあなたにはここで退場してもらいます。」

イクサ「何?」

カオスブレイカー「現れよ、我が手足よ。」

カオスブレイカーがそう言うのとゲートが開き中からロボットモンスターが何体も現れた。

カオスブレイカー「やれ!!」

イクサ「くっ。」

3対1はかなり不利だな。

カオスブレイカー「ファイトでも勝つことは可能だが一応念のため公平なりアルファイトをしようじゃないか。」

イクサ「何!?!」

カオスブレイカー「闇結界発動」

カオスブレイカーの手から煙を出すと、イクサが飲み込まれ気がつくどファイトステージにいた。

カオスブレイカー「ここなら邪魔は入らない。」

周りは3体のモンスターがいた。

イクサ「くっやるか。」

そうして3体1の戦いが始まった。

剣 s i d e

剣「はあ!!」

ドラゴ「何のまだまだ！」

和人「よくやるよな、あいつらこっち帰ってきてから暇な時ずっと鍛練しているもんな。」

そう、ドラゴと剣はイクサとの修行から帰ってきてからというものの、ずっと体を鍛えているのだ。来るべき戦いの時までには。

覇龍剣「それであいつと話してどうだった？」

ドラゴ「あちこちのワールドでカオスブレイカーが現れて暗躍しているそうさ。」

覇龍剣「そうか、あいつらも本格的に動き出したか。……あいつらを呼ぶか。いや、イクサの所へ送ろう。そうしよう。」

ドラゴ「あいつら？まさか!!」

覇龍剣「ああすでに2体生きていたんだ。」

そう、覇龍剣が言っているのは残っている霸王龍だ。

ドラゴ「それで誰だ。」

覇龍剣「マジックワールドとデンジャーワールドだ。」

ドラゴ「ああーあの二人か。何でこっちに合流させなかったんだ？」

覇龍剣「あいつら『そっちにいく必要は無い。自由にやらせてもらう』って言ってこっちに来なかつたんだよ。」

ドラゴ「あーあいつらなら言いかねないな。」

それから数分間ドラゴと覇龍剣は今後のことについて話し合っていた。

カナ「うっわ、また無理矢理ゲートが開かれて周辺の地域に被害だつて最近多いよね。」

剣「確かにな。イリイガルが現れる度に開かれるって言っても最近じゃ毎日じゃねえか。こりゃバディポリスも大変だな。」

レイ「そのバディポリスから私達に協力要請が来てるわよ。」

和人「マジ？」

レイ「ええ。なんでも最近のイリイガルについて協力して欲しいところがあるってさ。」

剣「マジで？なんだろう。」

場所は代わりバイポリスの本部では警報が鳴り響いていた。
画面には謎のモンスターが写されていた。

それ以外のモニターには最近行方不明届けが出されていた狂暴な
モンスター達がいた。

カスミ「何よこれ。こんなの本当にありえるの?」

竜次「ここ最近イリイガルモンスターが開けた穴を埋めていた作業
員が行方不明になっていた。その時に気づくべきだった。」

郷田「このままじゃあこの世界が………終わる」

同時刻

イクサがようやく全てのロボットを破壊していた。

イクサ「これで最後だ!!」

カオスブレイカーはロボットの残骸を見ても余裕の笑みを浮かべ
ていた。

イクサ「さあて次はお前だ。」

カオスブレイカー「流石ですね。しかしあなたはここで終わりです。
そしてあの人間達の世界もここで終わりです。」

イクサ「何?」

カオスブレイカー「全ての輝きを漆黒に染める絶望の剣よ!!今こそ
現れ世界を混沌と絶望に染め上げろ。」

激突!! 戦国の霸王龍対カオスブレイカー

イクサ side

「いでよ!!」

カオスブレイカーかカードを真上にかぎすとうの後ろに大きな人型の化け物が現れ何処かへ向かってしまった。

イクサ「くっあれは一体なんだ?どこへ向かった!!」

カオスブレイカー「そうあせるな。まずはこれを見ろ。」

カオスブレイカーが手からゲートを出しそのゲートの中の光景をイクサに見せた。

イクサ「!!」

その光景にイクサは言葉を失った。

カオスブレイカーが見せてきたのはあちこちにカオスブレイカーと同じ黒輪を体のあちこちに着けた、モンスター達が剣達にいる地球を襲っていたからだ。

イクサ「一体この短期間でどうやってあんな数のモンスターを増やしたんだ?」

イクサが気になったのはどうやってモンスター達を集めたのかカオスブレイカーが来たのはたしか去年の10月それから約4ヶ月であれだけのモンスター達を手駒にしたのか。

カオスブレイカー「ふっ、簡単だ。我のもといた世界で我は『リバーズ』という力があつた。それは我に負けたものの本人が最も欲している力を渡し、我の手駒にするのだ。」

イクサ「なんだと!?!」

たしかにそんな力があれば自分の手駒にしたモンスターが更に別のモンスターをリバーズすればのだから短時間であれだけのモンスターを集めることは容易いのもかもしれない。

このままでは地球がカオスブレイカーの手に堕ちるかもしれない。

剣達がバディポリスに向かって走っていた。理由は町のあちこちから大量のゲートが現れ町の人達を襲っていたからだ。

ちなみに剣はすでに覇龍剣と一体化して襲ってくるモンスター達を手当たり次第倒しながら進んでいた。

剣「ちっ、何だってこんなことになるんだよ。」

ドラゴ「恐らくこの事態の原因はカオスブレイカーで決まりだろうがな。フン!!」

カナナレイ「全く、何体いるのよ。キリがないわ。」

遙か「やるしかない。」

和人「……」

創一「(なんだ? あいつらが現れてから落ち着かないそれになぜかこのカードが力を増している気がする。)」

ドラゴ「俺達リアルファイトになると無力だよな。」

和人「いうな。虚しくなるから。」

剣「止まれ!! これは!!」

カナナレイ「バディポリスの本部が、」

和人「制圧されてやがる。」

数十分後何とかバディポリスにたどり着いた剣達は、騒然とした何せバディポリスの本部が既に謎のモンスター達に囲まれていたのだから。

カナナレイ「ダメね。カスミさんにもつながらない。」

剣「くそ! どうする?」

和人「こうなったら1体1体フィールドに連れ込んで倒すしか無いんじゃないか?」

創一「それじゃあ時間の無駄だ。奴らは既にバディポリスを制圧しやがった。つまり俺達だけで、あの数を相手にするのはきつすぎる。」

剣「じゃあどうする？情報が無い以上やみくもに動くのも危険だ。」
???「情報ならあるぜ。ここにな。」

シーカーズ「!？」

剣「郷田!?無事だったのか。」

郷田「ああカスミさんが手伝ってくれたんだ。大丈夫皆無事だ。あのビルで救助が来るのをまっている。それより町を襲っているのはカオスブレイカーの配下の者だ。」

カナ+レイ「それは分かっているわ。でも何であいつがこんなことを？」

郷田「それは分からない。分かっているのは襲っているモンスター達はすべてカオスブレイカーによって操られている。そしてあいつらにファイトで負ければ、あいつらと同じ運命になってしまう。バディポリスもそれが原因で制圧されてしまった。」

剣「負けたら手下か。まるでゾンビだな。」

創一「ふん負けなければいいんだろ。」

郷田「その通りだ。さあ反撃開始だ。」

そうして剣達は行動を開始した。

イクサ「ふつ、どうやらお前の思い通りには行かないようだな。あいつらが行動しているんだ。お前の用意した手札はじきに尽きただろうぜ。」

カオスブレイカー「ふつ、それはどうかな。さあてこちらもちり札を使うとしよう。」

剣達が謎のモンスター達と戦闘をしていたとき、上空にゲートが開き、その中から先ほどイクサのいた世界からどこかに行った。謎のゴーレムが現れ、近くの10階建てのビルに突っ込みそのままビルが倒壊してしまった。

剣「!!なんだあれ?」

和人「またなんかきた。」

カナナレイ「ちっ、こっちは元々いたできついつつうのに。」

創一「あいつなのか?俺の心をざわつかせているのは、なら)あいつは俺とオーバードロードがやる。他は任せた。」

剣「おい、創一待て!!止まれ!!くっ、じゃまをするな。」

カオスブレイカー「やはりあいつは動くか。まあいいこちらも第2ラウンドを始めようか。もちろん今度はこっちでな。」

そう言つて手に、持っているのはコアデツキケース2戦目はバディファイトと言うわけか。

イクサ「いいだろう。どっちにしろお前を倒さないところの結界からは出られないんだからな。乗るしかないな。」

オープン・ザ・フラッグ

イクサ「ドラゴンワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

カオスブレイカー「プラネットワールドそして食らえ!!」

ライフ10 ゲージ2 手札6

イクサ「何!?ぐわあー!!」

ライフ10↓7

イクサがターンを開始しようとした瞬間イクサの周りに倒したはずのモンスターが現れ、攻撃を受けた。

カオスブレイカー「フツ、ハハハ我が先程のリアルファイトが時間稼ぎだけだと思っていたのか?今お前が受けたのはさっきまでお前が戦っていたモンスターの怨念だよ。」

つまり先程のモンスター達はその為に自らの命を失ったということか。戦争を経験しているイクサはそういう戦略があるのは知っている。ただし了承はしていない。

イクサ「このくそやろうが!!俺のターンドロージャーアンドロー。ゲージ3払い、デッキから2枚をソウルに入れてセンターにバディコール!効果でドロップゾーンから1枚ソウルガードに入れる。」

戦国の霸王龍 バーニング・イクサ・ドラゴン

攻撃力20000 防御7000

アタックフェイズ

イクサ「俺でお前を攻撃。」

カオスブレイカー「くつ。」

ライフ10↓7

イクサ「ターンエンド。」

ライフ7 ゲージ0 手札6

カオスブレイカー「私のターンドロージャーアンドドロージャー、世界侵略の準備手札を1枚捨ててゲージ2追加してデッキから我が半身を手札に加え、我は星輝兵ラドンをセンター、星輝兵ネオンをレフトにコールしてそのままラドンを生け贄に我自身をバディコール。」

手札3枚 ゲージ2 ライフ8

星輝兵 カオスブレイカー・ドラゴン
攻撃力13000 防御力13000 打撃2

イクサ「お前も半身を呼び出したか。」
アタックフェイズ

カオスブレイカー「我の手でお前を殺してやろう。」

カオスブレイカーの鎌でイクサの身体を切りつけた。

イクサ「くっ、ソウルガード。」

残りソウル2枚

カオスブレイカー「ふっ、そうしなければ面白くないな!!」

カオスブレイカーは持っていた鎌を一回イクサから抜いてもう一回切りつけた。

イクサ「ぐはあ!!そ、ソウルガード。」

ソウル残り1枚

カオスブレイカー「ふっ、しぶとい奴だ。ターンエンド。」

ライフ8 ゲージ2 手札3

イクサ「俺のターンドロージャーリアンドドロージャスト、いくぞ。全体攻撃。」

カオスブレイカー「ソウルガード」

ライフ8↓5

イクサ「更にお前の半身を破壊したことでお前に2ダメージ。」

カオスブレイカー「まだまだ。」

ライフ5↓3

イクサ「ターンエンド。」

ライフ7 ゲージ1 手札7

カオスブレイカー「我のターンドロージャーリアンドドロージャスト我の効
果手札2枚捨ててゲージ1とライフ1払い、お前のイクサを」呪縛
”!”

イクサ「何の、ソウルガード。」

残りソウル0枚

カオスブレイカー「キャスト、呪縛されし者我のソウルを1枚生け贄にして、ゲージ1とライフ1払いお前の半身を」呪縛!!」

イクサ「何!？」

カオスブレイカーの半身の手から黒輪が放たれるがイクサが切り裂いたが本体の手から放たれた魔法をもろに食らってしまい、イクサが封じられた。

カオスブレイカー「更にキャスト、呪縛の呪いライフとゲージを1ずつ追加。」

アタックフェイズ

カオスブレイカー「ふ、これでお前を守る者はいない食らえ!!」

イクサ「ぐわぁー!!」

残りライフ7↓5↓3

カオスブレイカー「ターンエンドさ何かしてみたらどうだ?」

イクサ「俺のターンドロージャージアンドロー!! (このカードがあれば。) ターンエンド」

ターン終了を宣言すると同時にフィールドにいたイクサの封印が外れた。

カオスブレイカー「万策尽きたようだな。我のターンドロージャージアンドロー。我の効果手札2枚とライフゲージを1ずつ払い、お前の場のバーニング・イクサ・ドラゴンを」呪縛」

イクサ「くそ。」

またしてもセンターを裏返しにされて動けなくなったイクサしかしまだ諦めた顔はしていない。

アタックフェイズ

カオスブレイカー「ガード魔法があるのだろうか関係ない。時期に手札も尽き負けるのはお前だ。」

イクサ「いいや、負けるのはお前だ。ゲージ2を払いキャスト、ドラゴニック・フォーチュン!!」

カオスブレイカー「何!?!そのカードは!!」

イクサ「攻撃を無効にしてお互いのデッキトップをオープンそれがモンスターならそのサイズ分のダメージを受ける。」

イクサが使ったカードドラゴニック・フォーチュンそれはこの状況でもハイリスクなカード、この状況ではお互いにライフが0になる可能性がある。しかしイクサは早く剣達手助けに行きたいと考えギャンブルカードではあるが勝機のあるこのカードにかけたのだ。そして結果は、

2体「カードオープン!!」

オープンしたカード

イクサ 戦国の霸王龍 バーニング・イクサ・ドラゴン
サイズ3

カオスブレイカー 星輝兵 カオスブレイカー・ドラゴン
サイズ3

イクサ「……………」

カオスブレイカー「……………」

両者爆発した。

カオスブレイカー「ぐっはあ!!」

ライフ0

イクサ「まじかあー!!」

ライフ0

お互いのライフが0になり、闇結界から追い出された。

カオスブレイカー「バカな、あんなカードを使う奴に負けるだなんて。」

イクサ「くっ、やはりこれはかなりにきついな。さあお前を拘束させてもらうぞ。」

流石はイクサ戦国の霸王龍の名に恥じないあれだけの攻撃を受けても立ち上がる。しかしカオスブレイカーはまだ余裕の表情をしていた。

カオスブレイカー「フツ、ハハハイはややはり面白いなお前、その勝ったと思っているその表情それを壊すのが私は大好きなのだよ。」

カオスブレイカーがゲートを開くと中から5体のモンスターが現れた。

イクサ「何!?!」

カオスブレイカー「我がさっきのロボットだけが護衛のわけが無からう。お前ら後は任せた。そいつを始末しろ。」

カオスブレイカーが自分が開いたゲートの中に入っていった。

イクサ「待て!!カオスブレイカー!!」

既にリアルファイトとバディファイトで強敵2連戦を行い、消耗仕切ったイクサがカオスブレイカーまでとわいかなくても5体のモンスターとの戦闘はかなりきつい。

イクサ「ふっ、こんなもの戦争時代何度もあったわ。いいだろう全員相手をしてやろう。」

????「おいおい、何俺達抜きで面白そうなことしてんだ。」

????「まったくです。相変わらずですね。イクサ。」

イクサとモンスター達の間二つの人のようなが現れた。二つとも人と同じ姿をしている。

男のような声をしたのは革ジャンをきて黒いズボンを履いている。

もう1人はまるで魔法使いのような姿をしていた。

そう、彼らが覇龍剣の言っていた、デンジャーワールドとマジックワールドの霸王龍だ。

イクサ「!!いい、生きていたのか?お前達。」

???「ああ、久しぶりだな。」

??? 「元氣そうで何よりです。まずはこのモンスター達を倒しますよ。」

イクサ 「ああ、行くぞ。」

1体の霸王龍でもカオスブレイカーと互角にたたかえたのだから、その手下であるモンスター達が2体の霸王龍に勝つことなど不可能なのであった。

竜次の覚悟!! 放てマテリアル・ブラスタ―!!

カスミ side

時間は少し巻き戻る。

カスミ「郷田は剣君達の所へ無事行つたわ。これで彼らに協力を頼めるわ。」

竜次「了解。こつちも本気で行くぞ。」

カスミ達はこのモンスター達の襲撃にたいして、剣達の協力を得るため無理やり郷田をバディポリスから脱出させてすぐに自分達もモンスター達の撃退を開始した。

カスミ「マテリアルの変身の許可を出すわ。実戦では初めてだけどまあなんとかなるでしょ。」

竜次「おい、結構軽いな。」

カスミ「まあ、固いこと言っても雰囲気出るわけじゃないしね。」

竜次「まあそうだな。」

軽いことを言いながら外の映像を見ると竜次は先ほど話したとおりマテリアルに変身してモンスター達に対抗するようだ。そして手には黒いブレスレットをつけていた。

カスミ「ちよつとそれまだ調整中のやつじゃない!!」

竜次「しのごの言っている場合じゃないだろ。ハザード起動。」

ブレスレットに手をかざすとブレスレットが黒く光り、デツキケースから2枚のカードが飛び出した。

竜次「レッドラビット、ブルータンク小隊、合体!! 構築戦士マテリアル見参。」

2枚のカードが竜次とぶつかり周囲が煙に包まれた。しかし、煙がいつもと違い真っ黒だ。

カスミ「あ、ちよつと!! ダメだつて!!」

普段の赤と青の姿では無く、姿はそのまま黒く輝きまるで無駄な物を排除した姿だ。

マテリアル「これがハザードの姿か。面白い。」
いつもと違う姿に変身したマテリアルで謎のモンスター軍団に向かっていた。

マテリアル「うりや、そうりや、おりや!!」

マテリアルは手始めにバディポリスの正面にいたモンスター何体かを吹き飛ばした。

マテリアル「さあて反撃の時だ。ハザードランス」

ブレスレットから黒い槍を出すと相手に向かって投げつけた。しかも槍は貫通せず刺さっているととても痛そうだ。

「ギャアー!!」

更に畳み掛けてそのモンスターにひざ蹴りをしたあと刺さったままの槍を抜いた。刺されていたモンスターはそのまま倒れた。

「!? アイツヲコロセ!!」

倒されたモンスターを見た他のモンスター達は倒すべき敵をマテリアルに変更したようだ。マテリアルに向かって特攻隊のように必死に向かっている。

マテリアル「流石に数が多いな。ハザードシールド!!」

マテリアルがブレスレットを触ると先ほどの槍が盾に変わりモンスターへの攻撃を防いだ。

マテリアル「数が多いな。ならこれだ。オレンジタカ、グレーガトリング、プラスハザード起動合体!!」

今度はオレンジタカとグレーガトリングのカードが出て来てマテリアルにぶつかるとまた煙が辺りを包んだ。

「なんだこれ?」

「目眩ましか卑怯者め」

マテリアル「そんなんじゃないさ。さあ、第2ラウンドを始めようか。」

ラビットと坦克の要素が消えたが今度は背中に羽が生え、大型ガトリングを装備したマテリアルがモンスターを襲った。

マテリアル「さあて一掃するのでしょうか。」

カスミ「流石にあの装備の力ねただでさえ強力な武器をハザードで強化しているわ。」

研究員「あのーハザードブレスレットって完全にウルトラブレ」それは言っでは言えない面倒なことになるから。」は、はい。」

カスミ「それにしても対イリイガルモンスターように開発されていたマテリアルに霸王軍の持つ思いを力にする技術を組み合わせたらこんなものができるとはね。」

そう。元々マテリアルはバディポリスが開発していたイリイガルモンスターに対抗するためのパワースーツだったのだが、ドラゴが提供してくれた霸王の力やバディポリスが持っていたフューチャー・フォース等のモンスターやファイターを強化する力を解析し、人工的にそれらを作り出すことが出来るようにしたものがハザードブレスレットだ。

カスミ「それにしてもタカとガトリングの組み合わせは強すぎるわね。あんなの一方的な暴力ね。」

カスミが見ていたモニターを見るとマテリアルが敵を殲滅する映像が流れていた。マテリアルが敵に向かって弾丸を放ち続け、本来デメリットの筈の起動力の低さもハザードの力で肉体を強化、タカの力で空へに避けたりハザードシールドで防いだりして一方的な殲滅を行っていた。

カスミ「このままの調子で敵が減ってくればいいんだけど。」

研究員「所長それフラグってええ!!所長マテリアルの鎧のあちこちが損傷しています。恐らくハザードのパワーにスーツが耐えられな

かった可能性があります。」
カスミ「なんですつて!?!」

マテリアル「ま、まずいこのままじゃあ変身が解けちゃう。」
マテリアルはしばらく戦っていたのだが自らの行動にスーツが耐えられなくなりあちこちに不具合が発生しており今ではほとんど動くことが出来ないでいる。しかしまだ敵意のあるモンスターは3体もいた。

しかもそのモンスター達は盾やらアーマーやらで防御力が高く先ほどから攻撃を仕掛けていたが、傷一つ付けることが出来ずにいた。
マテリアル「まだ負けられない、負けるわけにはいかない。マテリアル・ブラスター!!ん?なんだ?通信?」

カスミ『ちよつとそれまだ調整が終わっていない武器じゃないの!それだけは止めなさい。』

マテリアルは持っていたカードを実態化して黒くになった。その名はマテリアル・ブラスターハザードの力を最大限までいかすための武器だしかし、この力はとても大きく、それでいて反動もすさまじく1発打つと生身なら身体が吹き飛び、通常の姿ではすぐに変身が解除されてしまいハザードフォームでようやく打つことが出来るどてつもない武器だ。

そんな武器を使おうとすることに気づいたカスミは急いで、連絡し止めさせようとした。

マテリアル「すまない。でももうこのてしか思い付かないマテリアル・ブラスター発射!!」

マテリアル・ブラスターから出された光線が敵のモンスターに当

たった瞬間その周囲の全てが光に包まれた。

カスミ「映像はあの後どうなったの？」

研究員「落ち着いてください。映像まもなく復旧します。」

マテリアル・ブラスターが放たれた瞬間周辺のカメラから映像が送られてこず、急いで復旧作業に入った。

それから数分後何とか復旧したカメラに写っていたのは周辺の建物は倒壊、撃たれたモンスターはギリギリ息があるようだ。

カスミ「あ、」

マテリアル・ブラスターを撃った本人はぼろぼろでマテリアルのスーツは完全に破損あちこちケガしていて出血もしてようだ。

カスミ「救助班いる？急いで彼の救助を。」

研究員「了解!!こちら本部、すぐに救援を要請します。」

カスミ「それにしてもまさかハザードにあんな力があるだなんて。」
実験を行った時は確かに強力だったがここまでの威力は出なかった。せいぜいビルを1つ破壊する程度だった。(それでも十分な力だが)先ほどの1発は下手をすれば町一つ破壊可能性があったしかし、それは巨大な盾を持つ た巨大なモンスターを3体も戦闘不能に追い込むとは、それほど仲間を守りたいという思いが強かったのだろう。

カスミ「今度何か奢ってあげるか。」

研究員「そんなときはぜひ我々もお願いします。」

カスミ「あんたらは自費ね。」

研究員「ええー!!ん？これはゲートから何か来ます。これは……カ
オスブレイカーです。」

カスミ「なんですって!?!」

その頃救護班はを治療するため救急車に乗せて状態を確認していた。

救護班「すごいですね。こんなにケガしているのに、意識を失っているだけだなんて。」

そうなのだ普通の人間ではほぼほぼケガではすまないくらいのダメージを受けているのにも関わらず、どこも致命傷にはなっておらず、本人の意識は無いが無事のようにだ。

研究者「おい、聞こえるか!!早くその場から離れろ。」

救護班「一体どうした?」

研究者「カオスブレイカーがそっちに向かってている。今回の騒動の原因だと思われる奴だ。この状況では撤退するしかない。急げ!!」

救護班「り、了解。撤収!撤収!」

救護班は急いで周りに怪我人がいないかを確認し、急いでその場を離れた。

カオスブレイカー side

「(くつやはり先ほどの攻撃が効いているな。早く回復しなければ。)!!ほう。」

カオスブレイカーは驚いた確かに手駒にしたモンスター達にはバディポリスを襲わせた。理由はバディポリスによって対抗策が講じられる前にバディポリスを潰し反抗勢力を封じようとしていたのだ。

なので勢力の半分を向かわせたのだが。しかし、実際に来てみれば、モンスター達は全滅、バディポリスは確かに損傷はしているが完璧じゃない。中々に想定外だった。

カオスブレイカー「やはり、面白い。これが人間達の意地と言うやつか。しかし、このモンスター達は私の力になつてもらう。」
そういうとカオスブレイカーが手をかざすと、周りのモンスター達から力を奪った。もちろんカオスブレイカーが与えた力を取り戻したようだ。それによりイクサによって受けた怪我が治ってしまった。
カオスブレイカー「さあて私の切り札を使うとしよう。」
そういうとどこかへ向かって行った。

カスミside

カスミ「カオスブレイカー、一体何をすべきなの？」

カオスブレイカーは恐らく周りのモンスター達からエネルギーを奪い自らの傷を修復したようだ。

それに呼応するように先ほどゲートから現れた謎のゴーレムモンスターのエネルギーも上昇している。

そしてモンスターを写していたカメラに一人の人物が写った。

創一「見つけたぞ。俺はお前を倒す。」

霸王の敗北

創一 side

俺は今日の前のゴーレムを見ていた。こいつが反応しているといことはカオスブレイカーが関わっているのは明白ならさっさと倒してあいつも倒す。

創一「お前がカオスブレイカーの遊具だろ。てめーを壊してカオスブレイカーが出てくるだろうな。」

カオスブレイカー「そんなことしなくても我はここにいるぞ。」

創一「カオスブレイカー!!」

後ろに振り向くとそこには自ら起こしてしまった罪の塊のようなやつがいた。

カオスブレイカー「いやはや感動の再開じゃないか。喜ぼうではないか。」

創一「お前がいなければもつと喜んだんだけどな。」

カオスブレイカー「そうかならばまずはお前を倒すでしょう。霸王軍をすべる者よ。」

創一「何?」

後ろを振り向くと、剣がいた。傷があるが無事なようだ。

剣「見つけたぞ、カオスブレイカーお前を倒せばこの騒動が終わるんだろさっさと倒れろよ。」

カオスブレイカー「ああそうだ。ならば始めよう」

創一「お、おい戦うなら俺が、」

剣「お前は今冷静じゃない。その状況じゃああいつには勝てない。」

創一「!!」

確かにそうだ。今俺は冷静じゃない。それは自分でも分かるだから剣は俺を落ち着かせるために、自分がファイトすると言っているのか。

剣「さあて、やるぞドラゴ。」

ドラゴ「おう。」

剣「フィールド展開!!」

剣とカオスブレイカーがフィールドに消えていった。
創一「頼んだぜ。」

剣 side

剣「さあて決着をつけようかカオスブレイカー!!」

カオスブレイカー「よかろう始めよう。」

剣「霸王の力を今のここに、ルミナイズ、霸王の絆。」

カオスブレイカー「混沌を極めし我が力、反転させし我が手駒全てを殲滅せよ!!ルミナイズ、リバーズ・オブ・オメガ」

二人「オープン・ザ・フラッグ」

カオスブレイカー「プラネットワールド」

ライフ10 手札6 ゲージ2

バディ 星輝兵 ”Ω” グレンディオス

剣「霸王 降臨」

ライフ9 手札7 ゲージ2

バディ 絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー

《星輝兵》 Ω ” グレンディオス》

「フラッグ」プラネットワールド

「種類」モンスター「属性」サイバーゴーレム

「サイズ」3 「攻」13000 「防」13000 「打」2

「効果」

■【コールコスト】君の場の《星輝兵》1枚以上をソウルに入れ、ゲージ3を払う。

■君のフラッグが「プラネットワールド」で、このカードがバディゾーンにあるなら、君は《プラネットワールド》以外のカード名に「〃R〃」を含むモンスターを使い、カード名に「〃R〃」を含むモンスター全ては、《プラネットワールド》のワールド名を得て、攻撃力+4

000!

■君の場のカード名に「〃㊦〃」を含むモンスター全てのサイズを3減らす。

■君のメインフェイズ開始時、君のライフが2以下で、相手の場のカード全てが裏向きになっているなら、君はこのファイトに勝利する。

■君の場にカード名に「〃㊦〃」を含むモンスターが登場した時ライフ1を払ってもよい。払ったら相手の場のカード1枚を裏向きにする（裏向きになったカードは、次の持ち主のターン終了時に元に戻る）。

■【起動】ゲージを払い、君の手札にあるカード名に「〃㊦〃」を含むカード1枚を捨てる。そうしたら、相手の場にある裏向きのカード全ては、次の持ち主のターン終了時に元に戻らない。

FT「全ての輝きを漆黒に染める剣！」

カオスブレイカー「私のターンドロージャンドドロ、センターに星輝兵 効果で手札のギガントソードドラゴン”㊦”を捨てて2チャージャンドドロそしてゲージ2を払いセンターにコール。ジェムクローン”㊦”をセンターにコール。ジェムクローンが登場した時、手札の”㊦”をコール出来る。ギガントソードドラゴン”㊦”をコール!!」

ライフ10 手札4 ゲージ5

星輝兵 プラゼオジム

プラネットワールド

サイズ1

攻撃力6000 防御力0 打撃力1

■君の場に”㊦”と名のつくモンスターがいるときこのカードのサイズは1減る。

■”リバースチャージ”このカードが登場した時手札の”㊦”を含むモンスターを捨てて発動することが出来る。山札の上から2枚をゲージに置き、カードを1枚引く。”リバースチャージ”は1ターンに1度しか使用できない。

ジエムクローン”㊦”

プラネットワールド

サイズ0

攻撃力1000 防御1000 打撃力0

コールコスト(ゲージ2を払う。)

■このカードが登場した時、ドロップゾーンの”㊦”を含むモンスターを1枚選んでこのカードにコールコストを払わずこのカードの上に重ねる。

■このカードが”㊦”を含むモンスターのソウルに入っているとき君の手札の”㊦”を含むモンスターの(コールコスト)のゲージを1減らす。

ギガントソードドラゴン”㊦”

ドラゴンワールド

サイズ3

属性 武装騎竜

攻撃力8000 防御力8000 打撃力4

(コールコスト)ゲージ3を払い、君の場のカード1枚の上に重ねる。

■「起動」このカード以外の君の場のモンスター1枚選んでそのカードを裏返す。その後相手の場のカードを1枚破壊して相手に2ダメージ!!(裏向きになったカードは、次の持ち主のターン終了時に元に戻る)。

センターにクリスタルの塊が出てきた。その後クリスタルが変形していき黒いギガントソードドラゴンになった。

剣「ジエムクローン!!それにギガントソードドラゴンまで!なんでヒーローワールドとドラゴンワールドのカードが使えるんだ?

カオスブレイカー「それはな。Ωグレンディオスの能力だよ。こいつはバディゾーンにいれば㊦”モンスターを使うことができるんだよ。」

黒くなってしまったモンスター達が次から次へと現れてくる。

アタックフェイズ

カオスブレイカー「ギガントソードドラゴンでファイターを攻撃。」

剣「くっ、」

残りライフ9↓5

カオスブレイカー「ターンエンドさあ、楽しませてみる。」

ライフ10 ゲージ5 手札4

剣「言われなくても楽しませてやろう。俺のターンドロージャーにアンドローレフトに覇竜 システミックダガーをコール。ライトに覇竜騎士団 エクシード・ドラグーンをコール。システミックの効果でチャージアンドロー。更に装備、覇竜拳 轟炎そして轟炎の効果で俺の場の霸王軍全て攻撃力と防御力+2000」

覇竜拳 轟炎

攻撃4000 打撃2

覇竜 システミックダガー

攻撃2000↓4000 防御2000↓4000 打撃2

覇竜騎士 エクシード・ドラグーン

攻撃10000↓12000 防御3000↓5000 打撃2

アタックフェイズ

剣「頼むドラグーンお前の力であの化け物をぶち壊せ。」

カオスブレイカー「キャスト” 冂 ”バリア」

”冂”バリア

プラネットワールド

属性 防御

■相手のターンの攻撃中に使える。

■その攻撃を無効にし、君の場に”冂”と名のつくモンスターがある時山札の上から1枚をゲージに置き、カードを1枚引く。

カオスブレイカー「私のターンドロージャーアンドロー星輝兵

プラジオジウムをクール効果で手札からフェンリル”㊦”を捨ててチャージアンドドロウそしてゲージ3払い我の場のをソウルにいられてレフトにバディコール星輝兵”Ω”グレンディオス!!”

カオスブレイカーの後ろに構えていたその名もΩグレンディオス、カオスブレイカー「我はゲージ3のところの効果でゲージ1軽減してゲージ2を払いアーマード・タイラント”㊦”をクール!!”

アーマード・タイラント”㊦”

デンジャーワールド

サイズ3

属性 アーマナイト

攻撃力9000 防御力9000 打撃力4

クールコスト)ゲージ3を払い、君の場のモンスターの上に重ねる。

■君の場のモンスターを1枚裏返す。そうした場合、相手の場のカード全て破壊する。(裏向きになったカードは、次の持ち主のターン終了時に元に戻る)。

「ソウルガード」

ドラグーン「すまねえ。あとは任せた。」

剣「ドラグーン!!お前の犠牲は無駄にはしない。」

グレンディオスが手から黒輪を放ちその黒輪にドラグーンが当たるとドラグーンがその黒輪に閉じ込められてしまった。

ドラゴ「いや次の我らのターンが終わった時再び戦えるようになるそれまでの辛抱だドラグーン。」

カオスブレイカー「それはどうかな。」

剣「何?」

カオスブレイカー「キャスト、呪縛されし者 ゲージ1ライフ1俺のタイラントのソウルを1枚ドロップゾーンに送りシステミックを裏返しに。」

ライフ10↓9

今度はカオスブレイカーが放った魔法によってシステミックまで封じられてしまった。

剣「何枚裏返しにされたって次のターンには戻って来てくれるその時がお前の最後だカオスブレイカー。」

やはり愚かだな。Ωグレンディオスの効果発動手札の〃〃を捨ててゲージ1払うことで能力発動!!相手の場の裏返しになっているカードは次のターンになっても帰って来ない。」

剣「何!?!」

Ωグレンディオスから放たれた波動のようなものを放つとシステミックとドラグーンを閉じ込めていた黒輪の色が濃くなり、中の2体が苦しそうだ。

剣「ドラグーン、システミック!!」

カオスブレイカー「他人の心配をしている場合かな。」

アタックフェイズ

カオスブレイカー「Ωグレンディオスでファイターを攻撃。」

剣「くっ。」

残りライフ5↓2

カオスブレイカー「我的手駒、アーマナイト・ブラックドレイク〃
 \forall でファイターを攻撃。」

剣「マツハブレイバー頼むゲージ1払ってセンターにコール。」

マツハブレイバーがセンターに現れた瞬間やられてしまった。

カオスブレイカー「ちつター耐えたか。我はこれでターンエンドしかし、お前に何ができる?」

ライフ8 ゲージ0 手札2

剣「俺のターンドロージャージアンドドロークそ。ターンエンド。」
レフトとライトのモンスターゾーンは使用不能。ということは本来の霸王軍の戦い方が出来ないということだ。

霸王軍の特徴はカードの効果でスペリオルコールによって攻めていくのだ。なので今回のようにレフトとライトが封じらると攻めようにも攻められないのだ。しかもΩグレンディオスの能力のせいである。実質的にこの2枚は封じられて動けない。

カオスブレイカー「私のターンドロージャージアンドドローク我はセ

ンターのゲージ1を払い、センターに剛力忍者 風魔小太郎 // 冨 // をコール。」

剛力忍者 風魔小太郎 // 冨 //

カタナワールド

サイズ3

攻撃力6000 防御力5000 打撃力2

コールコスト(ゲージ1を払い、君の場のモンスター1枚の上に重ねる。)

このカードが登場した時ドロップゾーンの // 冨 // を含むモンスターを1枚選びこのカードのソウルに入れる。

■このカードが攻撃した時君の場のモンスターを1枚裏返す。そうしたらこのカードはスタンドする。(裏向きになったカードは、次の持ち主のターン終了時に元に戻る)。

ドレイクを素材に黒い剣を持ったまがまがしい忍者が現れた。

カオスブレイカー「Ωグレンディオスの効果我の場に // 冨 // モンスターが登場した時ライフ1払いお前のアイテムを呪縛！」

剣「アイテムも行けるのか? くっ。」

カオスブレイカーから放たれた黒輪をくらってしまいアイテムも封じられてしまった。

アタックフェイズ

カオスブレイカー「やれ!! Ωグレンディオスその力であらゆる者を殺せ！」

剣「くそー!!」

ライフ0

創一「剣大丈夫か？」

剣「ああすまない負けてしまった。」

創一「気にするな次は俺が倒す。」

ファイトに負けてフィールドから追い出された剣がぐったりして

いる。

カオスブレイカー「ハハハまさか我々の目的の最大の脅威をこの手で排除できるとはな。さあて手駒にするのはやめておこう。その霸王龍を手駒にできそうにないのな。やはりその身を滅ぼすとしてよう。」

創一「や、止める!!」

カオスブレイカーは手から先程までの黒輪ではなく、純粋なエネルギー弾をぶつけようとしている。

カオスブレイカー「さらばだ。」

創一「させるか。」

カオスブレイカー「何!?!」

カオスブレイカーが放ったエネルギー弾を自ら受けた。

カオスブレイカー「バカめそのエネルギー弾を受けなければ我とフォイトでき、もしかしたら勝てたかもしれないというのに。」

創一「お、お前の攻撃そんなでもないな。」

カオスブレイカー「な、何!?!馬鹿な私の最大の攻撃だぞ。耐えられないわけがない。何故お前が生きている。」

創一「答えはこれだ。」

創一がもっていたのは数ヶ月前カオスブレイカーがこの世界に来る原因となった事件その時に手に入れたカード、そうドラゴニック・オーバーロード “The Rebirth” だ。

カオスブレイカー「!!なるほどそのカードのおかげでお前は生きられたと。」

創一「皮肉なものだな。お前がこの世界に来た原因がお前の邪魔をするだけだ。」

カオスブレイカー「まったくだ。あの世界で死んだはずなのに今もこうして生きていることと同じくらいな。だが、ここでバディファイトで貴様を倒し、アンソウンの手みあげにしてやろう。」

創一「こつちも今までお前にされたこと何倍にもして返してやる。」

カオスブレイカー「ふ、戯言をここで貴様を倒しこの戦争を我らの完全勝利で納めてみせよう。」

「させると思っっているのか?」

「!？」

2体の竜の戦いが始まろうとしたとき謎の声が聞こえたかと思うと上空のゲートが開くと3体のモンスターが現れた。

カオスブレイカー「ほおう。おっつて来たのかイクサよくぞあのモンスター達を振り切れたな。」

イクサ「いいや。倒してきたのさ。こいつらの力を借りてな。」

「てめえがカオスブレイカーか。さっさと」

「まったくです。これが終わったら我々で彼を鍛えましょう。」

剣「あ、あなた達は?」

イクサとともに現れた2人に名を聞いた。

「俺様は丈デンジャーワールドの霸王龍、無法の霸王龍 ドラゴ

ニツク・アウトレイジ・クロスだ。」

「私はマジックワールドの霸王龍にして覚醒の霸王龍 ドラゴ

ニツク・アウエイキング・ウィザードです。以後お見知りおきを。」

煉獄の霸王龍

カオスブレイカー「ほう。わざわざ死に来るとはバカな奴らだ。」
カオスブレイカーは5、6個のエネルギー弾をこちらに向かつて撃ってきた。

クロス「くつ、ここは俺に任せろ。お前達は速くアイツを覚醒させる。」

カオスブレイカー「これも防ぎますか。これならどうですか？」
クロスがカオスブレイカーの攻撃を防いでいる間他のメンバーは一ヶ所に固まりクロスに守ってもらっている状態だ。

イクサ「分かった。」
ウイザード「任せて。」

ドラゴ「待てお前達一体何をするつもりだ？」

ウイザード「それは、ドラゴニック・オーバーロードを霸王龍にする。」

周り「!!」

創一「な、何を言っているんだ？そんな事出来るわけが、」

ウイザード「それができるんですよ。我々霸王龍は各ワールドの霸王軍を指揮するための存在。言わば司令塔的な存在なのです。そんな我がらが想定外のことが起き指揮が時、どうする話だったと思いますか？」

創一「それは、別の人にやってもらう？」

ウイザード「そう。なので霸王龍には他のモンスターに霸王龍とする力があるんです。まあ同じワールドのモンスターだけですけどね。なので継承するのは、」

ウイザードはそう言うといくサの方を向いた。

イクサ「俺は今戦えない。だから少しでもお前に力を与えてカオスブレイカーを今ここで倒したいんだ。もうこれ以上あいつの思い通りにはさせたくない。頼む。」

創一「出来るのは分かった。イクサの意思も、でもオーバーロードはいいのか？お前は前にドラゴに霸王軍にならないかと聞かれて

断っていたじゃないか。」

オーバーロード「構わない。我はあのカオスブレイカーを倒せるのであればたとえ自分のプライドなど捨てる。我もあいつとは色々あったのでな。」

創一「そうか。……頼むオーバーロードを霸王龍にしてやってくれ。」

クロス「やっとか。速くしろ俺が持たない。」

イクサ「ああもちろんだ。創一、オーバーロードのカードの上にくのカードを。」

そう言つてイクサが自分の胸から赤いカードを取り出すと創一に渡した。

創一「これが霸王龍のカード。」

イクサ「見とれている状況じゃないぞ。速くオーバーロードを。」

創一「あ、ああ。」

創一が持つていたドラゴニック・オーバーロードの上にカードを重ねると赤いカードが燃えた。

創一「!!」

オーバーロード「!!これは。」

暫くすると、炎が消えていきカードに絵柄がついた。

オーバーロードが一回り大きくなり武器も大きくなつた姿が描かれていた。

これがドラゴニック・オーバーロードの霸王龍の姿。

イクサ「速く!!そのカードをデッキに。」

創一「ああ。」

カオスブレイカー「させるか。」

カオスブレイカーは今までとは比べものにならないパワーのエネルギー弾を複数撃つてきた。

クロス「あ、やべ。」

クロスは1発のエネルギー弾が創一達に向かって行つてしまった。

創一「まずい覇龍剣!!」

覇龍剣「ダメだ。まださっきの傷が癒えていない。これ以上やつた

らお前が持たない。」

剣「そんな事言っている場合か!!」

ウィザード「来ます!!」

攻撃が剣達に向かって来たときいきなりゲートから2つの炎が出てきてその攻撃を防いだ。そしてそのまま創一のデッキの中に入っていた。

剣「今のは一体?」

ドラゴ「恐らくカオスブレイカーによってゲートがめちゃくちゃにされた。その影響で何処かの次元から来たと思われる。」

剣「よく今ので分かったな。」

ドラゴ「まあこうゆうのはよくあるテンプレだからな。」

剣「もともこもねえな。」

創一はデッキの中を確認するとみたこともないカードが入っていたがその能力をみて何かを悟った。

創一「なるほどな。……お前を倒して全ての因縁に決着をつけてやる。フィールド展開!」

カオスブレイカー「ふっ面白い。返り討ちだ。」

そう言うときカオスブレイカーは創一が展開したフィールドの中に入っていた。

剣「頼んだぞ創一。」ガク

創一「煉獄の炎が全てを焼き付くす。ルミナイズ煉獄の龍王!!」

カオスブレイカー「混沌を極めし我が力、反転させし我が手駒全てを殲滅せよ!!ルミナイズ、リバーズ・オブ・オメガ」

二人「オープン・THE・フラッグ」

カオスブレイカー「プラネットワールド。」

ライフ10 ゲージ2 手札6

バディ星輝兵 “Ω” グレンディオス

創一「ドラゴンワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

バディドラゴニック・オーバーロード

創一「俺のターンドロージャーシアンドローゲージ2を払い、デッキの上から3枚をソウルに入れてドラゴニック・オーバーロードをセンターにバディコール。」

ライフ11 手札6 ゲージ1

ドラゴニック・オーバーロード

攻撃13000 防御13000 打撃力3

アタックフェイズ

創一「オーバーロード、ファイターを攻撃。」

カオスブレイカー「……」

ライフ10↓7

創一「ターンエンド」

ライフ11 ゲージ1 手札6

カオスブレイカー「私のターンドロージャーシアンドロー我はセンターに星輝兵 ネオンをレフト、星輝兵 ライトにコール。効果で手札のギガントソードドラゴン”Я”を捨てて2枚ゲージに置き、ワンドロー。ゲージ3を払い、ネオンをソウルに入れてΩグレンディオスをセンターにバディコール。」

ライフ11 ゲージ2 手札4

Ωグレンディオス

攻撃力11000 防御力11000

カオスブレイカー「更に星輝兵 をレフトに、更にゲージ2を払い、

クレイドル” 牙” をコール。」

クレイドル” 牙”

プラネットワールド

サイズ3

攻撃11000 防御11000 打撃力3

コールコスト(ゲージ2を払い、君の場のモンスター1体の上に重ねる。)

■このカードが登場した時、ドロップゾーンの” 牙” と名のつくモンスターを1枚選んで、コールコスト払わずコールできる。この効果で登場したモンスターはサイズが0になる。

カオスブレイカー「クレイドル” 牙” の効果ドロップゾーンからギガントソードドラゴン” 牙” をコール。更にライフ1を払い、オーバーロードを呪縛。」

オーバーロード「くっ、ソウルガード。」

オーバーロード残りソウル2枚

アタックフェイズ

カオスブレイカー「やれギガントソードドラゴン” 牙” でオーバーロードを攻撃。」

オーバーロード残りソウル1枚

カオスブレイカー「Ωグレンディオスでオーバーロードを攻撃。」

オーバーロード「ソウルガード」

オーバーロード残りソウル0枚

カオスブレイカー「クレイドル” 牙” でオーバーロードを攻撃。」

創一「キャスト、ドラゴンシールド” ” オーバーロードの盾” 攻撃を無効にしてライフ+1してワンドロー。」

カオスブレイカー「……ターンエンド。」

ライフ7 ゲージ0 手札4

創一「俺のターンンドローチャージアンドドローキャスト、黙示録の炎、能力でオーバーロードが攻撃するたびに相手の場のカードを1枚破壊して相手に1ダメージ与える。」

アタックフェイズ

創一「オーバードロードでΩグレンディオスを攻撃。能力でギガントソードドラゴン”ㄩ”を破壊。そして1ダメージ。」

カオスブレイカー「……」

残りライフ10↓9

Ωグレンディオス残りソウル0枚

ギガントソードドラゴン”ㄩ”破壊

創一「オーバードロードでΩグレンディオスを攻撃。能力でクレイドル”ㄩ”を破壊する。更に1ダメージ」

カオスブレイカー「キャスト”ㄩ”バリア、能力で攻撃を無効にしてチャージアンドドロー。」

ライフ9↓8

創一「くっ、やはりオーバーロードの2つ目の効果はやはり使われないか。」ターンエンド。」

ライフ10

カオスブレイカー「俺のターンンドローチャージアンドドロー星輝兵プラジオジウムをレフトにコール。効果で手札の魔浪 フェンリル”ㄩ”を捨てて2ゲージ追加して、ワンドロー。そして手札から捨てられた魔浪 フェンリル”ㄩ”の効果発動。手札から捨てられた時このカードをゲージ2払い、スペリオルコール。」

魔浪 フェンリル”ㄩ”

レジエンドワールド

サイズ3

攻撃10000 防御6000 打撃力6

コールコスト(ゲージ5を払い、君の場のモンスターを1枚選び、重ねる。)

■このカードが捨てられた時ゲージ2を払ってドロップゾーンにあ

るこのカードを（コールコスト）を払わずにコールする。

■「起動」このカード以外のモンスターを1枚裏返してもよい。このカードに「3回攻撃」を得る。

「ソウルガード」

カオスブレイカー「我の効果発動。フェンリル ♪ ♪ が登場したのでライフ1を払いお前のバディを呪縛。」

ライフ7↓6

創一「オーバーロード!!」

カオスブレイカー「これで貴様の相棒はもういない。」

アタックフェイズ

カオスブレイカー「Ωグレンディオスでファイターを攻撃。」

創一「くっ、」

残りライフ11↓8

カオスブレイカー「フェンリルでファイターを攻撃。」

創一「ぐわあー!!」

残りライフ8↓2

カオスブレイカー「ターンエンド。少年これが絶望だ。」

ライフ6 ゲージ1 手札

創一「俺の、いや俺たちのターン!!ドロー!!チャージアンドドロー!!キャスト天竜神明ゲージ1とライフ1払ってドロップゾーンの3枚をデッキに戻して2枚引く。そして行くぞ!!煉獄竜 ワールウィンド・ドラゴンをレフトにコール。」

カオスブレイカー「なんだ?そのモンスターは!!まさかお前は。」

創一「そして、ゲージ3を払い俺の場のモンスターをソウルに入れ

て、レフトに煉獄の霸王龍 ドラゴニック・オーバーロードザ・グレイド!!」

煉獄竜 ワールウインド・ドラゴン

サイズ2

属性 フレイムドラゴン

攻撃力9000 防御力4000

■君の場にサイズ3の（フレイムドラゴン）がいるときこのカードのサイズは2減る。

竜化（ゲージ1を払う。）

煉獄の霸王龍 ドラゴニック・オーバーロードザ・グレード

サイズ3

属性 フレイムドラゴン

攻撃力13000 防御力13000 打撃力3

コールコスト（ゲージ3を払い、君の場のフレイムドラゴンを1枚以上ソウルに入れる。）

■「シークメイト」このカードが登場した時、君のドロップゾーンにあるカード4枚を山札の1番下にする。その後デッキから「煉獄竜ドラゴニック・ネオフレイム」か（霸王軍）のアイテムを1枚選び竜化させるか装備する。

■「イモータル・フレイム」このカードが相手のモンスターを破壊したか、相手にダメージを与えた時君の手札を2枚捨てる。捨てたら君の場の（フレイムドラゴン）を2枚選びスタンドする。

「2回攻撃」

カオスブレイカー「まさかその姿になるとはな。だが相方がいなければどうということはないな。」

創一「そうか。ならば見せてやろう。オーバーロードの能力発動、シークメイト、!!ドロップゾーンから4枚をデッキに戻す。その後デッキから煉獄竜 ドラゴニック・ネオフレイムをデッキから竜化するかコールする。」

カオスブレイカー「まさか、さっきのあいつは!!」

創一「その通り、竜化!! 竜 ドラゴニック・ネオフレイム!!」

煉獄竜 ドラゴニック・ネオフレイム

サイズ2

属性 フレイムドラゴン

攻撃力9000 防御力4000 打撃力2

■君の場にサイズ3の（フレイムドラゴン）がいるときこのカードのサイズは2減る

■君のこのカードが登場した時か竜化した時ゲージ1払ってもよい。払ったらそのターン中攻撃によって相手のモンスターが破壊された時そのモンスターを破壊する。

竜化（ゲージ1を払う。）

ドラゴニック・オーバードロードが雄叫びをあげるとデッキから炎が出てきてそれが創一を飲み込んだ。

創一「え？」

ドラゴ「あれ死なないか？」

イクサ「大丈夫あれは。」

創一「その通り。ようやく俺もリアルファイトが出来る。」

オーバードロード「お前それ気にしていたのか？」

創一「……」

アタックフェイズ

創一「行くぜオーバードロードでカオスブレイカーを攻撃！」

オーバードロード（無視しやがった。）まあいい。食らえエターナル・フレイム!!」

カオスブレイカー「ふっ、進化してもあまり変わらずの特攻か面白いもないな。」

Ωグレンディオス破壊

創一「俺自身でファイターを攻撃。」

カオスブレイカー「く。」

残りライフ6↓4

創一「オーバーロード頼む！」

オーバーロード「任せろ。」

カオスブレイカー「ぐはあ!!だ、だがお前はもう攻撃出来ない。次のターンで終わりだ。」

残りライフ4↓1

創一「まだまだ、オーバーロードのスキル発動手札を2枚捨てることでオーバーロードと俺自身ネオフレイムをスタンド。イモータル・フレイム!!」

オーバーロードが炎を吹き出すように体から出し、それを創一にも当たり再度攻撃することが出来るようになった。

カオスブレイカー「ば、バカなこの我がこんなどころで。」

創一「これで終わりだカオスブレイカー!!これで決着だー!!」

カオスブレイカー「ぐわあー!!」

残りライフ1↓0

勝者 創一

緊急事態発生

カオスブレイカー「ば、バカな。この我が最強の兵器Ωグレンディオスの力を使ったというのにまけるだ?!」

オーバーロードの攻撃をくらい立ち上がれないくらい消耗したカオスブレイカーがそんなことを言っている。

創一「そうだ。お前はもう負けたおとなしく降参しろ。」

カオスブレイカー「敗北者? いいやまだだ。まだ我は」

??? 「いいや君はここで終わりだよ。」

周り「!!」

カオスブレイカー「ガハア!! き、貴様はアンノウン!!」

カオスブレイカーの腹から手が出てきたのはアンノウンの手だ。後ろに開いたゲートから手を出しカオスブレイカーが止めをさした。

アンノウン「いやー君はよくやってくれたよ。カオスブレイカー。おかげでこれだけのマイナスエネルギーが手に入った。それだけじゃなく我らの宿敵まで倒してくれるとはね。しかし、君はもう用済みだ。大丈夫だ君の力は無駄にはしないただ君のその力を生贄にして我らの神を復活させるだけさ。」

カオスブレイカー「ハハハ、ハーハツハハ!! 面白いある程度計画がすすんだら裏切るつもりが我が裏切られるとはな。やはり面白いぞ。褒美に抵抗せずに。お前達の供物になってやろう。」

アンノウン「強がりをも、もう抵抗する力すら残ってないんだろ。」

そう言うとカオスブレイカーは黒く光り輝き上へ登っていった。その上にゲートが現れ、光はその中に消えていった。

アンノウン「さあ、我が主君 混沌魔龍様をこの地に!」

ドラゴ「何!?!」

剣「混沌魔龍とは何だ？」

ドラゴ「我らがかつて倒したモンスターだ。そしてその力は我ら霸王龍が全ての力を結集してもようやく倒すことができる化け物だ。」

周り「!!」

1体1体が強力な霸王龍そしてそれらを指揮する覇龍剣、強力なウィザード「あの化け物を蘇らせるつもりなの!？」

クロス「そんなことになったら、俺たちが数百年前にしたことがイクサ」と、止めなければ。」

覇龍剣「剣、行けるか。」

剣「なんだかよく分からないけどとにかくあいつがやろうとしていることは危険だと言うことは分かった。覇龍剣!!」

弱った身体で、覇龍剣と一体化した剣は、アンノウンに向かって突進していった。

アンノウン「無駄なことを。タイムドラゴンども。」

いきなりゲートからタイムドラゴンのモンスター達が現れ剣達の道を塞いだ。

剣「邪魔だ!!」

霸王龍達「道を開けろ!!」

タイムドラゴンと霸王龍の衝突それによりとてつもないパワーが周りに伝わり、近くにあった建物が2つほど倒壊した。

その爆風の中でも剣と覇龍剣とドラゴは敵陣に向かって突進するのを止めない。タイムドラゴンも止められてない。

アンノウン「まさかこれほどの力をもっているとは、しかしもう遅い。まもなく我らが神はこの地に復活する。そして我ら、「解放者」によって世界は生まれ変わるのだ。」

剣「そうはさせない。」

覇龍剣「剣、俺をあの手の中。」

剣「分かった。」

ドラゴ「おい待て覇龍剣それは流石にお前の身が持たない!!」

剣「何!？」

覇龍剣「じゃあな、また会おう。」

ドラゴが忠告するが時既に遅し、覇龍剣がゲートの中に入っていた。暫くするとゲートの中から少し赤い光が輝きゲートが縮んでいった。

その後そのままゲートが閉じていった。

アンノウン「何!?!何故ゲートが閉じてゆく、貴様ら一体何をした!!」
ドラゴ「簡単なことだ。ゲートを閉じたそれだけだ。」

アンノウン「しまった!!今の我が主は、ゲートを開ける力は無い。それでも我が主は復活したまたゲートを開ければこの地に。」

ドラゴ「それも不可能だ。覇龍剣があの中に入っていたのはあのゲートを不安定にするためだ。お前達がわざわざ俺達の前で主を復活させようとしたのはそのカオスブレイカーとこの地に集まったマインスエネルギーそしてお前という存在それ等が揃わなければワールドの間へのゲートは開けない。」

剣「ワールドの間?」

ドラゴ「我らと混沌魔龍が最後の決着をつけた世界だ。元々そこはかなり不安定かつ危険な場所所以我らはその地で混沌魔龍を倒しし、その力を使って更に危険な場所にした。もう二度と誰もあの世界に立ち入らせないためにな。」

アンノウン「この短期間でよくそこまでの推理が出来ましたね。まあいいでしょうここは引かせていただきます。我が主は復活されました。あとは自らこの世界に来ていただきますしやう。それは。」

そう言つてアンノウンはゲートを開き何処かへ向かった。

剣「待て!くっ。」

ドラゴ「剣、無茶するな。ここは体制を立て直すんだ。」

数分後モンスターの攻撃が終わり、敵として現れたアンノウン、それにタイムドラゴン、そして混沌魔龍の復活それが1ヶ月後降臨させるこれらの情報からの対策をたてるつもりだ。

龍二「さてこれからの話をしよう。」

カスミ「そうね。奴らの目的がまさかドラゴ達が倒した化け物を次元を超えて蘇らせることだっただなんて。」

ドラゴ「そうだな。」

ウィザード「覇龍剣の力が効いてるとはいえ復活した混沌魔龍はおそらく1ヶ月ぐらいしたらこの世界に来ると思われるわ。」

龍二「1ヶ月か、その間に準備を、整えて対策をしないと。」

ドラゴ「そうだな、我々は戦力を増強しないとイケないな。」

イクサ「それについては考えがある。」

剣「何か策があるのか？」

イクサ「ああ我ら霸王軍はこれより世界を回る。そこで行方不明の覇龍剣を探しながら戦力を増強する。」

剣「覇龍剣生きているのか。」

イクサ「おそらくな。たがどこにいるのか分からない。だからこそ様々なワールドへ行き覇龍剣と他の霸王龍を探す。」

龍二達は今回の騒動とバディポリスの修復の為に帰った。

今ここにいるのはシーカーズと霸王龍だけだ。

創一「それにしてもやつらようやく組織名出したな。」

カナ「そうだね。組織の名前が分からなかったから呼びづらかったんだよね。」

レイ「名前さえ分かれば後はあいつらを潰すだけだね。」

ドラン「というかただ作者が思いつかなかっただけだろ。」

周り「……………」

カナ「さ、流石にそれはないでしょ。」

作者「そうだそうだ。絶対そうじゃないぞ。」

和人「おいー!!作者なんで出てきた!!ボロが出るだろうが。」

作者「おい今言っちゃったよ。もう訂正できないよ。どうすんだよ。」

レイ「ていうか何で今まで出てこなかった作者がいきなり本編に出てきているのよ。色々まずいんじゃないの?」

作者「いやー最近シリアスつうかネタを入れられなかったからこのタイミングで出てきてもいいかなって。え、何で皆武器持ってるの?や、やめましようこいうのは私作者ですよ。初登場何だから勘弁してよ。」

周り「『そんな理由で出てくんない!!』」

作者「ぎゃー!!」

シーカーズの総攻撃を受けて吹っ飛ばはれて作者が光となって消えた。

和人「そうだな。1ヶ月後には解放者が来ることが分かっているんだからそれまでもっと力を蓄えないとな。」

剣「俺は、これから霸王龍と共に各ワールドを周り、覇龍剣とあの化け物に対抗出来る力をつけて戻ってくる。」

創一「分かった行つてこい!!」

剣はそう言つて霸王龍と共にゲートの中に入つていった。

和人「さあて俺達はどうする?」

カナ「とりあえず期末テストの勉強」

「『……………あ』」

和人「というか剣はそのことを分かっているのか?」

創一「分かっているじゃないだろうな。」

レイ「……………今年度は色々あつて学校休んだりしたりしてるからワンチャン留年するんじゃないの?」

ドラン「それは流石に、ないんじゃないか。」

剣の留年を不安視する仲間たちなのであった。

アンノウン「まさか我が主の降臨を覇龍剣に邪魔されるとは。」
???「まあいいじゃないか。楽しみは取っておこう。」

タイムルーラ「それで俺達はこれからどうするつもりだ。」

謎の場所で集まっていた「解放者」と名乗ったアンノウンとその他
大勢

???「その他大勢ってなんだ。」

アンノウン「我々にはカオスブレイカーから奪ったモンスターを操
る力がある。それを使い、今までにないモンスター軍団を作つてや
る。」

???「スルーすんな。」

タイムルーラ「我の力も使うのだから。」

アンノウン「そうだ。そしてファントム、お前には霸王龍の邪魔を
してきてくれ。やつらの戦力をできる限り減らしてこい。」

そう言つて後ろに控えていたに命令した。

ファントム「……………了解。」

???「名前すら明かされてないのにこの扱いはひどいだろ。」

霸王への旅路

激突!! 覇竜騎士団対英雄 前編

剣「ここはレジエンドワールドか？何でここに？」

ドラゴ「儀式だよ。我らの新たな仲間を集めるために。そして覇竜騎士団を結成するためのものだ。」

剣達が最初に訪れたのはレジエンドワールドそして新たな

剣「覇竜騎士団ってドラグーンが所属していたっていうあの？」

そう忘れている人がいるかもしれないがかつての戦いでドラグーン以外の覇竜騎士団は行方不明になっている状態だ。

ドラゴ「そうだ。そして覇竜騎士団はかつてほぼ全滅してしまつた、だが滅んでしまつたわけじゃない。あいつらの意思を受け継ぎ新たな、新生覇竜騎士団を結成することをここに宣言する。」

周り「!!」

覇竜騎士団、それは混沌魔龍と戦うときに選ばれた精鋭という話だったその騎士団を再び集めるつまり今回の戦いもそれほど厳しいものになるということなのだろうか。

ドラゴ「これから1ヶ月後混沌魔龍と解放者と名乗る謎の集団との決戦に備えて新たに仲間を集めるにしても戦いとなれば霸王軍を指揮するためそして霸王龍を守護するための存在である覇竜騎士団を再結成したほうが都合がいいとおもつてな。」

ウィザード「それで本音は？」

ドラゴ「覇竜騎士団のあの鎧かっこいいなと思つて。」

周り「……………」

ぶつちやけちやつたよこの龍。

ドラゴが本音を聞いて無言になつてしまつた人達。

ドラゴ「とにかくこの地には覇竜騎士団を再結成するための団員もすでに集めてある。剣これを受け取れ。」

剣「これは!!」

そこにあつたのはハルバード、ドラゴ・アーチャー、そしてコマンデュール・ファアーネ。

剣が以前使っていた迅雷騎士団のモンスターや見たこともないモンスターがあつた。

ドラゴ「かつてお前が使っていた迅雷騎士団、そして異世界のモンスターを覇竜騎士団として我らは迎え入れた。そして剣お前にも覇竜騎士団になつてもらおう。」

剣「俺が覇竜騎士団!？」

ドラゴ「そうだ。そしてお前には完全に人間をやめてもらおう。」

剣「……はい？」

ドラゴ「お前には今までの戦いで分かつたはずだ。今のままでは大事な物は守れない!!」

剣「確かに。」

ガイアスカル、カオスダークネスドラゴン、そしてカオスブレイカーなどの戦いの中でほとんどの戦いで俺はぎりぎりの戦いをしてきた。

しかもカオスブレイカーとの戦いではモンスターゾーンを封じられてしまい何も出来なかつた。

そしてカオスブレイカーとの戦いの後覇龍剣がいなくなつてしまつた。それもありません。今までは覇龍剣の力で人間を辞めていたので今の剣は普通の人間と変わらない。それでは今後の戦いでは勝てない。

剣「確かに、俺も人間を辞めたほうがいいかもな。」

ドラゴ「そうだろう。さあ行け!お前の欲しい力はそこにある!」
ドラゴが指を指した方向にはゲートが開いておりその中に入れということか。

剣「分かつた。じゃあ行つてくる。」

そう言つてゲートの中に入つて行つたのだつた。

クロス「なあエクス、お前は行ったほうが良かったんじゃないか？
試練はファイトがあるし。」

ドラゴ「……………あ。」

試練場

剣「ここは？」

???「ようこそ私の世界へ。」

剣「あなたは？」

そこには謎の青年がいた。

しかしその姿ではありえないくらいの威圧を放っている。

???「私？誰でもいいだろうさあ始めようか。」

ドラゴ「ちよつと待った!!」

剣「ドラゴ!?!何で？」

ドラゴ「いや、ファイトがあるの忘れていたから急いできた。」

剣「それなら早く来いよ。」

ドラゴ「……………すっかり忘れていた。」

剣「……………」

???「ドラゴ、それを忘れてたらこまるのだがな。まあいいでは改めて
試験を始めよう。」

そう言うときフィールドが展開された。

剣「覇龍の魂受け継ぐ騎士団ここに見参!!ルミナイズ、降臨、覇竜
騎士団!!」

???「王に使えし伝説の騎士団ここに見参!!ルミナイズ、ロイヤルパ

ラディン!!」

二人「オープン・ザ・フラッグ」

??? 「レジェンドワールド」

バディ ブラスタター・ブレード

ライフ10 ゲージ2 手札6

剣「霸王、降臨」

バディ絆の霸王龍ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー

ライフ9 ゲージ2 手札7

剣「先行は俺ドロージャーリアンドドロ。覇竜 システミックダガーをそして覇竜騎士団 ハルバード・レヴオルーションシステミックダガーの効果でチャージャンドドロ」

ライフ9 ゲージ2 手札7

覇竜騎士団 ハルバード・レヴオルーション

ドラゴンワールド

サイズ2

攻撃7000 防御5000 打撃力3

属性 武装騎竜／霸王軍

「コールコスト」ゲージ2を払う。

■このカードが移動した時か、攻撃されたとき、手札の「覇竜騎士団」を1枚選び、コールコストを払ってコールする。

【移動】

アタックフェイズ

剣「ハルバードでファイターを攻撃。」

??? 「……」

ライフ10↓7

剣「ターンエンド。」

ライフ9 ゲージ2 手札7

??? 「私の先行、ドロージャージアンドドロ、私は円卓の騎士 ト
リスタンをレフトに円卓の騎士 ゴードンをライトにコール」
ライフ7 ゲージ3 手札5

レフトとライトに現れたのは円卓の騎士ある王に仕えたモンス
ター達だ。

円卓の騎士 ゴードン（ハナバーナさん提供）

フラッグ：レジェンドワールド

種類：モンスター 属性：英雄

サイズ2／攻7000／防7000／打2

■君がアイテムを装備しているなら、このカードの攻撃力・防御力
+3000！

【移動】

FT 「主は必ずお守りする！

円卓の騎士 トリスタン（ハナバーナさん提供）

フラッグ：レジェンドワールド

種類：モンスター 属性：英雄

サイズ1／攻5000／防1000／打2

■このカードが登場した時、ゲージ1を払ってよい。払ったら、君
のデッキから「王剣」を含むアイテムか、「ブラスター」を含むモン
スター1枚を手札に加えて、デッキをシャッフルする。

FT 「その弦が、勇者を戦場へ導く。」

剣 「そのモンスター達は？見たことがないカードだな。」

??? 「ゲージ2とライフ1払い、バディ変身。私の分身ブラスター・
ブレード!!」

ライフ7 ゲージ1 手札4

ブラスター・ブレード（ハナバーナさん提供）

フラッグ：ダンジョンワールド／レジェンドワールド

種類：モンスター 属性：騎士／英雄

サイズ2／攻10000／防10000／打2

■「コールドコスト」ゲージ2を払い、ライフ1を払う。

■このカードが登場か【変身】した時、相手の場のサイズ2以下のモンスター1枚を破壊する。

■君の場にこのカード以外のモンスターが2枚以上あるなら、このカードの打撃力+1！

【変身】「ゲージ2を払い、ライフ1を払う。」

FT 「其れは、光り輝く勇気の剣。」

謎の青年が青い鎧と青い剣を持った戦士となった。

剣「あれは、ブラスター・ダーク!!いや違う。それは一体?」

??? 「それは違うな。しかし、それについては後で話してあげよう。私の分身に変身した時、君の場のサイズ2以下のモンスターを1枚を破壊する。システムミックダガーを破壊。」

ブラスター・ブレードから放たれた光線をシステムミックダガーのが破壊された。

アタックフェイズ

剣「ハルバードをセンターに移動。効果で手札の覇竜騎士団をコールできる。覇竜騎士団ドラゴ・アーチャーをレフトにコール。システムミックダガーはサイズオーバーだが、チャージアンドドロウ更にドラゴ・アーチャーの効果で覇竜騎士団を1枚手札に加える。」

覇竜騎士団ドラゴ・アーチャー

ドラゴンワールド

サイズ1

属性 霸王軍

攻撃2000 防御2000 打撃力1

■君の場にカード名に「覇竜騎士団」を含むモンスターがあるならコールできる。

■ 〃霸王の一矢 このカードが登場した時君のデッキからカード名に「覇竜騎士団」を含むカードを1枚手札に加え、デッキをシャッフルする。『霸王の一矢』は1ターンに1回だけ発動する。

ハルバードの呼び声を上げたら手札にあったドラゴ・アーチャーが現れた。

??? 「相手ターン中にコールだ!!」

剣「ふっ、このデッキの特徴はそれだけじゃないぜ。俺も初めて使うけど結構面白いデッキだぜ。」

??? 「それは楽しみだ。ならゴードンで、ハルバードを攻撃。」

ハルバード破壊

剣「ハルバード!!すまない。」

??? 「トリスタンでファイターを攻撃。」

剣「くっ、」

残りライフ9↓7

??? 「ブラスター・ブレードでファイターを攻撃!!能力で打撃力+1」

ブラスター・ブレード

打撃力2↓3

剣「ぐわー!!」

残りライフ7↓4

??? 「ターンエンド。」

ライフ8 ゲージ1 手札5

剣「俺のターンドロローチャーアンドロー、ゲージ2を払い、絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザーをレフトにバディコール。」

ライフ5 ゲージ1 手札5

ドラゴ「久しぶりの登場だ。」

剣「ドラゴの能力でデッキから手札を1枚捨てて、覇竜剣 ドラゴ刃を装備」

覇竜剣 ドラゴ刃

レジェンドワールド

剣「ターンエンド。」

???「その程度か？」

剣「何？」

???「その程度で私に勝てると思っっているのか？」

剣「何を言っているんだ？まだ勝負はこれからだろうがいきなり何を。」

???「私のターンドロージャーアンドロー、なら見せてやろう私の切り札をゲージ2を払い、ブラスター・ブレードをソウルに入れるを变身!!アルフレッド・アーリー!!」

アルフレッド・アーリー（ハナバーナさん提供）

フラッグ：レジェンドワールド

種類：モンスター 属性：騎士／英雄

サイズ3／攻13000／防10000／打3

■【コールコスト】君の場の《英雄》1枚をこのカードのソウルに入れ、ゲージ2を払う。

■このカードが登場か【变身】した時、ゲージ1を払ってよい。払ったら、君の手札から《英雄》のモンスター1枚を【コールコスト】を払ってコールし、1枚ドロースる。この効果で登場したモンスターは場を離れるまでサイズが0となり、登場したターン中パワー+10000!

【2回攻撃】【变身】「君の場の《英雄》1枚をこのカードのソウルに入れ、ゲージ2を払う。」

FT「若き日の王は、盟友と共に戦場を駆け巡る！」

謎の青年の青い鎧が消え新たなる鎧をまとい、若き騎士の姿となった。

???「さあ、君の覚悟を見せてみる!!」

激突!! 覇竜騎士団対英雄 後編

これまでの状況

剣 ライフ5 手札4 ゲージ1

アイテム ドラゴ刃

レフト 絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー

ライト 覇竜騎士団 ドラゴ・アーチャー

??? ライフ8 手札5 ゲージ0

アイテム アルフレッド・アーリー

モンスター無し

アルフレッド・アーリー（ハナバーナさん提供）

フラッグ：レジェンドワールド

種類：モンスター 属性：騎士／英雄

サイズ3／攻13000／防10000／打3

■【コールコスト】君の場の《英雄》1枚をこのカードのソウルに入れ、ゲージ2を払う。

■このカードが登場か【変身】した時、ゲージ1を払ってよい。払ったら、君の手札から《英雄》のモンスター1枚を【コールコスト】を払ってコールし、1枚ドロウする。この効果で登場したモンスターは場を離れるまでサイズが0となり、登場したターン中パワー+10000！

【2回攻撃】【変身】「君の場の《英雄》1枚をこのカードのソウルに入れ、ゲージ2を払う。」

FT 「若き日の王は、盟友と共に戦場を駆け巡る！」

??? 「円卓の騎士 マロンをレフトに円卓の騎士 ゴードンをライトにコール。更にキャスト、円卓の絆。私の場の騎士1枚につきゲージつか。」

円卓の騎士 マロン

レジェンドワールド

サイズ1

属性 騎士／英雄

攻撃力4000 防御力4000 打撃力1

■ マロンの魔導書 《ゲージ1払い、このカードをレストしてもよい。レストしたら、ドロップゾーンの円卓の騎士と書かれた魔法カードを1枚手札に加える。マロンの魔導書は1ターンに1度しか使えない。

円卓の絆

魔法

レジエンドワールド

属性 騎士／英雄

■ 君の場に円卓の騎士があるなら使える。

■ 君の場の属性「騎士」のカード1枚につき山札の上のカードをゲージに置く。

??? 「更にマロンの効果発動ゲージ1払い、自身をレストすることでドロップゾーンから円卓の絆を手札に加えてそのまま発動。ゲージ3追加。」

??? 「更に、ゲージ1払い、ゴードンをソウルに入れてライトにブラスター・ダークをコール。」

ブラスター・ダーク

攻撃10000 防御10000 打撃2

剣「ブラスター・ダーク!?なぜあなたがそれを?」

??? 「:フツブラスター・ダークの効果手札を1枚捨てて2回攻撃を付与する。」

アタックフェイズ

??? 「行け!! ブラストター・ダーク」

剣 「くっ、」

残りライフ5↓3

??? 「ブラスター・ダークでファイターを2回攻撃。」

剣 「ぐわあー!!」

残りライフ3↓1

??? 「これで止めだ。私でファイターを攻撃。」

剣 「キャスト、ドラゴンシールド 覇竜の盾攻撃を無効にする。」

??? 「あがくか?だがまだ私の2回攻撃。」

剣 「ゲージ1払い、マツハブレイバーでガードサイズオーバーでドラゴアーチャーはドロップゾーンに。」

??? 「ふっ、こうでもなければ面白くないターンエンド。」

ライフ8 手札1 ゲージ5

剣 「なあ、一つ聞かせてくれないか?」

??? 「何かな?」

剣 「あんたはどういう存在なんだ?」

??? 「それはどういう意味だね?」

剣 「あんたは霸王軍って感じかしない。それにブラスター・ダークは遙かが使っていたけどあいつがいうにはオーバーロードと同じ世界の存在だということは知っている。ブラスター・ブレード、ブラスター・ダークと似ている。あんたは一体何者なんだ?」

??? 「……同じだよ、君達と同じただのカードファイターだよ。それ以外に何か説明がいるかい。」

剣 「……そうかいならファイトで聞いてやるよ。」

??? 「そうこなくては。」

剣 「行くぞ俺のターンドロージャーシアンドロー、新たなる霸王軍ここに見参。ゲージ1と手札1枚捨てて外部顧問 ボヤ男&ピオ子 “SD” をライトにコール。」

《外部顧問 ボヤ男&ピオ子 “SD”》（雪咲さん提供）

モンスター

サイズ1／攻撃力1000／打撃力1／防御力1000

クラン：ボイジャーW 属性：SE／グランドマスター／霸王軍

「外部顧問 ボヤ男&ピオ子 “SD”」は1ターン1回だけコールできる。

「コールコスト」手札1枚を捨て、ゲージ1を払う。

このカードが登場した時、君のデッキからモンスターか必殺技1枚までをドロップに置き、デッキをシャッフルする。その後、選んだカードをデッキの1番上に置いてよい。

このカードが攻撃した時、君のデッキの上から1枚をドロップに置いてよい。ドロップに置いたカードが「SE」の必殺技なら、そのカードを手札に加えてもよい。

お互いのアタックフェイズ中、君が必殺技を使ったとき、そのターン中、このカードの攻撃力+10000！

『かつて、滅びた星からボイジャーワールドを造り上げた二人の少女』

『壊れた物は直せばいい、傷ついたら癒せばいい。失敗したら、やり直せばいい。何度でも』

??? 「ボイジャーワールドだと？」

剣「これが俺たちの絆の力だ。ボヤ男&ピオ子 “SD”の効果デッキからモンスターか必殺技を1枚ドロップゾーンに送り、山札をシャッフルその後俺が選ぶのは覇晶竜 アイラ・ショット!!」

《覇晶竜 アイラ・ショット》（雪咲さん提供）

モンスター

サイズ3？攻撃力7000？打撃力0？防御力7000

クラン：スタードラゴンW 属性：プリズムドラゴン？霸王龍？覇

王軍

【「コールコスト」】君のデッキの上から3枚をソウルに入れ、ゲージ3を払う。

センターにいるこのカードは、カードの効果で、破壊されず、場を離れず、能力を無効化されない。

君のレフトとライトの「プリズムドラゴン」と「霸王軍」のサイズを3減らす。

『結晶竜達の力を1番使いこなせるのは——この、ボクだ!』

『プリズムドラゴン達の願いを受け、最高最強の司令塔がフィールドに舞い降りる!』

剣「キャスト、霸王の下準備ゲージ3追加。」

アタックフェイズ

剣「俺自身でマロンを攻撃。」

マロン破壊。

剣「ドラゴ刃の効果でデッキトップオープンそのカードが霸王軍なら出せる。」

??? 「トップが確定している。」

剣「そうだ。そして現われる覇晶竜 アイラ・ショット」

??? 「ほう、スタードラゴンワールドの霸王龍か。だが他のモンスターはドロップゾーンに送られる。」

剣「それはどうかな。アイラ・ショットにはレフトとライトにいる霸王軍のサイズを3減らす。これにより全ての霸王の力を使うことが出来る。」

??? 「何?」

アイラ「ボクの力は仲間の力を合わせることだ!!」

剣「頼む、アイラ・ショット仲間達の絆を繋いでくれ!!ドラゴ、ボヤ男&ピオ子連携攻撃。」

??? 「ノーガードだ。」

残りライフ8↓4

剣「ドラゴのスキルデッキトップをドロップゾーンに送るそのカー

ドが霸王軍なら出せる。デッキトップは……覇竜 エクスバスターだ。」

覇竜 エクスバスター

攻撃7000 防御2000 打撃3

剣「エクスバスター、アイラ連携攻撃だ。」

???「……」

残りライフ1

剣「ターンエンド。」

ライフ4 ゲージ0 手札3

お互いにライフ1先に1ダメージでも受けた方がライフ0になり負けとなる。

剣「このギリギリの勝負勝つのは俺だ。」

???「いいや、私だ。私のターンドローチャージアンドドローゲージ1払い、アルフレッドの上にこのカードを重ねる。立ち上がれ私の分身、エクスカルペイト・ザ・ブラスター!!」

エクスカルペイト・ザ・ブラスター（ハナバーナさん提供）

フラッグ：レジエンドワールド

種類：モンスター 属性：騎士／英雄

サイズ4／攻14000／防0／打3

■このカードはコールできない。

■このカードに【変身】した時、このカードのソウルを1枚残して全てドロップに置き、君の手札を2枚までこのカードのソウルに入れる。

■このカードが攻撃した時、代わりに相手と相手のモンスター全てに攻撃する。

■このカードのバトル終了時、このカードをドロップに置く。その

後、このカードのソウルにあった「ブラスタ・ブレード」1枚に【変身コスト】を払わず【変身】してよい。

【変身】「君の場の元々がサイズ3モンスターのアイテム1枚の上に重ね、ゲージ1を払う。」

そこにアルフレッドの上から現れたのはただの霊体とも見れる白き英雄

???「このカードに変身したことにより私の勝利は確定している。エクスカルペイト・ザ・ブラスタで全てのカードとファイター攻撃。全てを超える。!!」

剣「まだだ、キヤスト、霸王の奇跡、ドラゴ!!後はお前に全てをかける。」

霸王の奇跡の力によりドラゴとアイラはフィールドに残りダメーシこのターン0になった。

???「私の攻撃を耐えたかたがまだだエクスカルペイト・ザ・ブラスタの効果、エクスカルペイト・ザ・ブラスタをドロップゾーンに送りブラスタ・ブレードに変身!!ターンエンド!!」

剣「俺のターンドロ（覇竜の盾）これじゃない。チャージアンドドロー（ドラグーンこれじゃあ出せない。）」

アタックフェイズ

剣「いけ!!ドラゴファイターを攻撃!!」

???「キヤスト、ホーリグレイベ攻撃を無効にする。まだまだ負けない。」

剣「ドラゴの能力発動デッキトップが霸王軍なら出せる。」

???「君の場にはアイラがいるそのデッキトップが霸王軍ならエクスカスターを出して私の負けか。しかし引けるのか君に?」

剣「引いてみせる!!デッキトップオープン」

引いたカードは覇竜 サウザントレイピアよってドロップゾーンからエクスバスターをスペリオルコール!!」

??? 「負けたよ君には。」

剣 「アイラ、エクスバスター連携攻撃!!」

??? 「……」

ライフ0

??? 「これを君に。」

謎の青年から2枚のカードを受け取った。

剣 「この2枚は!」

渡されたカードを見て、驚いた。1枚は覇竜騎士団の鎧のようなカードで能力どころかワールドすら無いただのカードだ。

そして問題なのがもう1枚そのカードが

剣 「ぶ、バスター・ブレード!!何で俺に?」

??? 「そのカードは君の仲間とそして君自身の為に使ってくれ。それじゃあな。」

剣 「待ってください。あなたは一体なんですか?」

??? 「私はバスター・ブレード。バスター・ダークと共にこの世界にきた。そして私はこの空間に入りそして実態家することができた。」

ドラゴ 「そして剣と勝負してもらおうと思っとな。バスター・ブレードとの真剣勝負はとて面白い経験になると思っとな。」

剣 「そうか。それであなたは本当にいいんですか?この空間から出れば実態化出来ないあなたは本当にこれでいいんですか?」

??? 「いいや、この空間にいてもマイヴアンガードの元へは戻れないならば君達と共に戦い、元の世界へ変える手段を探すとするよ。頼む私と共に戦ってくれないか?」

剣 「:バスター・ブレード、分かったこれからよろしくな。」

そう言っただけ俺はこの空間から出た。

剣「ただいま。」

クロス「どうだった？」

剣「もちろん覇竜騎士団になってきたぜ。」

クロス「そうか、よくやった。これで世界を回れるぜ。」

剣「え？何で俺の覇竜騎士団になることが世界を回ることになるんだ？」

クロス「それはだな。」

ウイザード「世界をまわることで剣の身体が壊れないよう、各ワールドの環境に耐えられるようにする為に覇竜騎士団になってもらった。」

クロス「あーそれ俺が言いたかったこと！」

ウイザード「別に誰が言おうと同じです。」

クロス「なんだと!？」

ウイザード「なんですか？」

ウイザードとクロスが言い争っている。

ドラゴ「さあてそろそろ次の目的地へ向かうか。」

剣「次は何ワールドへいくんだ？」

ウイザード「それは私のバディがいるマジックワールドです。」

マジックワールド 少女の覚醒

剣「それでどこにいるんだウイザードのバディは？」

俺達は今マジックワールドにいる。

ウイザードのバディを迎えに行くということでマジックワールドにきているのだが

ウイザード「それはあそこの魔導図書館にいるはずよ。」

剣「え、あそこに!?!」

ウイザードが指差した方を見ると15階建てのビルと同じくらいの木造の立派な建物があった。

ドラゴ「ウイザードお前のバディ一体何やってんの?」

ウイザード「なあに大した事はない。ただ17歳という若さでマジックワールドの研究者になった。ただの少女だよ。」

ドラゴ「いや、十分すごいだろ。」

（建物の前にいた受付を済まして、中に入った。）

剣「それでどこにいるんだ?こんな大きな建物人探しなんて大変だと思うけど。」

ウイザード「カナミいる?いるんならちよつと受付まで来てほしいんだけど。」

剣「あ、スマホ持っていたのか。」

ウイザード「そうよ。モンスターがスマホ持っていることだってあるわよ。」

剣「スマホ持っているモンスターなんて見たことなかったから。」

「しばらくすると上から誰かが走ってきた。」

カナミ「いらっしやい、ウイザー!!」

上からウイザードに抱きついたのは俺と同じ年位の黒い髪のメガネをかけた女の子だ。

ウイザード「久しぶりね、カナミ。」

剣「あなたがウイザードのバディ?」

カナミ「ええ、私が覚醒の霸王龍のバディの立川 カナミ（たちか

わ カナミ)です。よろしくお願いします。」

剣「俺の名前は弓風 剣だ。よろしく。」

カナミ「弓風 剣?そう。あなたが覇龍剣に選ばれたっていう。」

剣「まあそうだけど、今は覇龍剣を探して旅をしているんだ。」

カナミ「そうだったの。それはごめんね。ということはここに来たのは覇龍剣の情報を探してきたの?」

ウイザード「いいや、カナミ、君を迎えに来た。」

カナミ「え、迎えに?なんで?」

ウイザード「地球で活動していた解放者が名乗る団体が混沌魔龍を蘇らせてしまつてね。」

カナミ「!!え、まさか蘇つたの!?混沌魔龍が!!」

ウイザード「ああ。それで私もバディである君の力を貸してもらいたくてね。」

カナミ「へえ。まさか本当に蘇つるだなんて。……私もウイザードあなたと一緒に戦うよ。」

ウイザード「ありがとう。」

カナミ「でも、剣あなたとは協力しない。」

周囲の空気が凍った。

剣「え、なんで?」

カナミ「だって初めてあつた人といきなり一緒に戦うだなんてちよつと難しいと思つてね。」

剣「確かに。」

カナミ「だから私とファイトして。あなたの戦い方を知つてそれから一緒に戦おう。だから私とファイトしよ。」

剣「う、うん分かった。(結局ファイトしたいだけかい。)」

ドラゴ「何かお前のバディすごいな。」ヒソヒソ

ウイザード「ええ。何か研究者としてもファイターとしてもすごいんだけど……ね。」

カナミ「何してるのウイザ早く始めるよ。」

ウイザード「あ、ああ。今行く。」

ウィザードがカナミの元へ向かおうとした時、カナミの後ろにいきなりゲートが開きそこから手が出てカナミを掴み、そのまま中に連れて行かれた。

カナミ「え?」

ウィザード「カナミ!!」

ウィザードがゲートの中に入っていった。

そのままゲートが消えた。

剣「ちよつと!!どこ行くの!?!」

カナミ「えつと、その、ここどこ?」

ウィザード「ここは、解放者と言われていた者達がファイトする時に使う為のフィールドだな。」

???「新しい戦力になりゆる者をここで仕留めておくのも得策だな。」

カナミ「え?あなた誰?」

そこには160くらいの黒いローブを着た人がいた。

ファントム「我が名はファントム悪いがお前にはここで死んで「あ、分かった。ファイトでしょ。こういう時はファイトだね。さあやろう。今すぐやろうさつさとやろう。」ちよつと!!人のセリフにかぶって来ないでくれる!?!」

ウィザード「まあまあ。ようやくすると闇のゲームをするってことでいいでしょう。」

ファントム「それカードゲーム違うんですけど!!まあそういうことなんだけどさ。」

カナミ「それじゃ始めよう、覚悟せよこれが覚醒した霸王の力ルミナイズ、アウェイキング・ドラゴン!!」

ファントム「速!!まあいい。邪悪なるドラゴン軍団ここに降臨ルミナイズ邪ドラ!!」

二人「オーブン・ザ・フラッグ!!」

カナミ「マジックワールド!!」
ライフ10 ゲージ2 手札6
バディ 覚醒を待つ魔道士 ウィザ
フアントム「ドラゴンワールド!!」
ライフ10 ゲージ2 手札6
バディ ガルガンチュア・ドラゴン

カナミ「私のターンドロージャーアンドロー、レフトに痺れるマホウ キヌース・アクシア、ライトに名家の魔道士 スズハ。」

痺れるマホウ キヌース・アクシア

攻撃2000 防御2000 打撃2

名家の魔道士 スズハ

攻撃1000 防御3000 打撃1

現れたのは小さいドラゴンとドレスを着た魔術師。

フアントム「ほう。魔術師デツキか。懐かしいデツキを使うな。」

カナミ「まあね。キャスト、コーシャー、私の場の（魔術師）モンスターが2体以上いる時チャージアンドロー。キヌース・アクシアの能力お互いにゲージ1追加して相手に1ダメージ。スズハの能力「ヘブンズベルの血統」デツキの上から1枚を確認、ソロモンの盾、魔法カードなのでワンドロー。」

手札6 ゲージ5 ライフ10

フアントム「こんなの痛くも痒くもない。」

ゲージ3 ライフ10↓9

カナミ「そしてゲージ2を払い、山札の上から2枚をソウルに入れてセンターにバディコール!!覚醒を待つ魔道士 ウィザ」

覚醒を待つ魔道士 ウィザ

マジックワールド

属性 魔術師／霸王軍／雷帝軍

サイズ3

攻撃8000 防御8000 打撃0

(コールコスト) ゲージ2を払い、山札の上から2枚をソウルに入れる。

■このカードが登場した時か攻撃した時デッキの上から3枚をドロップゾーンに送り、相手に1ダメージ与える。

■〃逆天〃(君のデッキから5枚ドロップゾーンに置く。)君のドロップゾーンの魔法カードを1枚選びそのカードを手札に加える。

〔2回攻撃〕(ソウルガード)

カナミ「登場時効果、ウイザの効果デッキトップ3枚をドロップゾーン置いて相手に1ダメージ!!」

ファントム

残りライフ8↓7

カナミ「更に覚醒待つ魔道士ウイザの〃逆天〃発動!!能力でデッキトップ5枚をドロップゾーンに送りドロップゾーンからウオラーリアを手札に。」

ファントム「なぜおまえが逆天が使える!!」

ウイザード「私、元雷帝軍なの。だからその時の力をまだ持っているそれだけよ。」

アタックフェイズ

カナミ「攻撃した時にもウイザの効果が発動。デッキトップ3枚をドロップゾーンに置いて更に1ダメージ!」

ファントム

残りライフ7↓6

カナミ「ターンエンド。」

ライフ11 ゲージ3 手札5

剣「俺のターンドロージャーアンドロー、ガルガンチュア・ドラゴンをレフトにバディコール。」

ライフ6↓7 ゲージ3 手札6

ガルガンチュア・ドラゴン
攻撃力7000 防御4000 打撃力2

目が死んでいるガルガンチュア・ドラゴンがレフトに現れた。

カナミ「ガルガンチュア・ドラゴン!?何で君が持つてるの?」

ファントム「それは言えないな。更にライトにガルキヤットをコール。効果でチャージアンドドロウ更にゲージ1払い、神竜剣 ガルブレードを装備。」

ライフ7 ゲージ3 手札6

ファントムはガルキヤットをコールし、アイテムを装備してカナミに襲いかかる。

アタックフェイズ

ファントム「ガルガンチュア・ドラゴンでウイザを攻撃。」

カナミ「ウイザ、ソウルガード」

ウイザ残りソウル1枚

ファントム「ガルガンチュア・ドラゴンで2回攻撃」

カナミ「ソウルガード。」

ウイザ残りソウル0枚

ファントム「更にへG・EVOへ発動!!手札からガルガンチュア・

ドラゴン ッモード・ブラスト」

カナミ「キヤスト、マジカルグルーゲージ1払い、ガルガンチュア・

ドラゴン ッモード・ブラスト」をレスト。」

ファントム「だったらガルブレードで攻撃。」

カナミ「キヤスト、ウオラーリア。ガルブレードを手札に戻す。」

ファントム「くっ、ターンエンド。」

ライフ7 ゲージ3 手札5

カナミ「私のターンドロウチャージアンドドロウ!!来たよウイザ。ウイザード」ならば行くわよ。」

カナミ「ええ。まずはキヤスト、覚醒の儀式、デッキから5枚をド

ロップゾーンに送り、デッキから覚醒の霸王龍 ドラゴニック・アウエイキング・ウィザードを手札に加える。」

覚醒の儀式

マジックワールド

魔法

属性 魔術師

■君の山札の上からカードを5枚ドロップゾーンに置く。その後君の山札を見る。その後ドロップゾーンからサイズ3の(魔術師)を1枚手札に加える。 覚醒の儀式 は1ターンに1度しか使うことが出来ない。

カナミ「そして、ゲージ3を払い、私のバディの上に覚醒の霸王龍 ドラゴニック・アウエイキング・ウィザードをセンターにコール。」

覚醒の霸王龍 ドラゴニック・アウエイキング・ウィザード

マジックワールド

属性 魔術師／霸王軍

サイズ3

攻撃力6000 防御力6000 打撃力2

(コールコスト)ゲージ3払い、君の場の(霸王軍)1枚の上に重ねる。

■このカードが登場した時、君の山札を見る。その中からカードを1枚ドロップゾーンに置き、相手に1ダメージ!!

■このカードが攻撃した時、このカードのソウルに「覚醒を待つ魔道士 ウィザ」があるなら相手に2ダメージ!!

■「起動」君のファイナルフェイズ中にドロップゾーンのサイズ1のカードを8枚をデッキの下に置いてよい。置いたら相手の場のモンスターを破壊して3ダメージ!!

「ソウルガード」「2回攻撃」

ウィザが魔法陣を描きその中に入るとウィザが巨大化して龍となった。

フアントム「何だ?このモンスターは。」

ウィザード「私の効果発動。デッキからマジックアーティスト ア

ンデイをドロップゾーンに送り1ダメージ。」

残りライフ7↓6

アタックフェイズ

カナミ「ドラゴニック・アウエイキング・ウィザードで攻撃。効果で2ダメージ!!」

フアントム「くっ。でもキャスト、ドラゴンシールド 神・緑竜の盾攻撃を無効にしてライフ+3」

残りライフ6↓4↓7

「2回攻撃効果で2ダメージ。」

「……ライフは残った。モード ヽブラスト ヽも残っている。次の俺のターンで」

残りライフ7↓5↓3

ファイナルフェイズ

カナミ「ドラゴニック・アウエイキング・ウィザードの能力発動。ドロップゾーンのサイズ1モンスター8枚をデッキに戻して発動相手の場のモンスター全て破壊して3ダメージ!!」

フアントム「!!そのためにデッキを削っていたのか!!」

カナミ「これが私達の全力よ。」

ウィザード「滅びなさい。」

フアントム「……」

ライフ0

勝者 立川 カナミ

ファイトが終わりファイトから追い出されてしまった。

剣「うおっと、え、あんた誰?」

カナミ「えっと、何かフアントムとか言っていましたけど。」

剣「いや知らない。誰か知ってる?」

ウィザード「何か霸王軍潰すとか言っていたけど知っている?」

イクハ「知らない。」

ドラゴ「知ってる知ってる詐欺じゃない?」

剣「ていうかただの不審者じゃない。」

ファントム「おい、色々ひどいぞ。」

剣「で結局お前誰？」

ファントム「俺は解放者の一人ファントムだ。まあこれから邪魔をしていくつもりだからよろしく。」

そうしてゲートの中に入っていった。

剣「おい、邪魔すんな。」

ドラゴ「ファントムと言ったか、どうする？多分これから旅をしていく中でまた邪魔をしてくるぞ。」

クロス「うーん。特に対処方は思いつかないからとりあえずまた来たら倒せばよくな。」

「「異議なし。」」

カナミ「軽くない!？」

剣「だっていつ来るか分からないし、とりあえず襲って来たら倒せば楽じゃん。」

カナミ「確かに。そうだね。」

剣「それで俺達と一緒に来てくれるか？」

カナミ「もちろん。剣と一緒にいたら楽しそうだしよろしく。」

剣「それじゃあ次のワールドに出発!!」

デンジャーワールド 無法の王の拳

剣「次はデンジャーワールドか。」

続いて来たのはデンジャーワールドクロスが仲間に出たいとのことだったのでここに来たのだった。

クロス「悪いな一回部下の状態を確認しておきたかったんだ。ここで」

ドラゴ「別にいい。どうせデンジャーワールドも確認しなければ行けなかったんだからな。」

剣「それでクロスの間はどこにいるんだ？」

クロス「それなら周りを見てみ。」

剣「周り？」

周りを見渡して見るが、周りには工場のようなものがあちこちにあってだけで分かりやすい建物などは無い。

剣「何もないけど？」

クロス「まあもう少し待て。」

ドツカーン!!

いきなりデカイ音が聞こえた。

剣「!!」

クロス「お、ちょうどいいな。今音がなった方に行くぞ。そこに俺の仲間がいるはずだ。」

剣「え？ちよつと待てよ。」

そんな理由で分かんのかよ。

数分後

剣「ええー。マジか。本当にいたよ。」

音がなったと思われる場所に行くとそこには2体のモンスターが戦っていた。

片方はアーマナイト・オーガ、そしてもう片方は見たことがないモンスターだ。

オーガ「フン！」

???「何のこれしき。」

オーガ「おりや！」

数分後戦いが終わり、お互いに息を荒げてオーガはどこかにいった。

クロス「元気そうだなパンサー」

パンサー「!!お久しぶりです。アニキ!!」

クロス「おう久しぶりだな。他の奴らは元気か？」

パンサー「ええ。元気ですよ。そちらの方々は？」

クロス「ああ。霸王龍とそのバディ達だ。」

パンサー「あなた方がそうでしたか。話は聞いています。自分、無法闘士（むほうとうし）アウトパンサーといいいます。よろしくおねがいします。」

剣「え、ええよろしく。（何かすげえモンスターだな。）」

クロス「それで他の奴らは？」

パンサー「それはええと。」

クロス「何があったのか？」

パンサー「他のやつらデンジャーワールドのモンスター達と共に大ゲンカしてます。」

周り「……はい？」

「ウオウりやー!!」

「ヒヤツハアー」

「ギヤアオー!!」

「勝つのは俺達だ!!」

剣「なにこれ？」

クロス「あいつらやるな。で、今回は何が原因だ？」

パンサー「いつもの娯楽ですよ。」

クロス「何だいつものか。」

カスミ「え！いつもこんなことしてるの!?!」

剣「……マジか。」

クロス「まあ、デンジャーワールドの名物みたいなもんだよ。」

パンサー「まあ、それは今回が終われば暫くは出来ないでしょうけどね。」

ドラゴ「それはどういうことだ？」

パンサー「カオスブレイカーです。あいつアーマナイト、タイラント、ゴツドヤンキーのモンスターを誘拐したそうです。そしてこの戦いが終わり勝利した属性のモンスターを筆頭にカオスブレイカーに戦いを挑むことになっているんです。」

剣「あいつデンジャーワールドにも来ていたのか。…でもなもうカオスブレイカーはいないんだよ。」

パンサー「!!それは一体どう言うことですか。」

俺は知っている情報を全て伝えた。

パンサー「そんなことになっていたんですか。ですがそれなら対象が変わるだけです。我々のこの戦いで勝者に指揮をするのは変わりませんよ。」

クロス「そうだな。それじゃ俺も本気で混じるとするか。」

剣「え?あん中混じるのか?」

クロス「おうよ。あんな楽しそうな場所参加しない方が損だぜ。」

パンサー「お供しますアニキ!!」

クロス「それじゃあいくぞ!!」

「あ、あいつクロスじゃねえか!!」

「何!?!あいつ帰って来ていたのか!!」

「厄介なのか来やがった。行くぞオメエ等あいつは倒せー!!」

「「おぉー!!」」

数十分後2体のモンスターしか残っていなかった。
その2体とは

2体「「オーブン・ザ・フラッグ」」

ドラゴレム「デンジャーワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

バディ 魔岩竜機 ドル・ドラゴレム

クロス「デンジャーワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

無法の霸王龍 ドラゴニック・アウトレイジ・クロス

剣「今回はかなり強引なファイトの始まり方だな。」

カナミ「仕方ないよ。作者だもん。」

作者「しようがないじゃんデンジャーワールドの話で無法者デッキを出したかったんだよ。」

二人「だから出てくんない!! (来ないで!!)」

作者「ぎゃあー!!」

クロス「俺のターンドロージャージアンドドロ、まずは設置魔法
無法地帯を設置。」

無法地帯

デンジャーワールド

魔法

属性 無法者／設置

〔設置〕

■君の場のモンスターがコールされた時、君の山札の上から1枚を
ゲージに置く。この効果は1ターンに1度しか使えない。

■〔対抗〕このカードをドロップゾーンに置いてよい。そうした
ら次に君が受けるダメージを2減らす。

クロスが設置したのは、無法の力を持つフィールドだ。

クロス「更にゲージ1を払い、無法闘士 アウトパンサーをレフトにゲージ2を払い、無法銃士 アウトショットをライトにコール。」

無法闘士 アウトパンサー

デンジャーワールド

サイズ2

属性無法者

攻撃力7000 防御力4000 打撃力2

コールコスト(ゲージ1払う。)

■このカードが登場した時、このターンの間このカードの打撃力を+2。

無法銃士 アウトショット

デンジャーワールド

サイズ1

属性無法者

攻撃力4000 防御力1000 打撃力2

コールコスト(ゲージ2払う。)

■このカードは1ターンに1度しかコール出来ない。

■このカードが登場した時、相手は自分の手札を1枚選び捨てる。

そして捨てられたカードがモンスターだったら君はカードを1枚引く。

先程あったモンスターと腕が銃になっている人型のモンスターが現れた。

剣「あれが無法者？」

クロス「その通り俺達は、身体の一部が武器になって戦う属性なんだよ。その戦い方よく見てやがれ。無法地帯の効果でデッキ上から

1枚をゲージに。そしてアウトパンサーの効果で自身の打撃力を+2、アウトショットの効果でお前の手札を1枚捨てさせる。」

ドラゴレム「何!?!」

クロス「ちなみに捨てたカードがモンスターだったら俺1枚引くから。」

ドラゴレム「……ストーンパージを捨てる。」

アタックフェイズ

クロス「無法闘士 アウトパンサーでファイターを攻撃。」

ドラゴレム「……」

残りライフ10↓6

クロス「ターンエンド。」

残りライフ10 ゲージ1 手札5

ドラゴレム「ドローチャージアンドドロー豪脚のカセゴレムをレフト、銅嘴 ヴアルゴレムをライトにコール。カセゴラムの効果ゲージ1を払いデッキから砂塵連結拳を手札に加える。更にキャスト、グラウンド・アルファ、ワンドローした後2ゲージ追加。更に装備、砂塵連結拳!!」

2体のデュエルゴーレムにが現れた。

豪脚のカセゴレム

攻撃5000 防御2000 打撃2

銅嘴のヴァルゴレム

攻撃6000 防御1000 打撃2

砂塵連結拳

攻撃9000 打撃2

ドラゴレム「そしてヴァルゴレムを犠牲にしてゲージ2を払い魔岩竜機ドル・ドラゴレムをセンターにバディコール。」

ライフ7 ゲージ2 手札4

現れたのは全身を武装した竜の姿をした機械仕掛けのモンスターがいた。

ドラゴレム「そしてドル・ドラゴレムの『逆天殺』ゲージ1払い、ドル・ドラゴレムの打撃力+4」

ドル・ドラゴレム打撃力4↓8

アタックフェイズ

ドラゴレム「ドルドラゴレムでファイターを攻撃!!」

クロス「ぐわあー!!」

残りライフ10↓2

剣「やばくねえかあいつ今の。」

カナミ「だ、大丈夫なのかな。」

クロス「何のこれしきキャスト、豪胆逆怒 今受けたダメージと同じ数ゲージ追加。」

ゲージ9

剣「すげえ、ゲージを9にしやがった。」

ドラゴレム「カセゴレムでファイターを攻撃!」

クロス「無法地帯の能力発動このカードをドロップゾーンに送りそのダメージを0にする。」

ドラゴレム「カセゴレムの能力自身を破壊。砂塵連結拳の効果でゲージ1追加してお前に1ダメージ与える。」

クロス「くっ。」

残りライフ2↓1

ドラゴレム「ターンエンド。」

残りライフ6 ゲージ0 手札3

クロス「俺のターンドロージャーリアンドロー、ゲージ3を払い、山札の上からの2枚をソウルに入れてセンターにコール。無法の霸王龍 ドラゴニック・アウトレイジ・クロスをセンターにコール。」

ライフ2 ゲージ7 手札4

無法の霸王龍 ドラゴニック・アウトレイジ・クロス
デンジャーワールド
サイズ3

攻撃力20000 防御力6000 打撃力3

コイルコスト(ゲージ3を払い、君の山札の上から2枚をこのカードのソウルに入れる。)

■このカードは相手の効果で破壊されない。

■このカードが攻撃した時手札を1枚捨ててもよい。捨てたら、カードを1枚引く。

■〃無法の連鎖〃このカードがレストしていて君の手札からカードの効果で(無法者)または(霸王軍)が捨てられた時そのカードをこのカードのソウルに入れる。その後そのモンスターの「このカードが登場した時」で始まる能力を1つ使っても良い。〃無法の連鎖〃は1ターンに2度まで使うことが出来る。

「2回攻撃」「ソウルガード」

そこに現れたのは全身が黒く染まった龍が遂にフィールドに現れた。

アタックフェイズ

クロス「俺でドラ・ドラゴレムを攻撃する時に能力を発動。手札の無法闘士 アウトショットを捨ててワンドロー。そして俺のはアウトショットの登場時能力を発動する。お前の手札を1枚捨てやがれ。」

クロスの左腕が銃となりドラゴレムの手札に向かって放たれた。

クロス「俺は仲間の武器をこの両腕に変形させることでその力をえる。これが絆の連鎖だ!!」

剣「そんなのありかよ。」

ドラゴ「これがルールに縛られない戦い方無法の霸王龍の名にふさわしい能力だろう。」

ドラゴレム「……バーストパーツを捨てる。そしてドラ・ドラゴレムはソウルガードで場に残る。」

手札2

クロス「2回攻撃する時にも能力発動手札から無法騎士 アウトソードを捨ててワンドローそのままアウトソードの能力発動。「対抗」このカードをスタンドする能力を得る。」

ドラゴレム「……」

クロスの右腕が剣となってドラ・ドラゴレムを破壊した。

無法騎士 アウトソード

サイズ2

攻撃力8000 防御力4000 打撃力2

コールコスト(ゲージ1を払う。)

■このカードが登場した時、このターンの間(「対抗」このカードをスタンドする。この能力は1ターンに1度しか使えない)を得る。

剣「無法者なの？それとも騎士なの？どっちだよ。」

ウィザード「あ、それに突っ込んだじゃうんだ。」

クロス「先ほど得たクロスソードのスキルで俺がスタンド再び攻撃
!!」

「ぐわぁー」

残りライフ7↓4

クロス「ターンエンド！」

残りライフ3 ゲージ7 手札2

「ドラゴレム我がターンドロージャーリアンドドロージャー救急ゴレムをレフトにコール更にゲージ2を払い、魔岩竜機 ドラ・ドラゴレムを再びセンターにコール。」

アタックフェイズ

ドラゴレム「ドラ・ドラゴレムでファイターを攻撃。」

クロス「まだだ。まだまだこんなじゃ満足できねえぜ!!ゲージ3

を払いキャスト、〃地獄還り〃ライフ1で復活だオラア!!」

ライフ1

ドラゴレム「……ターンエンド」

ライフ4 ゲージ0 手札1

クロス「俺のターンドロージャーリアンドドロローそのままアタックフェイズだ!!」

アタックフェイズ

クロス「俺の攻撃する時に手札から無法槍士 アウトランサーを捨ててその能力を得る。打撃力を+1して貫通を得る。」

今度はクロスの右腕が槍になった。そのままセンターのモンスターごとファイターのドラゴレムを貫いた。

無法槍士 アウトランサー

デンジャーワールド

サイズ1

攻撃力4000 防御力1000 打撃力1

コールコスト(ゲージ1払う。)

■このカードが登場した時このカードの打撃力+1して「貫通」を得る。

ドラゴレム「……」

ライフ0

クロス「よっしゃー!!最強はこの俺だ!!」

勝者 無法の霸王龍 ドラゴニック・アウトレイジ・クロス

クロス「それじゃあ共に戦ってくれよ。頼んだぜ!!」

「おうよ。任せな。」

「あいつらにはたっぷり仕返ししてやるぜ!!」

クロス「無法者共お前らも暴れる準備だけはしとけよ。」

「イエサー!!」

クロス「俺は他のワールドの連中にも声を掛けに行つて来る。オ
メエらも気合い入れておけよ!」

「おおー!!」

クロス「待たせたな。これでデンジャーワールドは大丈夫だ。」

剣「何か凄いワールドだったな。」

クロス「だろう。このワールドの力は凄まじいぜ。俺達が混沌魔龍
も倒してやるぜ!」

剣「頼もしいな。それじゃあ次の世界に向けて出発だ!!」

「おおー!!」

ダークネスドラゴンワールド 怨念の鎧

剣「ここはダークネスドラゴンワールドか？」

カナミ「何ここ？ジメジメして気持ち悪い。」

ここはダークネスドラゴンワールドあちこち沼地のようなところが多く

剣「それでここには何しに来たんだ？」

ドラゴ「ここには覇竜剣を探しながら仲間探した。」

剣「了解早速行くか。」

???「これ以上仲間を増やされては困るな。」

「!？」

いきなり後ろから声が聞こえてきたので振り返ると黒い服を着たフアントムがいた。

カナミ「あなたはカントム何でここに？」

フアントム「ち、がーう。私はフアントム、カントムなどでは無い。」

ウイザード「カナミ、そんな典型的なボケしないの。」

カナミ「ごめんなさい。」

剣「それで一体お前は誰で何しにが来たんだ？」

フアントム「え？」

そうなのだ。フアントムが最初に仕掛けてきたのはカナミとウイザードしかもいなかった。退けたのはその二人であり剣は一回もあつてないのだ。

フアントム「まあいい。私はフアントム以後お見知りおきを。」

剣「それで俺達に何のようだ。」

フアントム「それは君だよ。弓風 剣、君を消さしてもらおうよ。」

剣「何!？」

フアントムは剣だけをフィールドに飲み込まれた。

ドラゴ「剣!？」

カナミ「剣君!？」

ヤマト「待て!？」

剣が再び目を開けるとそこにはファイトステージがあった。

剣「くっ、何で俺だけを。」

フアントム「お前は今、覇龍剣を持っていない。それに絆の霸王龍もない。そんなお前に勝つのなんて簡単だ。それに俺にはこれがある。」

フアントムの後ろにはガルガンチュア・ドラゴンがいた。

剣「ガルガンチュア・ドラゴン!?何でお前と一緒にいる。」

フアントム「こいつは俺のバディだよ。まあこの世界とは違う時間軸が違うがな。」

剣「どういう意味だ?」

フアントム「これから死んで行く君には関係の無い話だ。」

剣「確かにな。でもな、今の俺がいるのは覇龍剣とドラゴだけの力だけで生きてきたと本当に思っているのか?」

フアントム「何?」

剣はそう言うとカードを一枚取り出した。

剣「今の俺にはこれがある。」

剣がカードをかざすとブラスター・ブレードと白き鎧を纏った。

フアントム「何だその鎧は!!」

剣「お前を倒す光の剣だ。」

カナミ「それで一体どうやって剣君を助けるの?」

ウィザード「あの空間はファイトが終わるまでは出られない。」

イクサ「でも方法がない訳じゃないんだろう。」

ウィザード「まあね。前回のフアントムに襲われた時にあの空間を解析していたんだ。」

カナミ「そんなことしてたんだ。」

ウィザード「その解析を今からするわ。少し待ってて。」

そういうと魔法陣の展開を始めた。
イクサ「そうか。それが終わるまで暇になるな。」
ドラゴ「無事でいろよ。剣。」

剣 side

剣「ふっ、はあ。」

ファントム「ハハハ、やはり覇竜剣のいないお前にはガルガンチュア・ドラゴンの相手にもならないな。」

確かにそうだ。先程からブラスター・ブレードとその鎧を着て戦っているのだが、俺が攻撃しても全て防がれ、あっちの攻撃を防ぐのに体力と精神をだいぶ削られてしまいかなり不利になってしまっている。

フォントム「さっさと攻撃を食らってらしくなりなよ。」

剣「わりいな。ここで負けるわけにはいかないんだよ。」

ファントム「ならばこれならどうだ？」

いきなりファントムが手に黒いエネルギー弾のようなものを作ったかと思うとこちらに突っ込んで来た。

剣「速い。」

ファントム「くらえ！」

ファントムは手に持っていたエネルギー弾を俺にぶつけてきた。

剣「くっ、何だ今のは？」

ファントム「時期に分かる。」

剣「どう言う意味だ!?ぐっ!!」

何だ?いきなり身体中に痛みが。

ファントム「聞いて来たようだな。」

剣「お前、一体、何を、したんだ!!」

ファントム「簡単だよ。俺がしたのはこの地に眠る怨念をカオスブレイカーの力で支配してお前にぶつけたんだよ。そのうち身体怨念に飲み込まれて俺の手駒になるんだよ。」

剣「なんだと!？」

そんな事が可能なのか？確かにカオスブレイカーには倒した相手を支配することが出来るのは前回の騒動で分かっていた。

しかし、まさか亡霊のモンスターまで支配できたのか!？」

ファントム「さあさあ早くなんとかしないと身体が奪われちゃうぜ。そいつらはな。復讐したい相手への感情を増やしている。お前が負けちまえば世界中で大暴れさせてやるぜえ。」

剣「そ、そんなこと、さ、させるか。俺は、こ、こんな物に負けない。」

『早く身体を寄越せ。』

『あいつらに復讐を。』

『お前よりも上手くその身体を使ってやるよ。』

『復讐を俺をはめたアイツらに復讐を。』

くっ、こうしている間にも少しずつ身体が侵食されている。このままじゃこの亡霊達によって身体を支配されてしまう。おまけに変な声まで聞こえてきやがった。これが怨念の力か。

ファントム「ハハハこの調子で行けばすぐにもでも支配して霸王軍すら我が手中にしてみせよう。」

霸王軍、そうだ。俺は覇龍剣に選ばれたんだ。このまま俺があいつに支配されたら俺は、いや、俺達は負ける。そんなこと、そんなことは絶対に、

俺は足の下から黒く染まっていくのも気づかないほど集中していた。

『お前ごときが何かを守ることも倒すこともできねえんだよ。』

剣「だめだ。」

足が黒くなっていく。

『お前は絶対に道半ばで倒れる俺達と同じようにな。』

剣「そんなことは」

肩まで黒くなっていく。

『だったらその身体俺達に寄越せ。全て破壊してやるよ。』

剣「俺は、俺は。」

そして全身黒くなってしまった。

??? 『お前の力では何も守れない。今のお前ではな。』

剣 「だったら、お前の力を奪ってでも俺は俺の大事な物を守る!!」
??? 『!!これは。』

覇龍剣 「剣!!」

フロントム 「これで霸王軍は総崩れだな。我々の勝利は確定した
!」

剣 「そんなことはさせない。」

フロントム 「!!」

剣の周りに漂っていた黒い霧が剣身体に集まり

フロントム 「何だ!？」

剣 「俺は絶対にお前たちの支配それない!そのためならこの亡霊共
の力だって俺の力にしてやる!!うおー!!」

フロントム 「何だ? 一体何か起きているんだ!？」

『俺達を取り来むつもりか!？』

『そんなことができると思っっているのか!？』

『負けぬぞ我は復讐を果たすまでは絶対に。』

『……フ。』

周囲の亡霊とプラネットワールドの力を吸収している。

そしてブラスター・ブレードの鎧が黒くなり、鎧のあちこちに身体

につき、その姿もはや人とは言えないくらい姿に変わっていく。

剣「俺は、どんなことをしてもお前達を倒す。死者すらも利用するお前達は絶対に許さない。」

フアントム「そ、それがどうした。お前はそこにいるガルガンチュア・ドラゴンすら倒せないお前なんて怖れるに足らず。」

剣「フン！」

俺はブラスター・ブレードだった物を振るとガルガンチュア・ドラゴンの周りにカオスブレイカーが使っていた黒輪が現れそのままガルガンチュア・ドラゴンの動きを封じられた。

フアントム「な、何!?何故お前が『呪縛』の力を!!」

剣「まず一体。」

フアントム「ま、まさかお前あれほどの力を自分の物にしたというのか。」

剣「次はお前だ。」

そう言つて俺は構えた。

フアントム「ま、まだだ。私は滅ぶ分けには。」

剣「お前ごときに俺は倒せない。」

フアントム「だまれえー!!」

フアントムが先ほどと同じように突進してきた。

しかし俺は、手に持っていたブラスター・ブレードだったものを手に取りフアントムを切りつけた。

剣「霸王流剣撃、ブラスター・エンド！」

フアントムを一瞬で右腕を切り落とした。

フアントム「ぐわあー!!」

剣「まず一撃」

フアントム「ガバあ!!不味いこのままでは、ここは一旦撤退するでしょう。」

フアントムはゲートを開き、その中に入りそのままゲートが消えてしまった。

剣「待て！ちっ。」

逃げられた。

すぐ後ろにゲートが開かれた。

ドラゴ「剣!!お前その姿、大丈夫か!？」

剣「ドラゴか?」

イクサ「その姿は一体!？」

俺は変身を解除した。

剣「フアントムとかいう奴にカオスブレイカーの力で操られた亡霊に身体を乗っ取らそうになってな。それとブラスター・ブレードが融合しちまったんだよ。」

ウイザード「身体を乗っ取られそうになったて、本当に大丈夫なのですか?」

剣「まあ大丈夫だよ。身体にも違和感が無い。」

クロス「身体を乗っ取ろうとした怨念を逆に吸収するとはな。根性あるじゃあねえか。」

カナミ「!!剣君そのカード。」

剣「カード?」

カナミが指差したカード……ブラスター・ブレードのカードを確認した。

剣「!!カードが書き換わっている。」

俺はブラスター・ブレードだったカードを見た。

ワールドにプラネットワールド追加され能力もはや前のカードと別物になっていた。しかも驚くべきことに属性に霸王軍が追加されていた。

剣「これは一体?」

イクサ「とりあえずブラスター・ブレードも霸王軍デッキに入れられるみたいで良かったじゃねえか。」

カナミ「そうだよ。喜ぶべきだよ。」

剣「そうだな、そうだよな。」

ドラゴ「それにしてもフアントム2回も邪魔をしてくるということ
はこれからもしてくるだろう。」

イクサ「そうだな。一旦ヒーローワールドに行って、体制を整えたほうがいいかもな。」

カナミ「一応一回剣君の身体を見てもらおう。」

剣「ああそうだ。……ファントム、てめえが逃げるんだっただらたえ地獄に行っても探し出し、てめえを俺が殺す。そのためこの力だ!!」

ヒーローワールド 新たなる始まり

剣「竜次さんお久しぶりです。」

俺は今までの成果と身体の検査の為にヒーローワールドにやってきました。

待ちあわせしていた竜次さんと合流した。

竜次「久しぶりだな。お前も大変だな。あちこちのワールド行って覇龍剣の搜索と各ワールドの調査だなんてな。」

剣「ええ。大変ですよ。おかげで色々なことを体験させてもらってますけどね。」

竜次「それで君の隣りにいるのは、君の彼女かい？」

カナミ「!!」

剣「!!いえ、この人はマジックワールドの霸王龍のバディのカナミさんです。」

カナミ「始めまして、カナミです。力になれるかどうか分かりますがよろしくお願いします。」

竜次「しっかりしてるな。」

ウィザード「それは私が礼儀を教えたのだから当然ですね。」

カナミ「いや、ウィザードあなたのは所々間違えてたじゃない。」

ウィザード「あれそうだったかしら。」

カナミ「そうよ、あなたが教えてきたの江戸時代の常識じゃない。あんなんじゃ生活することは出来ないわよ。」

ウィザード「しょうがないでしょ。私があつちで生活していたのはその時代なんだから。」

カナミ「そんな昔の常識は流石に現代で通用するわけないでしょうが。」

ウィザード「何よ。せっかく教えてあげたのに。」

カナミ「だったら、少しは役にたつ常識を教えなさいよ。当てにならないからわざわざアスマダイに聞いちゃった」

ウィザード「あ、あなたあのアスマダイに聞いたの!?!何でそんな危険なことしたのよ!?!」

カナミ「だって、あなたの情報が本当かどうか分からないからよ。ウィザード「何よそれ!!」

カナミ「そのままの意味よ。」

二人が言い争いを始めてしまった。

竜次「ま、まあ面白い人達だな。」

剣「まあそうですね。楽しく旅をさせてもらっています。」

竜次「それじゃあ、まずは報告を聞こうか。詳しい話は中に入ってからな。」

剣「はい。」

それから俺は、敵として現れた謎の人物、フロントムと名乗る人物に短期間で2度も襲われたが何とか撃退したこと、ガルガンチュア・ドラゴンが敵として現れたこと。そして2回目の襲撃の時に起きた身体のことも。

竜次「そんなことが、あったのか。」

剣「ああ。気になるのはガルガンチュア・ドラゴンがあいつらについているのが驚きでしたよ。」

竜次「その件だけだな。それはおかしいだよ。ガルガンチュア・ドラゴンは地球でバディポリスに強化してもらっているんだよ。」

剣「え?」

竜次「ガルガンチュアドラゴンはな。地球で色々あって今は他のバディポリスの仲間の指導もしてもらっているんだ。先程確認したんだが襲われたという時間もお前の仲間と特訓をしていたことが判明している。」

剣「それじゃあ、俺を襲ってきたあのガルガンチュアドラゴンは一体?」

竜次「おそらくはあいつらが人工的に生み出したモンスターだろうな。モンスターをそれもドラゴットを生み出せるだなんてな。これからどう対策をたてればいいのかやら、検討がつかない。」

剣「確かに、そうですね。(本当にあれば人工のモンスターが出せる力なのか?)」

竜次「それでこの後何だがちよつとしたヒーローワールドの整備工場を見てもらおうと思つてな。」

剣「なんでですか？」

竜次「ちよつと俺達の兵器を見てもらおうと思つてな。」

剣「え？」

「ガコさんカードバーン、カードライノー、カードサーペントのそれぞれのモーターの修理完了。」

「よっしやー!!そのまま外装の変えろ!!今日中にカードバーンシリーズのメンテ完了させるぞ!!」

「了解!!」

「ガコさん、ガイゼリオンの動作の確認お願いします。」

「了解。」

「がコさん、サツキの追加装備にメダルをレールガンにして発射させるのはどうですか？」

「色んな会社に怒られるからだめだ。」

「ガコさんこの間もらったマグロめちやくちや美味かったのでまたお願いします。」

「俺からもお願いします。」

「おうよ。あのよく分からんあの化け物倒したらまたもらつて来てやるよ。だから気合い入れて作業に当たれ!!」

「よっしやー!!」

「了解です。」

剣「……」

竜次さんに案内されて来たのは何か個性の強い人達がカードバーンを始めとするブレイブマシンの整備をしているところだった。

竜次「まあ、言いたいことは分かる。だがな、腕は確かだから問題は無い。」

剣「はあ、そうですか。」

俺達は案内される中でバディポリスが管理しているマシンの整備

室を見学させてもらっていた。

そこでは個性的な人達が作業をしていた。

そしてその中でも特に目立っていたのはガコさんと呼ばれる人だった。

剣「竜次さん、あのガコさんって人は？」

竜次「あの人はここの班長だよ。全てのマシンをメンテをしているんだ。」

剣「すごい人なんですね。」

竜次「ああ、すごい人はすごい人なんだけどなあ、」

剣「？」

ガコさん「お、竜次いいところにきたな。アルティメットカードバーンにD4レーンを搭載してもいいか？」

竜次「言い訳ねえだろ。世界を壊す気か。」

ガコさん「じゃあネオアームスト」だめだ。ちゃんと仕様書の通りにしてください。」くっ、しかたねえか。」

剣「(何か今やばいのを言おうとした気が。)」

竜次「大丈夫だ。気にするな。」

剣「俺何も言っていないんだけど。」

竜次「このようにこの人達は仕事は出来るんだがな、追加の武装を追加しようとして誰かが監視していないとすぐに改造をしようとしているんだよ。」

剣「あのおく無視するの止めてもらってもいいですか？。」

竜次「この間なんてただでさえ大きいバトルビルディングに更に強化外装を追加しようとしていたのを内の部下が発見してな。急いで止めさせたんだが、実際に作られていたかと思うと怖くてたまらん。」ガコさん「なんでだよ。設計図は完璧だっただろうがそれにあの武装が完成していたらな立派な城になっていたんだぞ。」

竜次「あんなの作ったら予算がいくらあってもたりねえよ。それにあつたとしてもあんな作ったら上の方から何言われるか分かったもんじゃねえよ。」

ガコさん「そんなん知らねえよ。」

予算を巡って口喧嘩が始まってしまった。

剣「どうしたものか。」

医者「剣さん検診の、準備ができました。」

剣「あ、じゃあ俺行ってくる。」

イクサ「俺達はここで待っているからゆっくりしてこい。」

剣「了解。」

カナミ「私も付き添いでいくよ。」

それから検査結果を医者話を聞いた。

医者「剣さんまずは落ち着いて聞いてください。あなたの身体について検査をしました。その結果、あなたの身体は少しずつ人間じゃなくなっています。」

剣「俺が人間じゃなくなっている!?!」

医者「ええ、君の右半身の細胞がモンスターのそれと酷似し始めています。」

カナミ「どうしてそんなことに?」

剣「……ドラゴ、」

ドラゴ「ああ、恐らくそういうことなんだろう。」

剣「やっぱりか。」

医者「何か心当たりがあるのかね?」

剣「ええ、俺はこの数ヶ月で何回も覇龍剣と一体化した。けどその後一応ってことで検査をしていたんです。でもその時は身体に異常は無かった。」

カナミ「え?じゃあどうして今はそんな状態になったんだ?」

剣「そして先日のファントムの襲撃の時ブラスター・ブレードが黒くなった。霸王軍の力とプラネットワールドそれに、ブラスター・ブレードからもらった覇竜騎士団の鎧のカード、最後にあの怨念の塊それら全てと一体化した時に俺の身体が変化したんだろうな。」

ドラゴ「覇龍剣がいればモンスター化を防いでいたけど今は覇龍剣がない。だから剣の身体がモンスターとなっているというわけだな。」

医者「何その混ぜるな危険並のばっかの奴を混ぜてるんじゃないで

すよ。というかよくそれで自我を保てましたね。普通、怨念をその身に宿したら自我を保てずに発狂するのが普通だと聞いたんですが。」

剣「ああ、それはな、」

カナミ「そんなことより、剣君の身体は大丈夫なんですか？」

剣の話を通りカナミが剣の状態を確認した。

医者「うーんこれは前例が無い話ですからな。どうなるのか私も検討が付きません。」

カナミ「そうですか。」

医者「ただ。その力はあまり使わないことをおすすめます。使った場合今よりもモンスター化が進行してしまう可能性があります。そうしたらどうなるかは私にもわかりません。」

剣「まあそんなに大きなことにはならないと思いますけどね。ハハ。わざわざ診ていただいております。それじゃあ失礼します。」

そう言って部屋を出て行った。

カナミ「あ、ちよつと。剣君!!」

医者「少し一人してあげましょう彼にも考える時間が必要でしょうから。」

カナミ「……はい。」

ドラゴ「……」

俺は、バディポリスが管理している休憩室の一つを借りて考えをまとめていた。

あの時手に入れた力のおかげで何とか返り討ちにすることができたがあああの時の怨念がまた使うとなると、俺は

ドラゴ「ここにいたのか。剣。」

俺はいつの間にか後ろにいたドラゴに気づかないほど俺は集中していた。

剣「!!……なあドラゴ、俺どうしたらいいかな。」

ドラゴ「どうとは?」

剣「俺さ、さつき人間を辞め始めてるっていう話聞いてさ、ようやく自覚したんだよ。俺が手に入れた力は人が持つていていい力じゃないものだって。」

ドラゴ「……それは」

剣「分かっている。この力が必要だったのはさ。でもさ。この力をこれからも使つていって俺は、あの怨念に身体を侵食されて正気を保つていられるのか不安なんだよ。」

確かにあの力はすごいあのガルガンチュア・ドラゴンを一瞬で倒してファントムの腕を一瞬で切ることができるほどだ。だけどその力はプラネットワールド、霸王軍、ダークネスドラゴンワールドの怨念、そしてブラスター・ブレードの力これだけの力を合わせることで何とか勝つことが出来たんだ。でもあの力は……

ドラゴ「ふ、ハハハ。お前はバカだな。」

剣「な、何だよ。ドラゴバカつて。」

ドラゴ「もしお前が正気を失ったとしても我が殴り殺してでも元に戻してやろう。」

剣「いや、殺すなよな。」

そうだよな。俺は一人じゃない。俺に何かあったとしてもドラゴと共に乗り越えてやる。

ドラゴ「確かにな。」

そう言つてカナミ達の元に戻った。

ダンジョンワールド 前編 本の中のダンジョンを 攻略せよ。

次に訪れたのはダンジョンワールドのとある国だ。

アリス「いらつしやい、よく来たわね。このアリス様が直々に出迎えに来てあげたわよ。」

いきなりな堂々とした態度で現れたのはこの国を守護する存在ワ
ンダーランド・ウオーカー アリスだ。

剣「よろしくお願ひします。」

イクサ「それで、ダンジョンワールドの霸王軍の仲間のはできたの
か？」

アリス「ええ。ダンジョンワールドの霸王軍になりたいたいと言ってい
たモンスターは今、彼の元で霸王軍になっていますわ。」

剣「彼？」

アリス「ダンジョンワールドの霸王龍、魔の霸王龍 ドラゴニック・
デーモン・デストロイヤーよ。私ほどじゃないけどとてもいい指導を
しているわ。」

ドラゴ「!!あいつが？」

ダンジョンワールドの霸王龍、剣とカナミはまだあつたないが覇
王軍の中でもとてつもない力を持ったモンスターだ。

アリス「彼は、この世界に帰ってきてからすぐにダンジョンワール
ドの強化を行っていたんだ。この世界を守るために。」

剣「この世界に帰ってきた？」

エマ「それについては後ほど本人に聞いてください。」

剣「あなたは？」

エマ「私の名前はエマよ。アリスとは幼なじみで大親友よ。」

ドラゴ「ではあいつの元へ行くとするか。」

エマ「えーとその前にちょっと手伝ってほしいことがあるのです
が、よろしいでしょうか。」

剣「え？」

カナミ「何ここ？」

そこには図書室のような場所だったのだが、本が散らかっていて本来あつたであろう本棚は壊れかけていた。

イクサ「何だここ？襲撃でもあつたのか？」

ドラゴ「いや、多分これは、」

エマ「……私が散らかしました。……色々調べていて。」

剣「こんなになるほどか？」

エマ「……すいません。私普段は人間界にいるんですが今帰って来ていて、バディと一緒にここで本を読んでいたのですがいつの間にかこうなっていて。」

剣「それでそのバディは？」

エマ「疲れて寝てしまったわ。」

周りが何も言わずになつてしまった。

ウィザード「ま、まあ片付けましょう。」

カナミ「そ、そうだね。色々してもらってたみたいだし、少しは返さない。」

そう言つて片付けを始めた。

剣『『モンスター融合理論』、『魔王の力の根源について』、『ワールド間のゲートについて』？本当にこれ読んだの？』

アリス「いや、それは私が散らかしたものよ。最近私も本が好きになつてね。その時ちよつと散らかしちやつたのよ。」

剣「あつそうですか。」

カナミ『『ケーキの美味しい作り方』、『日本マイナー昔ばなし』』絵本を書くための絵本』なんだろうだんだん変なものになつている気がする。」

そんなこんなで片付けが進んでいると剣は他のとはあきらかに違

う黒い本を見つけた。

剣「何だこの本？」

剣は黒い本を開けた。

アリス「あ、それ開けじや駄目!!」

剣「え？何だ!!本に吸い込まれて」

カナミ「剣君!?!あ、」

剣が開けた本の中に剣が吸い込まれてしまい、それを助けようとしてカナミがそのまま飲み込まれてしまった。

エマ「あちゃー。」

ドラゴ「おい、あいつらは一体どうなったんだ？」

アリス「……本の中」

ドラゴ「は？」

アリス「だから、本の中に入っちゃったの。物語を体験できる本の中に入って行っちゃったの!!」

ドラゴ「そんなことある!?!」

エマ「まあ私達童話のモンスターですから。」

ドラゴ「マジか。」

剣「……ここは？」

カナミ「何ここ？」

辺りを見渡すとレンガの壁で囲まれた部屋にいた。

そして扉があった。

カナミ「ここって何かのダンジョン？」

剣「みたいだな。」

アリス『その通り。あの本の名前は『ダンジョン体験本』そのダンジョンをクリアしないとその本の中から出られないよ。あ、こっちの声はそっちに届くけどそっちの声は聞こえないから。』

どこからともなく声が聞こえてきた。どうやらアリスの声のようだ。

カナミ「そんなことあるの？」

剣「まあ異世界だからな。」

アリス『マジックワールドの技術もあるからね。』

剣「なんで会話できてんだよ。こっちの声が聞こえないんじゃないかなかったのか？」

アリス『小さいことは気にしたら負けだよ。』

カナミ「そうだよ。小さい男は嫌われるよ。」

剣「何でそっちに肩入れするんだよ。ハア、まあいいか。とりあえずクリアすればいいんだろ。」

アリス『そう言うことそれじゃあ頑張ってね。』

剣「それじゃあさっさとクリアしますか。」

カナミ「そうだね。」

アリス『あ、そっちで死ぬと本当に死ぬから気をつけてね。』

二人「……は？」

剣「で、この道どっちに進む？」

カナミ「正解の道を行かないと、ここから出られないみたいだしね。ちなみに地図はここにある『カチ』え？」

ポケットの中にあつた地図を見せにこようとしたカナミは足元にあつたボタンを押してしまった。

ドシン!!

カナミ「あ、ヤバい。」

大きな音があつたので後ろを振り向くとそこにはダンジョンでよく見かける丸い道を塞ぐでかい石があつた。そしてそのままこっちに転がってきた。

剣「テンプレにも程があんだろ!!」

カナミ「いやー!!」

カナミ「ハアハアハアなんなのよ。今の。」

何とか石から逃げる事ができたのだが、二人ともクタクタになつてしまっている。

剣「……お前、今のわざとじゃないんだよな。」

カナミ「あ、当たり前よ。わざとなんてするわけ『カチ』……」

今度は壁にあつたスイツチを押ししてしまった。

今度は前と後ろ両方の壁が壊れそこから骨のモンスターがぞろぞろと現れ。こつちに向かつてきた。

その光景をみてカナミは遠い目をして固まってしまった。

カナミ「……」

剣「……おい」

カナミ「……はい。」

剣「何か言うことないか？」

カナミ「……ごめんなさい。」

剣「どうすんの？」

カナミ「ま、まあでも、これくらいなら私達なら余裕でしょ。マジシャンズロット!!」

剣「……確かな。覇龍剣ドラゴ刃!!」

二人はカードを実体化してモンスターとの戦闘を始めた。

カナミ「さていきますか？」

剣「ああ、時間もつたないし一気に攻略しようぜ。ちゃんとついて来れるか？」

カナミ「もちろん。」

そうしてダンジョン攻略が始まった。

アリス「いや、なにこれ？」

ドラゴ「何ってダンジョン攻略だろ。どう見ても。」

アリス「いやおかしい。何で罠に全部引つかかてるのに攻略スピードが普通のモンスターより早いのか？何で人間がカードを実体化できてんのよ!!そして最後に何でダンジョン破壊しながら進んでんのよ!!」

そうなのだもともこの本はゲーム感覚で楽しむ為のもので普通に出てくるモンスターはとても弱く、人でもギリギリ何とかなるくらいなのだが、剣達がカードを実体化したことで、ゲームバランスが崩壊。剣達が一気に進みモンスターも罠も一撃で破壊してその威力でダンジョンの壁を破壊してしまっているのが本のアチコチから煙が出たり、傷が出来たりしてしまっている。

イクサ「全部、霸王龍に選ばれたからって理由で納得出来るんだがな。」

ウイザード「最初にあんな嘘つくからこうなったのよ。何よ本で死んだら現実でも死ぬって、本から追い出されるだけじゃない。そのせいで彼ら本気になっちゃったんじゃないの。」

アリス「だってせっかくだから楽しんでもらおうと思ったのに。それにドラゴ様たちだって面白そうだって乗り気だったじゃないですか。後でフオローもしてくるって言ってたじゃないですか。」

「うっ。」

エマ「まあまあアリス何とかなるわよ。…きつと、…多分。」

アリス「その言い方めっちゃくちゃ不安なんですけど!!」

イクサ「あ、あいつらラスボス倒したぞ。」

アリス「え!?!もう?早すぎよ。」

イクサ「さすがというべきか悩むな。」

ドラゴ「だな。俺達と一緒に特訓なんなもしてるから強いのは認め

るけどこれくらい余裕と見るべきか」
イクサ「ん？お、お前は、」

剣「こいつでラスト!!」

「ギャァー!!」

剣がダンジョンの奥にいた最後のモンスターに止めをさした。

カナミ「以外と楽だったね。」

剣「まあ、これをつかえばな。でもしかたねえよな。死にたくないし。」

カナミ「そうだよな。デスゲームにしたのが悪いんだよね。そうだね。うん。」

二人とも少しではあるが罪悪感を感じていたがそれで死んだら本末転倒なので関係ないが。

そうこうしている間に目の前に大きな門が現れた。

剣「あ、あれ出口か。」

カナミ「みたいだね。さっさと帰ろう。」

剣「了解。」

剣とカナミはその門をくぐると先程までいた図書室にいた。

しかし先程と違うところがある。それは知らない少年が一人いた。

剣「ただいま。」

ドラゴ「お、戻ってきたか。」

???「よう。あんたとは始めましてだったな。」

剣「ん？あんたは一体誰だ？」

タギル「俺の名前はタギルだ。俺もお前と同じで旅をしているそして目的とお前と同じだよ。世界を回って新たな霸王軍を探している

者だ。」

カナミ「あ、久しぶり、タギルあんたこんなところで何してんのよ。」
タギル「カナミ!? 何でお前が剣と一緒にいるんだよ。」

カナミ「それは、私がマジックワールドの霸王龍、覚醒の霸王龍
ドラゴニック・アウエイキング・ウィザードに選ばれたからよ。」

タギル「なんだと!?! あの泣き虫だったお前がマジックワールドの霸王龍に選ばれたのか?」

カナミ「何よ、あんただってえーとなんかだめだったじゃない。」
タギル「いや、もつと具体的にいえよ。それじゃあ何の話かわからねえよ。」

カナミ「何よ察しが悪いわね。」

タギル「いや、出来ねえよ。」

剣「あの一。」

二人「何?」

剣「あなた方は知り合いなのか?」

カナミ「ええ。ただの幼なじみよ。」

タギル「まあな。腐れ縁ってやつだ。」

剣「ちっ、またリア充かよ。」(小声)

タギル「ん? 何かいったか?」

剣「いや、何も言っていないぞ。」

カナミ「それはそうとそれで旅をしてたって言うけどそっちは何を
手に入れたのよ。」

タギル「ふっ、これを見な。」

そう言うのとデッキケースから3枚のカードを取り出した。

「!!」

「見たか? お前がダラダラしている間俺はこの霸王龍達を探し出した
んだよ。」

その手にはダークネスドラゴンワールド、エンシエントワールド、
そしてダンジョンワールドの霸王龍を持っていた。

タギル「これが俺とお前の力の違いだよ。」

剣「確かにすごいな。」

タギル「ついでにいうとな。俺はお前のやり方が気に食わない。」
剣「何?」

タギル「弱い仲間を増やしたところであいつらには勝てない。選ばれた奴を強化して少数精鋭で開放者を倒す。数が多くてもとてつもない力をもつ敵を倒すことはできないんだからな。一瞬でやられるだけだ。」

剣「そんなことはない。敵はとてつもなく力を持っているなら皆さんの仲間と共に開放者を倒す。その為に俺達は仲間を増やして来たんだ。」

タギル「それがムダだって言ってるんだ!!」

剣が意見を行った瞬間アギトがいきなり大声を上げた。

周り「!!」

剣「それは一体どういう意味だ。」

タギル「そう言えば忘れていたよ。お前らは知らなかったな俺のバデイが生きていた理由をな。」

剣「え? どういうことだよ何かあったのか?」

ドラゴ「あいつ、魔の霸王龍 ドラゴニック・デーモン・デストロイヤーはかつての戦いで死んだはずだったんだよ。」

カナミ「え? じゃあなんで生きてんの?」

タギル「それは、あいつは過去から、タイムルーラー・ドラゴンによつて無理矢理連れてこられた存在なんだよ。」

周り「!!」

剣「な、何だって!？」

ダンジョンワールド 後編 ぶつかりあう霸王龍

ドラゴ「一体どういうことだ？お前はあの時何があったんだ？」
デストロイヤー「それを説明するには1年前いや、あの戦いの話をしないといけないな。」

数百年前

ここはとある戦場、混沌魔龍の配下のモンスターとダンジョンワールドのモンスター達が戦っていた。

デストロイヤー「よし、第一部隊引け!!第二部隊突撃用意。」

霸王軍「了解!!」

デストロイヤー「よし、このまま第2部隊突撃!!」

タイムルーラー「ふっ、やはり伝説の霸王龍。統率力も高いようだな。」

デストロイヤー「お前は？」

「我が名は究極龍、開放者の1人、タイムルーラー・ドラゴン」

霸王軍「開放者？」

タイムルーラー「お前はとうせこの後の戦いで死ぬのだ。ならば我々の力になってもらうぞ。」

デストロイヤー「何のはなしだ!!」

タイムルーラー「これから散るお前の意識には関係ない。」

霸王軍「隊長!!」

2体の龍がぶつかり合い、その力が周辺の空間に干渉していきどんどん空間が歪み始めた。

霸王軍「くっ、まずいこのままじゃこの空間が保たない撤退だ。」

霸王軍「しかし隊長が、」

霸王軍「隊長の決意を無駄にする気か!？」

霸王軍「くっ、隊長!!」

タイムルーラー「予想はしていたがここまで強力な力を持っていたとはな。」

デストロイヤー「次でお前を潰してやる。」

タイムルーラー「やってみろ。」

2体の龍が最大エネルギーでぶつかりその辺りが吹き飛んだ。

その後2体の姿が消えていた。

霸王軍「た、隊長!!」

霸王軍「とりあえず総本部に他の霸王龍にこのことを伝えるんだ。」

霸王軍「了解。」

1年前

デストロイヤー「ん?ここは?」

デストロイヤーが気がつくのと全身が動くことが出来なくなっていた。

タイムルーラー「気がついたようだな。」

デストロイヤー「!!お前はあのときの」

タイムルーラー「お前とは失礼な。ああ、そう言えば私は名乗って
いなかったな。我はタイムルーラー・ドラゴンこれからお前は我らの
コマになつてもらうぞ。」

デストロイヤーを拘束していた拘束具が黒く光だしデストロイ
ヤーを包み込み始めた。

タイムルーラー「その光にはモンスターを操る力がある。それで貴
様を我らの物さあ、抵抗を辞めろ。そうすれば楽になれるぞ。」

デストロイヤー「ふ、ぶぎけるなこの世界をお前のような外道に好
きにさせていいはずが無い!!」

タイムルーラー「馬鹿な、この拘束具は対大型モンスター用に作ら
れている。お前ごときが壊せるはずがない。」

デストロイヤー「それはお前の意見だ。お前の意見を俺に押し付け
てくるな!!」

デストロイヤーの周りにあつた拘束具を破壊した。

タイムルーラー「な、何だと!」

デストロイヤー「お前の思い通りになると思うなよ。さらばだ。」
そのままデストロイヤーは何処かへ向かって行った。
タイムルーラー「……やはりモンスターを操る方法を考えないとな。」

デストロイヤー「それから私はダンジョンワールドに戻り、精鋭部隊を結成し、今日まで鍛えてきた。タイムルーラーには時間を操作し様々な時間軸から強力なモンスターを連れてくるのが可能だ。それに対抗するには数では駄目だ。いくら数がいようと圧倒的な力の前では無力だからな。」

剣「!!じゃあこの間のガルガンチュア・ドラゴンさまか!!」

デストロイヤー「おそらく操られている。ガルガンチュア・ドラゴンすら操ることが出来る力、おそらくカオスブレイカーだろう。」

剣「死んでもその影響が残り続ける厄介な奴だ。」

タギル「だからこそ、今俺達の力とお前たちの力どっちが強いかな勝負だ。」

剣「なぜそうなる。」

タギル「ただ俺がフアイトしたいからだ。」

剣「ぶっちゃけたなまあいいフアイトだ。」

オープン・ザ・フラッグ

「覇王 降臨!!」

剣「俺のターン、ドロージャージアンドドロレフトに覇竜 システミックダガーをコール。更に覇竜 クロスバスターをコール。システミックの効果でチャージアンドドロ。」

手札7 ゲージ4 ライフ9

アタックフェイズ

剣「クロスバスターでファイターを攻撃。」

タギル「くっ、」

残りライフ9↓6

剣「ターンエンド」

手札7 ゲージ4 ライフ9

タギル「俺のターンドロージャーアンドロー、レフトに覇龍騎士団 ガロウズ・エンペラーをレフトにコール。ライトに覇龍騎士団
ダークナイトをコール。」

覇龍騎士団 ガロウズ・エンペラー

ダークネスドラゴンワールド

サイズ1

攻撃力1000 防御力1000 打撃力1

属性 深淵 霸王軍

「コールコスト」ゲージ1払う。

「潜影」

■このカードが相手にダメージを与えたときカードを1枚引く。

覇龍騎士団 不動のダークナイト

サイズ2

攻撃力7000 防御力4000 打撃力2

属性 騎士 霸王軍

ダークネスドラゴンワールド

「コールコスト」(ゲージ2払う。)

■このカード以外にワールドが2種類以上あるなら攻撃力+30
00 打撃力を+1

「2回攻撃」

現れたのは赤黒い鎧をまとった大男とガロウズ

タギル「ライフ1を払い、更に装備、エンシエントアーマー イザ
ナミそしてイザナミの効果レストしてゲージ2追加。」

残りライフ6↓5 ゲージ2 手札5

エンシエントアーマー イザナミ

エンシエントワールド

アイテム

攻撃力0 防御力4000 打撃力0

装備コスト(ライフ1払う。)

■このカードをレストしてもよい。レストしたら君の場のワールドの種類だけ山札の上からゲージに置く。

アタックフェイズ

タギル「やれ、ダークナイトセンターのクロスバスターを攻撃。」

クロスバスター破壊

タギル「2回攻撃」

剣「ぐわぁー」

残りライフ9↓6

タギル「ガロウズやれ。」

ガロウズ「ゲシゲシ悪く思うな。」

剣「くっ、」

残りライフ6↓5

タギル「ガロウズの効果でワンドロー。ターンエンドだ。この程度か？覇王に選ばれたくせに。」

ライフ5 ゲージ2 手札7

剣「言ってる。俺のターンドロージャージアンドロー、俺はゲージ2を払い、覇龍騎士団 エクシード・ドラグーンをレフトにコール。システムミックの効果チャージアンドロー」

手札7 ゲージ4 ライフ5

覇龍騎士団 エクシード・ドラグーン

攻撃10000 防御3000 打撃2

ドラグーン「俺の出番だぜー!!」

アタックフェイズ

剣「ドラグーンでガロウズを攻撃。」

ガロウズ破壊

剣「ドラグーンの効果スタンドして1ダメージ。」
タギル「くっ、」

残りライフ5↓4

剣「ドラグリーンでダークナイトを攻撃。」

ダークナイト破壊。

剣「ドラグーンの効果でスタンドして1ダメージ」

タギル「くっ、」

残りライフ4↓3

剣「ドラグリーン今度はガロウズだ。」

ドラグリーン「任せろ!!」

ガロウズ「ゲシゲシ俺様の出番はここまでか。」

ドラグリーン「俺の能力だ1ダメージ喰らえ。」

「くっ。」

残りライフ3↓2

剣「ドラグリーンでファイターを攻撃。」

「キャスト、 覇竜の盾攻撃を無効にしてゲージ2追加。」

剣「システミックでファイターを攻撃。」

「は、聞かねえな。」

残りライフ2↓1

剣「ターンエンドだ。」

ライフ5 ゲージ4 手札7

タギル「俺のターンドロージャーアンドドロレフトに霸王の眷

属 スターレムナントをレフトとライトにコール。」

霸王の眷属 スターレムナント

スタードラゴンワールド

サイズ0

攻撃力3000 防御力1000 打撃力0

属性 ネオドラゴン／霸王軍

■このカードが場にいる限り君の手札の（霸王龍）のコールコストを1減る。

「そしてゲージ1を払いにセンターにバディコール。センターに現われる、魔の霸王龍 ドラゴニック・デーモン・デストロイヤー」

魔の霸王龍 ドラゴニック・デーモン・デストロイヤー

サイズ3

ダンジョンワールド

攻撃力20000 防御3000 打撃力3

コールコスト(ゲージ3を払い、君のデッキの上から2枚をソウルに入れる。)

■このカードがセンターにいる時このカードの効果は無効化されず効果で破壊されない。

■このカード以外のワールド種類が3種類以上あるなら相手はスタンド出来ない。

〃魔王襲来〃このカードが攻撃した時君の場のカードを1枚このカードのソウルに入れてもよい。入れたら手札の(魔王)または(霸王龍)を1枚コールコストを払ってコールしてもよい。この効果でコールされたモンスターのサイズは0となる。

「ソウルガード」

アタックフェイズ

タギル「ドラゴニック・デーモン・デストロイヤーでアームズ・エイドに攻撃!!攻撃時効果レフトのスターレムナントをこのカードのソウルに入れる。それにより手札からゲージ1払う。霸道魔王「ガーグナーをレフトにコール。ガーグナーの効果ゲージを全てデッキに戻してゲージ4追加。」

霸道魔王 ガーグナー

ダンジョンワールド

サイズ3

攻撃力8000 防御5000 打撃力2

(コールコスト)ゲージ2を払う。

■このカードが登場したとき、ゲージを全てデッキの1番下に置き、山札から4枚をゲージを置く。

「2回攻撃」

剣「くっ。」

残りライフ9↓6

「ガーグナーでファイターを攻撃。」

剣「ぐわあー。」

残りライフ6↓4

「ガーグナー2回攻撃。」

剣「ぐわあー!!」

残りライフ4↓2

タギル「そしてスターレムナントでシステミックを攻撃。」

システミック破壊

タギル「ターンエンド。さあ抵抗してみろよ。」

剣「言われなくても俺のターン!!ドラグーン、システミックどうした!?!」

ドラグーン「なんだ?身体が動かない」

剣がそこを見るとドラグーンとシステミックが地面から生えてきた鎖によって動けなくなっていた。

デストロイヤー「驚いたか?われの能力だ。我以外にフィールドに3ワールド以上あるとき相手はスタンド出来ない。」

「だったら新しくモンスターを出すまでだ。ドローチャージアンドドロー!!このカードは!!」

剣が引いたカードはプラネットワールド黒く染まったブラスター・ブレードだ。しかしこのカードを使えば、

「そのカードを使うか?その力に飲み込まれて暴走してしまうんじゃないのか?」

確かに俺はこの力に飲み込まれて自我を失いかけた。

剣「俺は自分を信じて戦う。決して暴走なんてしない!!行くぞ!!変身!!」

カードから黒い霧が出てきて剣の全身を包んだ。

カナミ「剣君!!」

黒い霧を中から切り裂き黒き鎧を纏った剣が中から現れた。

その姿は正しく闇に飲まれた騎士だ。

断罪の覇龍騎士団 ブラスター・ジョーカー

プラネットワールド

サイズ3

攻撃力11000 防御力11000 打撃力2

属性 霸王軍

コールコスト「ゲージ3を払い、君の場のモンスター1枚の上に重ねる」

■このカードが変身しているとき君はもう一枚アイテムを装備することができる。

■このカードが（変身）したとき、相手の場のカード1枚を破壊する。

■断罪の一撃 このカードが攻撃したとき君のライフが3以下なら相手の場のカード1枚を裏返しにするか手札の魔法カードを1枚を使用コストを払わずに使える。

「2回攻撃」

「変身」（ゲージ2を払う。）

『たとえ1人になったとしても戦い続けてみせる。』

剣「更にバディコール。ドラゴニック・ユナイテッド・カイザー!!

ドラゴニック・ユナイテッド・カイザーの効果ドロップゾーンから覇

竜剣 ドラゴ刃を装備つくああー!!」

残りライフ2↓3↓2

ドラゴ「剣!」

ドラゴ刃を装備したのだがブラスター・ジョーカーから身体に雷が流れたような痛みがした。

剣「またかー!!」

剣の体から黒い霧が溢れ出し再び身体まで黒く染まった。

剣「あれ？今回は意識奪おうとはしないんだなまあいつか。」

アタックフェイズ

剣「……俺で攻撃攻撃時レフトのガングナーを呪縛。」

ガングナーの周りに黒い輪がガングナーを拘束した。

タギル「何!?何でお前がカオスブレイカーの力を？」

剣「……これが敵も味方も全てを飲み込んだ力だ!!更に、デストロイヤーを破壊。」

タギル「ソウルガード」

残りソウル2枚

剣「ドラゴで、デストロイヤーを攻撃!!」

タギル「ソウルガード」

残りソウル1枚

剣「ドラゴ効果デッキトップをドロップゾーンに送ってコール出来る。トップは覇竜 サウザントレイピアをレフトにコール。サウザントレイピアの効果でゲージ2枚追加。」

覇竜 サウザントレイピア

サイズ1

攻撃5000 防御0 打撃2

剣「俺のドラゴ刃とサウザントレイピアで連携攻撃。」

タギル「ソウルガード。」

残りソウル0

剣「……ドラゴ刃の効果デッキトップをドロップゾーンに送りそれが霸王軍ならコール出来る。デッキトップは覇竜拳 豪炎だ。……ターンエンド。」

手札4 ゲージ3 ライフ1

タギル「俺のターンドロージャーアンドロー。」

アタックフェイズ

タギル「デストロイヤー楽にしてやれ。」

剣「うわぁー!!」

ライフ0

「けっ、この程度か。まさか自分の本当の力すら満足に操れないとはな。」

剣「何!?!どういう意味だ。」

デストロイヤー「あの姿には隠されている真の力があるんだよ。我

らは攻撃を受けた際にその力のほんの一部を受けた。」

剣「一体どんな力があつたとしても使いこなすことが出来ない。一体どうしたらいいんだ？」

デストロイヤー「やはりその力を使うには覇龍剣を手に入れるしかないのか？」

ドラゴ「おそらくあの鎧には覇龍剣の力も混ざっていた。色々な物が混じって安定しないかもな。」

剣「でも、このままじゃ混沌魔龍が復活する時に俺は真の力で戦えないかもしれない。」

デストロイヤー「いや、可能性はある。」

剣「何!?!」

デストロイヤー「先程攻撃を食らった時覇龍剣の力の一部を感じたんだ。つまりそれはあのカードには覇龍剣が力が備わっていたつまり覇龍剣は真の力を解放するためのトリガーになっていると考えて間違い無いだろう。」

剣「でも覇龍剣の居場所は」

タギル「それなら知っている。」

剣「何!?!」

タギル「それはドラゴンワールドのガルガンチュアの遺跡だ。」

ドラゴンワールド 覇龍の復活

ドラゴンワールド

ガルガンチュアの遺跡

剣「ここに覇龍剣があるのか？」

「おそろくな」

「それで何処にあるの？その覇龍剣は？」

「多分あそこだ。」

ウィザードが指をさすとそこには普段よりも黒く禍々しいゲートが発生していた。

剣「あれは？」

ファントム「あれは混沌竜様への道だよ。」

「!!」

剣「ファントム!!」

ファントム「あれは混沌魔龍様の力の一部だよ。さあて我々の目的を果たさせてもらうぞ。」

こいつまさか覇龍剣が狙いか。

剣「そうはさせるかフィールド展開。」

「オープン・ザ・フラッグ」

ファントム「ドラゴンワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

剣「霸王 降臨!!」

ファントム「私のターンドロージャーリアンドローゲージを払いガルガンチュア・ドラゴンをレフトバディコール。」

アタックフェイズ

ファントム「ガルガンチュア・ドラゴンでファイターを攻撃。」

剣「くっ。」

残りライフ7

ファントム「G・e・v・o発動。手札からガルガンチュア・ドラゴン

モード「ㄥㄥ!!」

ガルガンチュア・ドラゴンモード「ㄥ」

ドラゴンワールド／プラネットワールド

属性 神龍族／ドラゴット

攻撃力13000 防御力5000 打撃力3

(コールドコスト)ゲージ2を払い、君の山札の上から1枚をこのカードの下に置く。

■このカードが登場したとき、相手の場のカードを1枚を裏返しにする。

■このカードが攻撃した時君の場のモンスターを1枚を裏返しにしてもよい。そうしたらこのカードの攻撃力+3000、打撃力+1してこのカードをスタンドする。この効果は1ターンに2回しか使えない。(裏返しにしたカードは持ち主のターンの終わりにもとに戻す。)

「ソウルガード」

黒く染まり両手両足に黒い輪がついたガルガンチュア・ドラゴンが現れた。

剣「俺のターンドロージャーリアンドローゲージ2を払い変身!!

断罪の覇龍騎士団 ブラスタター・ジョーカー」

断罪の覇龍騎士団 ブラスタター・ジョーカー

攻撃力 防御力

剣「俺は更に、プロミネンスバーストをレフトに覇竜 サウザントレイピアをライトにコールド。」

剣「更に手札のアームズ・エイドをブラスタター・ジョーカーをソウルに入れる。これによりブラスタター・ジョーカーの打撃力+1」

アタックフェイズ

剣「頼むプロミネンスバーストでファイターを攻撃。」

ファントム「……」

残りライフ11↓9

剣「プロミネンスバーストの効果発動プロミネンスバーストを俺のソウルに入ることによって打撃力+2更にアームズ・エイドの効果で打撃力

＋1これで打撃力5を喰らえー!!」

ファントム「キヤスト、ドラゴンシールド 緑竜の盾攻撃を無効にしてライフ＋3。」

残りライフ9↓12

剣「くっ、防がれたか。だけど2回攻撃だ。」

ファントム「くっ。」

残りライフ12↓7

剣「サウザントレイピアで攻撃。」

ファントム「ハハハ」

残りライフ7↓5

剣「ターンエンド」

ライフ6 ゲージ1 手札5

ファントム「俺のターンドロージャーアンドドロレフトにガラクーンとセンターにガルキヤットをコール。ガルキヤットの効果でチャージアンドドロ」

アタックフェイズ

ファントム「ガルキヤット、ガラクーン、ガルガンチュアダラゴンモードヲ、3体の連携攻撃を喰らえ。」

剣「キヤスト、ドラゴンシールド 覇龍の盾攻撃を無効にして2枚のゲージを追加。」

ファントム「モード ヽヲ」の効果ガルキヤットを呪縛してモードリバースを攻撃力＋3000打撃力＋1してこのカードをスタンドする。」

剣「なんだよその無茶苦茶な能力」

ファントム「モード ヽヲ」でファイターを攻撃。」

剣「ぐはあー!!」

残りライフ6↓3

ファントム「モード ヽヲ」の効果ガラクーンを裏返してこのカードをスタンドして攻撃力＋3000打撃力＋1して攻撃。」

剣「ゲージ1払い、マツハブレイバーをセンターにコールしてその

攻撃対象を変更する。」

ファントム「くっ、耐えたかまあいい。ターンエンド」

残りライフ5 ゲージ3 手札4

剣「俺のターンドロージャージアンドローゲージ2を払い、絆の霸王龍 ドラゴニック・ユナイテッド・カイザーの効果でデッキからアイテムを1枚を装備出来る。俺が装備するのは覇龍剣!!」

ファントム「何を言っているんだ？お前の覇龍剣は混沌魔龍様によつて消滅したはずだ。」

剣「そうじゃないんだよ。感じるんだよあいつの思いをな。さあ来い覇龍剣を装備だー!!」

ドラゴ「我らの声に答えよ。我らのリーダーよ。」

ドラゴが現れその効果で禍々しいゲートから覇龍剣が飛んできた。そしてそのまま装備した。

覇龍剣「待っていたぞ剣!!」

剣「俺もだ覇龍剣!!」

ファントム「なんでだ、なんで覇龍剣を装備できるお前はブラスタター・ジョーカーに変身しているのになんでだよ。」

剣「ブラスタター・ジョーカーはアイテムを2枚装備出来るんだよ。そしてこの2枚は真の力があんだよ。」

黒き鎧を纏い更に覇龍剣が持った時になる龍の姿になった。

剣「これが2つの力を混ぜた俺の新たな力だ。」

覇龍剣「剣、この時を待っていたぞ。」

剣「覇龍剣!!お前をずっと探してたんだぞ。さっさと働いてもらうぜ。」

覇龍剣「もちろんだ。さあ行くぞ。」

剣「ああ。」

アタックフェイズ

剣「まずは、俺がセンターのガルラクーンを攻撃。」
ガルラクーン破壊

剣「俺と覇龍剣の2体で連携攻撃。」

フアントム「キャスト、ドラゴット・クリスタルドロップゾーンに（ドラゴット）があるならこのターン自分のライフが0になるなら1になる。」

ライフ0↓1

剣「だつたらお前のドラゴットを破壊し続ける。俺と覇龍剣で一回ずつガルガンチュア・ドラゴンを攻撃！」

ガルガンチュア・ドラゴンモード””

残りソウル0枚

剣「ファイナルフェイズ、キャスト、霸王秘伝 アブソリユート・ブレイク!!お前の場のモンスター全て裏返す。」

フアントム「何!?!」

ガルキャットとガルガンチュア・ドラゴンモード””の動きを封じるための黒輪がついた。

霸王秘伝 アブソリユート・ブレイク

プラネットワールド

必殺技

属性 霸王軍

■君の場にブラスター・ジョーカーと名のつくモンスターがいる時に使うことができる。

（使用コスト（ゲージ2払う。））

■相手の場のモンスターを全て裏返す。その後君の場に霸王軍のアイテムが2枚あるなら相手のバディゾーンのカードを1枚ドロップゾーンに送る。

フアントム「皮肉なもんだな。俺のせいでお前を強化してしまいかもその力で俺をここまで追い詰められたんだからな。だがな。たとえこのファイトに負けてもガルガンチュア・ドラゴンは解放されない。」

剣「何!?!それはどういう意味だ!?!」

フアントム「カオスブレイカーのモンスターを操る力あれをガルガンチュア・ドラゴンの体に馴染ませ私と強制的に繋がりを与えること

でたとえ負けたとしても解放されることは無い。」

剣「ふっ、その話が本当なら確かにそうだな。だけどこれはバディファイト、ならこうする事ができる。ハァー!!」

剣はそのまま覇龍剣をバディゾーンのカードを切りつけたそのままドロップゾーンに送られた。

フロントム「はぁー!!俺のガルガンチュア・ドラゴンがー!!」

剣「お前のカードじゃあねえだろ。それにこれでお前とバディとの繋がりを断ち切った。」

フロントム「何!?!それじゃあ。」

剣「そうだ。これで俺が負けたとしてもお前のもとにガルガンチュア・ドラゴンは戻らない。」

フロントム「そんなのありかよ。」

カナミ「……あれって本来敵キャラが使いそうなカードだよね。」

「確かにバディとの絆を断ち切る力なんていくら何でも酷すぎる。」

ウィザード「あれが我々のリーダーの手に入れた新しい力絆を司る霸王龍だからこそ出来る力ってわけか。」

フロントム「くっ、俺のターンドロージャンドローくっ、ターンエンド。だが俺のガルがとガルキャットの呪縛は解放される。」

剣「それがどうした俺のターンドロージャンドローそのままアタックフェイズで俺と、」

覇龍剣「我で」

「連携攻撃!!」

フロントム「ぐわぁー!!」

ライフ0

フロントム「ま、まさか次元の隙間から覇龍剣を持ってくるだなんてな。まあいい、これでいい。なぜならあの空間にエネルギーを与えるためなんだよ。」

剣「何!?!」

ゲートを見ると中から何かが出て来ようとしていた。

ウィザード「あれは一体？」

ファントム「ハハハ、あれこそが我々の王の力の一部そしてお前たちの世界を破壊しつくす為の兵器だ。」

イクサ「そんな危険な物をお前達に渡す訳が無いだろうが!!」

ファントム「もう遅い。」

イクサがファントムを止めようとしたがファントムはゲートを開き、謎の存在をその中にいれてそのままゲートの中に入っていった。

剣「待て!!クソ!行っちゃったか。」

カナミ「これからどうするの?」

「あいつを追うぞ。」

ドラゴ「待て敵の居場所を掴めて無いというのにどうやって探すというんだ。」

剣「一度俺達の世界へ戻って体制を立て直すしかないだろうな。」

ドラゴ「だろうな。」

ガルガンチュア・ドラゴン「感謝するぞ霸王龍たちよ。」

剣「お前はガルガンチュア・ドラゴン!!俺が言うのもあれだけど無事だったのか!?!」

ガルガンチュア・ドラゴン「まあな。我があの程度で死ぬわけがない。それはそうとお前達に頼みがある。」

剣「何だよ。頼みって。」

ガルガンチュア・ドラゴン「我の力を霸王軍にしてはくれぬか?」

剣「なんだって!?!」

ガルガンチュア・ドラゴン「我は操られていたとはいえお前達を襲った。その償いをさせてほしいのだ。」

剣「分かった。一緒に戦おう。」

ガルガンチュア・ドラゴン「おう。」

フアントム「これを。」

アンノウン「やはりあったか。」

フアントム「そのせいで奴らの手に覇龍剣が戻ってしまった。」

アンノウン「構わない。そのうち奴らの手に戻ってしまうのだから。それにこれさえ手に入れば我々の勝利が確定する。この混沌魔獣たちがな。」

混沌魔獣編 集結した仲間達

剣「いやー久しぶりだな。この世界に戻ってきたよ。」

ドラゴ「そうだな。だがじつとして時間はないぞ。混沌魔龍が現れるまであと1週間しかないのだからな。」

剣「分かっている。」

カナミ「それじゃあ私達は行くところあるからここでお別れ。それじゃあ1週間後にね」

剣「ああ、それじゃあな。」

タギル「それまでにせいぜいファイトの腕を磨くんだな。」

剣「ああ言われなくても分かっている。」

タギル「フツ、ならいい。」

そうして二人は何処かに行った。

暫くして龍二さんが迎えに来てくれた。

剣「龍二さんお久しぶりです。」

龍二「久しぶりというほどあつてないか微妙だがな。それじゃあ行こうか。」

剣「行くってどこに？」

龍二「決戦前の景気つけだよ。」

龍二さんに連れて来られたのはバディポリスの飲み会の会場だった。

そこに行くくとチームリバイバルを始め、テレビやラジオで取り上げられる大会で優勝している人や、バディポリスの方、バディファイト研究会のメンバーまでいた。

龍二「ここには混沌魔龍が現れると思われる場所で迎撃にあたるメンバーの顔合わせをやっているんだよ。ここ以外にもあちこちに会場があつてみんな戦いに備えて準備してるよ。」

剣「へえー。」

龍二と剣が話しているとシーカーズが全員で剣の所まで来た。

シーカーズ「剣おかえりー!!」

剣「おうただいま。」

和人「それでちゃんと取り戻せたんだろうな。覇龍剣を。」

剣「もちろんだ。」

そう言つて覇龍剣のカードをみんなに見せた。

「おおー!!」

カナ「さあて、つるの話は後でね。とりあえずここに大量の料理を食べようよ。」

レイ「あんたは速くご飯食べたいだけでしょ。」

カナ「あ、バレた?」

レイ「……まったく。」

剣「ハハハ、楽しそうだな。というかこの料理市販の物か?それとも誰かが作ったのか?」

和人「それはな、クククツハハハ」

剣「なんだよ。これ何かやばいのか?」

和人「これな、このスタッフと創一が作ったんだよ。」

剣「……マジ?」

和人「マジ。」

創一「まあ大したことは無い。作る人が急遽風邪をひいたようでお助っ人として参加したまでだ。」

剣「……うまい。お前、こつちの方でも食つて行けるんじゃないか?」

創一「……そうだな。この戦いを生き抜くことが出来たらな。」

創一の発言で場の空気が少し氷ついた。

剣「そうだな。必ず生き抜くとするよ。あ、遙か今ブラスター・ダーク持つてるか?」

遙か「?一応持つてるけどブラスタター・ダークがどうかしたの?」
剣「実は旅の途中でもう変わってしまったんだけどこのカードがそっくりっておいどこ行くんだよ!!」

剣がブラスタター・ジョーカーのカードをデッキから取り出すとそのまま遙かの方へ飛んで行ってしまった。

遙か「え?あ、ブラスタター・ダークが。」

遙かのデッキからもブラスタター・ダークがデッキから抜けてブラスタター・ジョーカーの方へ向かった。

そしてその2枚がくっついた時2枚が光輝いた。

剣「!!何だよこれ?」

遙か「一体何が起きてるの?」

???'『光と影は一つとなり、そして新たな力が生まれる。』

剣「!!今の声は。」

弱いようなしかしその中に強さも感じる声が聞こえて目を開けてみるとそこには2枚のカードが遙かと剣それぞれが持っていた。

剣「ブラスタター・ブレード!それにブラスタター・ジョーカーまで。分離したのか?」

遙か「こっちはブラスタター・ダークそれにこのカードは?」

和人「なんだ?このカード見たことないな。何々「ドツカーン」ってなんだ?」

遙かと剣が新しいカードを見ていると後ろ何かデカい音が響いた。

龍二「おいなんだ今の光は?敵襲か?」

剣「いえ、カードがってえ?」

龍二「どうした?」

剣「龍二さん何でマテリアルに変身しているんですか?」

そこにはマテリアルに変身した龍二さんがいた。

龍二「い、いや、敵襲かと思つてな。速攻で変身してしまったよ。」

剣「ぷ、ハハハ。」

和人「ククク、だめだろ剣笑っちゃアハハ。」

遙か「そうだよ笑ったら、フフフ」

龍二「お前ら全員笑ってんじやねえか。ったく。」

劍「流石に張り詰めすぎじゃないですか？ちよつと落ち着いてくださいよ。」

劍は話をそらした。

龍二「そうだな。……ちよつと外の空気でも吸ってくるよ。」

ドラゴ「ちよつといい覇龍劍ちよつと話が聞きたい。来てくれないか。」

覇龍劍「……分かった。劍たちは楽しんでいてくれ。」

劍「……分かった。」

そのままカードの状態の覇龍劍とドラゴは会場を後にした。

会場から少し離れた場所

ドラゴ「それで、覇龍劍お前何時までもつんだ？」

覇龍劍「……何の話だ？」

ドラゴ「とぼけなくていい。お前あの時、自分を生贄にして混沌魔龍を封じようとしていたな。」

覇龍劍「ああ。あの状況で混沌魔龍がこの世界に来たら本当に危ないかったからな。」

ドラゴ「そしてお前は次元の隙間に混沌魔龍はゲートに閉じ込められた。その後お前は劍と我らで見つけ、その場にいたファントムを倒しガルガンチュア・ドラゴンを開放してみせた。結果だけ聞けばお前も無事のように聞こえる。だが俺は見逃さなかったぞお前、もうボロボロじゃないか。身体を構成するので精一杯その状態でファイトなんてしたら消滅することだってあり得るだろう。」

ドラゴの衝撃的な発言しかし覇龍劍は反論をしない。

覇龍剣「……誰も気づいてないと思っただんだがな。」
そして覇龍剣が実態化した。

見たらあちこちに傷があり剣の中心にも相当ダメージが行っているように見える。

ドラゴ「いや、霸王龍は全員気づいていると思うぜ。」

覇龍剣「マジか。」

ドラゴ「で、実際どれくらい持つんだ。」

覇龍剣「今は、霸王軍の仲間達の手で少しずつではあるが傷を治してはいるんだがな。とても1週間では完治とは行かないだろうな。」

ドラゴ「……お前死ぬ気か？」

覇龍剣「……いや、そんなつもりは無い。俺にはまだやらなければならぬことがある。」

ドラゴ「…覇龍剣。」

覇龍剣「それに剣達のこれからの未来も見てみたいしな。」

ドラゴ「まあ確かにな。……ってお前おっさんみたいなこと言ってること気づいてるか？」

覇龍剣「まあ人間から見たら数百年生きてるなんておっさん通り越してヨボヨボの爺さんだからな。」

ドラゴ「確かにな。……勝つぞ1週間後必ず生きてあいつらがどんな未来を作っていくのか見ようじゃないか。」

覇龍剣「ああ。」

そうして二人？は空を見上げた。

剣「……やっぱりか。」

龍二「それで？いつまでついてくるんだ？」「解放者」

???「やっぱり気づいてらしたんですね。」

宴会をしている会場から少し離れた駐車場そこに龍二と龍二をつけていた謎の長い金髪女性がいた。

龍二「俺が会場から出てからずっとつけてたな。目的は俺の抹殺か？」

???「まあ、そんなところですね。あなたはバディポリスの中でもかなりの実力者それにわりと早めに潰しといた方がいいと思いませんか。」

龍二「それだけじゃないだろ報告は受けている。混沌魔龍の力が一部がお前達に渡っていることもな。そのテストも兼ねているんだろ？それとそろそろ名乗ってくれないか？名前を呼べなくて困るんだがな。」

???「おっとそれは失礼しました。私はアリスとでも名乗っておきましよう。」

龍二「それで俺を暗殺するつもりか？」

アリス「そんなことはしませんよ。私は貴方とファイトして貴方を倒して見せますよ。」

龍二「言ってるよ。直ぐに倒してやる。フィールド展開。」

龍二がフィールドを展開していつものフィールドが現れた。

アリス「せっかくですからこのカードで飾り付けでもと」

アリスが謎のカードをかざすとフィールドが激変した。

フィールドのあちこちで穴や傷が出来ていた。

アリス「いかがでしょうか。」

龍二「あまり趣味がいいとは言えないけどな。」

アリス「お褒めにあづかり光栄です。」

龍二「褒めてねえよ。それじゃあ始めようか。」

「オープン・ザ・フラッグ!!」

バディポリス「おい、大変だ!!龍二さんが「解放者」とファイトしている!!」

一人のバディポリスが放った言葉が会場に響いた。その場にいた全員が戦慄を覚えた。

剣「場所は!!」

バディポリス「この近くの駐車場、フィールドを貼り周りの被害が出ないようにしているようだが、フィールドの様子がおかしい。あちこちを破壊されてフィールドを維持するのがやつとだ。そのスクリーンにフィールドの映像が出る詳しくはそれを見てくれ。」

バディポリスがそう言うのと近くのスクリーンにファイトの状況が映った。

剣「何だ?このフィールドあちこちが傷やら穴だらけだぞ。」

創一「そこまで激しいファイトなのか!?!」

バディポリス「いや、ファイト開始時相手が何かしたらしい」

カナ「ファイトの状況は互角みたいですね。」

レイ「でも油断出来ないわ。私達は現場に行くわよ。」

カナ「分かった。」

そうして二人は現場に向かった。

剣「まさかこのタイミングで仕掛けてくるとはな。」

和人「想像出来なかった訳じゃないが、まさかこんな堂々とくるとはな。」

創一「!!何だあれは?」

創一はスクリーンに映っている光景に驚いた。そこにはアリス『私のバディの魂を喰らい現れなさい!!混沌魔獣!!』

剣「!!バディを生贄だと!?!」

和人「なんてことを。」

会場のあるところから驚きの声が聞こえてきた。

あたりまえだ。バディを生贄にして現れるカードなんて聞いたことが無い。

そして現れたのは全身を武装した巨大なモンスターが現れフィールドを支配したのであった。

襲撃!!混沌魔獣の咆哮

二人「オープン・ザ・フラッグ」

龍二「ヒーローワールド＋クロスワールド」

ライフ9 ゲージ2 手札6

アリス「デンジャーワールド」

ライフ10 ゲージ2 手札6

龍二「俺のターンドロージャーリアンドドロレフトにレッドラビット、ライトにブルータンクをコールそしてこの2体をソウルに入れてフオマタイプを变身!!」

レッドラビット

攻撃力5000 防御力1000 打撃力1

ブルータンク小队

攻撃力6000 防御力4000 打撃力2

フオマタイプ “ラビットタンク”

サイズ3

攻撃力10000 防御力10000 打撃3

アタックフェイズ

龍二「マテリアルでファイターを攻撃。攻撃時効果相手に2ダメージ!!」

アリス「くっ。キャスト、豪胆逆怒、受けたダメージ分ゲージを追加。」

残りライフ10↓8↓5

龍二「ターンエンド。」

残りライフ9 手札5 ゲージ3

アリス「私のターンドロージャーリアンドドロ、私は破壊獣 デストラクト・テイガーをレフトにデストラクト・イーグルをライトにコール。テイガーの効果でデッキを3枚破壊!!その中にモンスターがあつたのでゲージ1追加。」

破壊獣 デストラクト・ティガー

デンジャーワールド

サイズ1

属性 破壊獣

攻撃力3000 防御力3000 打撃力1

■このカードが登場した時相手のデッキの上から3枚をドロップゾーンに送り、その後ドロップゾーンに送られたカードの中にモンスターカードがあれば君のデッキの上から1枚をゲージに置く。

破壊獣 デストラクト・イーグル

デンジャーワールド

サイズ2

属性 破壊獣

攻撃力4000 防御力1000 打撃力2

「コールコスト」(ゲージ1払う。)

■このカードが登場したとき、君の手札を1枚捨ててもよい。そうしたら相手は手札を1枚選んで捨てる。

黒い身体に身体のおちこちに武器がついたトラが現れ、そのままのデッキを破壊した。

龍二「!!俺のデッキが。」

アリス「更にデストラクト・イーグルの効果手札を1枚捨てて貴方も1枚手札を捨ててください。」

デストラクト・イーグルが翼を羽ばたかせお互いの手札を破壊した。

龍二「手札もか!!」

アリス「それだけじゃないわ。私はゲージ3を払い、場の2体の破壊獣をソウルに入れてセンターにバディコール。現れよ破壊獣 デストラクト・デーモン!!」

ライフ6 ゲージ4 手札2

破壊獣 デストラクト・デーモン

デンジャーワールド

サイズ3

攻撃力20000 防御力8000 打撃力3

属性 破壊獣

コールコスト(ゲージ2を払い、君の場の(破壊獣)を2枚をドロップゾーンに置く。)

■このカードは効果で破壊されない。

■このカードが攻撃した時お互いのデッキの上から5枚をドロップゾーンに送り、その中のモンスター以外のカードの数だけお互いにダメージ1!!更に相手のドロップゾーンのカードが20枚以上の時相手はゲージと手札を1枚ずつドロップゾーンにおいてダメージ2!!

(ソウルガード)

アタックフェイズ

アリス「全てよ全てを破壊するの。デストラクト・デーモンの効果お互いのデッキを5枚破壊。その中のモンスター以外のカードの数だけお互いにダメージを受ける。」

アリスのデッキからドロップゾーンに送られたカード

デストラクト・ベアー

デストラクト・イーグル

デストラクト・イーグル

デストラクト・デーモン

我狼心気功

龍二のデッキからドロップゾーンに送られたカード

グレーガトリング

お前の技は見切った!

ハイパーエナジー!!

レッドラビット

鏡界戦士 キャプテンアンサー アンサークエッション!! ”

デストラクト・デーモンが全身の武装でお互いにダメージを与えた。

龍二「ぐはぁー!!」

残りライフ9↓7↓5

アリス「キャアー!!」

残りライフ6↓4

アリス「ターンエンド。さあ次はあなたのターンよ。」

龍二「……一つ聞きたい。」

龍二「何故お前らは混沌魔龍なんて言う化け物をこの世界に呼び出そうとしてるんだ?」

アリス「簡単よ。私達全員世界によって自分の大切な物を壊された者達の集団なのよ。」

龍二の質問に対してアリスが真剣の表情で話し始める。

アリス「髪の色、目の色、肌の色、文化の違い、更には、どの世界のモンスターか。たったそれだけ。自分と違うだけで差別し、軽蔑しあう。この世界が本当に正しいと本当に思っているの?」

龍二「……………」

アリス「私はその差別のせいでね大事な家族を、弟を殺された。何も悪いことなんかしてないのに。差別が無くなれば私達のような人は無くなる。」

龍二「……………」

アリス「だからこそ世界を一つにしてそういつたことを無くすんだよ。」

龍二「そんなことが出来るのか?」

アリス「可能よ。だからこそ私達は負ける訳がない。」

龍二「俺だってそんなことさせるわけにはいかない。俺のいや、俺達の大切な物を守るためにな。」

龍二「俺のターンドロージャーアンドドロージャー払い、ハ

ザードブレスを発動。」

ハザードブレス

ヒーローワールド

アイテム

攻撃力0 防御力0 打撃力0

属性 マテリアルソルジャー

装備コスト(ゲージ1を払う。)

■このカードは君の場

■君の場のマテリアルソルジャーは攻撃力+3000防御力3000打撃力+1

■君の場のマテリアルソルジャーが相手の場のモンスターを破壊した時、君の場のマテリアルソルジャーを1枚選んでスタンドする。

赤と青のフレームが真っ黒に染まり戦闘力が底上げされた。

アタックフェイズ

龍二「行くぞ!!俺の攻撃!!攻撃時効果発動お前に2ダメージ!!」

アリス「イヤー」

残りライフ5↓3

龍二「ハザードブレスの効果フオマティブをスタンド再度攻撃そしてラビットタングの効果で2ダメージ!!」

アリス「キャスト!!闘気四方陣攻撃を無効する。」

残りライフ1

アリス「私のターンドロージャンドドロローそしてドロップゾーンの全ての破壊獣をソウルに入れてゲージ3を払い、センターにコール破壊獣 デストラクト・キメラテック・ドラゴン」

破壊獣 デストラクト・キメラテック・ドラゴン

デンジャーワールド

サイズ3

攻撃力0 防御力0 打撃力2

コールコスト(ゲージ3を払い、ドロップゾーンの全ての(破壊獣)をソウルに入れる。)

■このカードの能力は無効化されない。

■このカードの攻撃力ソウルの数×3000

■このカードの攻撃時このカードのソウルを3枚デッキの下に下
に置いて良いそうしたらこのカードをスタンドする。その後相手
の場のカード1枚を破壊して相手のデッキの上からから3枚をド
ロップゾーンに送る。

現れたのは10の顔が出た機械仕掛けの龍だ。

アリス「伝説のヤマタノオロチみたいだな。」

龍二「……言われてみれば確かにそうね。まあいい。」

アタックフェイズ

アリス「キメラテック・デストラクト・ドラゴンでファイターを攻
撃!!攻撃時効果でソウルを3枚デッキに戻してスタンドしてあんだ
のアイテムを破壊。」

デストラクト・ドラゴンの頭が3つ消え去り、別の3つが攻撃した。

龍二「ソウルガード」

フォマティブ

残りソウル1枚

残りライフ5↓3

アリス「もう一度よ。」

龍二「ソウルガード」

残りソウル0枚

残りライフ3↓1

アリス「もう一度!!」

龍二「キャスト、お前の技は見切った!」

フオマタイプ破壊

アリス「だったらこれでとどめた。」

龍二「いったはずだ。キャストお前の技は見切った。」
ハザードブレス破壊

アリス「ターンエンド。どう？私の破壊戦略お互いの全てを破壊するまで止まらない破壊獣責めを味わいな」

龍二「だったら俺は破壊されたものから新しい物を作るまでだ。」

龍二「俺のターンドロージャーアンドロー、レフトにライトブルーロケット、ライトにホワイトパンダをコール。そしてフオマタイプの効果発動ドロップゾーンのレッドラビット、ブルータンクを手札に加える。そして、パンダとロケットを素材にしてフオマタイプに変身。」

機械仕掛けのパンダとロケットが合体して一つの姿になった。

ホワイトパンダ

ヒーローワールド

サイズ1

攻撃力4000 防御力1000 打撃力1

属性 マテリアルソルジャー

■このカードの打撃力+1する

フオマタイプパンダロケット

攻撃力10000 防御力 打撃力4

■君の場にこのカード以外にマテリアルソルジャーが2枚以上ある時このカードをデッキに戻し、ドロップゾーンから「ライトブルーロケット」と「ホワイトパンダ」を手札に加える

「大貫通」（このカードがセンターのモンスターを破壊した時このカードの打撃力の2倍のダメージを相手に与える。）

アタックフェイズ

龍二「俺の攻撃は大貫通を持っている!!」

アリス「大貫通？」

龍二「この攻撃でセンターを破壊した時このカードの打撃力の2倍のダメージを与えるんだよ。」

アリス「何ですって!？」

ロケツトが噴出してパンダの爪でデストラクト・デーモンを切り裂いた。

アリス「キャスト、デストラクト・ポーション私のカメラテック・デストラクト・ドラゴンを破壊してその分ライフを回復する。」

残りライフ1↓4

デストラクト・ポーション

デンジャーワールド

使用コスト（君の場の（破壊獣）を1枚破壊する）

■破壊したカードのサイズ分君のデッキの上からドロップゾーンに置き、置いた枚数君のライフをプラス1する。

龍二「……ターンエンド」

アリス「ここまでね。私のターン、私は手札のこのカードをゲージ2を払い、私の相棒、バディを生贄にしてセンターに混沌コール。虎を司る混沌魔獣 カオス・ファング・タイガー!!」

混沌魔虎 カオス・ファング・タイガー

攻撃力25000 防御力25000 打撃力3

デンジャーワールド

属性 混沌魔獣

?このカードはデッキに1枚しかいれることは出来ず、このカードの能力以外でコール出来ない。

「混沌コール」（君のターンの初めに君のバディゾーンのカードがレストしているとき、同じ名前のカードを捨ててゲージ2を払い、バディゾーンのカードを全てソウルに入れてこのカードをセンターにコール出来る。）

「?このカードが登場した時か、君のターンの初めにお互い手札と場のカードを全て破壊する。」

「?君のターンの終わりにこのカードのソウルを1枚ドロップゾーンに置いて良い。置かなければこのカードを破壊する。」

「?このカードが場を離れた時君の場と手札のカードを全てドロップゾーンに置き、君のライフは1となる。」

フィールドの上にゲートが現れその中にバディであるデストラクト・デーモンが吸い込まれていった。

龍二「デストラクト・デーモンが一体どういうことだ?」

アリス「こういうことよ。」

しばらくするとゲートの中から右腕に機械仕掛けの爪左手には腕そのものが銃の武装した黒い2即歩行の虎の様な姿のモンスターが現れた。

龍二「な、なんだ!?この禍々しいオーラを放ったモンスターは?それにバディゾーンのカードを生贄にした!?こんなカード見たことないぞ?」

アリス「これが混沌魔獣世界を破壊する混沌魔龍の眷属よ。そしてその力は最強よ。効果発動お互いの場と手札を全て破壊するわ。滅びなさい、ワールドデストロイ!!」

龍二「ギャオー!!」

アリス「く、何だこのバカデカイ声は!!」

カオス・フアング・タイガーはその咆哮でお互いの手札とフィールドのカードを全て破壊した。

更にフィールドのあちこちが歪んで崩壊してしまった。

龍二「さ、叫んだだけでこんなことになってしまっただなんて。」

アリス「これが私の混沌魔獣素晴らしいこれがあれば本当に世界なんて簡単に破壊することが出来るわ。さあてドロージャージアンドドロージャージアング・タイガーで止めを指しなさい。」

龍二「ぐわあー!!」

ライフ0

勝者 アリス

ファイトの決着がつき

龍二「ファイトが終わったのにモンスターの力が持ち続けてるだど!?」

アリス「ファイトに負けたものには罰を受けてもらおうわ。ジャツジメント!!」

カオス・フアング・タイガーが光だし辺り一面が光に包まれた。

カナ「これは!?!」

レイ「一体何があったていうの。」

そこにあつたら謎のモンスターを中心に辺りを崩壊していた。

しかもただの崩壊ではない。

ここには本来ホテルがあつたのだしかし崩壊している建物はそれとは明らかに違う。

アリス「これが私達の力よ。」

カナ「あんたは、龍二さんとファイトしていたやつ。」

レイ「一体どうやったのよ。」

アリス「それはあんたらが知る必要の無い。そこで転がっている怪我人と共に滅びなさい。」

カオス・フアング・タイガーがその爪で龍二を貫こうとする。

カナ「させない!!」

レイ「カナ!!待ちなさい。」

龍二「カナ!!駄目だ。逃げろ。」

カナ「させない。この人は殺させない。この人はこの戦いに必要なんだから。」

レイ「カナアア!!」

龍二「やめろー!!」

カオス・フアング・タイガーが二人を貫いた

かに見えた。何かが攻撃を止めた。

レイ「カナ、龍二あれは一体!!」

龍二「何かが攻撃を防いだのか。」

カナ「あなたは?」

???「見事なり、その勇気まさしく我の主にあつた。これを受け取れ!」

謎の光がカナとレイの体の中に入っていき、二人が一つになった。

カナ+レイ「これは?新しい力!!」

アリス「どんな力を手に入れようと無駄よ。やれ!!カオス・フアング・タイガー!!」

の指示を受けもう一度攻撃しようとしたが突然光だしカードに戻った。

アリス「くっ、時間切れか。使えないわね。まあいいわ目的は達成したあとは帰るだけね。」

カナ+レイ「待ちなさい!!」

アリス「待つわけないわよ。さらば。」

龍二「くっ、逃げられたか。」

カナ+レイ「次は私達が必ず倒す。」

デートの誘い

剣「それじゃあ状況を整理すると、竜司さんはしばらくの間病院で安静にしなければいけない。」

カナ「かなりひどい状態だった。もしあれを食らっていたらもう……」

剣「それを防いだ勇気の霸王龍は？」

レイ「今カナナさんに検査と調整をしてもらっている。何年もカードのままだったから問題がないかどうか念のためね。」

創一「問題はあの混沌魔獣だ。バディの魂を生け贄にして強力な力で攻撃を仕掛けてくる。アレの対策を考えないといけないな。」

全員が龍二さんのファイトを思い出していた。

手札も場も全てを破壊され、その上で圧倒的な力を見せつけられたのだ。それは対策を考えようだろう。

剣「ブラスター・ジョーカーの力で絆を断ち切れるけどあまり効果はないだろうな。」

和人「混沌魔獣対策として防御魔法を温存しておくか、速攻で決着をつけるしかないな。」

剣「まあそれは各自で対策してもらおうとして、それでな、これからの予定んだけど明日はそれぞれ好きにしていればいいそうだ。」

「……は？」

剣の突然の休み宣言により、その場の空気が固まった。

創一「どういうことだ。この非常時に俺たちは何もできないのか？」

和人「そうだぜ。俺たちだって何かやれることがあるはずだ。いきなり休みにするって言ったてき。」

剣「落ち着け、本当に休みにするんじゃない。お前たちに町のパトロールをしてきてほしんだよ。」

遙か「パトロール？」

剣「ああ、今回の事件で奴らはどこでもあの混沌魔獣を出して暴れることができる可能性が浮上した。それにともない町の警戒レベル

を引き上げることにしたんだ。だけどその準備に丸1日要するみたいでその間ファイターは全員各地を回り解放者を探しだす。」

カナ「見つけたら？」

レイ「それは近くのファイターを集めて集団でたたく。これ以上被害を拡大させないための措置でしょ。」

どうやらレイは事前に話を聞かされていたようだ。

剣「あ、そうだ、これを。」

創一「ん？これは？」

剣「近くの映画館のペアチケット、なんかもらったからお前らにやる。じゃあな。」

そう言っただどこかに向かった。

和人「え？ちよつとどこいくんだよ。」

遙か「……これ明日デートしてこいってこと？」

「！！！！」

和人「あいつこんな気の利いた事できたんだな。」

遙か「ちよつと意外。」

創一「あいつはどうする気なんだろう。」

カナ「まあ、何とかするでしょう。」

レイ「(まあ最後の戦いの前で二人だけの時間を過ごさせてあげようという気の使ったんでしょうね。)」

ドラン「俺たちは剣のところに向かうわ。」

和人「え？警備なんだから一緒にいたほうがいいんじゃないか。」

ドラン「いや、そりや確かにそうだなまああれだ少し離れているからなんかあつたらすぐ駆けつけるからまああれだゆつくりしている。」

ダリルベルク「そうだな警備なら我々でやってるから楽しんでこい。」

レイ「ダリルベルクがまともなこと言ってる。」

ダリルベルク「なんだと!?それはどういう意味だ。」

ドラン「そのままの意味だ。」

ダリルベルク「何を言う我はただ割れの正統性を証明するために証

言しているだけだ。大体我だけデツキの初動にしか使われな
いんだぞ。お前たちは序盤から終盤までずっと活躍できるんだろ。それ
で、」

ドラム「どうでもいいから要するにお前は何が言いたいんだ？」

ダリルベルク「われの出番を増やせ!!」

「いつもと言ってること変わんねえじゃねえか!!」

ダリルベルクがいつものようにボコられるのであった。

「……デートか。」

カナ「ねえ、レイ明日何着ていけばいいと思う？」

レイ「なんでもいいと思うけどもう好きにして。」

カナ「そんなわけにはいかないでしょうが!!」

その夜、カナとレイは明日着ていく服について話していた。

「やっぱりこつちかなそれともこれかな、いややっぱりこつちかな、
ああ決まらない。」

レイ「普段と同じでいいんじゃないの？」

カナ「そりやあそうかもしれないけどさ、まあたまには違う服装も
いいかなってさいややっぱりいつも通りの服装でもいいかな。」

レイ「もう好きにして私はこれをやってるから。」

そうやってレイはパソコンに向かっていたそこにはシミレーショ
ンのようなのが出ていた。

カナ「なにそれ？」

レイ「前に話したダブルブレイブがついに完成するから最後の調整
してるのよ。まあ明日には使えるようになると思う。」

そうやってまたパソコンに向かっていた。

カナ「」

またカナは服選びに夢中になったのだった。

ダリルベルク「遙か、早く寝たほうがいいんじゃないか。明日は、」
遙か「わかってるんだけどちよつとこれをね。」

遙かはデツキを見ていた。

そこには今まで使ってなかったカードもあった。

ダリルベルク「この局面でデツキを組みなおすのか？」

遙か「私にはこれがある。」

そこには剣から受け取ったカードそれをサポートするカードを持っていた。

ダリルベルク「そうか、ならばこのカードを使うといい。」

遙か「ん？なにこれってえ!!」

ダリルベルクは遙かにあるカードを渡した。

ダリルベルク「このカードは我のとっておきだ。」

遙か「こんなのいつの間に。」

ダリルベルク「それは我の切り札だ。長い間力を貯めた結果だ。」

遙か「そうなの、ありがとう。大事に使うね。」

ダリルベルク「ああ我はおまえのバディだ共にこの戦争を生き残ろうぞ。」

遙か「うん。」

和人「やつべえ寝坊した。なんで起こしてくれなかったんだよ、ドラん!!」

ドラん「うるせえ！俺だってそれどころじゃなかったんだよ。」

和人「嘘つけ、お前基本的に暇人だろうが。」

和人は走っていた理由は寝坊してデートに遅れそうになっているのだ。

おまけにドラんも何かしていたようで時間になっているのに気づかなかったようだ。

ドラん「嘘じゃねえよ。なら後でお前のデツキを見てみるよ。驚く

ぜ。(未来からの干渉があるだなんてな。)

和人「時間に間に合って遙かを怒られなかったらな。」

ドラン「いや、もう時間になってるぞ。」

和人「は？」

和人は自分の腕時計を見ると約束の時間になったいた。

遙か「……それで、なんで遅れたの？」

当然和人は遅刻した罰として集合場所近くのカフェで待っていた遙かの飲みものを代を払わされたのだった。

和人「それは、「どうせ寝坊したとかそんな感じでしょ。」…はいその通りです。」

遙か「……信じられない。」

和人「……はい申し訳ございません。」

遙か「……早く映画館に行くよ。上映時間に間に合わない。」

和人「ありがとう。そういうえば何見るんだ？」

遙か「最近話題のホラーサスペンス。2時間半の超大作」

和人「…俺、精神持つかな。」

遙か「…あ、和人遅れたんだから今日全部おごりね」

和人「……」

和人の目が死んだ瞬間だった。

ダリルベルク「流石にかわいそうだな。」

遠くで見ていたダリルベルクが和人に同情していた。

遙か「……楽しかった。」

和人「そ、それはようございました。」

遙か「？和人は楽しくなかったの？」

和人「いや、まあ楽しかったんだがな。やっぱり監視されているのが気になってな。」

遙か「やっぱりさつきから変な気配を感じていたんだよね。」

和人「ということ……おい、そこに隠れてるやつ出てこい。」

和人がそういうと突然フィールドが展開された。

「!?!」

「???」やはりばれていたか。あまり姿を見せたくないのだがな。」

声をしたほうを見ると忍者の恰好をした男がいた。

和人「お前は、解放者か?」

「???」いかにも俺は解放者の一人だ。」

遥か「……名乗りなさいよ。」

「???」俺はシノビ名前を名乗るなどあり得ない。本来なら暗殺をなりあいとするのだがお前たちにきずかれるとはな。しょうがないフアイトで倒してやる。」

和人「いや物語的にそうしないとまずいだろ。」

シノビ「いやそこでメタ発言をするな。」

遥か「ここは結構シリアスな場面なんだから。」

和人「そうだったな悪い。」

遥か「いいんだよ。さっさとあいつを倒してデートの続きやろ。」

和人「ああ。」

シノビ「おーい、おれを忘れてイチャイチャするんじゃないよ。」

「イチャイチャしてないよ(ねえよ。)」

ダリルベルク「いやバリバリイチャついてたぞ。」

ドラン「まったくだ。」

和人「おまえらどっちの味方なんだよ。」

シノビ「まあいい二人まとめて相手をしてやる。」

和人「やってやるよ。「待って」遥か?」

遥か「こいつは私一人でやる。」

和人「遥か何を言っているんだ!?!こいつは解放者の一人、だったら二人で」

ダリルベルク「大丈夫だ。」

和人「ダリルベルクまで何言っているのか分かっているのか!?!」

ダリルベルク「分かっている。けどなデート邪魔されてマジギレしててな。」

和人「ああー。わかった任せろ。遥か絶対勝てよ。」

遙か「分かってる。」

シノビ「我が忍竜デッキの力見せてやろうぞ。」

「オープン・ザ・フラッグ!!」

黒き騎士の祝福

「オーブン・the・フラッグ!!」

遙か「ダークネス・ドラゴンワールド」

シノビ「カタナワールド」

遙か「私のターンドロ、チャージアンドローセンターにバディコールCダリルベルク効果でデッキから3枚見て1枚を手札に残りは捨てる。」

ダリルベルク「いきなりの出番感謝しよう。」

遙か「私はブラスター・ダークに変身。」

アタックフェイズ

遙か「ダリルベルク、攻撃。」

シノビ「くっ。」

残りライフ10↓8

遙か「これでターンエンド。」

ライフ10 手札7 ゲージ1

シノビ「私のターンドロチャージアンドドロ、キャスト、忍竜
召喚術デッキトップ3枚落としてデッキから忍竜 シラヌイを手
札に加える。そしてそのままセンターにバディコール忍竜 シラヌ
イ!!」

忍竜 召喚術

カタナワールド

魔法

属性 忍法

使用コスト（君のデッキの上から3枚をドロップゾーンに送る。）

■君のデッキから（忍竜 シラヌイ）を1枚手札に加える。

忍竜 シラヌイ

カタナワールド

属性 忍竜

サイズ3

攻撃力10000 防御力6000 打撃力2

(コールコスト)ゲージ3を払う。

■このカードは相手の効果で破壊されない。

■このカードが登場した時、デッキの上から2枚をドロップゾーンに送り、その後ドロップゾーンの忍竜と名の付くカードを2枚を裏向きにして(忍竜 シラヌイ)サイズ0攻撃力6000防御力6000打撃力2のモンスターとしてコールする。

■このカードが場を離れる代わりに君の場のカード1枚をドロップゾーンに送る。

シノビ「忍竜 シラヌイの効果デッキから2枚をドロップゾーンに送り、ドロップゾーンの忍竜を2枚シラヌイの影武者としてコールする。」

忍竜 シラヌイ

攻撃力10000 防御力6000 打撃力2

シラヌイ(影武者)

攻撃力6000 防御力6000 打撃力2

アタックフェイズ

シノビ「シラヌイ(影武者)でダリルベルクを攻撃。」

ダリルベルク「我の出番はここまでか。」

ダリルベルク破壊。

シノビ「2体のシラヌイでファイターを連携攻撃。」

遙か「キャスト、ドラゴンシールド 黒竜の盾ダメージを0にしてライフ+1」

残りライフ11

シノビ「見事、だがまだだ。キャスト、忍竜 反転の術、影武者をドロップゾーンに送り、それが忍竜を含むカードならコールコストを支払わずにコールできる。現れる忍竜 シラヌイ。」

忍竜 反転の術

カタナワールド

属性 忍竜

君の場の裏向きのカードを1枚をドロップゾーンに送る。その後忍竜と名の付くモンスターならコストを払わずにコールする。違ったらそのままドロップゾーンに送る。忍竜 反転の術は1ターンに1度しか使えない。

忍竜 シラヌイ

攻撃力10000 防御力6000 打撃力2

シノビ「さらに効果で影武者をもう2体コール。もう一度最初からだ。」

シラヌイ（影武者）

攻撃力6000 防御力6000 打撃力2

和人「さすがはシノビ分身の術は得意というわけか。」

ドラク「関心している場合か。」

シノビ「シラヌイ、影武者も全員で連携攻撃。」

遙か「くっ、がはあ、きや」

残りライフ4

遙か「私のターンドロージャーリアンドドロ、私は手札から煉獄騎士団を束ねし者 ロード・デイミオスをレフトに煉獄騎士団 ニードルクロー・ドラゴンをライトにコール。」

シノビ「今度は煉獄騎士団か。」

アタックフェイズ

遙か「デイミオスソードでセンターのモンスターに攻撃」

シノビ「シラヌイの効果場を離れる代わりに我が分身を生贄に場に残る、忍法身代わりの術。」

デイミオスがシラヌイに切りかかるが、影武者モンスターが攻撃をみがわりとなった。

遙か「だったらデイミオスの効果場のニードルクローを破壊して自身をスタンド。ニードルクローは効果で手札に。もう一度攻撃だ。」

シノビ「ならばもう一度身代わりの術。」

またしても影武者によって攻撃を阻まれる

遙か「プラスター・ダークの攻撃」

シノビ「だったらキャスト、身代わりの術攻撃の無効にする。」

和人「今度は魔法による攻撃の無効化かよ」

今度はシラヌイの攻撃をかわすことで無効にした。

遙か「2回攻撃。」

シノビ「残念だけでもうネタがないだから、キャスト、混沌魔獣の鼓動!!」

フィールドの真ん中に巨大なゲートが現れその中から1体の獣が現れ手札に加わった。

混沌魔獣の鼓動

ジエネリツク

使用コスト(君の場のバディゾーンにあるカードと同じ名前のモンスターを1枚手札に加える。)

君のデッキから(混沌魔獣)を1枚を手札に加える。その後君のデッキの上から2枚をゲージに置く。

混沌魔獣の鼓動は1ゲーム中に1度しか使えない。

遙か「そのカード名そのゲートはまさか!?!」

シノビ「その通り我が手札に加えたのはカタナワールドの混沌魔獣場のバディを手札に戻し、ゲージ2増やしデッキに1枚しか入ってる混沌魔獣を手札に加える。」

遙か「ターンエンド。」

シノビ「拙者のターン開始時手札の忍竜 シラヌイを捨てて、ゲージ2を払い、混沌バディコール。ドローチャージアンドドロー」

混沌魔鼠 カオス・アバター・マウス

カタナワールド

属性 混沌魔獣

攻撃力25000 防御力25000 打撃力5

？このカードはデッキに1枚しかいれることは出来ず、このカードの能力以外でコール出来ない。

「混沌コール」(君のターンの初めに君のバディゾーンのカードがレストしているとき、同じ名前のカードを捨ててゲージ2を払い、バディゾーンのカードを全てソウルに入れてこのカードをセンターにコール出来る。)

？このカードが登場した時か、攻撃した時、君のターンの初めにデッキの上から2体の分身(サイズ0 攻撃力25000 防御力25000 打撃力5)をコールする。

？君のターンの終わりにこのカードのソウルを1枚ドロップゾーンに置いて良い。置かなければこのカードを破壊する。

？このカードが場を離れた時君の場と手札のカードを全てドロップゾーンに置き、君のライフは1となる。

次元を超えて巨大な鼠が現れた。

和人「これがカタナワールドの混沌魔獣!」

シノビ「それだけじゃない。効果で2体の分身モンスターを呼び出す。」

更に2体の鼠が現れた。

シノビ「我が混沌魔獣は鼠、鼠は仲間を呼び寄せる。」

ダリルベルク「な、なんだこれは、こんなのありか!」

アタックフェイズ

デイミオスをセンターに移動

シノビ「分身モンスターでファイターを攻撃。」

デイミオス破壊

残りソウル0枚

シノビ「今度はもう一体の分身モンスターで攻撃。」

デイミオス破壊

シノビ「やれ!!混沌魔獣、我ら宿願を果たすために」

遙か「キャ、キャスト黒竜の盾ダメージを0にしてライフ+1」
残りライフ5

遙か「私のターンドロージャージアンドロー!!来た。」

遙かが引いたカードは先ほどダリルベルクが渡されたカードだった。

ダリルベルク「来たか!!」

遙か「でも、私は怖いこの力は今までの全てを合わせた私たちの切り札。ということはこれが通じなければ私たちの負け。私たちも竜司さんみたいに。」

遙かは突然湧き上がってきた恐怖に今にも倒れてしまいそうになつてしまった。

ダリルベルク「なぜそのようなことで恐怖を覚えているのだ?」

遙か「え?」

ダリルベルク「考えてみるのだ遙かよ、お前が負ければ、和人が傷つくぞ。」

和人「おい、待てなんか嫌な予感がしてきたぞ。」

ドラン「もうあきらめろ。見ろあれ」

遙か「和人は傷つかせない、傷つかせない、傷つかせない、傷つかせないむしろ拉致つて監禁して閉じ込めて二度と出れないようにしてだれとも関わらせないようにすればいいのよ。そうよ、そうしよう。」

遙かのまわりがどんどん黒くなつていった。

和人「誰か!!助けて!!できれば警察!!俺の彼女壊れた!!前からそんな感じあつたけどついに本性出し始めた!!」

和人が壊れた。

ドラン「おい!ダリルベルクどうすんだよあれ。完全にやばいほうに行つたぞ。」

ダリルベルク「え?わ、我はただ気合を入れなおそうとおもつてだな。」

ドラン「やべーよ。和人最悪死ぬぞあれどうすんだよ。」

シノビ「あのー我らのこと忘れてない？」
ダリルベルク「……もう諦めてくれ。」
シノビ「どういう意味だ？」

遙か「私は私の限界を超える、キャスト、キラーオーダーライフル
払って、ゲージ2追加して、ゲージ3を払い限界を超える我が相棒、覇
龍騎士団 ブラスター・ダリルベルク」

覇龍騎士団 ブラスター・ダリルベルク

ダークネスドラゴンワールド

サイズ3

攻撃力20000 防御力4000 打撃力3

コイルコスト(ゲージ3を払い、君のドロップゾーンのカードを2
枚をソウルに入れる。)

■このカードは君の場に他のブラスターを含むカードがあればこ
のカードのサイズを2減らす。

■このカードが攻撃した時君のデッキの上から3枚をドロップ
ゾーンに送り、その後ドロップゾーンのブラスターを含むカードをコ
ストを支払わずに変身または竜化する。

■このカードが破壊された時
ソウルガード

現れたのは黒い鎧に今までよりもごつくなつたダリルベルクだ。

ダリルベルク「見よ!!我が相棒そしてそのチームメイト全ての力を
合わせ誕生した我が力見せてやろう。」

シノビ「なんだよそのデッキブラスター、煉獄騎士団、それに覇龍
騎士団どんだけカテゴリーを混ぜているんだよ。」

遙か「これが私のデッキよ。」

ドラン「まさに混沌だな。」

シノビ「それこっちの専売特許だろ。」

遙か「そんなこと知らない。」

アタックフェイズ

遙か「私とダリルベルクの連携攻撃!!」

ブラスタター・ダークとダリルベルクの力をもって鼠を退治した。

シノビ「混沌魔獣は共通効果で場を離れた時ファイターの全てを失う。」

手札0 ライフ1

遙か「ダリルベルクの効果デツキから3枚落としてこのカードに変身!!光と闇は一つとなり、そして大きな力が生まれる。変身マジエステイ・ロード・ブラスタター!!」

遙かが新たに纏ったのはブラスタター・ダークとは違うがどこか似ている黒い騎士だ。

マジエステイ・ロード・ブラスタター

サイズ3

攻撃力10000 防御力10000 打撃力2

レジェンドワールド／ダークネスドラゴンワールド

???

変身(???)

遙か「なによこれ力がブラスタター・ダークの時と似ているけど力が明らかにおかしい、抑えられない。このままじゃ。」

和人「遙か!」

ドラン「止めるぞ!!」

和人「分かったドラン超進化!!」

遙か「大丈夫だよ。この力であいつを倒す。」

ドラン「ええ。俺ら活躍するシーンだと思ったのに。」

ダリルベルク「そういうメタ的なことをいうな。」

遙か「とりあえずこの力であなを倒す。」

そうやって遙かは一瞬で切りつけた。

「バ、バカな!!」

残りライフ0

勝者

シラヌイ「ぐおおお」

ファイトが終わりフィールドが消えると突然シラヌイが苦しみました。そして足元から黒い何かが身体をむしばんでいく。

「こ、これは一体どういうことだ？」

シノビ「……我らは混沌魔獣を使った。その代償は相棒の魂。それがこれだ。我らの肉体を混沌魔獣のエネルギーに変えられる。」

遙か「そんなのって」

シノビ「仕方なかった。我らには力が必要だったのだ。そうあの時から、」

数十年前

そこはカタナワールドのとある山奥そこにシラヌイはいた。

周囲には戦いの跡が色濃く残っていた。

そしてシラヌイ以外の忍童たちが無残な姿で残されていた。

そしてシラヌイの手にはまだ幼い子供を抱いていた。

シラヌイ「なぜだ。なぜこんなことに、」

辺りにはシラヌイの同志だったモンスター達が倒れていた。

シラヌイ「我らはただ自らのことを上の奴らに認めようとしただけだというのに。結局生き残れたのは我とこの子供だけ……こんなことなどあり得るものか？」

???「自らの運命を変えたくはないか？」

シラヌイ「!?何者だ？」

謎の声が聞こえてきたと思うと突然ゲートが開き中から謎の龍が現れた。

タイムルーラー「我はタイムルーラー・ドラゴン、お前は本来ならここで力尽き、お前たちの忍童流は悪しき忍術として歴史に刻まれている。」

シラヌイ「そんなことはない我ら忍童流は必ず歴史上最強の忍者として名を残してみせる。」

タイムルーラー「我ならその力を高めることができるぞ。お前たちの運命を変えたくはないか？」

シラヌイ「(このままでは刺客に我もこの子もやられてしまうだろう。ならば、)いいだろうその話乗ってやろう。」

遙か「そんなことが。」

和人「カオスルーラーめ。弱み潰け込んでこんなことをするだなんて。」

ドラン「許せない。」

シラヌイ「我ら二人は必ず忍竜流再建のため負けるわけにはいかなかっただが、その夢はこの体ではもう果たせない。ならばシノビお前が我らの願いをかなえるのだ。た、頼んだぞ。」

そう言つてシラヌイは消えてしまった。

和人「悪いが一緒に来てもらうぞ。いろいろと聞きたいことがあるからな。」

シノビ「……悪いがそれは無理な話だ。」

そう言つて周辺に煙玉を使い煙をばらまいた。

和人「クツソ逃げられた。!!これは」

煙が晴れ、シノビを探すがすでにいなくなっていた。しかし先ほどまでシノビがいたところには混沌魔獣のカードがおいてあった。

和人「まあとりあえず混沌魔獣回収やったな。」

遙か「うん。後は和人を監禁するだけだね。」

和人「……え?」

遙か「大丈夫和人は何もしなくていいから、全部わたしがやってあげる。」

和人「た、助けてくれー!!」

それから数時間後ボロボロの和人が発見されたのだった。